DS
895
H6M38
v.3

Matsuura, Takeshiro
Takeshiro Ezo nisshi shu

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/takeshiroezoniss03mats

顧問
井上通泰先生
山田孝雄先生
新村出先生

正宗敦夫 編纂 校訂

日本古典全集

松浦竹四郎著

多氣志樓蝦夷日誌集 第三

東蝦夷日誌
唐太日記
北蝦夷餘誌

DS
895
H6M38
v. 3

LIBRARY
MAR 28 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

藏書之章

多氣志樓蝦夷日誌集第三目次

東蝦夷日誌初編……一
東蝦夷日誌貳編……五三
東蝦夷日誌參編……九七
東蝦夷日誌四編……一四一
附錄
唐太日記　上……一八五
唐太日記　下……二一六
北蝦夷餘誌……二五三

東西蝦夷山川地理取調記行

東蝦夷日誌

初編

多氣志樓藏板

凡例

一蝦夷千島の廣太世人無ニ不レ知者一また其所レ産ぼら鱈から鮭䱱の如きは、山村僻鄕といへども其味を嘗ざる者なし。且數の子に數々年を重ね、昆布に聟入嫁取をよろこん布は縉伸公子より匹夫匹婦に到る迄其產物を賞譽せり。其地たる海中に特立し接ニ近異域一實に皇國北門の一大鎖鑰にして樞要の地なり。古人或履歷し或は傳聞を採錄して編をなす物少からず、雖レ然海岸のみにして山脉水派を審にしたるを見ず。依て余嚮に彼地に予役し編輯し納函館府所の書を抄擧し、日誌八種を刻し、八ヶ場所の大略を著す。今爰に東西海岸の大概を記し、東蝦夷日誌、西蝦夷日誌と名を冠る者也。

一土地の產物地名の譯は其地の古老に審し、其內所々に太古神の敎え、また源廷尉（ヲキクルミ）の事跡に依て号る等可レ付二一笑一事ども疋を捨ずして誌す。尤も喜ぶべき事は浮屠氏等未だ烏頭（ツヱ）を見ざる地故に其荒譚（シユンケ）に汚されざるをや。

一此卷は山越內（ヤマコシナイ）、蛇田（アフタ）二ヶ場所にして其內ユウラップは勇蘭別（ユウラツフ）誌（二冊）より摘取り、トシヘツは其川筋バンケサカイマフ（地名）より上は山越內領下は西地、太櫓（フトロ）、瀬田內（セタナイ）領なる故に安政三丙辰の夏、兩所の土人を引導とし川口より遡りしに、雪水滿漲終に意を達せず歸る。再度丁巳の秋、東部の君縫（クンヌイ）川を遡りルウチシ（峠）を越てトシヘツに出て其地の大略を探訪し、報登之別誌（三册）を著す。是より抄て誌るす所

なり。閲者其微細を審に爲給はんとの意有ば其全部を閲し玉え。

一巻中所記の川と余が踏遍したる年月幷案内者の名共に詳審に記す。小川に及ては地名を諮問する所の土人の名を記さず。是紙葉の多からんを厭ひし也。余が疎漏杜撰とする事なかれ。若余が函館府に収る所の全部を閲る時は、泉澤澗流の細、魚類樹木の末に到る迄一々是を誌し置けり。

一事實に渉る事は古記錄、道の記等を以て件々摘擧せり。則此編のシヤクシヤイン亂また膃肭獵(ウネヲコル)等の如き是なり。引用する所の書も亦杜撰無にしもあらざれども、此地文字無が故、其証を取ること難し、故姑らく夫等の書の說に讓り置くもの也。

一圖畫惣て余が掌册に圖たる儘を擧れば、只其眞を失はざるを要とす。

一此地平假名を和人(シヤモ)いろはと云、片假名を夷人(アイノ)いろはと云。稀に是を書者有。夫故自然地名に片假名を用ひしに、近來山越内君縫等音訓接りの字を當たり。依て余も是を用ひ置ども是余が杜撰にあらず。衆人見馴しが故也。

一文體簡朴人をして見易からしむるは國家經濟有志の士の逢志を報はしめ聊か天恩に吞謝せんとの意也。夫丘陵山岳土地高隆にし不レ可レ耕所たり共、或は巨材金石を出し、平原曠野地荒廢せし處と雖も、或は耕の益有、河海は水田灌漑の利、船舶運輸の便、魚蝦產物の大なること筆の及所にあらず。是造物者の無盡藏也。明察せば寸土とし不毛に比し無用に渉る物なし。閲者其文の飾無に欠伸せず熟讀なし玉はん事を。

文久三癸亥年九月初一日於二下谷違不似溝の西崖一なる寓居

源の弘誌

東蝦夷日誌　初編

伊勢　松浦竹四郎誌

山越内領

豐茅原の水穗の末葉の國（厚消太神宮鎮座祭文）と秦檍丸が書れしも今は元末のけじめ無まで茶店(チャヤ)旅舍(ハタゴヤ)江戸前としるせし食肆(ニウリヤ)立並び、寄昆布といへる土娼(メシモリ)も今は背繡(ツヽレ)の刺袖(モジリ)に引かへ棧留島に往來の客を招き頗る繁昌の地となり、實に昌平の御代の賢さぞ仰がれける。「市中となりし昔しの一里塚」（其角）の句等思ひ出られける。爰に境の稻荷（小社）と云は、余はいつも捧物をなし、道中の安を祈りて入けるに或時此一首をぞ書附たりける。

　天地の神も知りませ國の爲千島の奥に思ひ入る身を

標柱（從箱館十八里十四丁）是を内地(シャモチ)蝦夷地(ハショ)の境とし、文化比迄夷家有しが今は他へ移たり。其傍に息水油(クソウヅ)の涌出る所有。池田某（伊右衞門）是を見出し、近比取始めまた製して疥癬の藥として出す。人家つゞき並て關柵有。

山越内（制札、會所、旅宿所、板藏五、武器藏、備米藏、馬や二、鍛冶や、漁や、雜藏、廐や）本名ヤムウシ内にて栗多澤(ヤムウシナイ)の義、其地今のサカヤ川也。昔し其所に會所有し故場所の惣名となる。此所の本名はバロシ

ペウシとて往古關柵を結し時用ひし木の切株多を以て号しと、元松前家臣青山某（蘭右衛門）給知也。濱形丑（七分）會所辰巳向卯方に沼尻岬見へ、其間素濱にて船繋なく、荷役は掛り積也。然に西に山有り、風凌よし。山根に諏方明神の社（稲荷合殿）有。圓空鉈作り座像の藥師如來を安置す。（社司茂邊地村より來る）土産鮴鮭昆布鱈鰯其外雜魚多し。土人八十四軒（文政五壬午改百七軒、五百余人）三百七十余人場所中に散在す。爰にて出入の者を改む。（勤番所一棟）出て阿彌陀庵（淨土宗）過て

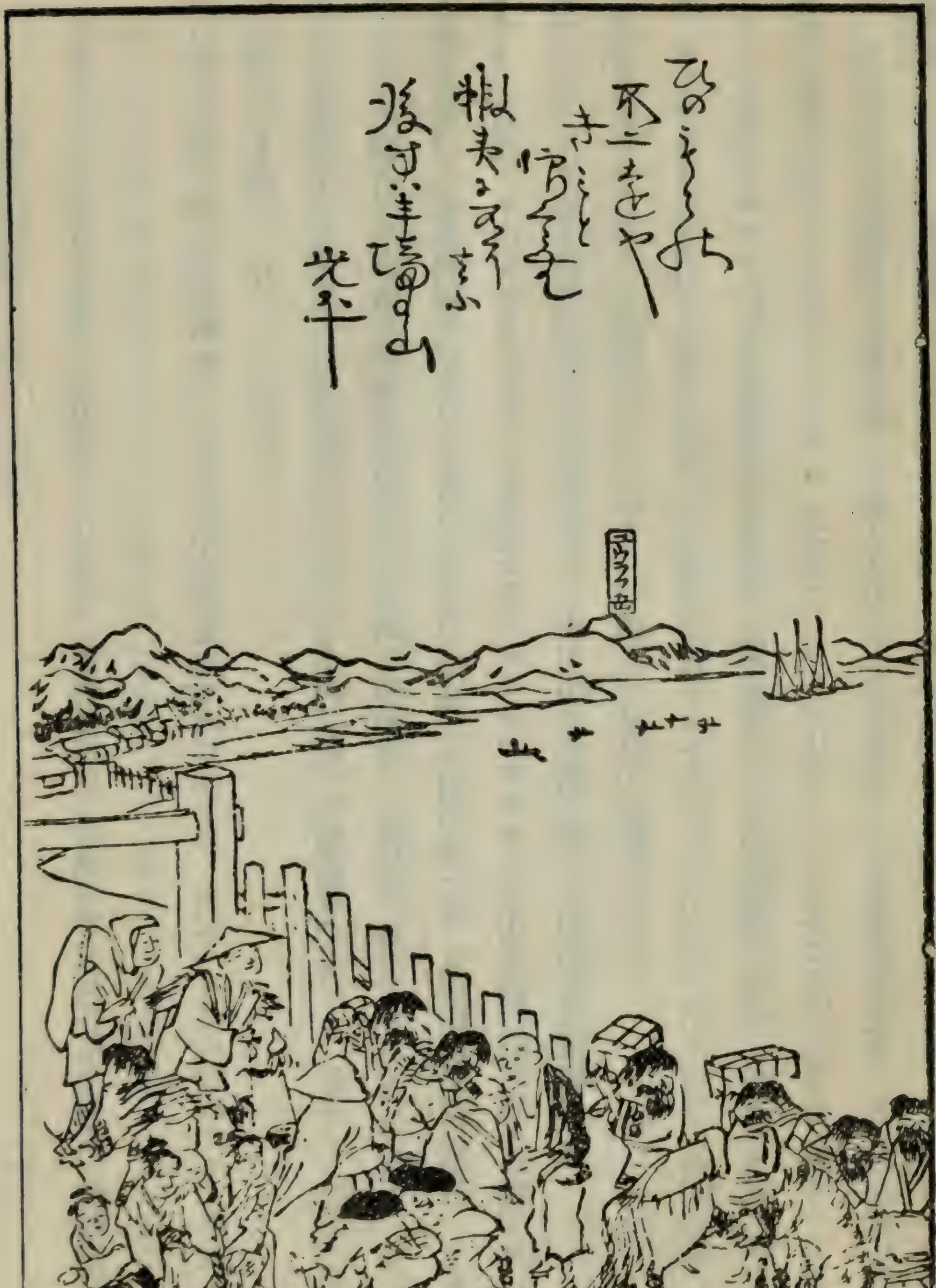
サカヤ川（橋有、夷家五軒、畑多し）是山越内の元地也。文化度此所へ南部大畑より酒造人來り水車を仕懸、酒を作りし故此名殘りしか。フユペ（小川、夷家）大なる白き穴ある石有し故号く。今半は砂に埋て纔見る斗也。ヲ、コツナイ（小川あり、漁や藏）其義犬の番如く頭二ツに成故号く。ホンヲ、コツナイ（小川有）共に源フプカンナイ（右股）タフカンナイ（左股）と分る所に閑蘭根、南に熊根岳と云高山有。川筋蝦多し。

トコタン（漁屋藏有、夷家村政）沿所との義也。此邊當時出稼商人屋等立て賑し。此道の上に萢地有。水田に宜敷地勢也。夷家數十軒立並たるを過（一リ廿九丁）、ユウラップ（番屋、板くら六、旅宿所、小休や）前に鎮守社妙見觀音龍神稲荷福山社等五社祭る。又商人屋も立たり。名義はユウランペツにて、溫泉下る川の義なり。其源溫泉有が故に号く。此川鮭鱒鯇桃花魚いとう有。前に川（巾三十余間船渡）其川口洪水後は色々變革す。地形澤目廣く平地にて東向二三百石の船は入る也。又冬分は氷上を往來す。此所土人皆トシヘツより移りし者也。

ヲホコ岳
ユウマップ岳
ウイヘン
フトロ岳
ヲコツナイ
山越内

安政四丁巳八月廿一日乙名チエトン小使アニカ等へ川上行を談じ、教導の者四名（ノサカ、シトント、ハウシ、トカシン）を頼む。通辯宇吉懇に手配致Ꝏ、丸木二艘にて出立、今日始て鮭此川にみしとて大勢の者括槍もて探ける樣、恰も船合戰の如し。其舟の進退自在なる事感るにたへたり。夷地にては第一番に鮭を取て會所に持行や酒三升または五升等、貳番は何程、三番は何程と五番位迄甲乙を附て褒美を出す也。依て其先を爭ふ事甚し。召連し者は當所第一の豪壯の者成故、毎年此翬が取りしと。依て此者の言に、此魚川上へ上りし故何れ我等か物成ば、今宵はニシハに鮭を振舞んと戲て出ける。（五六丁）ヤスシ（川筋五ッに分れ急流）名義、網曳場の義也。川巾廣く淺き故網を曳に宜敷故号く。兩岸平野にて粟畑多く（七八丁）メム（右小川）過て（廿余丁）サラベ（左川巾七八間）名義、終りの義也。此川第一川下に有る故也。川筋兩岸家多く上にて二ッに成る（右相沼内ヤンケ岳、左ノタヲイ岳）魚類鮭鱒鯇多し。此邊り兩岸赤楊柳等多く立り（貳三丁）クンヘツ（小川）暗き義（十二三丁）ヒンヘツ　右小川　過て（三四丁）ブイラ（瀨）川央の大岩に當る浪吼々と鳴故に号く（六七丁）タンネフイラ（急瀨）長く鳴ナル義か。左赤崩平此底一面の磐也。一人上陸して繩を引辛じて上る（十七八丁）ハンケルヘシベ（左方川巾七八間）下の山越と云儀か。今は鉛川と云り。

安永年間鉛を堀しに山崩れて死人多し。故其後廢坑と成りし由、然るに今度また吉岡某開坑を思ひ立れ、今は盛に出るよし、爰に舟を置て上る。兩岸小字多く几一り斗にて流木多く上り難し。源二ッに分れ



し。
（左ヤンケ岳、右見日岳）連山峩々とし聳ゆ。往昔は西地江山越の者有し故此名有と、鮭鱒鯇桃花魚多にも人にても此ゆへ有ごとく思はる。
暮方歸る哉果て鮭二尺を得たり。何れも小き故是を土人に問ふに、川が小き所の鮭は魚も小き物と、如何
廿二日霧雨浸〻衣しばし過（五六丁）ヲシユニ（右小山）其下平磐急流（五六丁）ブイラハツタリ（左平）崩平に一筋の瀧有、下は俵を積重たる如き石にて頗る奇觀也。是に當る波逆立して鳴故号く。爰にて南部（北郡木並村）の米舍利様の石を見る（或ぬけ舍利、阿州にて岩舍利と言、是特生礜石に當る）。上りてシユマチセ（左窟）小山を廻りてホロフイラ（大淵）アシリハツタラ（右山左淵）新き淵との儀、シユマシユンハツタラ（右山下淵）過てヘンケルペシペ（左川巾五六間）是上の山越と云儀也。
往古人家有りしと、水源高山有、字多く是を越るや見日川の源に出ると。
過てホヘポナイ（右小川）名義、引込し所と云か。エコタサンナイ（右小川）兩方向合に有川の義、トヘトマイ（二股）トキトキ（右方赤平）此川底凸凹に成る故号く。其崖に瀧二筋有、此邊より椴の木を見る。
ヒラ（左平）シユルクタウシハツタラ（大淵）シユルクは毒、ウシは多にて爰に毒箭に用ゆる虫有より号く。昔しは土人等に箭毒を聞に秘して敎えざりしが今は左なくノサカ余に審に語ける。鳥頭根に烟草の脂と蜘蛛（ヤヲシケ）クルンヘ（長五六分水中石につく虫也）と四種を練合して筒に入腐らし用ゆると、然し是を用ひて

取りしは其肉に毒廻りて動もすれば喰し者に當る故今は烏頭一味にて製す。然れば毒の廻り遲けれ共、肉を捨る所少しと話しぬ。過てルッケイ（右小山）此所高山より百間斗崩落たり、依て号く。トワルペッ（右川巾五六間）

トワルは温泉の事也。此源に温泉有故号く、依て白崩石多く流有。字多し。上二ッに成、右ルウクシヘッとて昔レトシヘッ土人の越道也。左本川太櫓岳より來る。

過てサレキハッタラ（左山）マクンヘッ（小島）リイヒラ（右平）メナシユンマッナイ（右小川）往昔此所へ東方より一人の神女が來りしに依て号ると。タンネラルシ（左川）下淵に成る、土人等潜りて魚を取ると云儀か。タンネヒラ（左平）平に瀧一すじ有、并てセヨヘッフト（右方川巾七八間）此川上に貝石多き故に号く。余も少し拾得たり。

川筋字多く今傳はらず。源は太櫓岳より來る。兩岸惣て高山なり。

爰にて宿。夕方雨降始しが故に急に欵冬葉もて小屋を作り夜に入雪に成たり。寒甚し。戯に一首を木の株に誌るし置ぬ。

かりふける篷に時雨の音たえて今朝は深雪にふりかはりけり

廿二日平旦嗽ㇾ流、雪五寸に及ぶ。擧ㇾ頭ば四山皆戴ㇾ白、船の溜水みな氷り、偏に氣候の異るを覺ゆ。是より席（チタラヘ）一枚銕鍋を背負、雪を踏で出立す。轉太石の上を飛越〳〵行に辷りて甚急し。ヤムワッカナイ

チライハッタラの圖
松園老人

（右小川）冷水澤との義、此邊より愈急流にして屈曲たり。チライメムン（兩岸高平）此所細く瀧に成落る、瀧壺深くして底しれ難し。いとう多きが故号ると。山々一面の白楊赤楊にして、其上に到りて雜木に成し所は十分の紅葉を到したり。

はる〴〵とわけ入る山はもみぢ葉の色の深さもしられざりけり

シヤマツケハツタラ（右平）ヘタイヌツトハツタラ（淵）二股淵の義也。上にてヘタヌ（二股）に成る。モユウラフ（右方太櫓岳より來る）左りシユウラフ（本川）川筋皆小石、左右高山にして遠山を見ず。危と正午なれども日景を見ることを得ず。山氣鬱濛とし孔竅に入る如し。過てヘーペヒラ（右平）崖下に火を焼、須臾溫もり各々括槍（長三間位）を持て上る、凡貳百間斗行又左りに平有、其間卅余間斗、此所百四五十間行て

クンネヒラ（左平高七八間）岩面黒が故号く。中程數條の水滴り昨夜の雨にて勢甚よろし。恰も玉簾を懸如し。匡樹垂レ枝藤蘿帶レ紅、是にかゝる水凍て玉の如し。紅映て珊瑚を綴かと怪しみ、仙境に入の心地す。又百余間にしてソウランヒラ（左平中程に穴有、高凡五六丈）三四十間の所水滴落、名義瀧落る平の義也。穴に入るや裏見の瀧とも云べし。又孫悟空が住し花果山の水簾洞も如是哉と思はる。其所百余間、川中上るやチライハツタラ（兩岸數丈崖中に淵有）巾三間斗、前に一大岩有、其淵チライ多が故号し。此所より右の方岩に取附、左り方手にて括槍を持、右手にて岩面を傳ひ十間斗行。愈盛りて屛風の如し。歩窮

ソウランヒラの圖
幽谷生寫

て共に躶〔蜾カ〕に成、水に入る乳限り有。其冷き事足先を切如し。水中五六十間行や、左の方の平に瀧有、是を越て石原また百余間を過、左り大岩窟（三ツ）過て右に大瀧、其水沫霧の如く山懐を暗んじけるに、日輝映五色の暈をなし、浮屠氏を連來らば不動明王灌頂の窟、或は彌陀如來來迎の瀧とも号くべけんに、此地未だ傳教弘法も錫を入ざる故に欺賣者流名を冠らざるをや。是此地に志を用る者の第一賀すべき事也。扨身は其奇觀に寒を忘れ、躶にて又三十間斗崖の間を行や土人等手を打悦び、是ぞマーニセイ（眞の兩岸絶壁と云）と云。擧ゝ頭ば兩岸峩々とし壁立十余丈、上の方二間位、下の方三四間、洞の如く奥を伺に透邃無限暗してしれ難く、水深くして龍蛇をも潛しむるかと怪まれける。尤土人等神靈有由にてエナヲを作り奉る。余も亦拜して、

えなをたて手向よくせよ何神とみなこそしらねあやに尊とし

蝦夷惣國中大小神祇國家安穩萬民豐樂と叩頭して頭を上れば、岩には雪もやう、菊葉の黄連其餘見しらぬ異草種々生たり。此度の教導者もマーニセイと名は聞居れども、誰も來りし者なく、ノサカは當所一の獵師にて是より西地へも越たれ共、此洞中を此度程詳審に見たるは始也と。河水是に三寸增時は中々來り難しと。實に此渇水に余忝も爰に來る事を得しぞ有難し。夜ソーベヒラにて宿し、翌廿四日トキトキにて宿し、五日濱に出る。

川を越（上方平地）素濱過てフイトシナイ（川巾五六間橋有、漁や藏有）此邊土地東南向暖地也。

マーニセイケの圖

川筋泡地多し。濱にて二分す。ホンフイタウシ（左方）フイタウシ（右方）上にフレムクシ（小川）クヲヘタヌ（二股）シヨシコト（瀧有）源熊根尻山より來る、後ろトシヘツに當り椴多し。過てフレモコ（平濱）またフイトシナイフト（此所川口なり）是より左り平山に成る故山崎（漁小や、藏三、いなり社）と云。此邊より鰯取出稼多し、ホンシラリカ（小川）過て（従ユウラツフ二り）

黒岩の名さへうもれてふる雪は春たてどなほやまさきのいそ　　石場高門

シラリカ（小川夷家七軒書所番やあり）シラリイカの略にて汐越る義。此比出稼商人旅籠や等立たり。爰を以て往古は山越内ヲシヤマンベの境なりしを、今合て一場所となせし也。後ろ皆山根にて前沙濱南向畯地也。川筋字多くヒラヲマナイ、（左澤）フクシヤタウシ（左澤）ラトウシ（并て）チエフンヘツ（小川）等、其源に瀧有。上は熊根尻也。是よりトシヘツに甚近し。土人等多は爰を越る也。過てクンネシユマ（大岩）黒岩と云。是に白き玉石附たり。其小粒なるは透明し可レ弄物也。

旅人の手をはなふれそ岩床に神在せりとえなを立たり

ロクツ（川巾五六間、夷家有。漁や、雑くら二）沙道よろし。當所第六の川也。上にヘテウヨヒ（二股）シユマウシフイウシ（左川）タツカルシ（同）ラルマニウシ（石川）過てホロソウ（大瀧）有。源熊根尻より來る。山中椴の木多し。此邊より平地にて沙濱、フイウシナイ過てホロナイ（川有、漁や、雑くら）夷家有。出稼多し。モクンヌイ

（巾七八間船有）夷家有。モは小さき、クンヌイは暗き義、水濁るが故号く。又此方より行も、彼方より來るも、此邊にて暗く成故ともいへり。

第四の川也。セヨイ（左川）チイカシュツトク（右川）トツフエウシ（右川）タツカンナイ（左川）レタリシヨシケ（左川）サンケヘタヌ（二股）右に瀧有。左本川、其源エナウシ岳より來る。

シツナイなるシヤクシヤイン此所迄押寄來るや、蠣崎佐左衞門爰に陳を取て山中の金丁共を九百六十人程呼寄障けるに、日本方は鐵炮、夷等は毒矢にて互に射合へども、日本方の甲冑の鎧よければ通らず。朝より午刻過迄に、夷方五十余人うたれ候得共、死骸を日本方の目に懸らざる樣によく隱したり。此方九人打れ共五人は金丁、四人は侍分也しが養生は叶也。其より夷共志通苅山え迯行しが、只日本方困しは、晝飯が少し遲刻するや、足腰も立ざりしが、夷方は六七日位飯は喰はずともひるまざりしぞ。平生の仕馴らしとは申ながら、强壯の程（下略。蝦夷亂興廢記）

此邊シヤクシヤインの古戰場なりと云り。過てクンヌイ川巾七八間、船わたし、夷家有、漁や二軒、雜藏、小休所）上に畑多し。昔しはトシヘツ江是より馬道も有しと、今は絕たり。

八月十一日（安政四丁巳年）從ヲシヤマンベ乙名（トンクル）小使（サンリキ）を召連來る。是よりトシヘツ越案內の者四人（トサンル、シイトン、メチヤシ、サンハ）を漁場より呼よせ支度致させ、翌

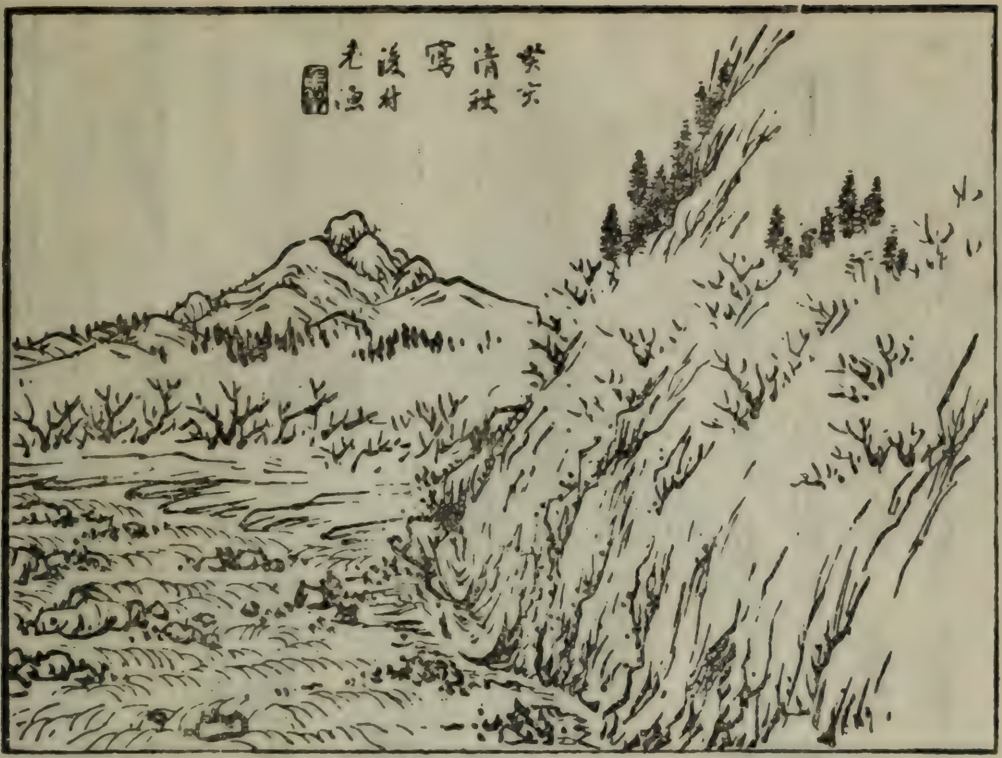
十二日（快霽）丸木船にて出る。兩岸霜厚く川霧深く、薄苅萓も黃み、是をからむ蔦蘿紅に染て、中秋比と

は思はれず。遲流曲屈の處暫くにてヘシユシナイ（左澤）イヌ、シナイ（左川）鮭漁の時小屋を立る義か。サカツキ（石川）此邊石の方山に成る也。名義礪石（サカツキ）が有故に号く。澤すじ金坑多し。爰にて川淺く成、流木多き故船を繋置川まゝ此方彼方へ渡り上る。マサカリヲシユマ（右澤）ヒラカワサンナイ（左澤）此川磐の上流來る故号く、ヒラ（左平）兩山聳て急流に成り、所々に淵有と。鮭菜多し。また川原に石英、含水瑪瑙、其餘雄黄の氣を含む石多し。別ても瑪瑙は種々品を見る。バンケベタヌ（下二股）左小川にて源に溯有。カリンハウシ（右澤）櫻多しとの義、ヘンケヘタヌ（上の二股）是より右の方本川なれ共其名傳はらず。上にルウトラシナイ（小川）と云有。源はカニカン岳に到ると。

左りに入サヤ（左澤）ホロナイ（左澤）ヤチナイ（左川）此邊り大笹原の中を分け上る也。チクシトカニウシ（左小川）ヤベチ（兩岸平）越てまた二股に成る。　左り本川源エナウシ岳より來る。　右ルヘシヘナイ（小川）路越る儀也。上りてエナヲ峠、一同木幣を作り途中の安を祈り（從濱几六り、トシヘツの分水也）下ることしばし也（從是トシヘツなり）

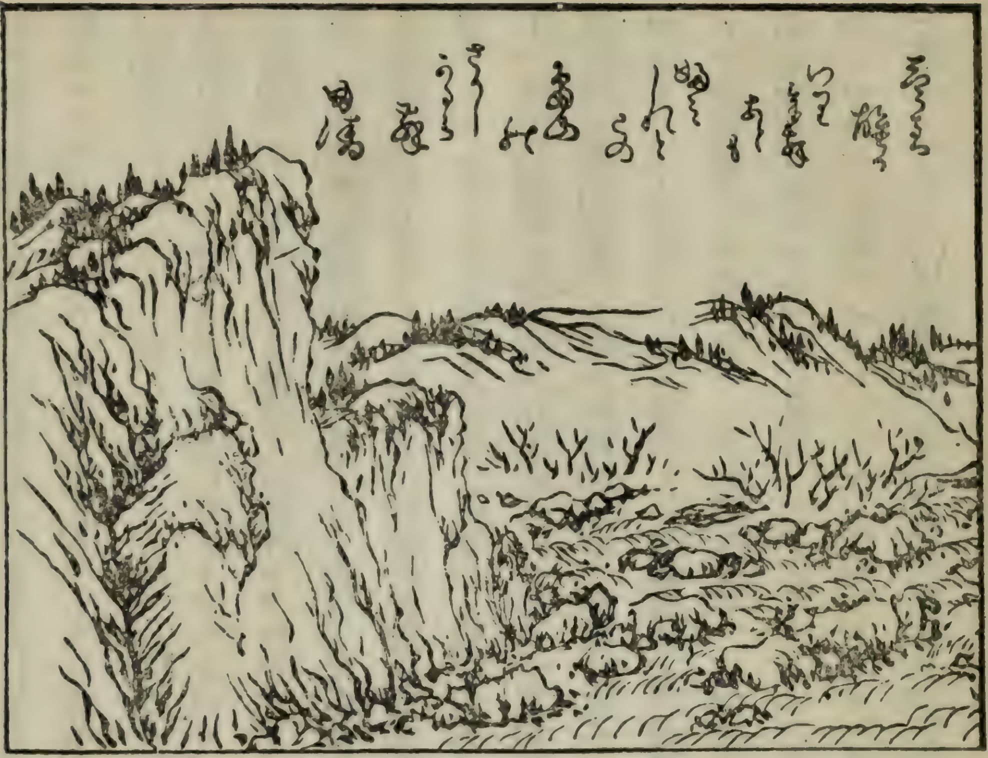
ナイフト（トシヘツ南岸）に出る。此所小石原よく開らけ、河筋數條に成、赤楊柳生繁り小島に成し所多く、是をウエンシリ（淵）と云。川筋三ツに分る。右を

ヒリカヘツ（川原廿余間）美川と譯す。水淸冷なる故号く。チトツハツタラ（右平）タンネヒラ（平）シユンクシナイ（右川）蝦夷松多き故号く。今花姑［估カ］にて落葉松を蝦夷松と同物とすれ共、此地の松



落葉はせぬ也。是別種なる事明か也。是より上エラマンテウシ（右小川）アイチユウナイ（左小川）此所にて二股、右クスリサンヘツ（小川）此源に溫泉數ケ所有て、土人等皆モウヘツより爰え湯路〔治カ〕に來る也。左りの源カニカン岳に至るよし、扨又（從ナイフト）左りの方は

チウシヘツ（川巾二十余間）此川急流故に号く。チウシは汐早き事也。上にタツユプ（左小山）エラマンテウシ（左小川）ニカラウシニセイ（兩岸平）階子ならで上り難き故号く。川筋瀧多し。是より魚上らず。二股に成。共に源はカニカン岳也。其中はトシヘツ（是本川）繩川との義、其譯は此川下フトロセタナイ入組領なる故セタ內土人等川口に繩を張置、若是に太櫓(フトロ)土人が障る時は償を取しと、依て号也。河水清潔、水底の砂算ふるに宜し。底平



磐にて淵多し。水の淸は是全く金玉の氣の有なるべし。グンベツ（左小川）軍兵衛なる者沙金を掘し故号く。過てケイシヤウハツタリ（淵）慶藏淵か、シユヲハツタリ（ふち）ヘヨフハツタラ（淵）カフケハツタリ（淵、チフホハウシ（急瀬）此所まで昔し船を遣りし故号く。ニセツ（兩平）クチヤウニ（淵）クンネケヘルペ（淵、ウエンヒルウシ（右小川）トレフシ（大淵）ザヤ（平磐）ヌツフコトハツタラ（大淵）タンネラルシ（大淵）サヤハツタラ（大淵）二股右の方カマウシトシヘツ左本川大瀧有、源はカニカン岳より來る。此邊皆樺、五葉松、石楠花のみ也。此岳此邊の一大岳にて西はトシヘツ北ヲヒラ。ヲリカワ。東黑松内ヲシヤマンベの源也。金銀玉石の氣多く、昔し神が爰にて金銀を作り玉ひしと言傳ふ。從ナイブト南岸（二丁）下り、黑岩（左澤）と云平

に茶碗の繪薬様の物有しが故取歸りて舍密家に審にサンカマンカンの由、色黒く鐵氣有、至て重み有。此邊種々の土砂有。爰をして物産家に審さしめば頗る有益の品も出べきと思はる。岸に欵多葉もて穹廬を作り宿す。

十三日此所に一艘の丸木船の有に余とトサンル乘り、餘の者は陸路を下しぬ。少し下りセヨヒラ（平）崖に海扇《ホタテ》、螺《マテ》、蜊《アサリ》の売出る故号く。シヤマツケハツタラ（淵）タンネウツカ（長瀬）ルフネシユマヲイ（岩淵）ヤソツケ（瀬）此ところ廣くして網曳場なる故号く。昔しはクンヌイより此所へ馬道有しと、其比は金坑至て盛にして文化年間石井（善藏）高橋（治太夫）高麗（鱗平）等此所を切開、砂金六百兩を獻じ、追々人家も建しが可惜文政五年より廢山と致す由也。ラルシハツタラ（左平）ウラエウシハツタラ（右平）ホロブイラ（瀧瀬）此所兩岸突出たる岩に水當りて泖洄て瀧の如し。依て余を陸に上げ一人にて船を下すや、岩に當り舟傾反り。トサンルは川に落、荷物は沈み、舟は遙下へ流れ行くや、トサンル直に游ぎ行、船を取歸り、其より水底に潛り探せしに、糧嚢鍋《ナベ》鉞《マサカリ》まで清冷なる水故速に知れ、一品をも失はずして取上たり。其働感ずべき也。過て三四郎淵（左平）三四郎なる者沙金を多く得たりと、ウリルハツタラ（大淵）ヘンケルフネシユマヲイ（左平）ヘンケロクチ（左平）カヌチ（平地）昔時鍛冶が住しと、クウヨシ（左平）レーラクシ（左平）チヨコシカマ（左平）トハツタラ（右平）廣くして湖の如しと言儀。ヲンネハツタラ（大淵）ヘロシナイ（右澤）シユフヌンゲヘルペ（右平）ジンゴペ（左平）甚五平と云者沙金を掘て大利

を得たる所也と、其廢坑不容易仕縣也。此邊には叉穴居跡多し。ユウラツフ土人は皆此所より移りしと。過てヌケシハツタリ（右平）ホンヒラヲマナイ（右川）シユフヌンサイ（左川巾七八間）其名義、桃花魚多き故号く。冬分シラリカへ越るによろし。

川筋字多く奥にホロソウ（大瀧）タンネソウ（大瀧）とて黒岩に傳て落る瀧あり。過てアシリハツタラ（左平）シカリ淵（右平）水が廻る義也。チセネハツタラ（左平）チヤシウシナイ（左川）此所城跡有。是は大古神が築し由にて跡より土器の破れ勾玉瑪瑙の簇石等出る也。セヨヒラ（右平）ホロセヨ平（右平）共に貝殻多く出る故也。并てメナシユンマツナイ（左小川）ウトラシウシ（平山）ホロニタ（岬）此下急流に成、川巾廣し。ウトコンハツタラ（右小山）シシヤシハツタラ（右平）フシコヘツ（左川）ネウシヒラ（左平）此所西風も東風も崖の陰に成、寒きと云譯也。シユマシユンハツタラ（右平）水底大礬なる故か。ホンシユフンナイ（左川）ハンケルフネシユマヲイ（右平）フムシナイ（左川）高山の間に人故号く。イクルケ（村跡）アヘケシウツカ（急瀬）サクルヘシペ（左川巾五六間）夏山越との義なり。

川筋字多し。三ツに成。其本川源ユウラツフ川筋（トワルヘツ）に越るよし、今絶たり。過てシイキナウシナイ（左平）サツテクハツタラ（右平）クタツケヒラ（右平）コヒタナイ（左平）トイタナイの訛りか。昔し神が作りし畑有故号く。ラ、キチヤン（右平）リイヒラ（左平）赤土高平に白筋帶

を引如く至て美しき故号く。アシリヒラ（左平）ヲシンコイネ（右平）ヘツカシバ（淺瀬）川幅九七八十間に成て相應の出水にも渉らる故に号くと。今日は其所淺くして船轆が故に川に入曳下しける。レタリカマ（大平）ハキイチヤン（急瀬）フシコハツタラ（左平）ヤームウシ（左平）ヘンケサカイマフ（右川有巾五六間）其儀上の境有と云義也。陸行の者此元へ出る由（九六り）川の方は屈曲して遙に遠し（川筋九七り）爰にて

川筋両岸字多く又金坑の跡多し。源カニカン岳より來る。魚類多し。

舷を叩や親父（イヌマカシ）出て慇懃に出迎ふ。是西場所にてカブ親父といふものなる故其譯を問ふに、先公料の比より蕪を多く作りフトロセタナイ江持出し、酒烟草とかへ來るが故に、松前家の比は畑を作る事を嚴敷禁し有故、越年の料に我が持行を待居て買ひし故に蕪親父と号られし也と、家は傍一面に蕪を作たり。又前は小笹、青茅(カルカヤ)、敗漿(ヲミナヘシ)、胡枝花(ハギ)、芒(ススキ)、龍膽(リンドウ)、葛(クズ)よく咲たり。まだ日も高に金鐘兒(ススムシ)、紡績虫(クツハムシ)、老禾(ムシヲヒ)蟖(シ)鳴すさみ、籠に飼ふ態は見知らぬ我々が行しを見て、吼々と頻に叫び、雛養鷲はトサンルを見て嘴を打て食を乞ふに、如何にも可愛氣に余飯(ワリゴ)籠の殘を與ふるに、其悦事限なく、其を喰もせで隙より手を出して愛を求めたり。

國遠きしるしなりけり秋はまだなかばながらに風ぞ身にしむ

十四日西風爽然蟋蟀床の邊に群れ海邊より大に異る住居也。去年フトロセタナイ土人等召連メナ迄上り來

蜻洲窮絕域意氣
冒妖氛虎吼弓鞘
月熊驚杖下雲地
絕利漁獵俗未辨
耕耘萬里賴君碍
比隆禹稷勲

しが故、其間を見んとイヌマカシ、トサンルの兩人を連て舟にて下るに頗る急流にて疾し。岸に畑有て染(雪の下、餅、粟、ふゆる粟)黍稗大根胡瓜隱元豆大豆小豆蕪を作る。過てヲヤウナイ(同)爰に昔より大なる蝮蛇が住ける由にて、是を見るや如何なる者も發熱して病ると云傳えぬ。過てカネカルハツタラ(右平)金取淵と云義也。シヤウマイ(左崖)トウメンチ(左小川)クワロウシナイ(左小川)ヲフイネ(左淵)フイラウシナイ(右小川)ルエツルウシナイ(左小川)此邊より追々平地になる。ハンケサカイマフ(右川巾六七間)下境(山越內フトロ)と云儀也。爰にイヌマカシ住せし由にて今に祖父の墓所有、其祖父平生栗を好み、死に臨て一粒の燒栗を握り居、喰得ずして我れを埋めし所に植くれと遺言せし故、よく斗らひしに生て今大樹と成りしと。此者此川筋より沙金を掘出し始め、頗る英邁の聞え有る者なりしよしなり。

川筋兩岸字多く、源エシケツホウシ岳と云。旱藕多き山より來る由也。

夕方メツフブトよりメナに到り宿す。(從サカイマツフ、メナまで凡八里、フトロ領西部に記ス)此邊秋草一面に咲たり。是を押分け穹廬を作り戯に其柱に誌るし置

　草といふ草は花こそ盛りなれ今宵は何を枕にはせん

十五日黎明解纜。黄サカイマフに着。士人獺三頭狐二疋を獲る。月下團坐し炙レ之、一樽の白酒に興じけるに余は先に家に入寐んとせしや、爐邊にアリモン(トサルル妹)と言ふ黑脣と、和語によく達せしメ

チヤシと對して有ける故、余メチヤシに、此女は和語を知るやと問ふに、メチヤシ答に、何ぞ此山中に在て和語を知る哉とて、其女は知るまじと思ひ、和語もて余が今宵は此女(メノコ)の方へ辺行んやと勸る、余辭して先にメチヤシ行べし、其方(ヤニ)試し後余も行ん、彼また辭して余に先え行とすゝむ。互に語り合て居しや、其娘我等に向ひ、和語もて左樣の事は御免なされと云たるに、余もメチヤシも共に驚き、戯れとは云ながら赤面をなしたり。其方は此山中に居てよく和語に通じたりと問ふに、此邊りは西地より山稼等が入來る故、其者共より覺えたりと語りぬ。戯れとは云ながら、かゝる事は言さる事と後悔を致しぬ。

今宵とてゑみしも月をめづればや夜るはすがらに語りあふらん

十六日昧旦發、混分二大筈こて陸行、紅葉既に十分也。黑岩内に着しぬ。

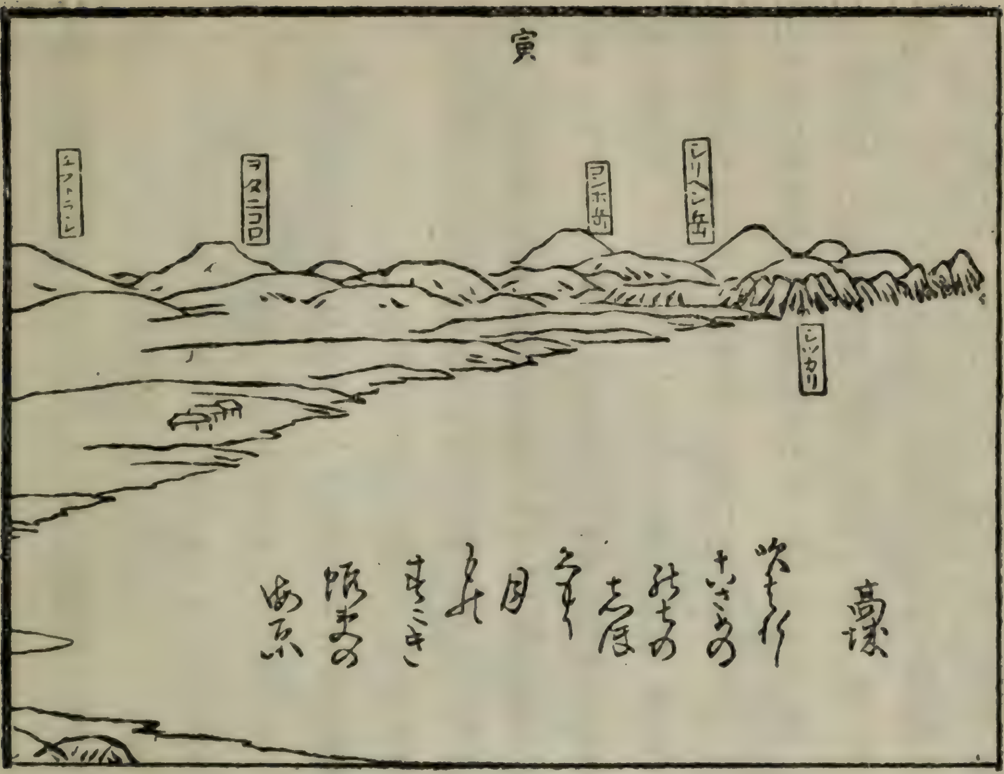
十七日トシヘツ。ヒリカヘツ。チクヘツの三川を少く見、同所に歸り宿。

十八日微雨濛々冷氣甚し。ルウトラシナイを上り峠に至り聊思ふ事有て樹皮を剝き、天莫レ嘯二此地一時非レ難二開墾一と題したり。雨追々はげし。河水俄頃にまし舟の繋場に至る迄甚難澁を致し、薄暮君縫に着す。河すじ鮭鱒鯇桃花魚チライ杜父魚(方言チマカンチ)鮭菜多く然し杜父魚は取を禁じ置、鳥は鷲鷹多く其外久摺にてキサラウシチカフ(方言チヒシヤウ)と云鳥、川烏水乞鳥其餘種々の異鳥多し。獸は熊鹿狐貂獺東華錦鼠栗鼠多し。樹木は椴其外雜木多くカニカン岳には五株松樺多く、奇石いろ〳〵有。沙金は極上々の品を出す。

相語巡官所宿山

過て砂濱玫瑰梻柏等多し。コイトイ名義浪越る義なり。ワルイ夷家有、ヒウチ（小川上に沿有）モヘツ（小川人家有）如何なる惡病流行するとも此村え入らざる由にて号くと、此川洪水の時船にて渡す。川筋少上りヲタレヲカ（右小川）エニハ（同）サツヒナイ（同）ホツサクナイ（同）ワツカレタレナイ（左小川）ヘタヌ（二股）兩方共源はカニカン岳に到る。所々溫泉數ヶ所有。瘡切疵眼病こしけ等に宜しく、此邊の土人君縫ヲシヤマンヘ川筋等より上る。夏秋は草深くして甚行惡く（一日半）春堅雪の比に余はモヘツより上しが、溫泉近く迄行て泊たり（凡六り位）其所しばし雪なし礁原也。爰に小屋を作り宿す。又浴る處も無が故に俵笆を小川中に敷て其上に臥て溫もる也。其溫もり方他方に類なく、實に奇とすべし。

砂濱つゞき少し行、川口（ヲシヤマンベ）有、其上をしばし行、夷家有。（從山越内八り廿一丁十二間、從シラリカ四り二十五丁二十五間）ヲシヤマンベ（川巾三十余間船渡）名義、昔し神有て此處の海に釣し大比目魚を得給ひ、土人に教へて曰く。此魚は神也、我是を山に祭らん、已後春每に諸山雪消て後、此山に此形したる殘雪有べしと、其時汝等此海に出て漁せば多くの比目魚を得んと教へ給ひしと。今に至て其教の如く、山の端に夏迄魚の形に雪殘れりと、依てウバシ（雪）シヤマンベ（比目魚）と云よし（蝦夷奇觀）傳ふ。素濱卯辰向陵地惣て平地（番屋、止宿所二棟、馬や、漁や、制札、板くら五、雜くら、稲荷、かんおん堂、其外多し）番屋の上茅野なりしを、巳年より開墾し畑地また旅籠や茶屋等を建て、農夫といへる者多くを下し、是に家を作り給はりし者等數十軒一條の街をなし、昔しに異る繁華の地となりぬ。土產鰈鰯鮹鮭昆布其外雜魚また蓴菜の名物



我國の民草しげく生ひそひてこぞにことしはながめかはれり

也と。

從是西地ヲタスツへの道有、黒松内越と云有、先公領の比黒松内と云に土人（レフンケ土人ヲヘフキ）一人住し往來の者を木賃にて泊めしが其後（天保二辰年）松前の利右衞門と云者土人（エヒソ、ラムカ、クシ、シネハンコ）とともに川に橋を架け谷地には木を横たえ往來の便利たらしむ。其出來上りし時エナヲを削りて立しが、新道の愈開ける兆なるか、芽を噴枝を出して盛長し、今にエナヲ柳とて有。其後安政三辰年箱館在の者四人（中ノ鄕源兵衞、千代田才兵衞、一本木新兵衞、庚申堂儀兵衞）官に乞ふて今は車馬も通ずる道と成りし也。其順路は川まゝ（西岸）行にル ヘトマイ（人家近比立

たり）ハルシベツ（左小川）上に南部家陳屋立たり。トノ（右小川、此上に沼有、周二りヨ）栗台（小川）此所人家有て往來の者百十四文ヅヽ橋錢を取、發起人此錢を以て切開し由、其故は山中に三十八ケ川有、右一ケ所三文と積りて取る仕法也。ヲムルベシベ（右小川）トッタ（左小川）此邊より木立山の下に成、所々上り下り難場有る也。ベンゲトツタ（左小川）イヌ、シナイ（同）ナムメム（同）メム（同）木立箬原也。二股（人家一軒）右チライ、左ヲシヤマンヘツ是を越る急流也（出水の時船有）

西蝦夷へかよふ旅人宿るべき家もみつよつふたまたの里　　高門

右方チライ（右）チフタウン（右ホシチフタウシ等過、源エナヲ峠に至る。

左本川也。フイタウシ（右）ハンケナイ（同）へ

ンケナイ其外字多し。源カニカン岳也。越て箬原小川多し。ニナルイカ此邊谷地中に柴を敷て其上を往來する故此名有。其譯新橋の義也。坂に上り左高山右原山也。蕨臺（夷言トハウシ、人家あり）畑有甜瓜を作る、此所の名產とす。前に礼文木岳を見て頗る風景也。又上り溪蓀野（平山）あやめ一面に生ずる故号く。上りエナヲ峠（昔し山越内アフタの境也）土人等エナヲを立し跡有。しばし過（六七丁）境柱（今此所を界とす）是より下り木立原、右にスッヽヘッ、左黑松內川を眺み下りて風栗の木台、是ふな多が故号く。後ろウタサイ（丸山）と云山有、ウムマトイ（小川）フシコクロマツナイ（小川）クロマツナイ（川巾二十余間船渡壹人十三文）此川スッヽに落る。人家（當所切開人利右衞門宅）有。旅籠木賃泊りをす。春分出稼の往來する比は毎夜五六百人ヅヽ止宿する也。稻荷社有。近年此川をアフタヲタスツの界とす。昔はしばし下ヲフイネと云を以て境とせし也。（從ヲシヤマンヘ六里）余弘化の初比通りし時は、丈餘の箬を分て通りしが、今は馬足も通ずる樣に成りたる事あり難かるべし。（是より先は西部に誌るす）

河水西部スッヽに落る故スッヽヘッといへども、本川シユフツウヘッ也。芦の儀に取る。此所アフタ領にしてレフンケ土人の昔しより漁場也。兩岸小字多く、源に到りライハ（小川）キンクシライハ（小川）等皆レフンキ山中にて越る所也。

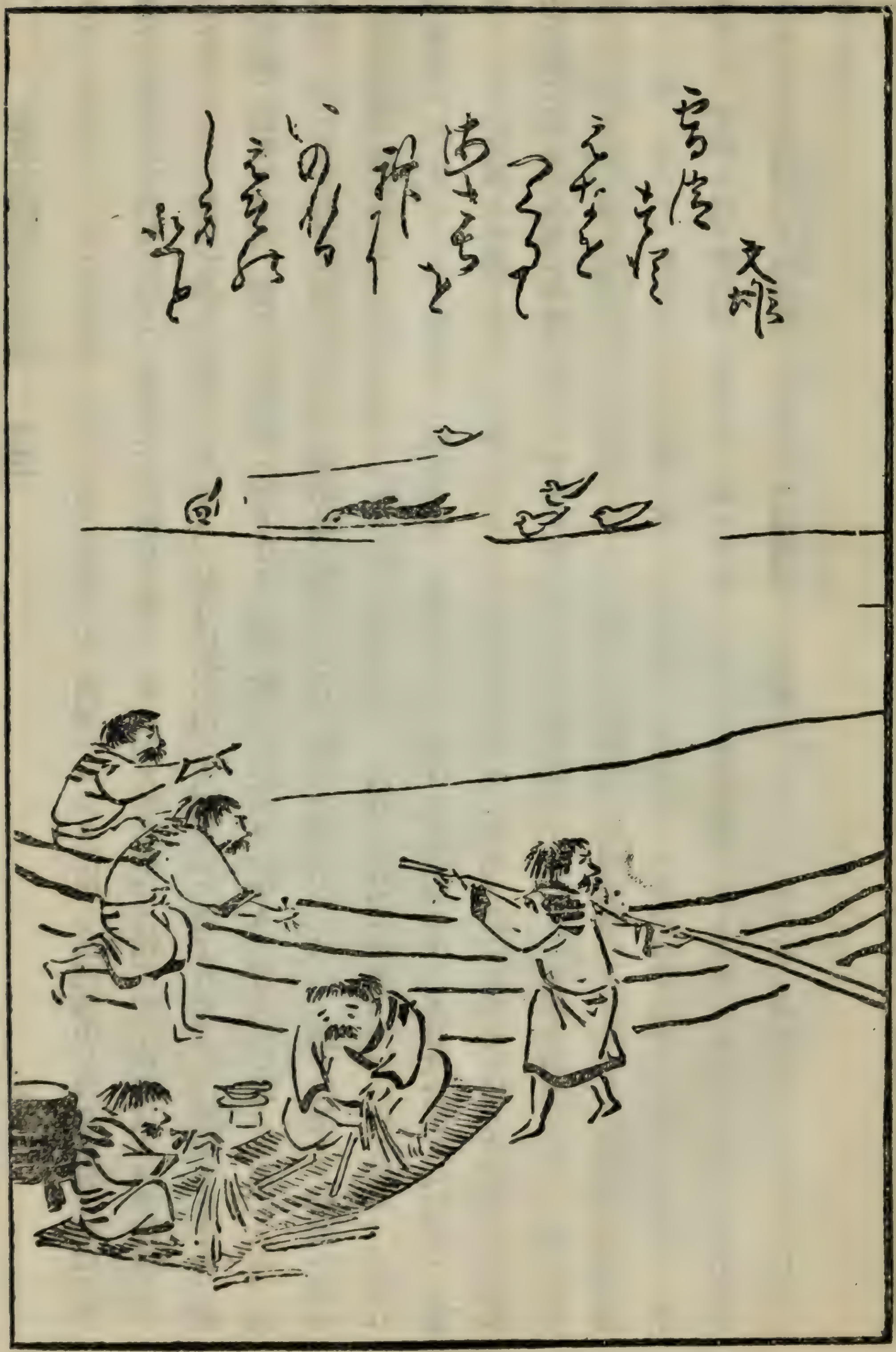
渡（ヲシヤマンヘッ）て素濱鰯屋多し。（砂濱）ブイタルウサン（同）ブイは流泉花也。是を取に行下る路

の義。此邊の上の蕕地に多し。又蕁菜も有。當所の土人は是を牛の糧となせしよし也。（一り十九丁四十三間）ネツニシヤ（寄木塚と云）流木を積て境印とせし所也。近比シツカリに境を移せしを、又此度爰に復さし標柱を建る。（從山越內十り二十丁十三間）

虻田(アフタ)領

此邊より右を眺めば沙原茅部(サワラカヤベ)の諸岳隱映列ニ碧波間ニ左り方チフトラシ岳（此水ヲシヤマンへ沼に落る）ヲタニコロ岳（此水ネツニシヤ沼に落）側立恰如レ使ニ人情開濶一過てニクトル（砂地）兩方木が有る間の義也。（一り半十間）シツカリ（小川、小休所、此比人家一軒立）川の中央大石有、名義行留りと云か。則沙濱を行留りし故号く。須臾の間此所を以て境となせしが、近比復古して寄木塚にもどしぬ。（是より山道も有、次に記ス）此邊膃肭多し。ヲシヤマンへ土人來り漁す。是を幕府江獻上の事は松前家にて慶長十五年、神祖の命有て獻じ、又享保二年に獻じ（松前志）其後絶ずして獻上有し也。

膃肭は夷地にしても殊に稀る物にて、是を產る所限りある事也。其餘の所にても時によりて取事あれど（蝦夷圖說）ヲシヤマンへの蒼海冬十月より春三四月比迄夷に命じて取らしむ。此漁事をよくする者をテバ蝦夷といへり。その比に至れば物忌くさぐ〵なして身を淸淨め、木幣神酒を製して海神舟神を祭る。膃肭方言ウネヲ、大サ三四尺餘、また一種ヲ・ネツプといふ品有。大サ五尺斗より六七尺、二種ともに牙あ

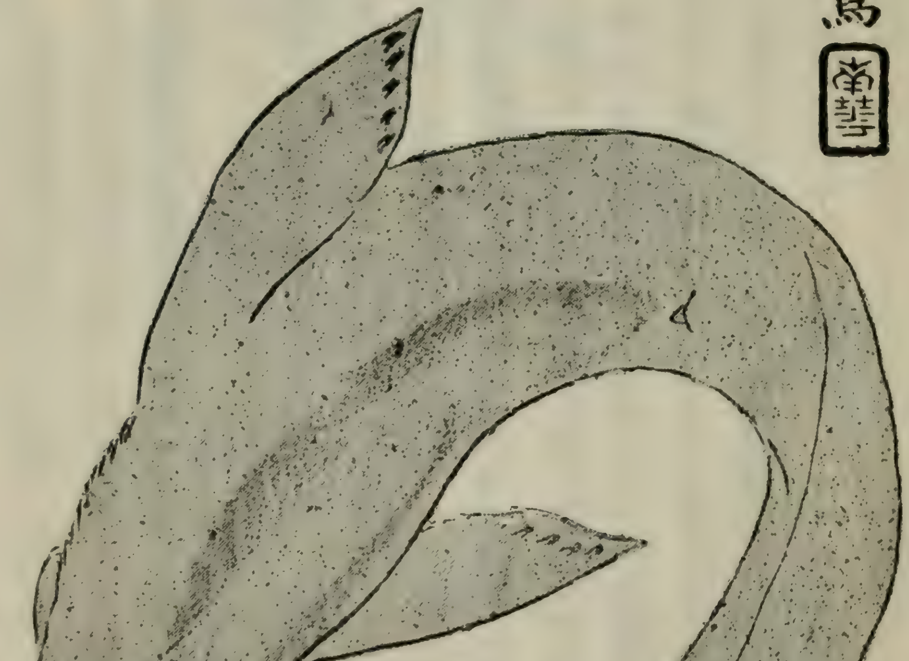


りて上は支齒にし下は特齒也。波に浮也。狀圖の如く西地ヲコシリに出る品尾鰭少し異るも有。空穩に波靜なる日を伺て漁事に出る。其跡にては物音を禁じ、家の婦女等食事さえ縕にせざれば彼ウネヲ物驚して眼を覺すとぞ、捕獲て皈れば窓より入るゝ、其外漁具の出し入迄もかく窓よりせざれば獲難しとなん。（蝦夷奇觀）漁事は夷地に曆無が故何時と定りなく、多く初冬の比シュシヤムと言魚有て海より川に上る、其日數十四五日を經て又海にかへる。膃肭是を喰はんとして海上に浮み出るゆへ、是を時節とし獵業を始め（蝦夷圖說）獸の浮游する時は其側必ず鳧の如き鳥群れり。夷其鳥を見て舟を漕事いかにも靜に、其間凡十間斗にして魚籽(ヲッフ)を以て擲獲す（蝦夷奇觀）老夷の言に、昔は天氣の和らぎたる日は大小五六疋ヅヽも獵せし事なれば獻上の品を納め、其餘を饂食となし皮を裘に製せし事也。然に近年是を得る事甚稀也。纔獻上の數に具ふのみ也（中略）取來り會所に納め腸を出し腹に鹽を十分に入、男根(チイ)は會所に收め、膽と肝を家に持歸り干て藥とし、肝はよく精氣をまし、又此生血を飲時は生涯頭痛の苦を除くと（圖說）每歲捕獲モ一二隻ニ過ズト、松前市中ニテ所賣ノ勢ハ皆僞物也。大者魚勢(トド)、小者則獺或狐貉ノ腎也。又ネツノト呼者アリ。形魚(トド)ニ似テ觀物場ニ出ルモノ盖シ此物ナルベシ（物產志稿）とし尤古くより少き物か、膃肭臍多僞者海中有獸號曰水鳥龍海人取其腎以充膃肭臍（本草綱目）とせし、然れども是を土人より買取るは至て安き者也と。

一膃肭臍漁事之儀取掛り　　蝦夷人名前取調乙名小使一同呼出ヲムシヤ致シ、漁事方出精致取獲候樣申

讀畫齋主人寫

膃肭の圖



渡シ、其上一人ニ付濁酒五合宛、尤蝦夷椀貳盃ヅヽ遣ス。外同酒二斗入一樽一同江遣ス。乙名小使共江烟草一把ヅヽ、并膳部一汁菜ニテ平夷人共江蝦夷椀にて酒一盃ヅヽ喰事共遣し候上取獲差出候節結合立合之上腸を去り鹽ニつけ箱入ニし荷造即刻箱館江差上來候。タケリは素干ニ致し乾立次第差遣間是又箱館江差立候（請負人申上書）

　但獻上品抔ニ付立會并取扱候者共一同汚穢を相改申候事（同）

定代壹隻ニ而　上壹貫五百文中壹貫二百文　小八百文（同）

如此安直故土人も不出精ニ成自然出產少く成りしものか否哉。

從是船にて行時は斷巖峩々白浪擊レ岸擧レ頭雜樹森々又樅栢五葉松有、恰も米家の山の如し。亂嶼點々として齒ニ於石ニ厦也。イメクシモ（切立岩）物を分る儀、昔し舟が碎けし故、水夫此岩に上り一尾の魚を分ち喰ひ居たりしと、イメクシエンルン（岬）廻りヒエカウシ（岩礒）過てヨヨノホリ（岩平）并て岩礒つゞきヲワリヒス（岩平）トカリウシホロ（穴岩）此所水豹多く住む洞故に号く。并てイルモ（岩礒）鼠の如く岩石依て号く。ホロナイ（小澤）岩屋（岩平）數丈の岩窟に圓空鉈作の觀音の像を安置し、前に拜殿を立て心願の者は參籠するに靈驗著き由也。カマナタモエヘ（岩平）ケソラフイカイシ、（岩）往古鳳凰の如き美敷鳥が巣をなせしと、またチカフシトウシ（岩礒）とも云よし、カハラシラリ（大石原）水かぶりの石原と云儀、ヌツコフ（岩）水に隱る義也。イコリ（岩岬）廻りトントニイカイシ、（立岩）草木の生ぜざる所の義。レブン

レフンケフ
イメシレモ

ゲフ（岩岬）何を流しても此岸え寄らずして沖ェ迦出す義也。過て濱に出る川有（レフンケヘツと云）其兩岸畑多し。（從ヲシヤマンヘ海岸六里四丁五十二間、從寄木塚同四里十九丁五十九間）川筋少し上にトウフウシナイ（左小川）メナ（右小川）トレフウシ（左小川）此所ェ山道にて下る。此上小字多し。上りてヘタヌ（二股）左りスツヽヘツに對、右コンホ川すじに向背し當所土人其處を越て皆昆保に漁に到る也。川魚有。又近比鰻鱺を產す。

レフンゲ（番屋、通行や、板くら三、制札、かんおん堂、馬や）名義前に言如し。爰は虻田の持也。安政七申年南部家へ被下ニ成る。土人廿餘新畑多し、土地午未向、左右高山雜木立、山道切開き前は他村へ船ならで行れず甚難澁なりしと。濱小石にして所々奇岩有。土產䲁鯡鰈鮭鱈海鼠椎茸あつし昆布ふのり、てん草また蝲蛄に巨大の品多し。

賤刈休所より岩角九折まゝ棧道を行や（右高山、左谷）賤刈峠爰よりヲシヤマンへ濱一面に見へ風景よろし。（卅二丁半）ライバ（木立、スツヽ、ヘツ源、小休所）過てまたキンクシライバ（卅三丁）ホロナイ（小休所）共ニスツヽの源也。又上りホロ內峠、是より臼アブタ後方羊蹄內浦岳等見ゆ。下り（廿八丁五十間）トレフナイ（レフンケ川也。休所）澤まゝ下りてレフンケペツ（本川）に出る。是に附下る（卅四丁廿三間）番屋元へ出る。此山には往古より土人の道形少有しを文化度當所結合の者切開今は馬足も立樣ニ成たり。（從シツカリ三り廿丁）

已知此地與
丘乘海氣歊
晴寒氣来三
伏時節無炎
暑居人無道
未聞雷
香溪題

從是海岸轉太濱大難所也。カシウシ（大立岩）過てホロコツ（岩岬）大なる地形との義也。フレシユマ（赤立岩）赤岩と譯す。廻りてホロヒー（コロタ濱）此所何が寄ても崩ると云儀なり。コツチヤケ（岩）并てウトロチクシ（岩礒）過てナンワツカ（岩岬）此所に淸水有故号く。チヤシナイ（山岬）上に昔しの酋長の城跡と云物有。近比迄岩にて疊上たる井戸も有しが今埋もれてなし。三面は絶壁に成て一方山根に續き頗る要害の地也。下りて砂濱。

汐滿る時は番や前より九折（觀音堂）を上りチヤシナイ峠と云を越て（十七丁十七間）此所にて濱道にて出合ふ也。其間岩高く雜樹垂レ枝甚難所也。（從レフンケ、ヲフケシ、一りヨ）

道よろし。モセウシナイ（沙地）此所蕁麻（モウセ／イラクサ）多き故号く。タツコフ（小山）過てキナチヤウシ（砂地）席（チツタヘ）に織る茅多き故号く。上の方一面の平地水田となすによろし。ヲフケシ（川巾五六間橋有。小休所、夷家有）遲流也。ヲフとは括槍、ケシは尻也。昔し括槍の鐏（イシツキ）を神が拾ひ給ひしと云故事有て号ると也。

川筋少の間深く遲流にて恰も龍蛇の蟠屈せる如く爰をメナと云り。上りてメナシユンヲフケシ（右小川）フム、シナイ（右小川）ヘタヽ（二股）其餘小字多く、源はコンホの方に到る。魚類鱒鯇桃花魚チライ鰻鱺泥鰌有。又椴材多きよし。

川を過て濱まヽヲフケシサキ（小岬）過てチハトエンネ（沙地）岩壁平也。イシリユハシシユマ（大岩）立岩の義。此岩大なる岩洞通りて恰も石門の如し。ヲタニコロ（砂地）ホンヲタニコロ（岩岬）岩間少しの濱

と云義也。ヘンサイシユマ（石濱）船の如き岩有故号く。カムイヌフカ（岩平）上に野有。此所神が遊び給ふ所也と傳ふ也。月のよくさえたる夜など管絃の音等致し彷彿と神の群遊び給ふを見る事有と、是伊勢の國渡會の高の宮の神隱れの里等いへる神域ともいへるか。則カムイヌフカは譯して神野なる由聞ば取敢えず

　　大神の作れるまゝの國なればその代のわざも絶ずやあるらん

等戯過る并てフレペシ（赤平）是より沙地になる。爰にて山道と出合也。

ヲフケシ川を越、左り坂道上り（廿四丁五十間）是より後方を顧るや、川すじ屈曲して奇を盡し、兩方平坦也。峠は箬深くして道惡し。タフコカクナイ（小澤）是より澤まゝ下りフレヘツに着す。（從ヲフケシ山道一り十二丁四十間）

フレヘツフト（川巾十余間、くり船渡し）夷家有。赤河の義也。此川濁りたる故に号く。本名ヌツキヘツなり。其儀も同じく濁り川也。

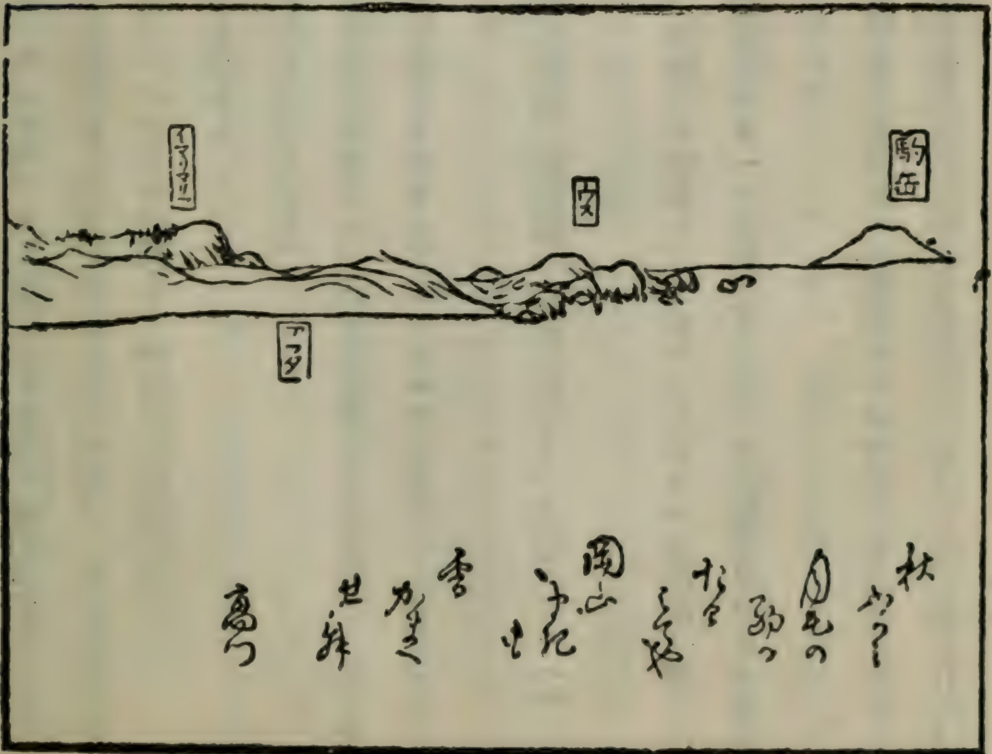
川口少し上りヨヲロシ（左小川）トウヘンヘツ（同）其他小川字多く、トウヤよりシリヘツ川筋へ越るには此川上を越るが故、委敷は後方羊蹄日誌に出す。源昆保（コンボ）シリヘツの間より來る。右の源ソリヲイの南より來る。鮭鱒鯎鯇チライ多し。

越て沙濱（半里斗）ペンペ（小川、小休所、漁や、藏有）土人廿余軒。本名ペウレペツにて冷水生る所多しの義也。此間の岩間に淸水の涌出る所有。若此所へ蔊菜（キセセリ／ワサビ）を植れば至極宜しと思はる。是より海を廻るにレタ

ツトエ（沙地）白土と譯す。爰に喰土有るよし也。

アルトル（崖小川）山の向ふの事也。是カラフト語也。惣て山の向ふの事を相互にアルトルと彼地にては呼なせり。恐くは向ふより此方を呼なしたる名の殘りしかと思はる。ツーシレトまたヘンペシレト等号く。チヤシ（城跡）廻りてシヒヽ（岩岬）過てヘモエヒ（岩岬）廻りてチヤシユマムイ（小灣）岩灣の義也。また此上にも城跡有りともいへり。上の方高山雜樹陰森としたる山也。チエムイシユマ（小岬）過てアチヤボ（大岬）此所岩重りて眺望よろし。フウレシユマ（赤岩）クリヤ（小澤）ホロナイノツ（小岬）廻りホロナイ（小川）の澤目へ出る。此所にて山道と出合也。

ヘンペ（小休所）より坂に上る箬原、雜木立（十八丁四十間）チヤシユナイ（小川）山の平通り（十



丁卅間）ホロナイ峠、是より谷間へ下り（十丁半）
しばしにて濱に出るなり。
濱つゞきフレナイ（小川）赤澤と云儀。先公料の時此川に橋を架て千里橋と号くよし、休明光記に見ゆ。（従レフンケ海岸三り三十二丁山道六里余、従ペンペ壹り十三丁四十間）
フレナイ（會所、止宿所、制札、備米くら、馬屋、井戸櫓、漁や、板くら八棟、鍛冶藏）是をアフタの會所といへり。其儀は元虻田に有しが文政五壬午閏正月十五日臼岳燒の時此所へ移したる故其名殘れる也。地形西南を受船懸り悪し。皆アフタに懸り荷役する也。海を隔て内浦岳に對し風景宜し。東に沼見(トウヌケ)峠(トシ)臼岳北に鯱雪岳(ヘロキウハシ)是は雪降積るや多鯱此潤に寄り來る故に号く。并て新路多山(ニイナルウシ)其山に靠て土人の畑多く連り、また近比石橋某君の世話にて結合前田落合の

兩人新田を開かれしが南受にてよく熟りし也。是此地稻作の始也。其功業實に感ずべし。余是を見て、

　荒蝦夷がうへしばかりの新墾（ニヰバリ）も年有げなり今年よりして

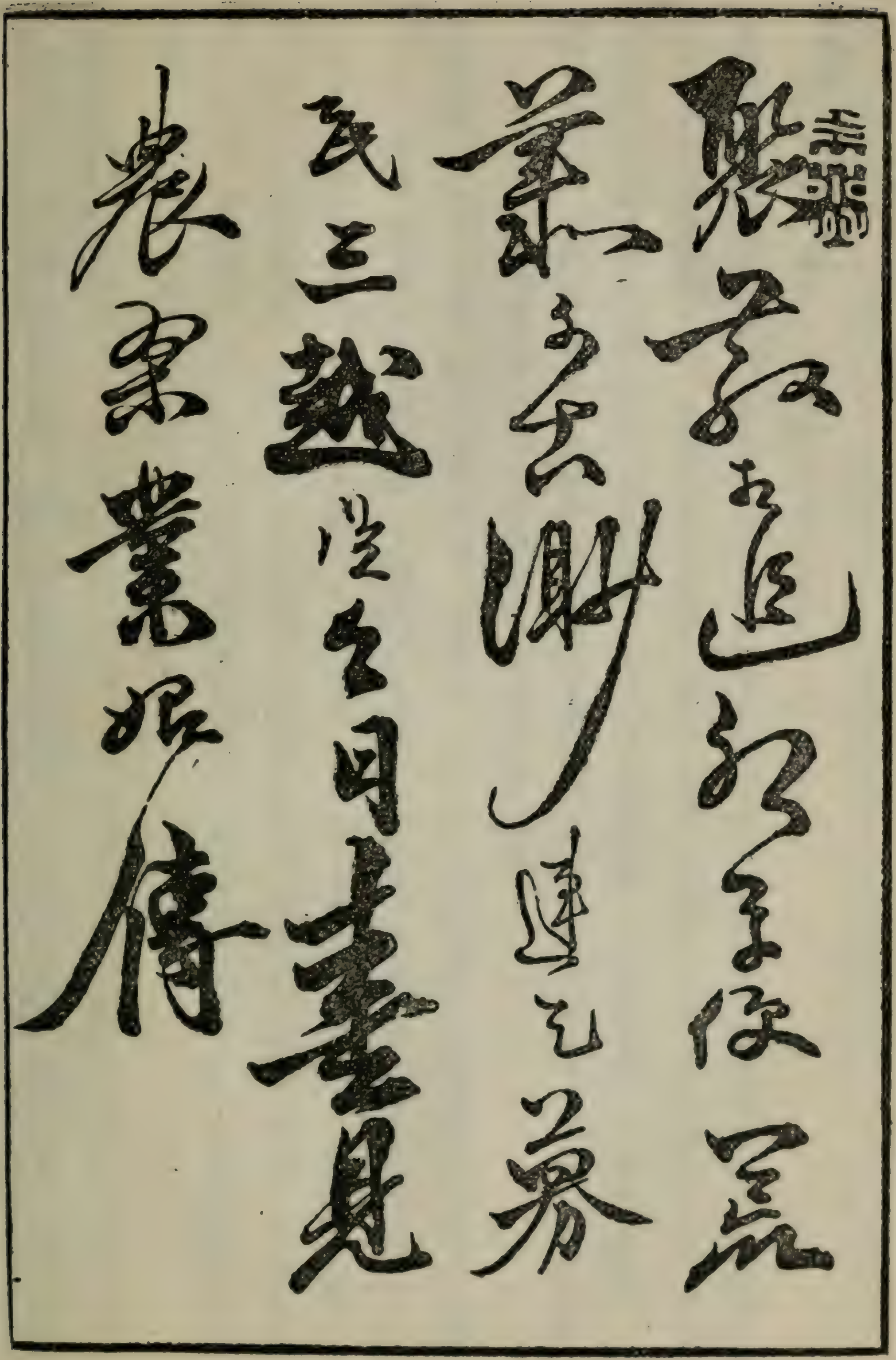
と蜂腰を兩土に贈りて歸る。土產鮭是は多くレリヘツの川筋にて取。馬にて爰に出すもの多し。多鯡春鯡海鼠昆布ふのり鱈雜魚種々有。又巨材多く椎茸あつし多く、土人（文政壬午改百七十軒人口八百人、安政丙辰改百六十四軒人口六百余）多し。上に稻荷社、蛯子社并て勤番所有。下に牧士長屋、此牧は（富川牧、平野牧、岡山牧、豐澤牧）文化二巳の年戶川筑前守樣原新助福井千馬助河間彥八郞等と議て江戶より父馬を下し始め玉ふ。今莫大の數に成たり。又出稼人家も追々增繁昌に成也。

從是沙濱ヲモナイ（小川）此上一面の平地にて畑多し。アフタ川（小川）過て（人家跡多し）アフタ（沙灣）會所の元地也。西向濱にして船懸り宜し。名義鉤取（アフタ）との義。シユマエハケ（岩道）是まで沙地、是より上山道入口下濱道岩角上りホンシレト（岩岬）下に、戎社有。ヲタムイ（小淵）ホロシレト（岩岬）大岩岬と云義。チヤランケ石（岩岬）チヤランケと云は夷人風の談判する事也。此所二ツの石有、相對て談合ふ如き形故に号る也。往古はホロシレトを境となせしが今爰を境とす。（從ヨリキツカ九り十八丁卅間）此道を行て臼の會所元は甚近し。また海岸の眺望實に奇を盡せり。

從シユマエハケ陸路は（六丁四十間）木立ウコシヨンコウシ（坂上）此所を境とす。昔し境目海岸に有て陸に無りし時、海へ鯨が流れ來りしを、臼よりアフタに知らし、アフタより臼に知らさんとの使、爰にて

行合しが故、是ぞ神幸ならんとて、此所を以て界と定めしと、ウコションは互にと云事也。モロランへ行には此山通りの方近し。

東蝦夷日誌初篇終



洛陽伽藍記

穀之一題

東西蝦夷山川
地理取調紀行

東蝦夷日誌二編

多氣志樓蔵板

首言

一此編東部ウスよりモロラン、ホロヘツ、シラヲイ四場所を誌す。海岸は初集の如く數度の日誌より摘抄して大意を記し、曰のヲサルヘツの事は於沙流邊津志より摘抄すなるべし。

一編中大臼山二世鸞洲上人垂誠三世辨瑞上人子引歌等を入る。上人の土人を教撫し玉ひしは人の及ばざる處にして弘法の爲のみにあらず。上人行狀實に不凡なるが故に是を誌置り。嗚呼今度の御所置の時に當り質直淳朴の民を教育するの有司其意を汲給はんことを。

一海岸は上より誌るし、文化度切開陸路は一字下げ○標左右へ入る處また川筋等△を以て標とす。

一川筋桃花魚、鯇等誌るす處必ず雜喉も有也。一々是をしるさず。

一編頭るに順て處名の譯を省略す。是前に出す故也。余闕嶋の地名一として不レ審もの無れば若シ審さんと欲る人は余が門扉を叩給ふべし。

一此地の事を探索し給はんその人、先其書を讀に、余が日誌の如きは餘り繁く讀惑はれ煩雜して、又近世梓行せる書は無稽の譚多く、猿蟹合戰御伽話の如き書にも下り、却て奇を說んとしてこの地を異邦の樣に書なしたる事多ければ其害少からず。依て余は有の儘、聞のまゝ文を飾らず節と實を主とし誌るし置ものなるべし。

文久三癸亥の霜月中つ頃に喰二熬豆一てしるし置

東蝦夷日誌 貳編

伊勢　松浦竹四郎　著

宇須

海畔ノ尖山似ニ劍鋩ニ秋來處々割クニ愁腸一（柳子厚）聞に予山水の癖有故か、何時も此處に來て旅腸を慰ざる事なし、奇岩怪石實に神工鬼斧所レ不レ及也。擧ハレ頭駒岳隔レ海影を浸し恰も菱花の如し。窄路迢々（五丁六間）キラフヌト（岩岬）角の如き岬の義也。此岬尖て長く出たる故号く（并て）タンネシリ（長岩）カシウシユマ（岩）抄子岩の義也。廻りて灣に入る。（灣口百余間周二十余丁、從フレナイ會所一り七丁五十間）灣口恰も嚢の括の如く臆の如くして船懸り宜し。本名ウシヨロと云を結て今（松前舊事記に長錄三己卯宇須の隨岸寺を松前に移す。永正八辛未四月シノリ宇須與倉前の首長爲レ戔見レ敗、慶長六辛丑四月宇須岳落城等は是皆箱館の事也）

ウス（會所一棟、制札、雜藏、馬や、旅宿所、板くら五）と云て場所の惣名となれり。東西北地とも如此よき灣を皆ウシヨロと稱る處多し。箱館をウシヨロケシと云しは臆の端也。西北のヲシヨロ、是ウシヨロの轉じウシヨロコツは臆の地所の義、北地のウシヨロも如レ臆灣よりして号し也。此地本名はメムカ（會所元）と云。其義太古の海嘯に外は皆流れしが、此所斗殘しが故也。是恐は今の辨天社（姪子、會殿、二間四方大

岩上に有)の地か、土人多し。(文政改百三軒四百十七人、安政改九十三軒四百六十人)產物鮭鱒多鯡海膃雜魚粕昆布鹿皮海扇布海苔多し。土地西向芽部と對し、東に臼岳常に煙出。會所は灣の北岸に在て諸國の船舶其前に舫(モヤイ)す。土肥沃にして菜疏よく出來、阜に上り海面を眺めば

△瀰漫浩渺として亂礁點々饑虎餓狼或立或踞眞若シ圖畫。北の方イエネ、ソウ(岩磯)チカフウシシユマ(小)鳥多き故号く。エコンケシラル(小岩)レシランネコツ(三岩)レは三ツの義也。ホロシラル(大岩)トシランネコツ(二岩)トは二ツの義也。カバフケシラル(岩石)フプシヲル(岩磯)昔し蝦が有し故号く。ヲヤコツ(岩磯)レフンシラリ(立岩)レフンモシリ(岩磯)沖島の義也。灣口にホロモシリ(大島)シヒタモシリ(岩島)此二嶋へは干潟に亂礁を飛越刎越行に宜し。海栗(ウニ)小貝海草等をあさる夷童(セカチカナチ)常に群遊す。

　氷ゐし岸の岩ほを根さしにて春とて咲か浪のはつ花　　攝津守

陸奥紀行
　水の面にかぞへし秋のなかばともえぞしら浪の音ばかりして　　紀正敦

并て灣の北岸に(會所より二丁五十間)イタヲノト(大岩岬)夷家有、其上に門有。

大臼山道場院善光寺(淨土宗本尊臼坐三尊彌陀如來金佛津輕今別本覺寺五世貞典上人作、背文享保十一丙午歳正月廿五日同國祈願所光善寺十三世靑蓮社禪譽上人知榮和尙松前臼山善光寺一光三尊如來開眼道場大願主上總國市原郡古敷谷村光明寺八世天譽社眞譽辨知頓阿和尙と有)善光寺と号るもウスに緣あり。また燒山の

巓凹く成て臼の形に似たるなど頗る因有も奇とす。抑此地に今の穴間と云に慈覺大師の舊跡とて古より地藏堂あり（海中出現のよし云）傍に石の彌陀の像等ありしが慶長十八年（癸丑）領主慶廣公至二宇須一營二善光寺一（松前志同舊事記）給ひ其後寛文六（丙午）年江州伊吹山平等岩の僧圓空再興後また享保十一（丙午）年上總國古數谷頓阿和尚再建す。今に慶長十八年棟札幷に享保十一年の棟札あり、然共形斗の小堂なる故に享和二戌年九月廿一日寺社奉行へ懸合けるに、新寺院の事停止たりと雖も蝦夷地は別の境にて追々御世話も有事なれば苦しからず、然ど後に至り不正の筋も生ずべきや難斗に依て、新寺何ヶ寺と定め、其餘は庵室の類も成難事に極て然るべしと同年十月十一日寺社方（松平周防守樣）より挨拶有又十一月廿五日備前守忠精朝臣より達し有、（中略）追て五ヶ寺も建立の積りを以先當時三ヶ寺も造寺致し度、尤彼地寺院共墳家等も無るより追而墳越等出來る迄は普請幷扶持等も當御用金の內より賄可申とぞ（中略）住職は寺社奉行の方にて撰びの上野增上寺金地院の會下より可被下付、夫より翌々文化元子年淨土宗大臼山道場院善光寺莊海（翌丑）三月出立（休明光記）し建立半にして遷化し給ふ。二世鸞洲上人は筑前の產にして法德四方に隱れなし。德本行者と同に紀州須加谷に山居なし給ひ後に行者を江戸に誘引し、自分此地江渡り、此一寺を建立し、文化四丁卯年五月俄羅斯亂の時には處々へ佛幡を立て土人に地を守らしめ、身は彼等が炮丸に死すとも、外夷の恥を受事なかれと教撫し、一紙の垂誡を作り、是と一枚起證に夷言を附梓にのせ、又後世の枝折といへる書を著して施し、又或時は大なる數珠にて夷民に百萬返をくらしめし等も其法筵に連る者五百人余、是此地にて念佛の

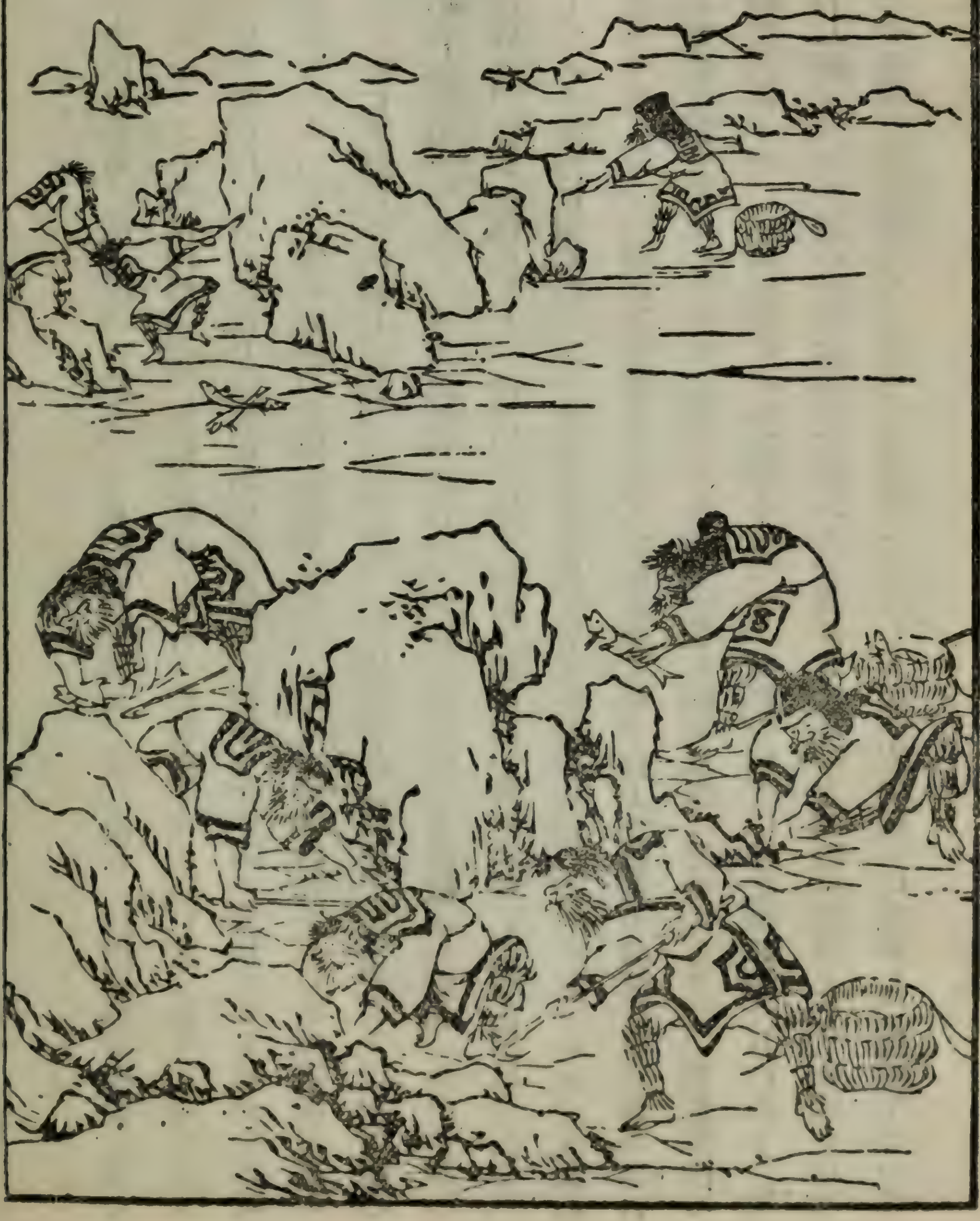
跡人断未陟此地為誰開
絶域縦横跡着君砕百骸
田原　萱生元順
白老岳
ミキウ岳
ヌフルヘツ岳
クツタルシ
モロラン岳
イマリマリフ岳
臼沼
臼岳
ニレケリサンヘ
エトモ
○ホンモシリ
○大コクシマ
トカルモイ
ハタチウス
チリヘツ
ホロシレト
チアイヘツ
イマリマリフ
ヲサルヘツ
ホンウス
シレト

始め也。依てか豊の淡窓老人も君是宗門第一人、乘レ桴嘗度異邦民、元知佛性無南北、說甚毛夷不易馴、と因に其垂誡を爰に加ふ。

即今赤賊來寇して干戈眼に遮る。衆心風旆の如く、手足の置所を失ふ。切に恐らくは汝等儕輩の墜に墮して牙根定らざらむことを。この故に山僧一苦言を吐之砭鍼とせむ。汝等斯干戈の時に當て怖るゝ事なかれ驚くことなかれ、平生の教示は今日の爲なり。無常念に至常與死王居頼みなき露の命惜て留る我身かは死緣無量何ぞ今日の賊徒のみならん、本願大悲の來迎は時處をきらふなし、念佛の聲あらむ處は軍陣もまた聖衆來迎の道場也。今既に進退のがれ難し、前後共に賊軍也。四山來逼して外死王の殺鬼きそひ起る、唯心を決して念死念佛の外他事有べからず。夫治亂推移は古今の定數、倚伏常なきは識士の習也。今更に驚べきにあらず。生死は分有、定業は逃がたし。仲尼曰、死生有命。孟子曰、修身而待、世間之聖賢既に然り、出世の道人何ぞ執して心を形體に留めむ。況や我等渡海の始より弘法利生の爲に身心を放下せり。九流の俗士すら我を見ては生を輕んず、三寶の聖種豈境に對して死を恐んや。たゞ此眼前の轉變を見て增上厭苦の心を起し、身後の常樂を觀じて專心欣求の念をすゝむべし。徒に病床に臥て死せんよりは、勇進念佛の時識士を出ん事勇敢にあらずや。上機は頓に身命を捨ると尺す。背後の炮聲に命を捨ん事今日にあり。嗚呼無窮の生死は今日に縮まり、不退の淨土は斷息に隣れり。豈思きや軍陣を臨終の道場として來迎を待べしとは、影をも計きや夷賊を逆知識として往生の先途をとぐべしとは。大衆至心に念佛して怨親平等一佛

臼の沼にて氷の上岩石に依るカツチキと云ふて魚を木の鋒にて突出す図

秦檍麿

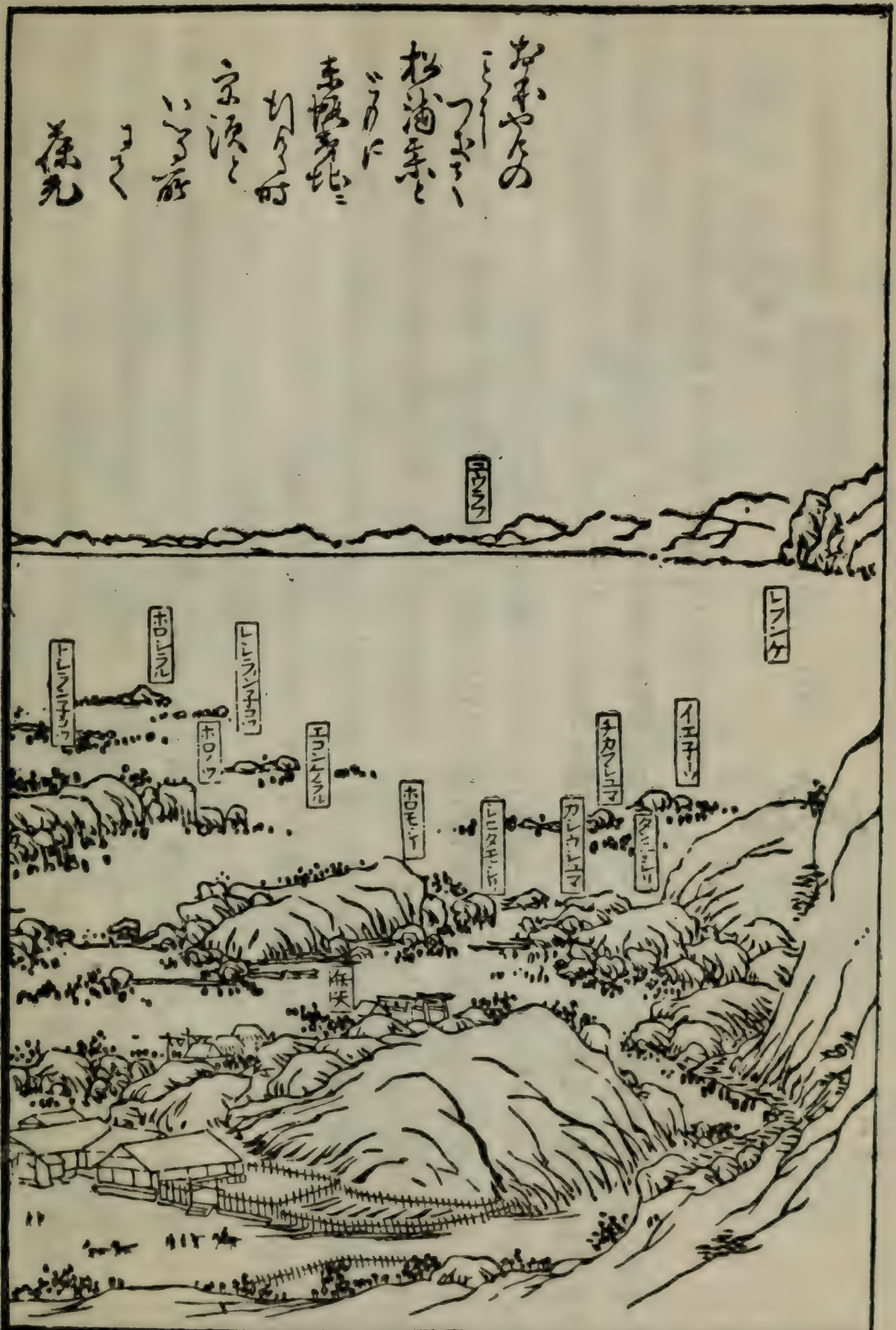


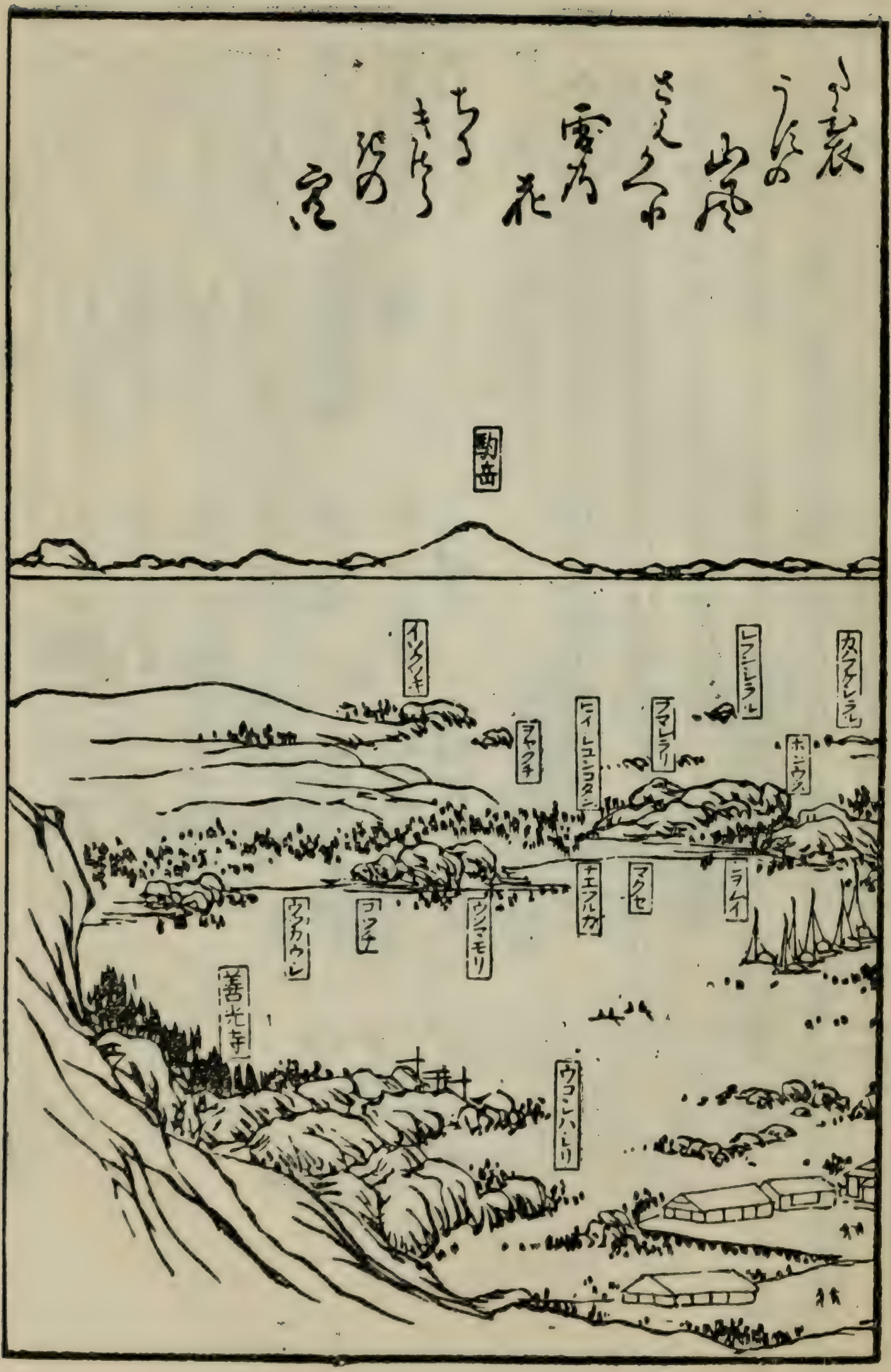
浄土の回向すべし。佛の加祐有らんには天下和順兵戈無用の巨益有べし。白行を全して萬民を益す。怨敵(オンテキ)退散(タイサン)の祈願も此に有、今にして免るゝ事もあらば、深山幽屈に棲身して余生を送るべし。亂を巖洞に避、筆を飢寒(キカン)の間に弄せられし先蹤を思ふべし。汝等たゞ浄業の勇進せざる事を憂ひて、賊徒の平治せざる事を思とせず、道俗分有所作おなじからず、彼は防戦の備を設ん、我は吾道を全ふす、其事同じからずといへども其守は一なり。　大臼山二世鳳譽鸞洲誌す。

また三世辨瑞上人も行者の法弟にて道徳著(イチヂル)き御方なりしと。常に場所を廻り米袋を荷はせ、病人孤獨等有時は手當し、後世の事勸め、若者には子引歌といへるを作り、是を蝦夷語もて敎へ、自ら鉦(カネ)打鳴し舞踊等し、また梓にのせ和人共にも施し給ひし故、今に上人を念佛カモイと云て尊敬しける也。上人常に行者の洪德を諸人に示し給ふに、其中に一人の小才子(コザカシキモノ)有て、行者にはかく尊き御方なれば本地が有そうに存候由、難問しけるを、上人夫よりして晝夜ともに行者の本地佛をしらんことを願はれしや、或夜夢となく現となく、天童天降り一ツの箱を授け給ふに、是を開き見給ふと、德本行者彌陀化身爲度衆生來入火宅汝等仰心莫生疑心と有にて、始て行者の本地佛を感得し、自ら是を認め置給ひし也。(巢鴨一行院記錄摘要)如此大德の駐錫なし玉ひしが故、今に黑屑(コクシン)の胡女(メノコ)までも稱名念佛する事とは成たり。

念佛上人(ネンボチカモイ)　子引歌(ポポウンニシケイナ)

南無阿彌陀佛　蝦夷地大臼山善光寺三代　念佛
前大本願辨瑞上人


レフンケ
チカフレユマ
カレウレユマ
ホロモイ
エコンムクラル
ホロレラル
ホロノツ


駒岳
マクセ
善光寺

これや人々　おしえを聞よ　早ひかおそひか　一度は死ぬよ
死かいやなら　念佛まうせ　まうす人なら　いつ何時に
かゝるからだの　しにたるとても　蟬のぬけがら　棄るが如く
月も日もゆく　死せざる國へ　往て生れて　心のまゝよ
妻や子供が　可愛ならば　共に念佛　申がよいぞ
此世はかならず　厄難うけず　後の世はまた　淨土に生れ
和人も夷人も　下もとのも　一ツ蓮の　臺にすみて
ながく樂しみ　死ぬ事ぞなし

今よりはみな人ごとにひゞ〳〵にわすれずまうせ南無あみた佛と
阿彌陀佛と常にとなふる人はみな世のさいはひ來るなりけり
南無阿彌佛ねがふこゝろぞみそなはせ南無阿彌陀佛〳〵　小師佛彦

又土人に片假名を教え給ひし由、續て辨定（四代）辨諦（五代）順立（六代）仙海（七代）と法燈依然とし千島の隈を赫す。是偏に佛法不思議の謂爰に有る仰き尊ぶべき事也。境内に經堂釋迦堂愛宕社胎内潜岩方丈庫裡美々敷、また前に一光三尊如來は增上寺偏譽大僧正御寄附也。又古き鰐口半鐘有。

石亭畫

奉上鰐口
寛永拾五年戊寅五月吉日　下國宮内尉康季

半鐘に
寶暦三癸酉五月大吉日
奉献　松前臼岳善光寺如來　願主　南部大畑武川氏
久兵衛謹敬白

岩角を下り、ウコシワシリ（岩岬）モヤサン（下り坂）引込し處と譯す、陸地と爰にて出合也。
陸境より（二丁十九間）ノヤフル（坂）蓬坂(ノヤフル)と譯す（三丁四十間）下りてモヤサンにて出合なり。
沙地（三丁半）ヤアモイ（平磯）網を懸て鮱を取し由也。ヘラエヘウシユマ（沙地）ホツヌシリ（穴渕と云）大岩窟有、譯て地獄穴と云。燒山に通ると、多は暖風を生じ、夏冷氣を噴。其岩の上に小堂有（本尊地藏𦬇、昔し相摸國より椴大木流れ來り、是を以て作り、其枝にて千體佛を作りたりとて今に有る也）樹木陰森とし是善光寺の舊跡也　岩崎（并て）ウツカウシ（平濱）昔しヲサルヘツの口爰に有しと、其頃椴の枝もて梁(ウラエ)を懸しと、ウツカは瀬也。其土地を考るにヲサルヘツ此所へ落しと云は信じ難けれ共、今のフルホク等は山燒の時に出來たると聞ば、實にもと思はる。何ぞ桑田碧海の譬諭(タトエ)に及ばん。并てコツチ（平地）南方窪き義也。ウソコマモシリ（周十間余）岩島也。汐滿れば嶋に成、干時は歩行す（此處より陸地へ出る道有也）上にホントウ（小沼周五六丁）水面に菱實(ヘカンベ)三稜(ヒシ)からけん生たり。ナエフルカ（平磯）本名ナイホと云、澤の口の義也。昔し川口爰に有し時の名也（三丁余）マクロ（平磯）是灣の南岸也。畑多し（人家有）ショモイ

（岩名）行留り灣の義也。此邊カツナキと云魚多し。ホロノツ（大岬會所元に對す）廻り外に出てホンウス（小灣）小き灣の義也。ヒイシユンコダン（沙地人家有、番や、かやくら、畑多し）此處向村の義也。是會所より云事也。又此方よりは會處元をヒイシユンコタンと云が西向にして駒岳を望み頗る勝景也。平沙衍迤としたり。ヲタサンゲ并てヲタムイ（砂濱）過てイソクソキ（岬有）昔し此崎に啄木鳥（イツクイキ）が窠を作りしと、依て号く。（十丁余）アルトル（沙地、鰯小屋、夷家有）名義、山の向ふの義也。是も臼の方より言事か。今は地名と成たり。シユマシレト（岩岬）リイヒラ（高）過て（一り余）川口に出る、是を海岸通りと云。頗るよろしき眺望なり。三田（喜六）君予と同道の時、海原遥に霞たなびき渡りければ

朝霞たな引わたる駒が岳こやはつ春の見るものにせん　葆光

○追分（モヤサン）より陸地を行や平野皆礁石にして楊柳（シユシユ）赤楊（ケネ）茱萸玫瑰生たり。ホロカウシ（平地）是より坂にかゝる（廿丁余畑通）シニウシユマ休岩の義（此處より臼岳）。

△扨是より木立を分け入ことしばしにて虎杖原に出るや、山も追々峻しく成て礁石辷りて甚上り難し。辛く南に廻り何を目的となく東の方に到る。湖（トゥ）の傍に出。是を極樂濱と云。觀音堂有。（江戸鉄屋久右衛門寄進す）向に後方羊蹄（メシリヘシ）山并てヒンネシリ（ヲシリヘシ）立り。其形恰も富士の如し。

陸奥紀行
海ならぬみるめもあるをしらでたゞうすの山路と何思ひけむ　紀　正敦

湖中に三ツの島あり、是に小堂有て圓空鉈作りの佛を安置す。

予は數度登りしが、或年正月に川々池沼皆氷たる頃に、此湖少も氷ざる故土人に其故を問ふに、此湖が氷らば人が皆死と答しに、根も無事と笑て過しが、實說なるか、寛永六己巳蝦夷松前大雪人多く死す。阿武田沼氷(松前誌、同舊事記)と有に始て實說としりたり。北方沼見峠西に廻り臼灣を俯し其形如臼、依て臼岳(本名ウショロノホリ)と呼訛れり。嶺燒拔て常に黑烟を吐き、千萬雷を轟す如く、實に膽心を寒からしむ。昔はしらず、慶長十六冬十月臼岳燒(松前誌)寛文三癸卯年七月十五日宇須岳燒(松前誌、同舊事記、津輕一統志)文政五壬午閏正月九日臼岳燒時之人夥く死す。安政元寅年少し燒たれども此時は怪我人もなかりしと聞り。

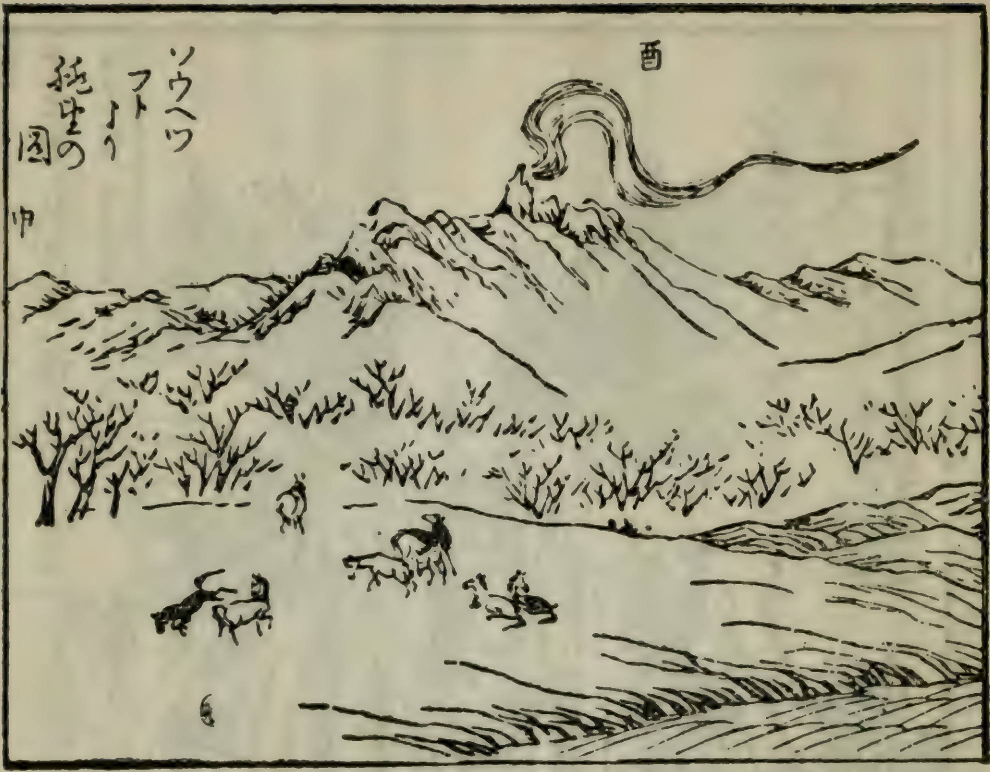
春がすみけぶりとゝもになびくなりうすの高嶺もわかぬばかりに　石場　高門

○本道を坂に上る、フルホク（峠）坂下る義也。ヲサルヘツ眼下に見ゆ。下りて平野、十年前は是より左に行、今は右に行（一里六丁）川端に出る能き廣地なり。

△七月廿四日（安政四巳年）支配人（富右衛門）に水源行を談じ、教導者三人（ハシテヤキ　トソウエシクソ）を連れ、糧食用意し出立。フルホリより左りに入、柳赤楊茱萸桑赤たも白楊原を行。右川筋、左臼山（此間凡二十丁）しばし過て右にハンケ平并てヘンケ平（川南）此山イマリマリフ岳に續く、舟は此平下迄上るよし也。上は岩高水怒て上り難しと、左（七八丁）セタヲミマヒイナイ（臼山南赤几平）樵山故常に水涸れども昨日の雨にて今日は頗る能き飛泉（タキ）と成たり。譯は犬が落たる深谷底の義也。左右は屛風の如し。（并て）ユクヲミマヒイナイ（前同）是も同く瀧に成たるが、歸りに見たる時は一滴の水も無りし也。ユクは鹿の事也。（三十丁余）リヤコタン（小澤）此處去ル寅年燒迄漁（ナヤ）やが有しと、今埋れて棟斗樵泥の中に少し見たり。リヤは越年の義、此邊泥沙にて澤埋れ踏込て危かりしが、我等を見て遊し鹿が逃んとして泥中に四足を踏込み、渉り得ざりしを、土人枯木を泥上に横たへ、此上を渉り、其鹿一頭を雜作もなく曳來り。是より枯木を追々持運び辛うじて越ゆ。如此處三所過て（白楊原也）ルエンワツカ（小川巾七八尺）鹽（ヒン）氣有る故に号く。澤を下り（川向）ヨウロシ（大岩）エナヲを作り手向て山中の安を祈り、先彼鹿を石上に屠る。腥血を歃（スヽ）て山路の一興を遣たり。ヲホナイ（北岸小澤）此邊急流轉（コロ）た石のみ也。（貳三丁）ソウペツフト（ソウヘツ）是に添て上る。（五六丁）チエホツナイ（同枝川也）小魚多き故号く。此邊白楊（ヤヤニ／トロ）

の三間四間のもの斗り也。（十五六丁）過て瀧河(ソウハツ)（水巾七八間）急流、此處渡る場也。石に滑有て甚危し。（川面三丁）漁や（アフタ土人トモツナ）二軒有、其故は昔し虻田土人鹿を追來り、爰にて瀧に落死せし時、首長サカナ（アフタ）なる者、東西に名を得たるしれ者なりしが、曰場所には如此瀧が有る故に我が僕(ウタレ)死し故、其償に此瀧を以來我等方へ遣し候様申に、曰乙名答に瀧は元より余が領分の物なる處へ來て落る共其方の過ち也、と答し也。サカナ申にチコエキフ（喰物なり）を見て追ふは土人の法也。依て追來しが惡くば、已來曰土人は鳥獸の駈走る物を喰ことなかれと申、談判に勝て川を蛇田江取る、川口迄を入込の場所と定めぬとかや。

扨樹根岸角に手を懸て上に（三丁）や、兩岸雜樹陰森たる中に大瀧(ホロソウ)（巾七八間高五丈）二口に落、大の方



中にて腰を折故、水聲愈淙々珠跳玉迸無レ可レ譬二奇絶一ハ、予流木に腰懸圖レ之間に衣服濡浸たり。土人等エナヲ奉りて南無阿彌陀〳〵と合掌稱名しける故、予も牛に見れて念佛し、按るに流石善光寺近邊の土人成る故也と、門前の子供習はぬ經を讀との譬如何もと感じたり。從是樹根傳ひ少々上り、ソウチヤロに至る、是銚子口也。上は碧水明二滅樹間一其深幾尋莫二能測一ハ、予亦翌正月三田君と同に到るや、飛泉凍合恰玉磬を立如く、又玉柱を逆にする如く是亦一段奇觀也。下りてヘツカシハ（渡場）越る、此處轉た石、一同手を引連わたる、上りヌプカ（野原）右本川左沼の山也。（此原巾廿丁長一里余）我等が肩より貳尺三尺高き芒にて四方望み難し、たゞ臼岳向に白老岳右に阿蘇岩（ホロヘツ源）を時々見る斗也。ヌプカは野也。ヌフとは却て古言のよし也。イヌムコチ

（小川）此邊槲柏少し有。（七八丁）タッコフナイ（小川）上に小山有依て号く。此處本川（巾十余間）中に大岩三ッ程并び其間瀧に成落る、爰にて宿けるに鍋を忘れ如何ともなし難く、予樺鍋を作らんとて樺を探せども無故に、甚是を思ひ煩ひしに、土人程なく欵多葉を取來り五六枚重ね、是に程よく米と水を入て括り火上に置しが、頓て其葉は燃仕舞と思ふ頃に取上見れば、中に握る如く丸く飯に成たり、實に奇とすべし。

廿五日出立、向岸（一丁）ヌッコマナイ（小川）其義野に有譯也。木原を分行かつらの木の十五六間も通り、三圍四圍の物のみ也。ケナシノシケヲマナイ（小川巾五六間）木立中の川の義也。（十余丁）レリコマナイ（川巾三間）急流、其譯鹿が此澤へ三日程隱れ居たりとの義、（七八丁）ハンケヘッブト（向岸）ヘンケヘッブト（向岸）共に源は緜別岳より來る。（十七八丁）クヲペッ（小川）昔し弓を仕懸置し義也、此邊にて南岸追々狹りし故、川原に出て此方へ越え彼方へ渡り上り行。（廿丁余）シフシウシナイ（左小川）木賊（シフシフシ）多き故号く。（二三丁）ヒラソウ（崖平瀧有）とて赤崩平に瀧有（七八丁）ホロフウレヘッ（向岸川）緜別ヌフルヘッ岳より來る。（三四丁）ウツカ（瀬也）南岸へ越少し上り温泉（平地に涌出ス）硫黄の氣有、出瘡切疵に宜しき由也。（従タフコフ四里）是より川筋上るに愈南岸壁り川流急にして間（廿丁余）漸々平下え少の平地を得て宿す。終日蚊に困りしが夜に入一匹も不來安眠せり。

廿六日平旦身一ッにて岩角を飛越刎越行、南岸小澤有ども其名は傳らず。午過（凡一里半と思ふ）ヘタヌ（二一

平瀧の

股）に成る。此邊白老岳の後ろ也。左りはシリベツの後に到る、是をトクジ、ヲンベツ（左股）と云。則鯇川の義也。源簃縨岳に到る。シノマンヲサルベツ（右本川也）と云は支骨湖の後に到ると此處にて兩山愈𨻶り、歩窮て引歸し、夜溫泉に宿。翌日タツコブに一宿し會所に着し、土人等に念佛申せし事を富右衛門（支配人）に話たれば、前鸞洲辨瑞二上人の洪德を話し、それ故此處の土人は念佛する事なりと答えぬ。

ヲサルベツ（巾三十間余船渡）本名ヲサラベツ、其儀川尻に濕澤有義也。五六年前少し上にて渡せし也。其處をクッテキナイと云。アマホの䌙の事也。越て柳原（土人屋、小休所、漁や、茅くら、鮭場也）モンヘツ（小川、土人二軒有）濱に出てサンミチセ（砂濱）此邊海扇多く、和人も出稼し、汻日和には甚繁華也。其海扇は殼の捨有る事遠くより眺ば雪と見惑ふ斗なり。此上に豐澤牧と云有、戯に蜂腰を其標に記し置。

春がすみたてる荒野の遠こちにいばゆる駒の聲ののどけさ

サッテキイマリマリフ（小川）古き川也。又（并て）イマリマリフ（小川、土人や有。鮭場なり）名義游く形云り。一説川上にアイノチセ（大窟）と云窟有、依て号ると。此邊一面の平地頗る畑地に宜し。フウレ平（赤平）平エハチリクシナイ（小川）ヲヒネネプ（小川）ヲコロマツプ（小川）ヲコシフシヘ（小川）ホロネツプ（小川、小休所）貝引出稼多し。上に小沼有、チマイヘツ（川巾五六間程有）今場所境とす。（從アフタ境六り十六丁十間、從會所六里八丁十三間）本名チヤエヘツ也。チヤは自ら燒、エは喰する、自燒喰川の義

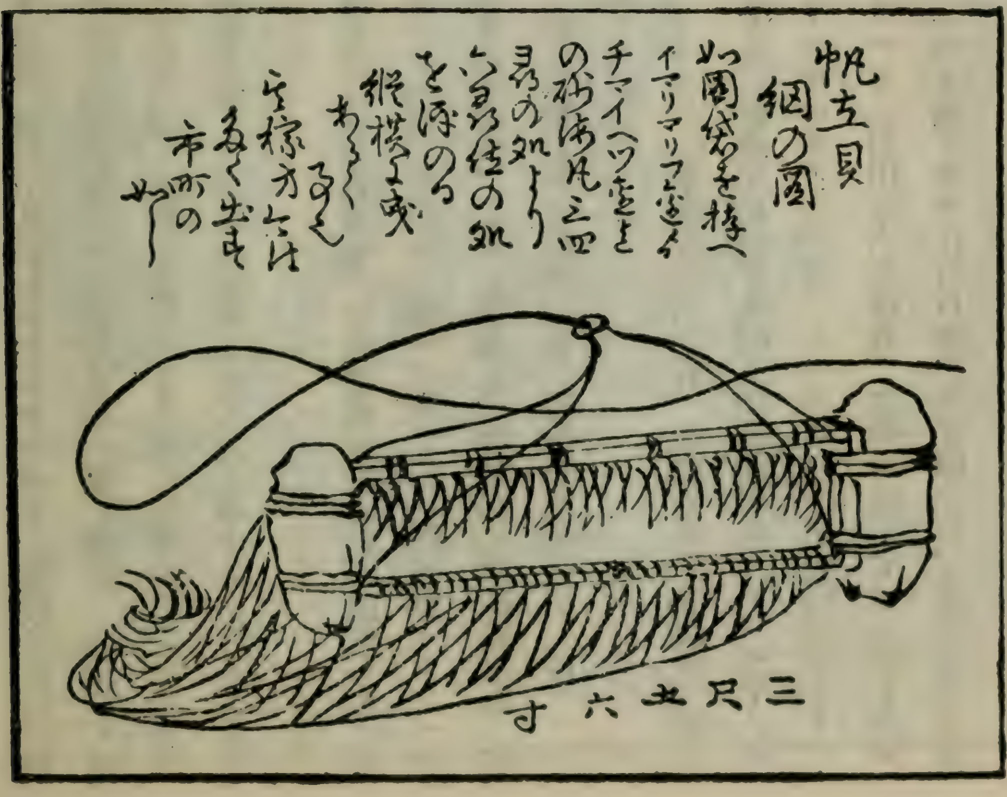
也。又チマイ〳〵と鳴鳥が出たる故とも云。（ニシハタ串口）土人の説に、昔はそのヘケレヲタが境にしモロランヱエトモの會所を引てより此處を境となすよし傳へける也。

△川筋屈曲して遲流なり。上りてヲホナイホ（右小川）ヘトツル（右小川）此邊地味宜敷今ハ在住の宅地に成り、畑通ホンヘトツル（右小川）キムンニタイ（左小川）クンナイ（右小川）過て、ヘロクワシ（左股）シノマンヘツ（水源）是則モロラン岳に到る也。（ニシハタ串口）

從是海岸は岩石濱也。（十丁余）ホロシレト（出岬）廻り（八丁）會所前也。

○川を越赤土坂上り掰柏原しばし過下りて（十八丁）

モロラン（會所、通行や、勤番所、調役邸、板藏、



御備米藏、辨天社、永住はたこや、并出稼等多し）西南向砂原に對し毎日乗合船出る（海上七里）頗る辨利也。土人多し（文政改三十六軒人別百四十三人、安政改四十三軒人別二百五十六人）是はエトモより移りし故今にエトモ會所といへり。産物鮴鰯鮭鱒海扇海鼠昆布海蘿荒皮椎茸等也。地名譯てモルランにて小また靜也、ルは路、ランは下る義也。小道を下ると云也。昔し山道なく是よりエトモへ船にてこへる、其船を呼に前の辨天の岬のホヲナヲシと云大岩に上り招きし由、其岩今に在り。又昔しは爰に何か有しや、此度會所普請の地を作りしが頗る面白き陶器等多く堀出たり。其地山の懐にて挾き處なり。或時雪の降りければ朝起て

　はる〴〵とこゝろ細くも見ゆるかな山路は雪車の跡ばかりして

海岸崖下モエ（岬）廻りホトエウシ（大岩）此上よりエトモの船を呼しといへり。ホンヘケレヲタ（小川、土人屋有）小き明き沙と云儀、此處にて陸道と出合ふ。從是内をハクチヤウマ（今白鳥の淵と云）と云。エトモに對しモロラン岳を望み風景よろし。

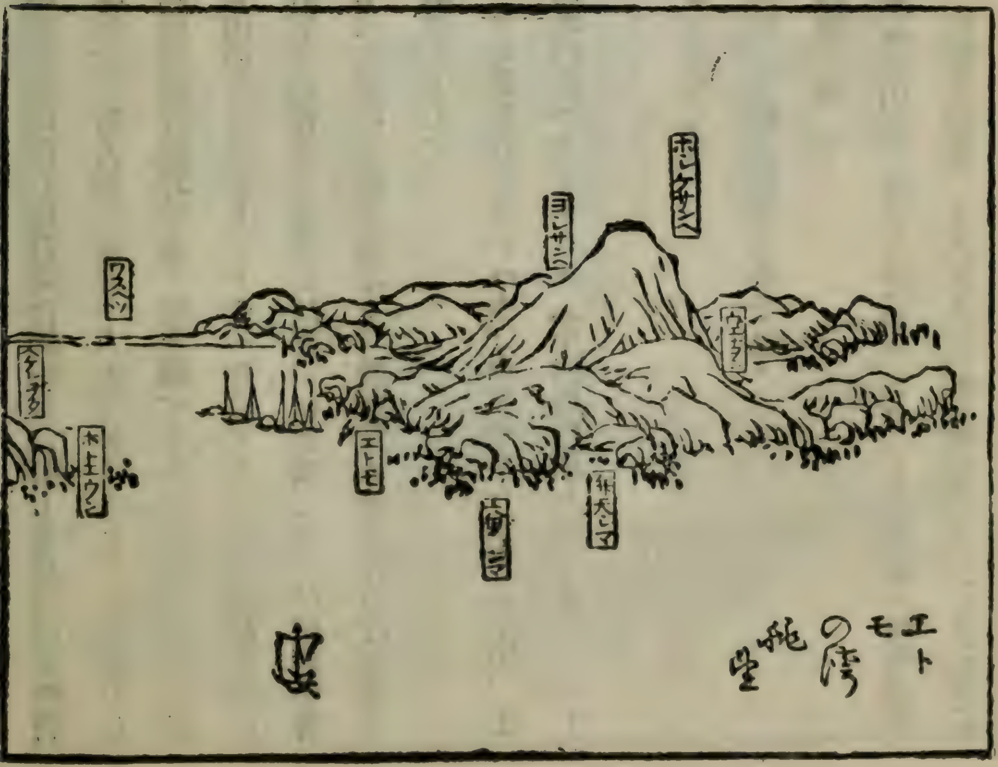
　あし曳のもろらねおろし吹ぬらし椎ひらふとてむるゝゑみしら

○會所前より九折を上り槲柏原（十八丁）過て下る此處より駒岳を望み勝景也。

　むら千鳥いまやゑともに渡るらん羽がひにしらむ白鳥の濱

ヘケレヲタ（小川）此處え南部家の陣屋を立、（是より左本道山也）濱まゝはホロショシケ（平岬）海邊歩行かたし。ホロモエ（小彎）岬を越てワヌシフト（小口）此邊平濱也。ワヌシノッ（岬）廻りチリヘット（川口）

ホンチリヘツ（小川）此處灣の第一奧也。一面の平地、昔しは外海まで汐が通じエトモは嶋なりしと云傳ふ。名義奧迄谷地にて山無との義也。（岬）エトチケレフ（小島）此嶋にて仕事するや日和が變ると云り。又は土龍に似たる故号くともいふ。ホコエ（芦原）ウエンチヤシ（出岬）惡城跡の義也。トウブツ（沼口）上に沼有、マクニシ（番屋）漁に行て泊る義也、爰より外海へ五六丁也。岬を廻りホンモエ（小灣）トツカルモエ（小灣小灣漁や）水豹灣との義也。近年迄土人有りしが皆會所元へ引移りし也。ヲシユクニ（小灣）冬分陸路惡き故爰にて渡るとの義也。ホンヲハシナイ（小灣）ホロヲハシナイ（小川）ホロシレト（大岬）アルトル（山岬）山向ふの義、シクシ、（岩岬）山蒜多故号く。是より岩崖に成、舟ならで行難し。此邊舟懸宜し。幷てシヨフキ（平磯）近年迄人家有りしが今漁場のみ殘



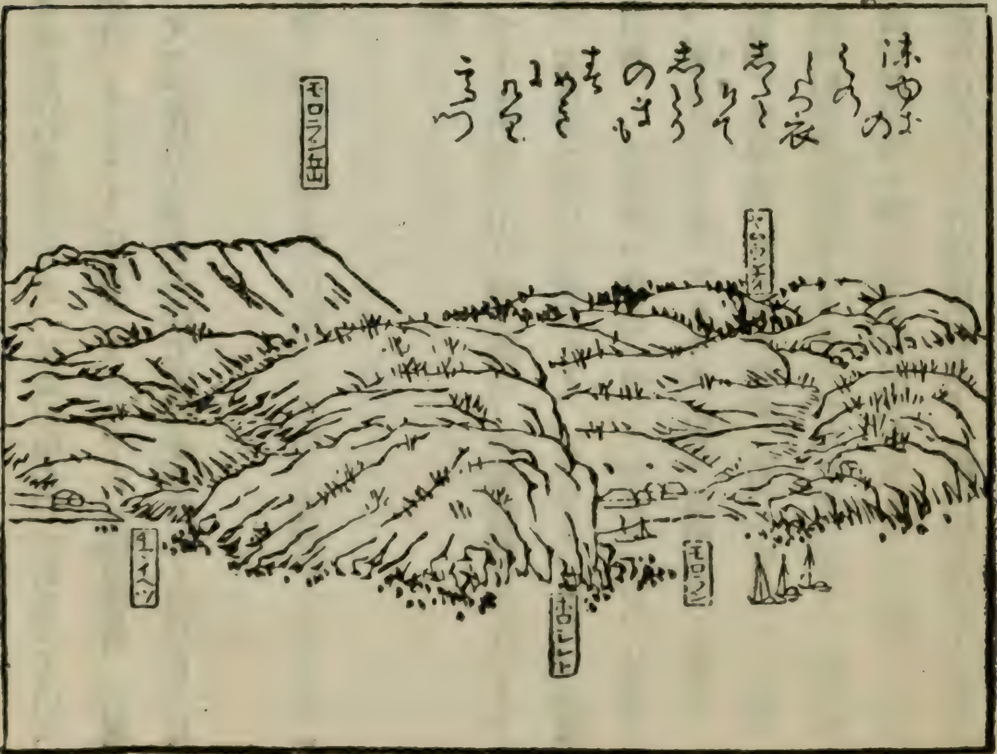
たり。エトモ（岬）鼻の義也。又エンケンの結りともいへり。是此場所の物元地にて、文化度まで會所爰に有し也。

△大黒島（周廻四丁）夷言ホロモシリ惣て草生にて樹なく此内舟懸り宜し。并て

△小島（周二丁）夷言ホンモシリと云。昔し辨天の社有し由にて又辨天嶋共云へり。

月よめばまだ秋なれどえともの海この山かげは氷
ゐにけり

是迄（海岸五り半）會所より船路卅丁斗也。爰より外海にて浪荒し。ニマ（岩岬）木鉢の如き岩有故号く。ホロチヌイ平（崩平）平に何か摸様有故号く。崖にて通難し、ホロチヌイ平（崩平）ハルカルモイ（小灣）何魚にても取に宜き灣の義也。ケソラッフムイ（崖）美敷鳥の集が昔有しと云り。マタエカリ（岩岬）多海獱



が寄る義也と、マシユエチセ（岩平）黒く觜と蹼が赤き鳥が住む故号くと云。又鷗が留る穴があるともいへり。タンネシラリ（長磯）セタイツキ（沙濱）昆布小屋有。ホンムイ（沙地）ヲエナヲシ（遠見番所、台場有）名義昔し御目見蝦夷が日和待をして遊びし處也と、又ヲは在るイナウシにて木幣多き義にも取なり。其上に山有、形ち富士の如し。

△ホシケサンヘと云。名義雲より下りし義也。一說に沖へ漁に行歸る時に此山を見始る故針を立たる如しと云山也と。（地名考）また幷て少し小さく

△ヨシサンペ此山第二番に見ゆる故号ると云り。二峰聳へたり。

（幷て）モトマリ（小灣）此邊竹蟶海栗(マテカゼ)多し。フトフレナイ（小川）川口赤き義也。此邊鐵澁有る故なり。澤桔梗、乙切草其外種々の異草多し。ムンカリシヨ（崖）大古神が遺ひし鉞有しと、依て号く。從是岩崖難場に成、步行成難し。チヤラセナイ（瀧川）チケウエ（岩岬）、番高岬の義也。ホンチケウエ（同）此邊山惣て鉛氣又石英の氣有。土人取來り鑛(サカツキ)を燒て鉛を取り、鎭石に作る也。アトカニ（岩）弓勢を試る義也。土人必ず舟より此岩を射て通りしとかや。トカリシヨ（岩磯）鮭場也。ウクシハウシ（岩）ニヨモイ（小灣）ヘシホケ（沙地漁や）高山の下恐敷坂の義也。イタンキ椀の如き岬有故号く。フンペシユマ（砂地）鯨頭の如き岩有故也。ウトナンカルシ（岩岬）昔し此方より男神が尻を捲り向より女神が尻を捲り來り逢給ひし故事有。過てワスペツ（小川）昆布場也。近年まで人有しが今はなし。此處濱の境也。（從臼境海岸十二里九

丁五間）并てルウハロ（平地）此處江山道出る也。名義路の口と云なり。（小使セタコアンニシパタ中口）

○濱（ヘケレヲタ）より上り槲柏原（平山）一ツ越てホムイ峠下りて、上りホンナイ峠（小川）下りて、上りホンハニシ（山坂）下りてヤムウシナイ（小川）栗多き義也。ホロニハニシ（坂）難處也。下りワヌシ（小川、休所）また上り、此邊樹木陰森たり。下りチリヘツ（小川、晝所、人家一軒）此處にて茶草鞋等を賣也。是古の境也。（従モロラン會所二り半、従ホロハニシ廿七丁）今五六丁東に移したり。坂を上り新境有。惣て此地名は海岸に有る名なるべし。

ホロヘツ領

○坂下りワシヘツ（小川）此處在住岩井帶刀開墾有、野道を過濱に出。（ルウハロ）此道も寛政十一年より切開に成りし也。此邊眺望平地にて宜し。

過てエワカルナイ（平地）トンケシ（小休所）平野にて南受也。谷地川（小川、鮭小や有）過てホロヘツプト（巾十三間舟渡し）名義大川也。（従モロラン會所五里廿五丁、従境一里廿九丁十三間）こへて（四丁五十間）

△川流屈曲兩方平地にて畑多し。少し上にタツカルウシ（左小川）樺所に多きとの義。ヌウシトラシナイ（同）ライバ（右小川）此川ライバの後に至る故号る也。ノウコシマナイ（左小川）ホロライハ（右小川）是もライハの後に行也。ヲマンタンネナイ（右小川）此川長く行との義也。（并て）ヲシケフウシナイ（右

午
未
申
ワスヘツ

小川）シユマウアンヘッテ（右小川）ハナウントレウシケナシ（左小川）ヘナ（同）此邊木立兩方高山に成、過てウヌンコイ（左小川）ラアルサッタ（同）ヨコイカヲマーヘッテ（右小川）ワシヘツヲマヘッテ（左小川）此源よりワシヘツ源に越と、レウケハッタラ（大淵）是より高山峨々川筋皆岩石にて堅雪の上ならで行難しと、シノマンヘッテ（本川）此源アソイワ岳より來る也。後はヲサルヘツに當る。雪時は二日に（ハンケナイ）越ると也。魚類鮭鱒干ライ其外桃花△［魚］多し。又虎斑竹（シリキトツフ）（シヤコタンタケ）を產す。是當所の名物也。

（酋長メンバク申口）

ホロヘツ（會所、通行や、板くら五、備米くら、制札、茅藏、勤番所、馬や）傍に妙見稻荷社有。此處文化度前は松前家臣細田儀右衛門給所也。其後モロランと一場所の樣に成しが、今度又境標を立たり。土人多し。（文政改五十八軒二百三十一人、安政改五十二軒二百六十人）產物鮭海鼠布海苔鯡昆布鹿皮椎茸多し。土人好て畑作す。東はランボケ西ワスヘツ岬の間平濱南向にして曖地、北に山有、少し灣に成れども廻船は沖懸りなり。

土人村また引越和人も有、出て平地（十余丁）ヲカシベ（小川）モウセウシナイ（小川）此處まで平野一面の茅野也。是より上下兩道崖下通り、汐時は行難し。極難所也。ランボケ（崖岬）ヲンは下る又落るを云也。ボケは陰也。陰ヱ下る事を云。廻りてランホキ（漁や有）濱少し過てヌフルペツフト（川有巾六七間）溫泉川口の義也。又は湯フルは强きにて溫泉强き義共云。此處人家有しが近頃會所元ヱ引移る也。フンベシヤバ

（岩岬）鯨頭の義、其岬の形に依て号く。フシコヘッ（古川）昔しの川口也。今爰を以て境とす。（従モロラン境三り三十丁廿八間）

○坂（モセウシ内）口より九折を上る凡三丁、十年前は棧道なりしが今は無く成たり。上り平地（小休所）下崖にて下を臨ば白浪撃岸、西を眺ば會所元よりエトモ岬内浦岳其景恰も薩埵峠にて富峰を如レ見、惜むらくは樹木松ならざるをや。東を臨やフンベシヤバと云岬有、是又絶景也。下りて

ヌフルベツ（橋有）越て野道也。開墾せば頗る好しからん。（并て）フシコヘッ境目に到る。

△予弘化（丁巳）二年夏始てヌプルベツに到しが、其時は道も有か無かにし丈より高き蕃生、其難溢筆の及ぶ處ならざりしが、去る巳（安政四年）の夏石場（齋宮）君私費にて開かれしと聞ば再行せんと戊

午八月）橋の元より（左方）入る。平山雜木立にて槲柏の大木有。ハアナウサンケナイ（右小川）トレフケナシ（右山）廿余丁にしてカモイワッカ（周四間淸水也）とて冷水噴出、また冬日は溫き由也。其底白砂を噴上すぐに一筋の流れに成、名義神水の義也。其邊り緑樹陰森冷風を催し

山路來て息もつきあへぬ旅人にめぐみ給ふる神の井の水

三伏の暑に此處に一睡をと思はる。予此處に小社をと思ひ、翌日ワスヘツにて岩井（帶刀）某に此事を謀りたり。此岩井氏は武州大宮の社司なれば恐らく他日氷川明神を立給ひしやらん。扨從二神水一少し（七八丁）白老道有、合ふて九折に上り、峠より俯ば縨別白老粲然として掌を指が如し。又旅人の多く來りければ

山かげに今や淸水をかひつらん羣くる駒のいさましくみゆ

下る事十五六丁七曲坂、兩方雜木接枝頗る險地なり。此道成功未レ日が故處々崩たり。下り川端崖下岩角を刎越飛越ベナウサンケウシヘッ（右小川）過、崖岩平淸水滴る處是を雫石（シヅクイシ）と云。山態豎り樹垂水怒りて小暗き處是を地獄坂と云。是皆石場君の号られしと、岩坂切通し少し下りて溫泉場今は止宿所も出來、湯治人も居たり。筵を河中に敷て浴せしが、今は川の上に屋根を架、二川（西シュンヘッ、水川也ヽ東クスリサンヘッ、熱湯也）合て程よき湯にして入る也。硫黃にして臭氣甚し。又岩間より先年は五六尺も噴上る處と、二尺斗上る處と二ヶ所有しが、當時はなく成、其頃觀音藥師の小堂有しが是も見へず成ぬ。其土地も餘り開くれば其水勢藥功も薄らぎたるやに思はる。源ヌフルヘッ岳（高山後ろヲサルヘッに至）より落

奇峰指問無名怪異菓折來有毒疑
錄前川文蝦夷雜詠句
敬齋書

る、此處よりヲサルヘッ江二日、雪時は越ると、湯家の柱に石場君の戯れ書の有ければ、其傍に予も誌し置、

岩をさき山をならして出る湯の音もとゞろにわきかへるなり　高門

蹄をばぬふるへつてふ湯あみすとくるしき道もいとはでぞこし　弘

白老領（シラヲイ）

境より（六丁廿間）アエウロ（小川、海岸出岬）名義はアイヲロにて、アイとは矢の事、ヲロは納めまたは入るの意也。矢を納むと譯す。土人往來の時爰にて矢を放ち神に捧る義也。（昆布場）ヲショロコツ（砂地）同名處々に多し。（十余丁）

○往來は海岸より少し上小坂有、是を越てヲモンヘッの晝所へ下るなり。

エマニシ岬、箸所といふ義、廻りてヲモンヘ（小川）陸地と爰にて逢ふ。（晝休所、漁や、夷人小や）名義時化の時に川口が閉ると云義也。

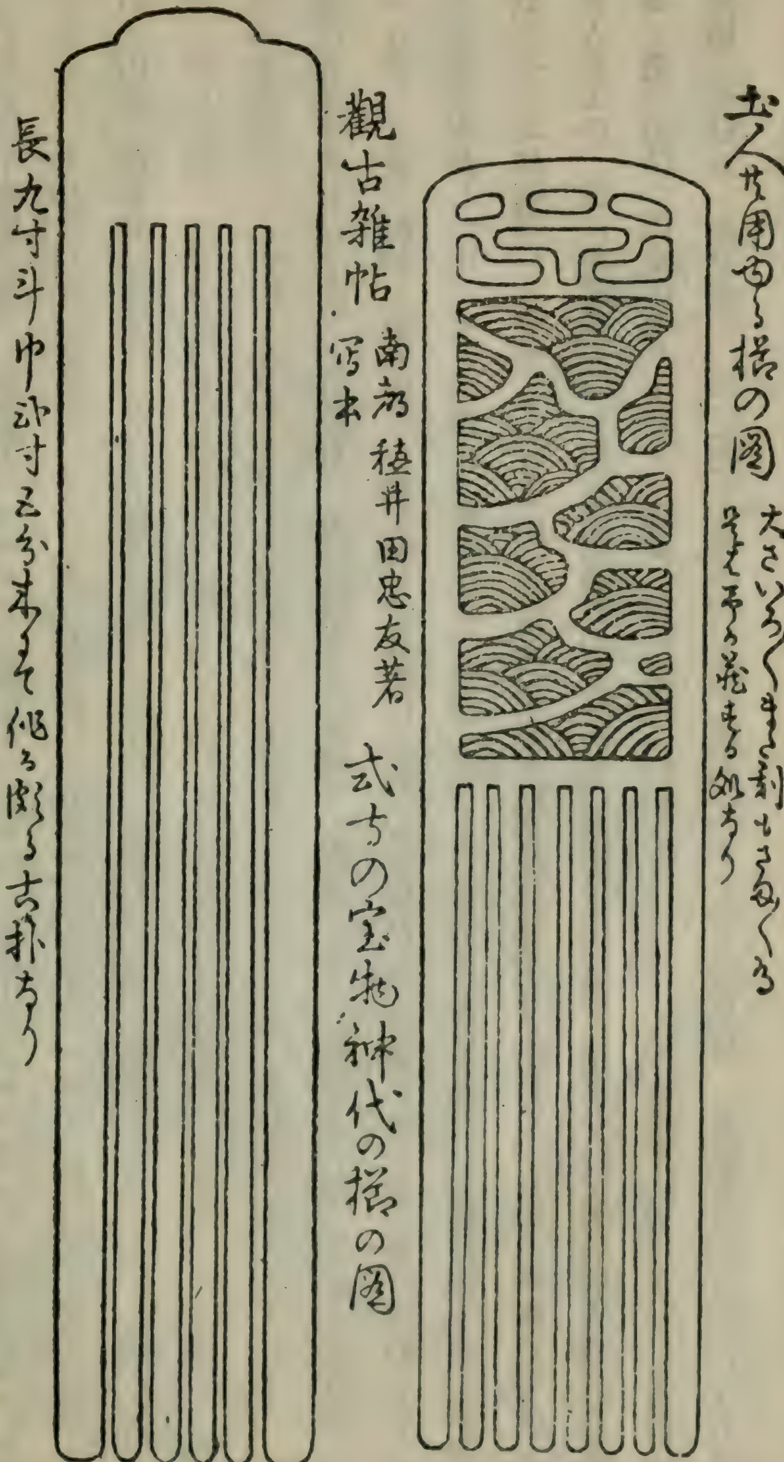
△川筋にヒシクシナイ（右小川）過て二股、右ホロナイ（源ヌフルヘッ岳）左りホンヲモンヘッ、其源クツタルシ岳、虎杖多きとの義也。巓に沼有(周五六丁)是に水留りて何所へ落るか知れざれども按に神水（カモイロツカ）に出る也と思ふ。久摺（クスリ）領摩周湖（マシウトウ）の水は潜てニシヘッに出る同利也。彼は凡五里是は一里半に不足、怪しとする事なし。

濱つゞき（十余丁）ヒンナイフッ（沙濱）ホロナイ（小流）トンケシ（小口）古え沼有しと今はなし。シキ

ウ（川巾三十余間船渡し、小休所）南岸人家（二十六軒）有、秋味場也。シは至る、キウは蓄麥葉貝母也。此川筋に多く有る故号くと、

えぞ人がかいぞ數かくもゝ羽がきしきふの渡り浪高くして　高門

△川筋兩岸平地肥沃也。（右小川）ハエシト（左小川）トヒウ（右小山）タツコフ（右小川）トイトシカ（左小川）トロフウフ、（右小川）メムフト（右小沼）トウフト（右小川）モシキ（同）アハヲイ此邊より追々山高く雜木立（左小川）ヌフヌシクシナイ（左小川）ヌツハヲマナイ此邊左りヌフルヘツ岳、右白老岳の間に成也。ルウランヌシ（右小川）ウヌンコイ（同）ムヌシシユマ（左小川）ヘトマヘツ（過て）二股、右コエカタヘツ（小川）左コエホクシヘツ（本川）其源にシキウ岳と云有、後は臼ヲサルヘツに當る。此處にカモイクシ（小山）と云山有。譯は熊越また神越等の義也。土人の說に太古後方羊蹄（シリヘツ）の神此處へ來り日暮たる故、刺給ふ櫛を拔てそれを燈し、其明にて濱へ下り給ひし、其櫛の燃て炭と成て今石に化したるが追々生長して山に有と云傳ふ。實に土人の荒譚と思ども、後方羊蹄は女神なれば櫛に因も有、其說に似たると云は我邦にも有事にて（日本紀、古事記）伊邪那岐命伊邪那美命と御合て、女神の御腹に御子三十五人產玉ひ、遂に神避坐玉ひしが、出雲國と伯耆國の界、比婆之山に葬し奉りしに、男神御妻の伊邪那美命を慕ひ玉ひて黃泉に至り玉ひて、御妻の屍を視玉ふに闇かりければ、左りの御髻に刺せ玉ひたる湯津津間櫛の男柱を一箇取闕て、火に燭て女神の屍を細に視玉ひ、さて還り玉ふ時、泉津醜女命を追かけゝれば、



大古如此大なる櫛なりしが故、燭して命屍を見給ひ、彦火々出見尊が鵜葺草葺不合命の産れ給ふを見給ひし由有けると思はる也。又如此櫛ならん振分髪等は中々梳がたく有もの也。太古は今の如く飾りにさしたる物ならず、皆梳る斗也。

命黑御甕を投玉ひしかば、醜女生蒲子(エヒカツラ)と思ひ拾ひ食む間に逃行玉ひしに、猶又追しかば、其右の御髻に刺せ玉ひし湯津々間櫛を引欠て投打玉へば、生筍(タカンナ)なりと思ひて拔食間に逃行玉ひし。(已上要を摘む)等有て聊事の能く似たるも奇とすべし。櫛に燈して等荒譚も餘りと思へども、此如九寸も有ては燭無時は油はしみ有、燭の代に用ひしと云も宜也。その光り遠く照たると云は神の德なり。又石の生長したると云は和漢に例少からず。又北蝦夷(クシユンコタン)の岩神(シユマカモイ)ソウヤ(ノツシヤフのトウヘン内)の神岩(カモイシユマ)等也。又西陽雜俎に有二漁子一下レ網ヲ擧レ之有レ石如レ拳、石遂長生已經レ年重四十余斤(下略)と有、川筋鮭鱒鯇チライ多し。堅雪の時サルフツに越によろし。

越て、此邊頗る田畑に開き又漆楮等植て宜し。ネツノサ(沙濱)トンケシ(同)上に沼有て今は半埋れたり。

ウヨロ(川有、夷家三軒)此川陸は爰にて越れども、川口は白老フウヘツと是三ツ一ツに合て海に入る也。

△川筋屈曲遲流なり。メム(右小川)并てタツコフ(右小山)イシヤカナイ(左川)カツテトシハツタラ(右大淵)ヘトコヲヘイ(左小川)シノマンウヨロ源白老岳に到る。桃花魚鯇有。

又平地しばらく行、フウヘツ(小川)名義フウレヘツにて赤川の義也。溢にて赤き故号く。

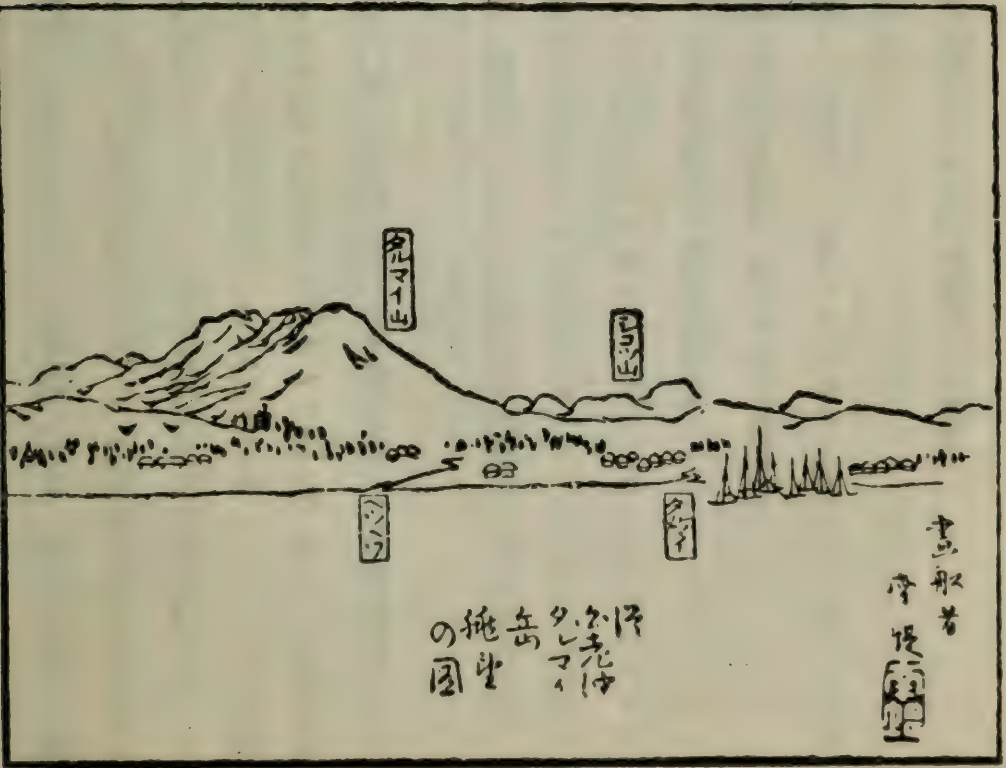
△川筋イシカリフヘツ(右小川)タツコウトルサンナイ(左小川)カマイアンナイ(左小川)カマショケシユリンナイ(右小川)源白老岳より來る。桃花魚鯇多し。

過て、木立原、濱は白沙、東南向に成也。シラヲイヘツ(巾三十余間、船渡し)越て、

△川ロウヨロフウヘツと合して海に入る。川筋渡場より少し上りウトカンヘツ（右小川）ヘンケヘツ（右川）カハヨシイ（右川）ウサンロクテナイ（左川）ムコツフヘツ（右川）此處二股、右方モシラヲイとて小さし。源は樽舞岳より左り本川サヨシナイ（右川）ハンケノコイ（右川）アシリヘツ（左川）ホロケナシ（左川）ナルウシヤツタ（左川）又二股左りイシカリシラヲイ（右川）クテアイシラヲイ（右川）此處瀧に成てフクシ岳より落ると、左りヘケシラヲイ（左川）イウルクシナイ（左川）ヲヨロヲマシラヲイ（右川）ヌフリウトルクシナイ（左川）フウレシラヲイ（左川）フクシチマルリシヘツ（左川）源白老岳に到る。堅雪時二日に上ると。鮭鱒チライ鯇桃花魚多し。

此後ろヲサルヘツの源に當る也。

一しきり過るみぞれに見上ればしら老か峰は雪に



白めり　弘

あはれさよさつやたばさみむかふともしらをひ山

の小男鹿の聲　高門

シラヲイ（従ホロヘツ會所八里廿七丁陸地七り、従境月六里十七丁五間、制札、備蔵、會所、通行や、勤番所、板くら五、芽くら、馬や、漁や）土地東南向素濱船沖懸り、土地平地なり。一里余上に到る山有、辨天社阿彌陀堂、（慈覺大師作三尊彌陀）名義、シラウは虻の事也。此地に多きが故号し也。土人（文政改七十三軒三百三十余人、安政改八十二軒三百九十九人）產物鰯鮭昆布鱈有、鮏雜魚粕鹿皮椎茸海鼠多し。又紫根多し。惣て此邊北西山を受巳午向濱にして暖氣也。是より沙濱なり、

△又是より上（十二丁）仙臺家陣屋（安政甲寅年立り）有。西に白老川を被取、三好監物繩張にて築き旭

岡と号く。川水を曳沼池を堀て用水となし、是に鹽竈社を觀請し邸中より眺望する處を以て十景を作る。（啓明山霞、磐井川櫻、宮川夕立、中川夏月、大野萩、新川氷、泉橋眺望、月峰鹿、泉川雪、旭岡神祇）是皆三好氏の功業なり。

　宮柱太しくたてゝ祈りける照日のおかに君が八千代を　　三好清房

（凡三十丁）ヲモツナイ（小川）上に沼有て沼尻とも云り。過て（九丁斗）鰯や多し。龍神堂あり。シヤタイ（小休石谷地有、夷家一軒）前に川有、是則ペツペツと合て上に到る西岸芦多し。

△川筋兩岸萢地平地多し。ホンヒラクシナイ（左小川）イクウシヒタ（右小川）タンネ平（平）クテクン平（平）ハウニシ平（平）リイ平（同）フウレ平（平）ヘナワンフウレ平、皆左り方崖に成り、右の方へナワンクシホンヘツ（右小川）カマイアンナ（右小川）ホンシヤタイ（右小川）源垂舞(タルマイ)岳西より來る也。

桃花魚鯇多し。

過て（十九丁）ペツペツ（川有）本名ペツプトにて川口との義也。一説往昔川上に蟒蛇(ウハハミ)が下りしに依て号たりと、是ユウフツ境なり。川中標柱あり。（從ホロヘツ境五り廿七丁三十五間、從シラヲイ會所一里廿丁三十間）此邊惣てタルマイの麓に成て風景よろし。

松浦侯の需めにより蝶夢の碑にと
画をかきて筆のあと海よりは同じ意き
こまかに其人を思ひ出業うつしたる

蝶夢の沙人面影以画
ありし面影の忍ばれて
[illegible]

乾正

東西蝦夷山川
地理取調紀行

東蝦夷日誌二編

多氣志樓藏版

凡例

一此編は西白老境（ペツペツ）より始てユウブツ次にサル場所會所元迄を記す。會所以東ニイカツプ境（アツベツ）迄サル領たりといへども、是は第四編に讓り又ユウブツ會所元より千歳番や元通りイザリムイザリシユマ、ツブ迄の處ユクブツ領たりといへども、是は西部ヲタルナイの部に讓り、樋平（トユヒラ）新道の處にしるし置もの也。

一日誌中靑木とする處多し。是椴蝦夷松五葉松等の類鬱叢たる處をさして言なるべし。已後是にならひ玉へ。

一此地ヲムシヤの說種々あれども、石場氏の考頗るおもしろき故に擧置たり。

一川々筋の地名此二場所は他と異にして甚多く、其譯も又種々の故事有、筆狀するに限り無れば略するもの多し。其微細を閲せんと欲する人は安都摩誌（一册）武加和誌（三册）毛武邊津誌（一册）沙流邊津誌（四册）等を熟讀なし玉へ。

一義經（ウキクルミ）公の事跡夷地處々有といへども、今其所祭の社は當所に有故に、惣ての土人當所の者を尊敬する事大かたならず。又言語も夷地處々にて聊か異れども、當所の言は何處にても通ずる事也。閲者其意をして當所の地名の譯說等よく熟讀なし玉へ。

文久三亥のとし極月末つころ餅ひ搗音の中に

松浦の弘誌

伊勢　松浦竹四郎　著

ユウブツ領

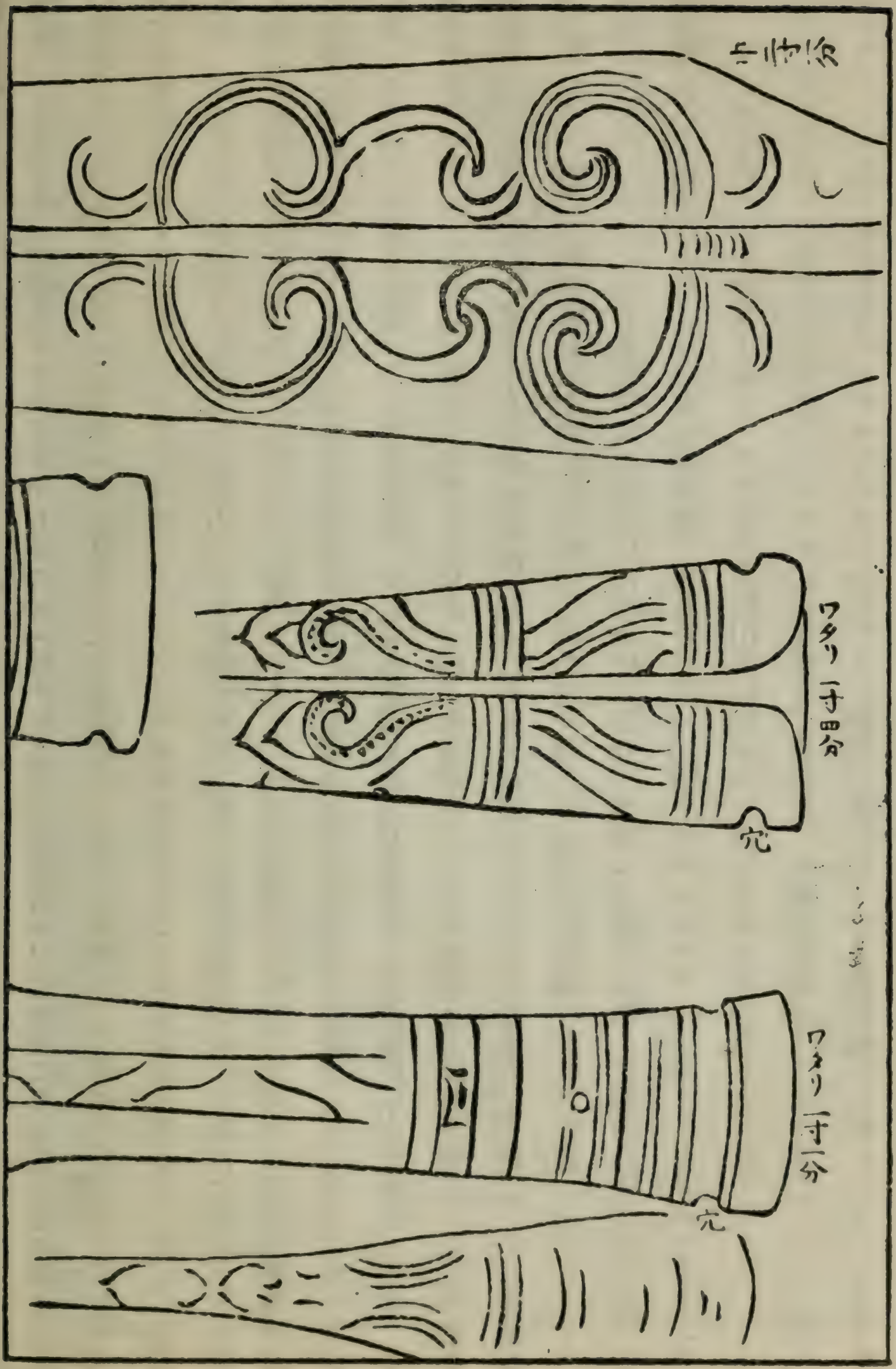
此邊は皆南受の暖地にて、沙濱浪打際より上に(二三丁)路有。躓く石一ツなく、鰯屋左右に立並び酒肆茶店(サカヤチヤミセ)もさま〳〵の暖簾(ノレン)さげ、中々に言さえぐ蝦夷人の里とは思はれず。其繁昌いはん方なし。(廿余町)タルマイ(川巾五六間、小休所有)本名ヲタルヲマイにて沙路有義(ヲタルーヲマイ)也。名山圖繪(谷文晁著)に玳瑁渉(タイマイノホリ)とする是也。其巓赤儿礁石にして春靄(モヤ)深き日朝暾(アサヒ)夕陽(ユウヒ)のさし輝く時は、此處彼處(ココカシコ)の樹立は黒く斑の如く見え、實に玳瑁の字も能く適(カナヘ)りと思ふ也。垂舞(タルマイ)山の拜殿(三間二間)有。本尊は圓空鉈作の觀音、寛文六酉八月廿八日此處にて作納玉ひしを、アブタに持行置しを、文化二乙丑の秋七月再び爰に納むと也。此山昔し(年月不知)燒たる由にて此邊り皆五寸斗下は燒沙有。其已前慈覺大師の建立の堂も有しと言傳ふ。岳の後ろはシコツ湖に當る。(土人一軒)元は松前藩遠藤(四郎太郎)給所成しと。

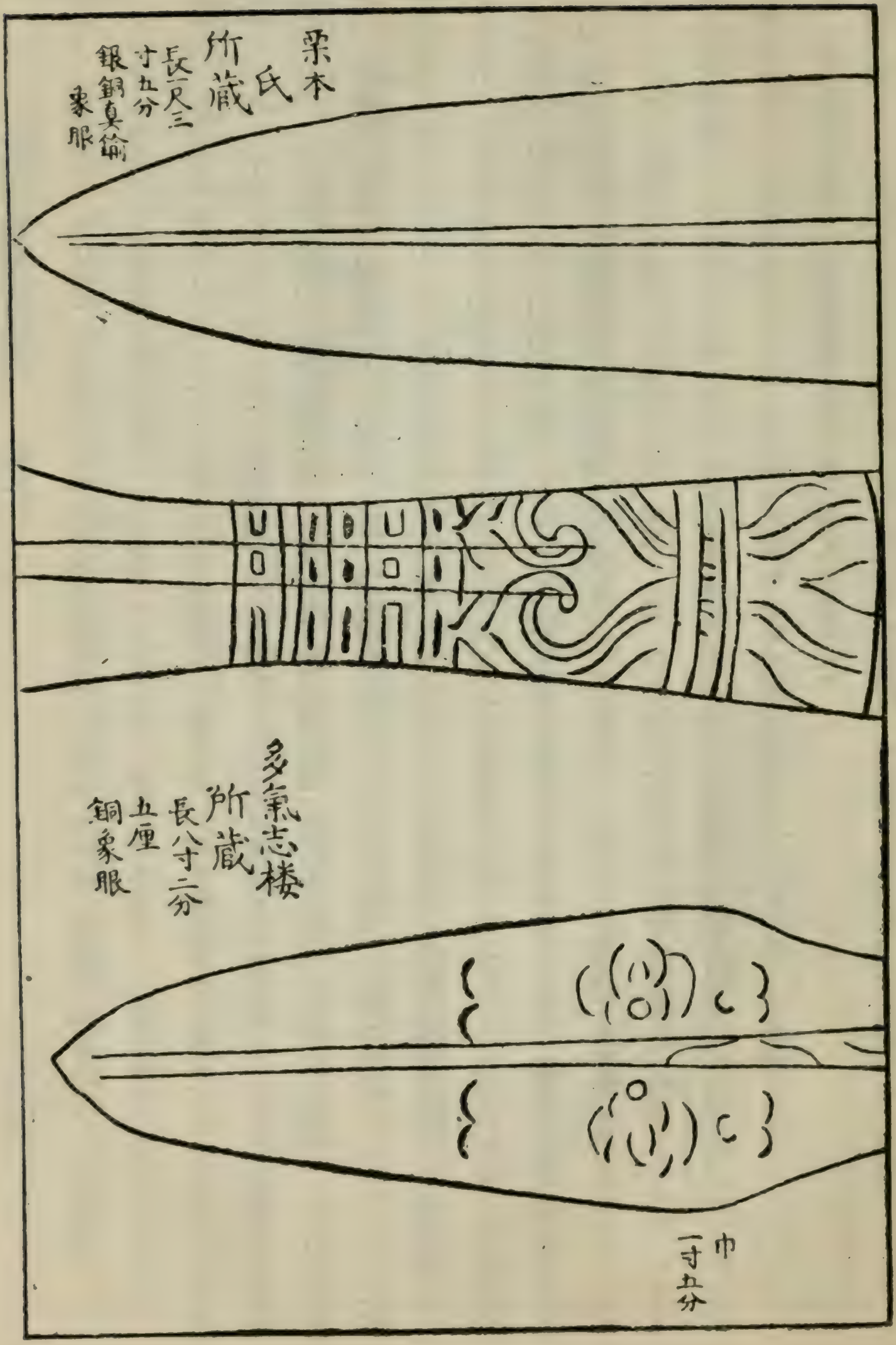
△川筋二分し(左ホンタルマイ、中ニシタフカル)右本川筋の源は岳の西に至る。(アンル、ウク中ロ)

ホンタルマイ(小橋)フシコタルマイ(同)古川口也。ヲボウ(橋有)鎗拾ふ所の義。往古川中より鎗が出たりと言傳ふ。此邊よりシコツ九間道有。極難澁也。(夕張日誌に出)扨其鎗の事に就て按は、此地鎗を用る

南
サル岳
イワウナイ

事古くより有し哉、北蝦夷ヲロッコタライカスメレンクル人好て鎗を遣ひ、又此地にても種々古き鎗身を見る事有、是に金銀銅眞鍮等にて象眼あるを見る。又一種銅鉾有。何れも袋鉾にして鑄物と思はる。余が得る鉾は銅象眼也。是を鍛工に見するに日本物なりと言。本邦象眼を劍に用ひし事有哉否と怪しに、男山八幡宮寶物　神功皇后の御劍并に法隆寺の刺小刀、下野足利元町天王社の神鉾等皆象眼有。其時代に及ばずとも實に希代の物也。和漢とも銅を以て兵器に當る事例少からず。容齋翁（菊地）の藏なる肥後國菊地郡福祥寺村より堀得し銅鉾も袋作也。又好古日錄（藤貞幹著）に載る安藝國諸延八幡の社地より堀得たる七枚の銅鉾も其作彷彿たり。因に抄擧に坤齋日鈔（西嶋長孫）韓延壽傳延壽又取二官銅物一候二月蝕一鑄二作刀劍鉤鐔一（漢書）夏禹子啓在位十年以二庚戌八年一鑄二一銅劍一長三尺九寸啓子太康在位二十九年歳在二辛卯一三月春鑄二一銅劍一秦始皇在位三十七年以二三年一歳次二丁巳一採二北祇銅一鑄二二劍一吳王孫權以二黃武五年一採二武昌銅鐵一作二千口劍萬口劍一（陶弘景刀劍錄）其餘數條を引用し以銅鐵爲兵器明證を擧たり。其古物此地に存する事實に奇と言べし。夷地も此邊には少けれども北海岸には種々の古物を持る家有。栗本（名鵬字北鵬）君廻浦の時、次に圖する物を得しとて余に示さる。其作余が藏に遠く勝れり。同く沙地フシコニシタプ（小川）アシリニシタプ（小川）フシコは古アシリは新き義ニシタフは昔し此川上に森が有、其に何時も雲が有しと、依て号し也。フレペツ（小川）ホンコイトイ（小川）コイトイ（小川橋有、小休所）名義浪越義也。フシココイトイ（古川）ルヘノコ（小川）路曲義也。トウマコマイ（小川）上に沼有、依て号く。是垂舞越にて通りし也。マコマイ


ワタリ一寸四分
穴
ワタリ一寸一分
穴

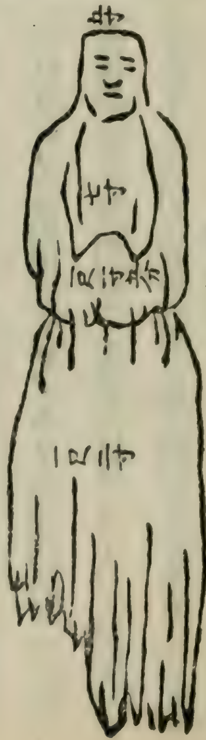

栗本氏所藏
長一尺三寸五分
銀銅真鍮象眼
多氣志楼所藏
長八寸二分五厘
銅象眼
巾一寸五分

(小川、漁屋多し、小休所) サッタフ (小川) 乾る義に取、ロクモツナイ (小川) 黄顙魚川との義也)
タナシリ (本地) 小高き處の義也。過て (此處チトセ道入口) 會所前に至る。(從箱館海上凡五十五里余、從白老九里海岸八里四十五間) ユウフツ (會所、通行や、勤番所、備米藏、漁や、板藏、馬や、船くら、鍜冶や、雇藏) 名義イウブツ也。イウとは溫泉ブツは口也。此川上に溫泉有る故に号く。元は松前藩十三軒(麓小兵衛、今井新左衛門、藤田東九郎、佐藤東馬、岡野彥兵衛、蛯屋平四郎、工藤淸左衛門、柿崎四郎左衛門、佐藤周右衛門、蛯屋新下、松前鉄五郎、遠藤四郎太郎、小平甚左衛門) 入會の給所にして土人 (文政改三百十二軒千三百十二人、安政改貳百二十八軒千百七十九人) 牛馬澤山、產物は鰯八分鮭二分鹿皮多し。實に夏日の漁時諸方より出稼多く、其取上高百石の内十五石目會所元納八十五石自分収納の法也。是東部第一の漁場也。又當所より石狩越新道有、ヒヽと云迄は小舟も通じ頗る便利なり。前に橋有 (三十余間ユウフツ川) 往古は橋東にて惣場所の賣場買場と云有交易せし由なるが、寛政十二申年より會所一軒と定む。其後文化元子年に橋東は風波にて欠崩度々有、損せし故、今の地に土居を築き移したると、地所タルマイより千歳をかけ平地にし土味肥沃なれども、七八寸下に燒沙有。然し雜穀野菜は能く出來、又近頃結合鈴木尙助藍を試られしが、至極土地によく合しや追々出稼の者も漁事の暇等作り初しかば、其功勳を愛で丶、

　世の中のためとて藍を植初し心の色の淺からぬかな

大船沖懸り、小舟川口に入れて荷役す。傍に不動堂稻荷社、又川東に (漁や、土人雇小や、台場一ヶ所有)

沼有、此小島に辨天社有て圓空作の地藏尊を安置す。其前立に如圖木像有、是は昔し古機を以て舵工が作ると、風を祈り又海上難風の時祈誓して頗る驗有りと聞り。余が按には、是も圓空の作ならんと思ふ也。此邊より上一面の茅野也。（十二丁）

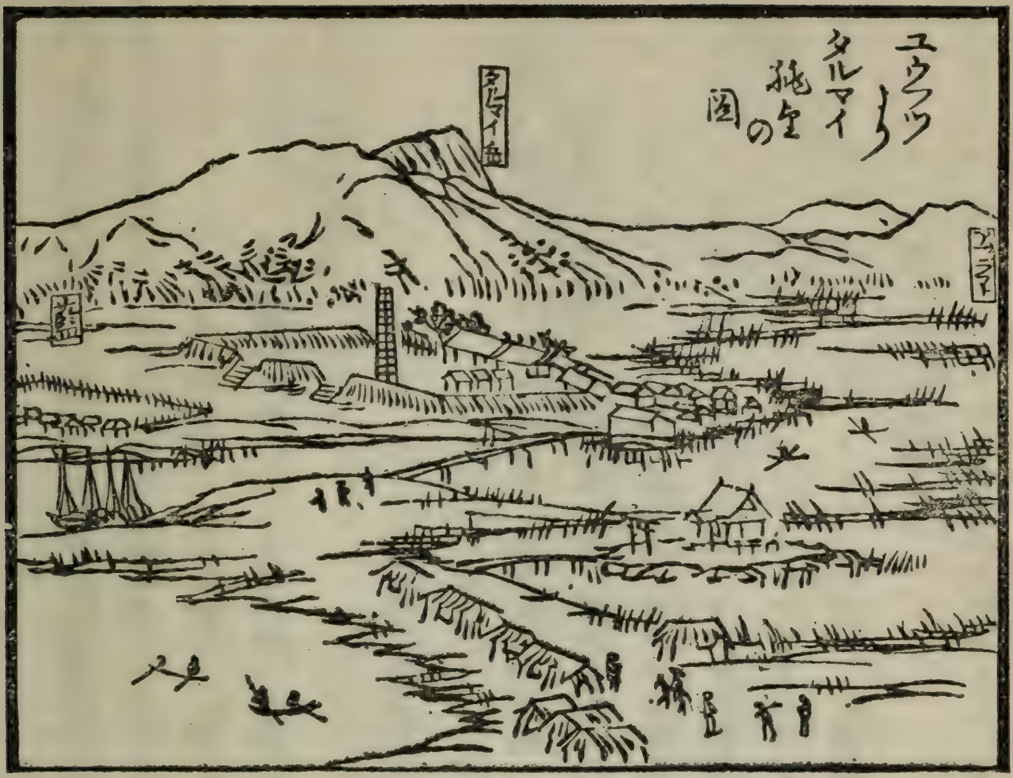

惣長四尺

ロウサン（平地玫瑰沙參多し）路下(ルーサン)る義。昔し此處に會所有し故、シコツ土人此處へ出し故号く。サットウ（小沼）乾沼(サツトウ)の義。トユウフツ（小川、橋有）小きユウフツの義。ヘコモヘツ（小川）戻川の義。此川上の方へ流るゝ故号く。トアツマ（小川）是アツマの枝也。

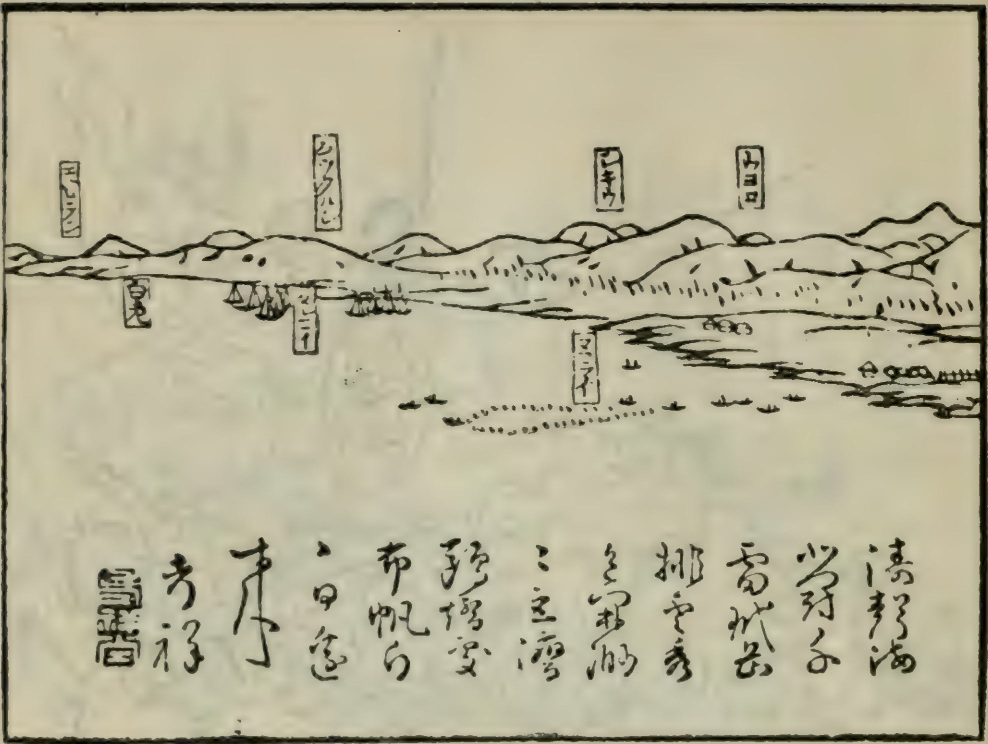
アツマ（川有巾三十余間、船渡夷家三軒）螢屋某給所なりしと。昔しモヽカと云獸が游ぎ越せしを以て号しと。アツは獸の事にて、マは渡る義也と。又アツは木鼠の事とも云へり。

△六月廿一日（安政五戊午）教導を賴む。アツマは同所乙名板藏（トンニカ村ヱカシユ）ムカワの事は板右衞門（イナヱフ乙名イタキシウリ）ホヘツより上はイクラムカ、此外にイシランシ、クフクリの兩人を召連出立。馬にて東岸を上る、トツホ（右小川）此邊萢地多し、シユフン（同）向にトイホチ（左小川）昔しトユウフツ此處へ落しと云傳ふ也。

ウシヽヘツ（同）ウシヽキナと云草多き故号くと、東岸山道少く山に懸りてキムンコタン（人家十軒）山



村の義。此邊畑多し。下りてヤムワッカ（冷水）此邊當月十二三兩日の洪水未だ引切らず、處々水乘りて甚歩行難し。又處々腰限りも凹地に落ること有て難澁したり。（東岸）ノヤシヤリヘツ（川巾七八間、源ムカワ越に至る）此川如何にも渡り難く、毎には五六間の處十余間にも成しが、一番に板藏躰に成川に飛入哉、二番にイクラムカ共に背立す、辛うして向岸に游ぎ行たり。馬は躶にし六疋とも繋ぎ合せ越さし、大木を倒して是を一同に渡りしが半程にて下を見るや泥水渦卷眩ばかりに覺えし也。木立を過ホントウ（小沼）に出、向岸にはチカユウ（小川）サルシコマフ（小川）マンメムイ（小川）チヘシナイ（小川）等云四川有。又東岸にサットウ（乾沼）シイナイ（小川人家五軒）過て向にニタホロ（小川）東にモヘツ（小川）向にウリルヘツ（川巾七八間



本名ヲクルヘツにして土人の喰料ヲクリキナと云草有故号し也。此川の源にヲタニ岳と云有。此邊屈曲して其川口を見ず。并てキウシナイ（小川）東岸チホマナイ（小川）名義、恐敷義にて、昔し變化物が住と云て其水土人共呑ざる由也。上りて
トンニカ村（從アツマフト凡六里、人家五軒）土地高く肥沃皆畑作をなしたり。名義、コムニカルの訛にて、槲（クヌギ）多き故号く也。召連しエカシユム家に宿す。隱元豆を煮て出せり。

おひたてる林がくれに家居せる人のこゝろもなほ
くぞあるらし

初夜頃に犬二疋頻に鼻を鳴らし來るや、其犬と共にエカシユム弓を持て走り行しが直に鹿貳頭を得て歸れり。是は皆粟畑え來るを知らしに來る也と。鳴ば去る故鳴ずに來る也と。實に能く仕馴たる者也。

廿二日爰に馬を置て川上に行にヒラウトルナイ（并て）ヲフムセナイ（小川、人家三軒）シケレペナイ（小川）名義、黄蘗澤の義。シヤウヤウシコツ（平山）蜂の巣多しとの義、并てヲコツコ（小川）此間川に添て上れば凡貳里も有よし、山越故甚近し。また此山は樹深き故下草至て少く歩行よし。川には流木多く横はり其に當る水勢鳴とよみ山谷に響きて頗る物寂しくぞ有ける也。

えみしらもしらぬ深山に分いればふみまよふべき
道だにもなし

ホロナイ（小川）過て二股（右本川）に至る。左りカヒウ（川巾七八間）鷗（カヒウ・カモメ）の事也。鷗は海邊に住める者なるに、昔し爰に來り集を作り雛を持しや、其時海嘯（ツナミ）にて海邊皆荒たりと。依て其鷗は神の御使者なり迚今に其處を尊敬し、必ず此處に來ればエナヲを

供えけるとて多く立たり。上にトコンマカリ（兩岸崖）名義、此方彼方に神が居玉ひ輪らけをなし玉びしと言り。今晝飯をせし間に葡萄蔓にて輪を作り、是を向より投、此方にて竹もて是を受に、一ツも受損るなし。實に手練と言べし。また此上に小川多く、源平山にてアヒラの山中より來ると。

右方本川の大概を聞に（向に）コムニ岳（小川）メナ（小川）東にマカウシ（小川）蕗薹多き義、ヲニケシヘ（小川）榀皮多き義、カニシユウ（小川）昔し金の鍋が有し故事有。トレフンナイ（小川）向にヲチヤラセナイ（小川）シヨロマ（小川）共に瀧に成よし、東にセタヘツ（小川）ミヨシユン（小川）ルフネシユマ（小川）過て二股（東をメナシヘツと云、西をシユンヘツと云）其源高山とてもなく夕張續きの山より來ると。樹木惣て雜木にし高き處に聊

青木有斗也。夜に到りトンニカに歸り宿す。

わけわぶる笹原遠し山本の里のけぶりは近く見ゆれど

廿三日曉霧未だ深に出足し山一ツ越、シユルクの川に到る。（昨日通りし處也）是を上り二股、右ホンシユルク、左をルウクシシユルクと云。堅雪の頃土人等ニワン（ムカウ川筋）に山越する故也と。峰に上る、是をウエンノキサフ（峠也）、并てコッチセ（山）此邊種々の異草を見たり。樹木皆楓柏秦皮等の大木也。下りて（此處よりムカワの枝川なり）

△ニワンの水源也。澤目廣し。少し行二股（左モニワン、右ニワン）凡壹里余、蘆荻原の丈より高き處を過ニワン村（人家六軒）に出。名義、イワンの訛にて六ツと云也。水源六ツに分れし故に号しと。此澤至て暖地土地肥頗る見込有地也。

廿四日雇ニ刳舟ニ上る（河原廣し）ホロトルトイ岳（左高山崩平）平より石崩て時々落至て危き處也。ホロメイ（右小川）タケペリナイ（同）ノホリハ（右山）スッハヲマ（右小川）ヒラウトル（同）左りホロ平（大平）下は大淵也。カイカウリ（小川、近頃迄土人小屋有しと）此邊兩岸平地頗る能き場所也。メナシユシナイ（右小川）ウヲロケトイナイ（左小川）上にイナユウ（右小川近年迄土人有しと）上にヘチユク岳と云有。此邊より追々川筋屈曲したり。ヲシユキサルウシペ（左小川）チホマナイ（右）イチミフ（左小川、人家六軒）イタキシウリの家に休む。其邊り畑多く下は崖にて河流を俯て眺望よろし。（并て）ヘ

川ガラス
信州木曽山中其外深山ノ山川等ニハマヽアリ水辺ニ居テ小魚及虫ヲ拾喰フ日光中禅寺湖水ニ川車アリ大サ雀ホトアリ黒トビ色ナリ六此類ナリ

讀畫齋主人

ンケイチミフ（左小川）カツケン（右小川）名義、川烏と云鳥多き故に号くと。カムイチヤシ（土曲）此處より雷斧石、矢根石を出す。過てヲチヤルセナイ（右小川、人家三軒、ルヘシへと云り）ホロヌタ（左り峠）流屈曲たる故岬をなす。（人家二軒）過てクイト（右小川）クイは鴈の事也。此原には四時共に鴈が住ける故に号ると也。今日も見たりければ

春霞たつを見捨てこし鴈の花も夏野に何あさるらん

過てキナウシ（右方平、左り山、人家八軒有）此源にトウマイと云、昔し地震の時出來たりと云沼有て、世に類なき小魚が有よし、ルベシヘ（右小川、源にイワナイと云溫泉有よし、人家六軒）是サルへ越に道すじ也。又西岸にルヘシベ（小川有、シツテキナイと云、アツマへ越すじ有と人家四軒）カイクマ（人家六軒）上にケナシハヲマ（小川）ノホリコウトルクシ（右小川）ノタツハヲマ（左方）ホロソウ（右山小川）西岸峨々たる崖にて追々急流に成。ヤサナイ（左川）ウナウシ（同）ヲソウシ（同）チ、ヤフ（左）シヤツコツ（右）シユツフシナイ（右）上陸し平野一里斗の處に至る。北の方ホヘツフト迄見へ能く開らけし處也。（人家六軒）是より西岸に渡る。

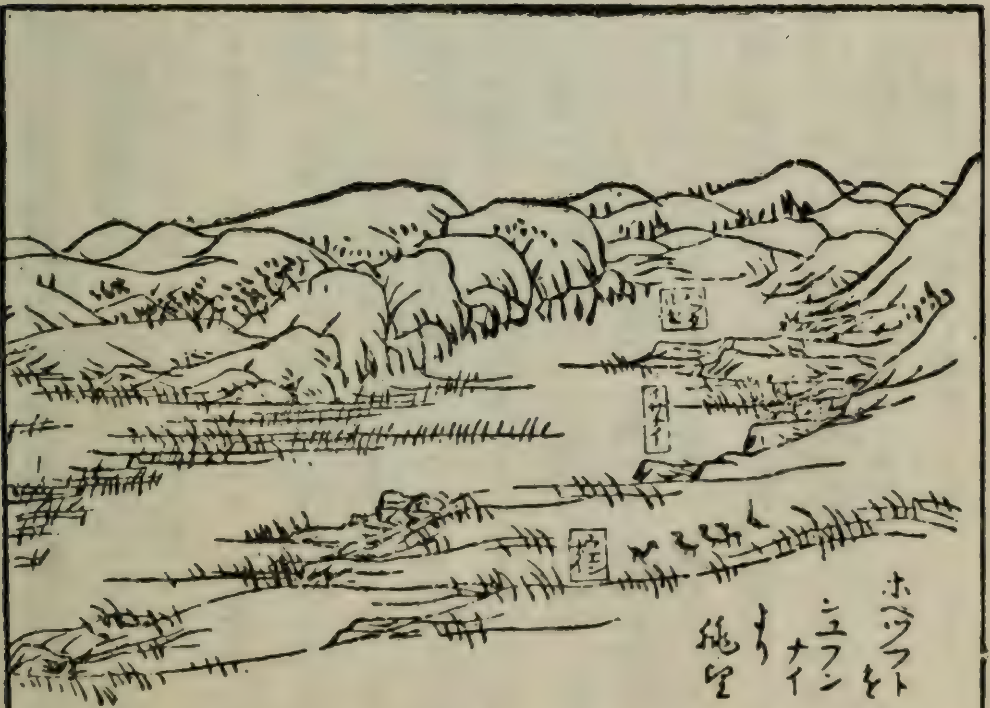
川巾六十餘間急流、越てクツチセ（上崖山也）又ツハヲマ（左）シユツクシナイ（右）ハンケトヨマナイ（左）此邊より畑有、別て麻を作る也。其麻苧は皆土人仕懸弓の綱に用ゆると、何れの家にても天井には仕懸弓を一面に積たるが、中々容易ならぬ數也。壹人の獵夫にて一冬に取獲る處凡五六十頭に下らざるよし

語る也。カネラフ（左川）此水鐵漿の如し。土人の話に、水源に岩鐵が有と、昔し最上某試堀致せし由、ウエンナイ（右）トヨマナイ（左）ユクヲロナイ（左）皆人家續き也。（十五軒）爰をホヘツフト村と惣稱す。此處餘程の平場也。爰にて右本川左りホヘツと成る也。夜召連しイクラムカ家に宿す。

廿五日舟にてホヘツの方に上らんと欲すれど水洪く上り難き故、歩行にて出立、暫上り（人家六軒）ヌットコ（左）ハンケヲヒラルカ（左川）アイカップ（兩岸崖）此處より山に成處奇觀の地有。ムイネニタッ（右）シュイコンフ（左）ルウマヘッリ（右）リルイカヲマ（左）ハンケモヘッ（右川源にソウシケイと云高山有）ヲトイマウシ（左川）爰にて最早八ッ頃と思ふ故、源の大略を聞に、アツマの源を併て二日路斗上り、夕張岳に到り、大瀧有て實に天下の奇觀也と申牌ヲヒラルカ江下る哉．土人二名刳舟に掉來る故、是にて向に渡る。一面の曠野にて槲柏の大木有、薄暮ムカワの西に向ふ。（從是ムカワ筋）

イサナイ（右）カハイウシコッ（左山）ユケトヨマフ（右）フヨマナイ（右）此處に喰土（チエトイ）有る由也。クイトッ（右）ホンシュフナイ（左）シュフナイ（同）ハッタルセ（左人家四軒）星影明りに成るや．胡女樺明しを持て迎に來りしが我等を見て、其を犬に含ませ遣、先へ走り歸りしが、須臾の間犬は其明しを含て我等を教導し程よく行しが、二三町過て外の犬一匹來ると、夫と噛合其明火を消仕舞たるも可笑事也。是に似たる話しは余が友飼犬を馴し置、書附と錢を首に附買物を致させしが實によく事を辨へたるに、或時醬油買に遣したる道にて噛合て．其陶の首斗をさげ歸りし事有しに彷彿たる笑草にぞ有けるなり。

廿六日水勢吼々難レ舟故陸行す。ニナツミ（小川。人家五軒）ヘトンナイ（左川）ウツカウシ（左川）ラウネナイ（左川）トサ（左川）フンレヲニコロ（右川）キロ、ヲイ（左小山）等皆鹿道をたどり行に、爰に神の作り玉ひしと云畑有と、畝も切し跡有て陶器の欠等有と、恐らくは是往古土人の村なる哉。エサナツケ（右小山）此邊より兩岸共高山に成り又樹木も陰森として石高く難所なり。トウサ（左川）上にセタニウシと云山有。此山一面に鹿梨（セタニ・コナシ）生たる故号く。平ホコマナイ（右川）ヲソツケイ（右川）此奥に奇なる瀑布有と、源はサル山に到る由、爰にて申牌過なる故大樹の下に宿る。今日は蚊虻にて各面も手足も赤く腫たりしが、夜に入一匹も見ずして安心す。扨是より山愈嶮樹密にして歩捗取難き故奥の大略を聞に、ヘンケヲソツケイ（右川）チク（同）シュマ



ルフネナイ（同）此邊大岩壁、堅雪の時ならで行難しと。舟は常水の時爰迄上ると、ニタカイ（右川）從是川筋簇々たる岩石となり、是に石英の氣を含もの多よし、シケレペ（右）モシリハヲマ（左川）イワナイ（同）源に温泉有と。上にルツケイ（小山）と云丸山有る由、（并て）イラミウシナイ（同）等其餘小字多し。ホロカンペ（右川）ニセイケショマ（兩岸絶壁）是を過て上は惣て平山にして川筋五六條に分れ、東はサル山、西北は夕張の方より來り、奥に到るや青木山也と。山中半より下鹿多く、上は熊羆鷲鵰また種々の異鳥奇獸有よし也。（クトムカサムコト、トナイラム申ロ）

廿七日未牌ハツタルセに歸る。宿途中鹿二頭を獲斬とし羹とし脫領頭

廿八日屆舟下疾如矢兩岸の風光見留るの暇なし。輕

舟已過萬重山實に今日の一興たるべし。午牌（トトノシケ）イナユウへ歸る。宿土人に華錦鼠（カセクルツル）を取に遣す。

廿九日平旦發舟、辰牌ニワンフトに到る。水霧朦々の中處々山巓を見るも亦奇也。ヘンケニセイ（西川）此處石英の氣有石多し。ホントウフト（東）ニセイケナイ（西川）キナウシ（東岸、人家五軒）キヽニナイ（西川）早咲（キキニティ）うつ木多き故号く。モ平（平）河筋屈曲鶺首忽に轉じぬ。過てヲフシユシナイ（東川）キタルシナイ（東川）シユサン（并）エネンケネウシ（同）楤木（エネノケネニ）（トリトマラス）多き故号く。クヲナイ（西川）ニタツナイ（同）シイチカフシナイ（同）ヘンケチヤフ（同）ユクヘツ（西川七八間、人家八軒）此源に大岩有。其根に窟有よし、アツマへ山道にて此處を通るよし也。ニユクナイ（東川瀧也）過てキリカツチ（西川六七間、人家四軒）爰にてトンカウと云者の家に休らひしや、此者話に、去冬夕張に行しに我が獵小屋に字が書有しが若ニシハにては無哉と云に、拍手し、それは我が去七月十四日に宿し書置し由答しに、同人も大に其奇偶を感じ、一宿と勸呉られども急ぐ旅なればと出立し、ウルニウシ（東川）イワツケナイ（西川）ヲルイカ（東川）ソコムカ（東川）ヲサンネフ（東川、人家一軒）アツルヘシペ（東川）モイヘツ（西川巾七八間小名多し、人家七軒畑多し）名義、深く遲流の義。是モンヘツの誤りか。此邊より追々川深くして遲流に成る。ヤーネシル（西亥山）ヒヨタサンナイ（西川）シイチカフンナイ（同）リセツフル（同）カアナイ（西川、人家四軒）此處鶴多き故是を取仕縣を置故号しと、ヲタサンヘ（同）チシネイ（同）ケナシヨロ（西小川、人家四軒）シリキヲトンカ（西平）イモツペ（東岸小川、人家六軒）此上にヲタヽキイと云砂地

ミワンアト

を飛虫多きより号る地有、チン（同小川、人家十軒）此邊より兩岸とも平地に成。茅原多く上は槲柏原也。ライハチン（東岸小山）過てムカワフト（巾五十余間）此處渡場也。纁黄爰に漬、小休所（土人四軒）に宿す。ムカワの原名ムカにして延たる義也。山中處々涌水有、それが集りて川と成し義也。川筋鮭鱒チライ杜父魚桃花魚鯇、又初冬の頃シユシヤモも入る事有、土地肥沃土人好て畑作をなす、往古は松前家々臣籠小兵衛佐藤東馬の給地なり。文化度には八王子原半左衞門支配の者共來りて畑地を開きしが、可惜皆荒廢なせしぞ。（イタエム、イクラムカ申口）

アツマ（船渡）越て濱通り行や、ライチヤン（平地）昔しの城跡なり。（凡一里十一丁）ユルシカヘツ（川巾五六間）名義、憤る川の義也。是アツマの枝也。惣て濱道（四丁廿間）チクニロシケ（平地）エキシヤラ（沙地小川）コノロ（小川）惣て平地にし玫瑰沙參其外草花秋頃は見事なり。（十八丁）

ムカワ（船渡）兩方谷地中に道有。フレヘツ（小川）トンニトイ（小川）是より坂に懸る。名義、槲柏原の義。（從是サルエ海陸兩道有、今陸道を本道とす）ヲヒシラヲマコツ（平山）濱へ出る道故号く。（半里）カムイトフニ（沙山）此處昔し境なりしと（サル乙名ハフラ申口）名義、昔し神が這入しとの義也。（十丁）フイハブ（境目）本名ヲフイバフとて昔し燒し處に依て号く。此邊皆礁沙也。

○從トンニトイ海岸まゝ來れば只平通り、字も別になく皆上と同じければ誌さず。寄木多くして甚歩行難し。（從シラヲイ境目十一り廿五丁二十間、從ユウフツ會所五里五丁）

沙流領

本名シヤリにして濕澤蘆荻叢の義。此邊多きより号く也。扨字フイハフを過て槲柏蔥陰森（小休所）土地一面胡枝花（レシケフ）芒（ラヘンチ）生、南東を眺望すれば、極目無レ際覺三轉入二異境一、余が乙巳紀行此處の圖上に友人竹堂題曰飄二將下變袖一上中高臺上一望連レ天浪作レ堆、亜墨茫々魯西遠、不知風自二底山一來。しばしにて（十三丁）ヒラウトル（小川一里）ウエンチセ（平地）此海岸に崖窟有、其を言なるべし。（五丁）トイフル（坂）土坂の義也。下り（渡守壹軒）川端に出る。（此川上のことは次に記す）

サルブツ（川巾七十余間、遲流深し）當場所此川筋の土人を用ゆる故惣名とす。越てトフシケ（平地九丁）ヲコタヌサル（木立）名義、古へ此處に人家有、其より廣まりしと、依て号く。（廿丁）トンニカ（左方、人家十一軒）槲柏の義（十一丁）ウエンチ、ヤブ（本地）昔し爰に女子一人有、煩ひ居て水を汲に行死たるが故号しと。（五丁）ヲヒソマコツ（小川）末流海へ横切に落る故号ると。（二丁）キナチヤウシ（小川）草深き義也。（七丁）小々下りて、

モンベツ（川巾七間、橋有）名義、靜川の義。又モペツにして小川とも言、越て會所元也。

海岸通りは境目より沙濱上の方赤崩平流木多く甚歩行難し。（二十九丁）

ビラトルナイ（小川）ブユンチシ（昔岩窟有しと云）ブユンは穴、チシはチセにて家の事也。風波の時通

り難しと、古老の傳に、太古南方神の國より女神一人虚船に乘て爰に來り住玉ひしに、何處よりか一匹の犬來り、此神に馴近きて心有氣に日々木の實、艸の實又は魚等を取來り供奉しけるが、不思儀なる哉何時となく此神后孕み玉ひ多くの御子達を產玉ひしが此國内を知ろし召玉ひしと淨瑠理(ユウカリ)に有る由。又村上檍丸が蝦夷奇觀に、昔しシツナイと言處と有、是フツナイの誤り哉、フユンチシナイをフツナイと結ひたるかと思はる也。依て此場所は蝦夷地第一創業の處とぞ語る。扨其岩崩の下過て（七丁）サルブト（川口）過て（廿二丁半）シノタイ（漁や有）名義、シノは至る、タイは山の事也。（四丁半）トニカ（平山）モノタイ（漁や）小山ムロ義（十四丁半）セウリウシ（平場）享和元戌年迄シノタイに義經社有しを爰に移し、又近

年會所元に移す也。過てウエンチヤブ（平濱十四丁半）過てモンベツフト（従ユウフツ境二里三十一丁十間、従同會所九里海岸八里十間）此處會所元と成たり。

サル會所（勤番所、通行や、板くら、漁屋、馬や、大工小屋、鍛冶や、土人雇小屋）人別（文政五改千二百十五人、安政三改千三百廿余人）多く産物鰯昆布鮭海鼠鮫売鱒雜魚多し。濱形巳午向惣て平濱船懸なし、沖積也。小山の中腹義経社（御丈一尺二三寸）合殿辨天、傍に天満宮、蛭子社。また畑多し。元松前家々臣小林某給所、其比は運上屋サルの川端に有しを文化二丑年此處江移す。然に呑水無故山より筧を以て取用ゆ。廻船箱館より寅卯風にて出、酉戌にて入津す。土地至て肥沃なり。

△六月廿八日（安政三戊午）於二會所一案内土人五

名（ホロサル村リキナシコロ、シユムンコツ村トレアン、ロレタリ、イナヲラン、アムキリ）を雇て出立しモンヘツ川筋を上るに、山根覚を架て會所の水を見たり。此邊新畑多し。山に入リイメンシユイ（土人小屋七八軒）向にヲヒシヨマコツ（モンヘツ西岸）ライキヲマナイ（右小川）平山南向嶮地也。ブンカルシコツ（右山）トサツナイ（右川）向にサラハヲマ（左川）トイチウシナイ（同）爰に穴居跡多し。考に往古は餘程土人の住せしと思はる也。惣て川筋屈曲する故本川を見る事なく、山の半腹を行こと也。ホンユクチセナイ（従イトンナイ山越也）山合に畑有、粟稗よく出來たり。（人家二軒）クヲナイ（同人家一軒）山に上るや山椒の大木一面に有、實に奇と言べし。向はシイチカフンナイ（左川）ルウエンを上る事しばし（凡廿丁）峠に至り下る。（十余丁）モベツ（川東、人家十二軒）村中にワツカクナイ（右川）向にヲサツナイ（左川）モヘシユイ（右川）テホマナイ（同）アシカリヘツ（右川）此源はハイ山より來ると、又マウニウシ（左）フツホウシ（左）イヨシルイカ（右川）此源にヲニウシと云高山有てハイと向背する由、ラウネナイ（右川）此處山の平に大岩有、年々小石を孕み出すと、是子持石なる哉。サヌシヘ（左）ヲタツコムシベ（右）チヘシナイ（左川）キラウシナイ（右川）鹿角多く落て有義也。故は此處に獨活多く有、鹿好て是を喰ふ故也と、必ず是を喰と角忽に落る由也。ナエー（右川）ヲフチフミフ（左川）チヤシ（右城跡）クツタラ（左川）名義、虎杖益母草鍬形草の類多き故也。（人家六軒）爰をニナツミ村と云り。此村サルフツのニナツミより獵の便利故移り來りし故に如此号と也。漸々哺夕首長シユクフクリ

の家に着す。此邊未だ谷々雪深し。今日の里數凡八里といへり。

山陰の雪間の千種咲そめて此里人も夏をしるらむ

扨本川は雜木慾陰森、兩山高聳へ少にてアトナイ（左川）ヒンネ（同）ハンケコロ（右川）ヘンケコロ（同）此邊大石簇々種々の奇石を出と、兩岸絕壁也。左ホリカモヘツ、右シノマンモヘツ、其源ヌツケヘツとアツヘツの間に入り山皆靑木也。

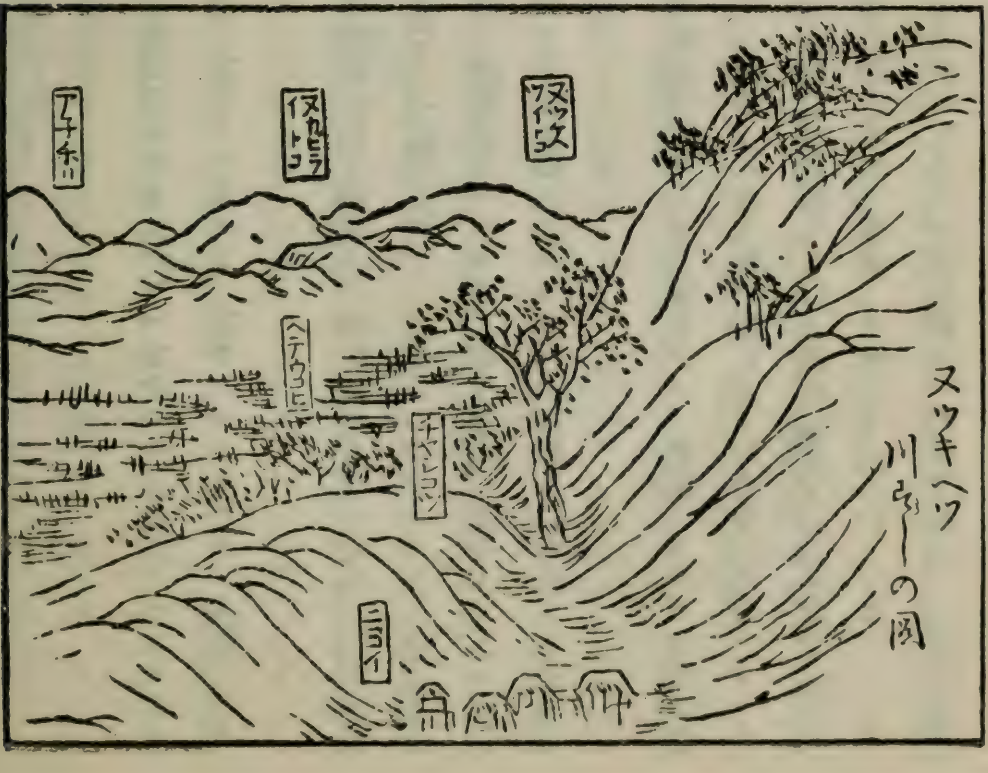
廿八日霧雨杳靄とし鬚髮を濕し恰も白毛の如し。山中蝮蛇（マムシ）を見る事度々、然に蛇を見ず。寒地には長虫は無と思ふに、北地の白主又蝮蛇多し。其性蛇と蝮と異るの甚敷を覺ふ。乙名シユクフクリを先導とし出立。マカウシ（左小川）ホロケウ（左小川）過て二股、此處右モクツタラ、左り本川、是を上り（一里）マサラマ、（左川）より木根に取附辛うじて晝頃峠に到り、左を顧ればヌツケヘツ村眼下に蜿轉としたり。是より峰傳ひ下りて（凡三十丁）、

△ヌツケヘツなるコタンヘツの乙名（召連アムキリの親シラウヱンカ）家に宿す。名義、ヌツケは濁の義也。是より南岸を下りチヘナイ（源チヘナイ岳と云）ニヨイ（人家九軒）爰にニソレウシ（八十七才）と言老人有、其娘アシリマトク（卅七才）と云未だ夫をも持たず孝養なしける故に、聊兩人に手當遣し出に、ウムンチヤシ（城跡）ヲタシユイ（小川）トレフンナイ從是北岸へ渡り、イナツミ（小川）シケレヘ（人家五軒）セトシペ（小川）キタルシナイ（小川）是より船にて乙名の家に歸る。此邊平場（巾一里長三里）

土地肥沃、是を開けば見込有也。夜土人等より隠元豆胡瓜を貰ふ。扨土人は雪隠なくして大木二本横たへ、其上にて便する事なるが、爰にて始て雪隠を見たり。

ところせくはたものうえてえみしらもわが日の本の光りこふらむ

七月朔日發舟、ヌッケヘッに上る。（右小川）ケナシヒホ（左川）タユシナイ（同）イヘミシナイ（右）過て二股（凡一里）左りをヌカ平と云、右本川を上るにチセニカルシ（右川）ニタツイ此邊水流急にして上り難故舟を下し余は上陸してヌカ平の川筋に出たり。（陸地凡一里）其川上の大略を聞に、兩岸小石多く凡二日路にて源に至る。兩山聳立左右數十ケ所の瀧有。其上はヌッケヘッ岳と云る高山の後ろは十勝のビバイロに當ると。

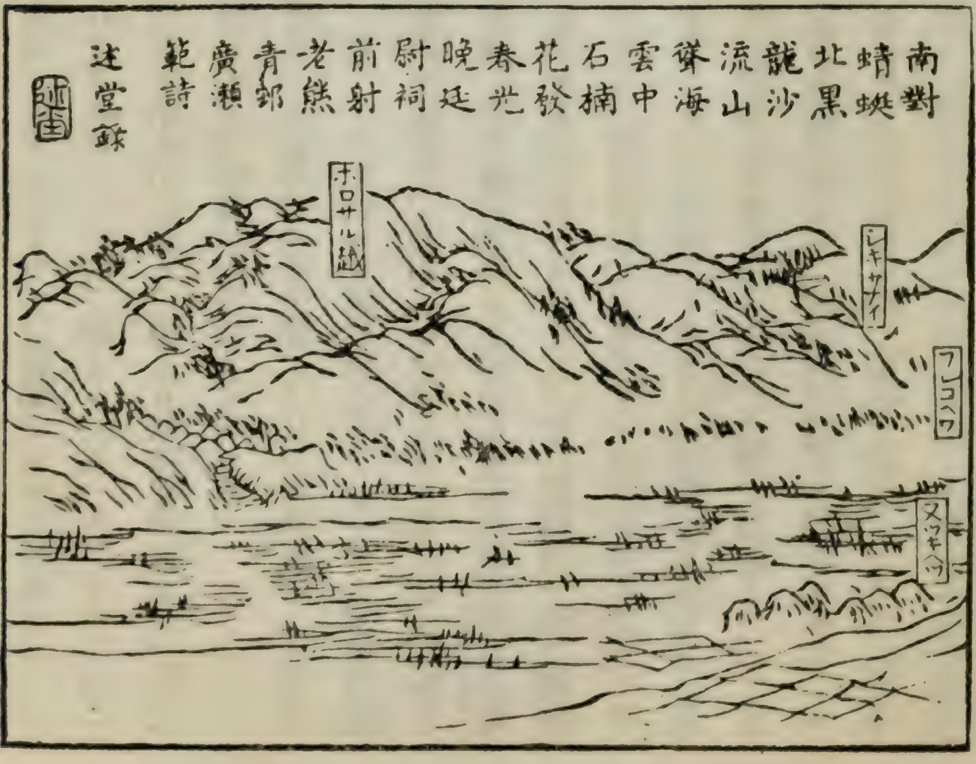


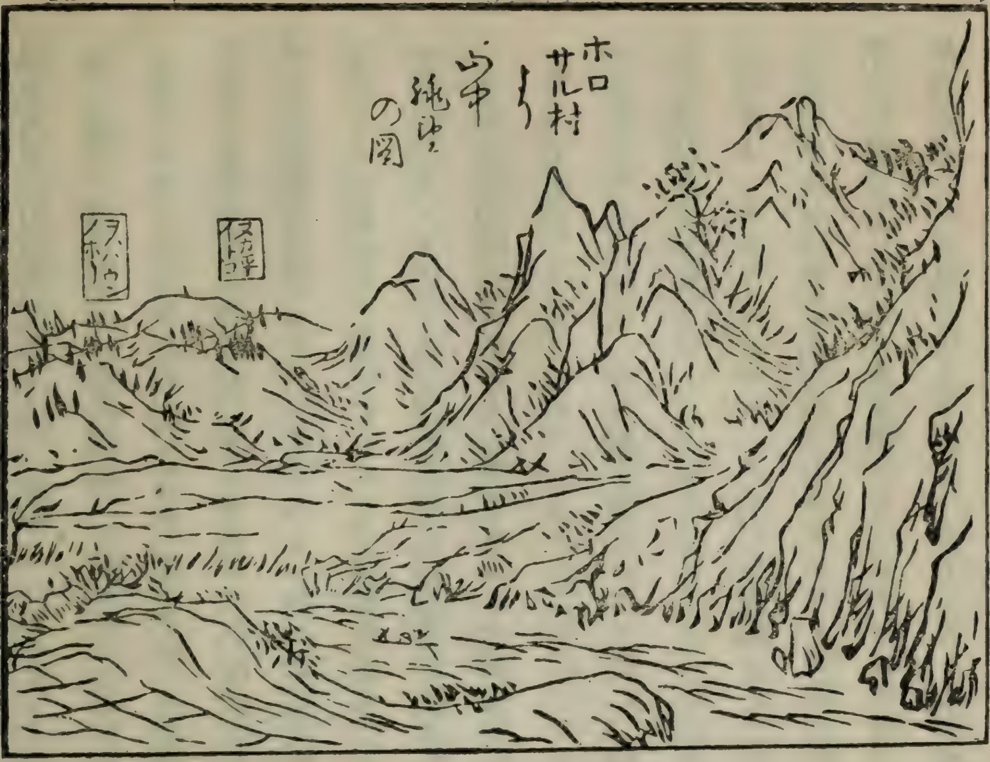
扨ヌカ平（川巾凡卅間）に出、爰をヌヘトウマイ（左川）と云。涙川の義、源は雪路二日にして二股に至り右をシヨクシヘツと云、源シヨクシヘツ岳と云有、其後ろ是もヒボクに當る。左りヌカ平、其源兩山峨峨とし川筋大岩簇々上にユクルヘシヘ岳と云、又糠平岳とも云高山有。後ろはシヒチヤリ川に當る。又十勝のメモロえ近しと、四時雪有、山皆青木なりと。

　さる山の雪間傳ひにともしするえみしは夏もしら
　ですぐらん

等戯れ二股迄歸れば、舟を繋ぎ我等を待が故に、掉して暫時に下りぬ。

二日キムンサンケ（シケレヘ乙名）を先導とし（十余町）フシコヘツ（下川）過て上りチエトイナイ（小川）に出、爰に鹿多く土を喰たり、是チエトイ也。此邊の者も昔は是を喰しと云り。上り（凡一り）峠





に出、（半り）下りて（從是ホロサル川筋）。

△キタルシナイに出、澤まゝ（凡一り）下り川端に至るや兩人川に飛入、向より刳舟を乘來り、一同を渡しぬ。其勢實にいさましく有たり。

サルペツ（川巾六十余間）上にホルサル村（人家廿二軒）リキナシコロ家に到るや、シュクトカ爺は瀰頭菌小鹿壹匹、乙名（シュクシナ）妻は鱒、鷹豆を持來。地形南向畑多く粟稗南瓜胡瓜呱吧芋手なし豇豆蔴烟草蕪の類多く作たり。實に蝦夷第一の土地なるべし。午後舟にて上る。ヲヽコッナイ（右川）タンネサル（右平野）シュッタ（右川）フウレナイ（左川）此邊より大岩簇々川中に突出し甚危し、依て從是舟を禁じ有よし、然る强て遣るや兩岸嶮嶮也。ルツチュッフ（左川）一條の瀑布と成落、トナエ（左小川）此邊白き丸石のみの川原也。夕陽是に落るさま

實に奇觀なるべし。此處にて舟を岡に揚ちて穹廬を作り宿す。（從ホルサル五二り半）飯を炊んとせしに石飛刎て其邊りに居難く甚困りたり。

三日出立山皆椴に成、地形一變す。又檜も有と、夷地檜の有は此處斗也。是を材木山と云。當處の材木皆爰より出せば也。ルツケウ（右平）イケウレリ（右川）并てムセウ（左川）此川鱒多き由にて土人等梁を架て漁し居たり。ムセウは煮て喰義也。川筋小石多く、源はムカワの上に至ると、舟を繫ぎ岩間傳ひ上る。ケナシヨロシナイ（右川）レタリヲマナイ（同）過て、岩愈尖、歩窮しが故、其大略を聞に、處々無名の瀧有、實に奇と云べし。

きて見べき人もあらじを山姫の瀧の白布なにゝおるらん

從是上はハンケナイ（右小川）ヘンケナイ（同）エ

ネンケナイ（同）シキシヤナイ（石川巾六七間）此源にアネノホリ（尖り岳の義）と云佛飯の如き山有、アネは尖りし事を云也。此後ろ十勝のサヲロに當る。過てイワチシ（右高山二有、其間より落る）イワナイ（左川）フツホコマ（同）此上にセタニウシ岳と云有、過てモサラ（右股）ホリカウエンサラ（左川）シイサラ（右川）此邊惣て大轉太石、源夕張の南つゞきの山に到る（シユツカトク、シユクシナ申口）と聞り。

扨舟して下るに、舷より水飛入其危さ言んかたなし。輕舟已過萬重山等口吟てホロサルに宿。此村昔し十勝より來りし者と津輕の宇鉄より來りし者の子孫なりと、今に乙名また外の家等にも持來りしと云種々の寶物有と。此地惣ての元地にて爰の言は何處にても通ざる處なしと、其譬を云はゞ、云はゞ膳を何處にてもイタと云、イタは板也。當處にてヲツヽケと云り。家居もまた他處より太く其餝り附も見事にし、客の應對も惣て慇懃なり。夷地にて庭の掃除さする等有無に、此處にては朝夕叮嚀に掃除等し、其風大に內地のさまに似たりければ、

世ばなれし保路さる山の奥えみし都の手ぶりいつならひけん

四日早晨解纜て下る。ヒラチンナイ（東川）ホロケシヨマ（西中川源小石多し）過てモウセウシナイ（西川）瀧に成落、樹間より眺望の風景よろし。ロクントエト（東山）モルヘシペ（東畑）トナイ（西小川、小石多し）此源にソウホコマとて數丈の瀧有。タユシナイ（東川）トユシナイ（東川）トツホヲツナイ（東

芳齋

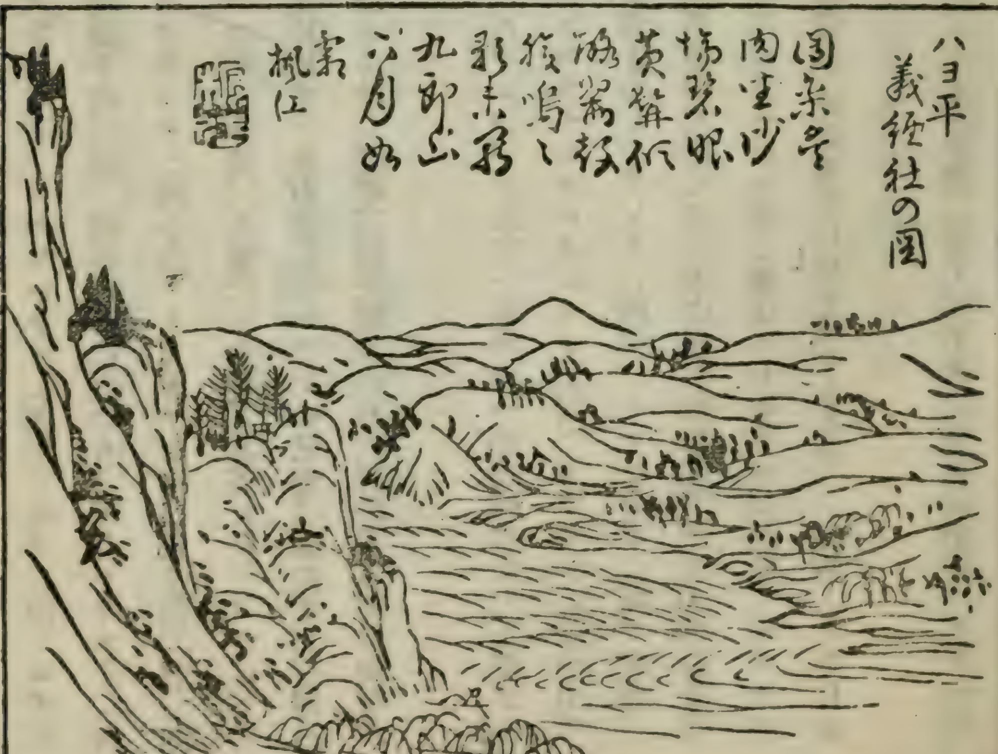
川）ヲサッナイ（西岸、人家廿軒、中川小石多し）名義、口が干る義也。タユシナイ（西川）モ平（東黒岩岬）キソマフ（西川）アノヒ（西川）ヒタンノシケヲマナイ（同）ヘテウコヒ（二股、是ホロサルとヌカヒラの別れ處なり）此邊よく開らけ、此方彼方に人家も見へ、聊夷地の心持はせざるなり。是より水勢大に遲く成たり。ヘヲサン（西川）ホロコツコロ（東川）過てペナコリ（東川人家十一軒）名義、昔外より子供の育が能き故に号しと。トウナイ（西川）平ケショマ（東川）ニトツミ（東川）此處近年迄人家有しが今モンヘツに引移りてなし。クトホウンナイ（西川）カンカン（東川、人家三軒有、源エサヲマカン〳〵岳と云）名義、鹿の腸を童子へ神が呉給ひしに依て号く。越てピハウシ（東川、畑有、人家十五軒）ヲホウシナイ（西川）クロマトマナイ（同）此處文化度金丁を入れて金を掘し跡有。其邊り礦石（サカツキ）多く捨れり。ルヲマナイ（西川）ヲサツ（東川）ヒンニ（西川）ウロイロシキ岳（西岸小山）雜樹陰森として川中に聳たり。コヲイ（東川）源に溫泉有。タユシナイ（西川）シユマルフネナイ（同）ニフタニ（東小川、畑有、人家廿七軒）名義、昔し此處の細工人木太刀を作り其柄に金物を三ツ附て奉りしと云故事有。過てフウレナイ（東川）此邊り皆村境〳〵に標柱を立有。村々より案内に出る者其地名と譯を問ふに、我持分の處迄教へ境より外は少しも敎えず。其仕馴し恰も內地にて順見使等え村役の出る如く何を聞くも只エラマシカレ〳〵と答けるぞおかし。

ヒラチミ（西川）ウトルヲマナイ（同）トコンウトロマ（東川）ハヨ平（西岸平高十余丈）舟を寄て分二

探荊こて上る九百余間、惣て胡枝花芒繁茂し小絲毬(コテマリ)咲盛て水を照す。上には掇五六株老立たり。俯レ下や恰如レ屏碧水溶々、其風光恰も奥の北上河の高館の趣に似たり。仰レ首重疊たる連山の上に糠平山(ヌカヒラ)、尖岳(アネノホリ)、沙流山等空を凌て聳ゆ。岩間には石楠花雪もゆう種々目馴ぬ異草一面に生し、此處に一ツの小社を安置し毘羅沙大明神との額を懸し、八十年前は卿の甲冑の像有しが今は其像會所元に有と、公高館を去て此地に渡り玉ひ、此川筋に城郭を作り、時々爰に遊覽なし玉ひし處なりと。其地形の高館に似たるも奇と言べし。額拝して一首を木幣にしるし奉りて

蝦夷人が作る荒木のみあらかにますぞと思へば袖
ぬれにけり

下りてノホリハヲマナイ（西川）平ハヲマ（東川）ア、ヘツ（東岸川、小石多し）越て



ヒラトリ村（西小川、人家卅一軒）一條の町に成、大なる家有。ヲヘウシナイ（西川）セメ（同）ニチンケウ（東小川）ヘンケニナ（同）テナ（人家跡畑有）此邊平地に成、楊赤楊原に成たり。ヲラウネナイ（西川）サラハ村（人家十九軒）ホロトコン（西小山）セタラコツ（同小山）トミルヘシペ（東小川）昔し義經公の大軍が越たる故事有。シリ（東川）シユムンコツ村（東岸、人家三十余軒）本名シユンコツにして西地面の義也。畑多く有。夕方乙名（イヨラツケ）家に宿す。是召連しトレアンの兄也。家の正面行器八十余、太刀短刀百餘振、鎗五本を餝り、余が來るを待もふけて挂甲二領を餝りたり。何れも古製の物なれども余此道に暗らきが故目の及ざるぞ遺恨也。

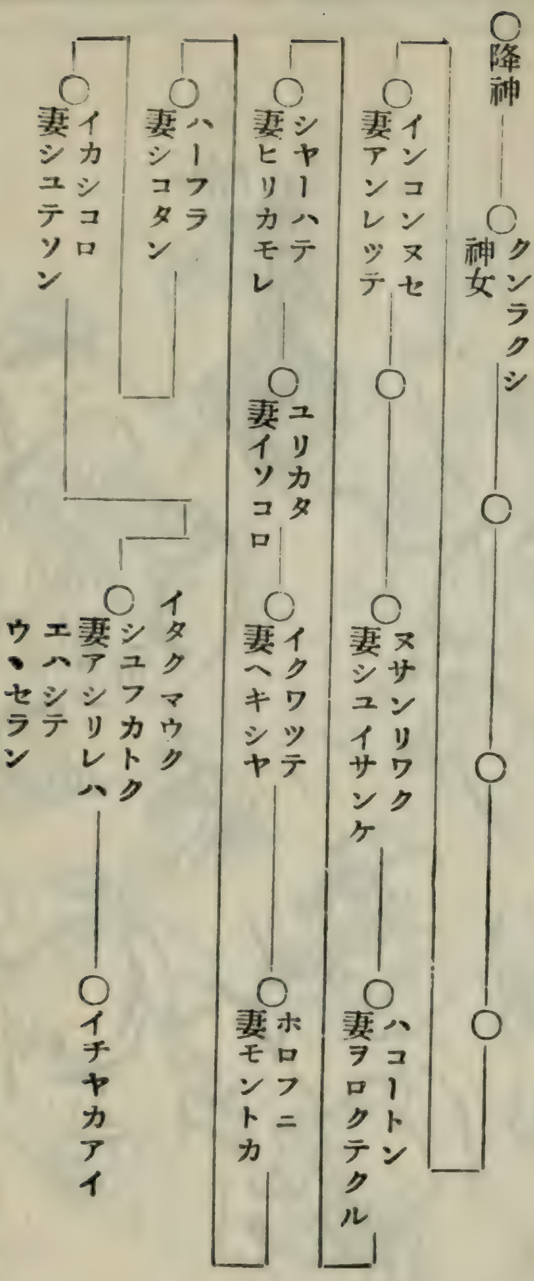
五日平明舟を艤下る（東岸）シラウ（東川）源はシユルクシヌタと云て一里斗の一面烏頭の生たる處より來る。ペンケヲツフネイ（東川）ヲツフネイ（同）タツコフヘンコロクシナイ（同）タツコフ（同小山）タツコフハナクシナイ（西）此山に一ツの瀧有り、風景よろし。サント（西川）エソロカニ（同）名義、火箸に作る木有と、同名ユウフツにも有、按に此木漢名鐵掃木にて至て火に強き木也。チヤシコツ（西方）是義經卿の城跡也と。時々石砮（ヤノネイシ）を出す。コンカラ（同）チツヘシコロ（東川）トイフル（西川）ウヨツヘ（東川）ヒタラバ（小ヒ、人家三軒）ヲコタスサル（渡場）此處東岸に舟を寄せ上るや、會所より今日もヲムシヤなれば早く來れと馬一匹を廻し呉たり。

扨往來より左り（上の方）の方に入（五丁）トンニカ村（人家）を過（廿丁）イクレウシ（小川）イタ、ウ

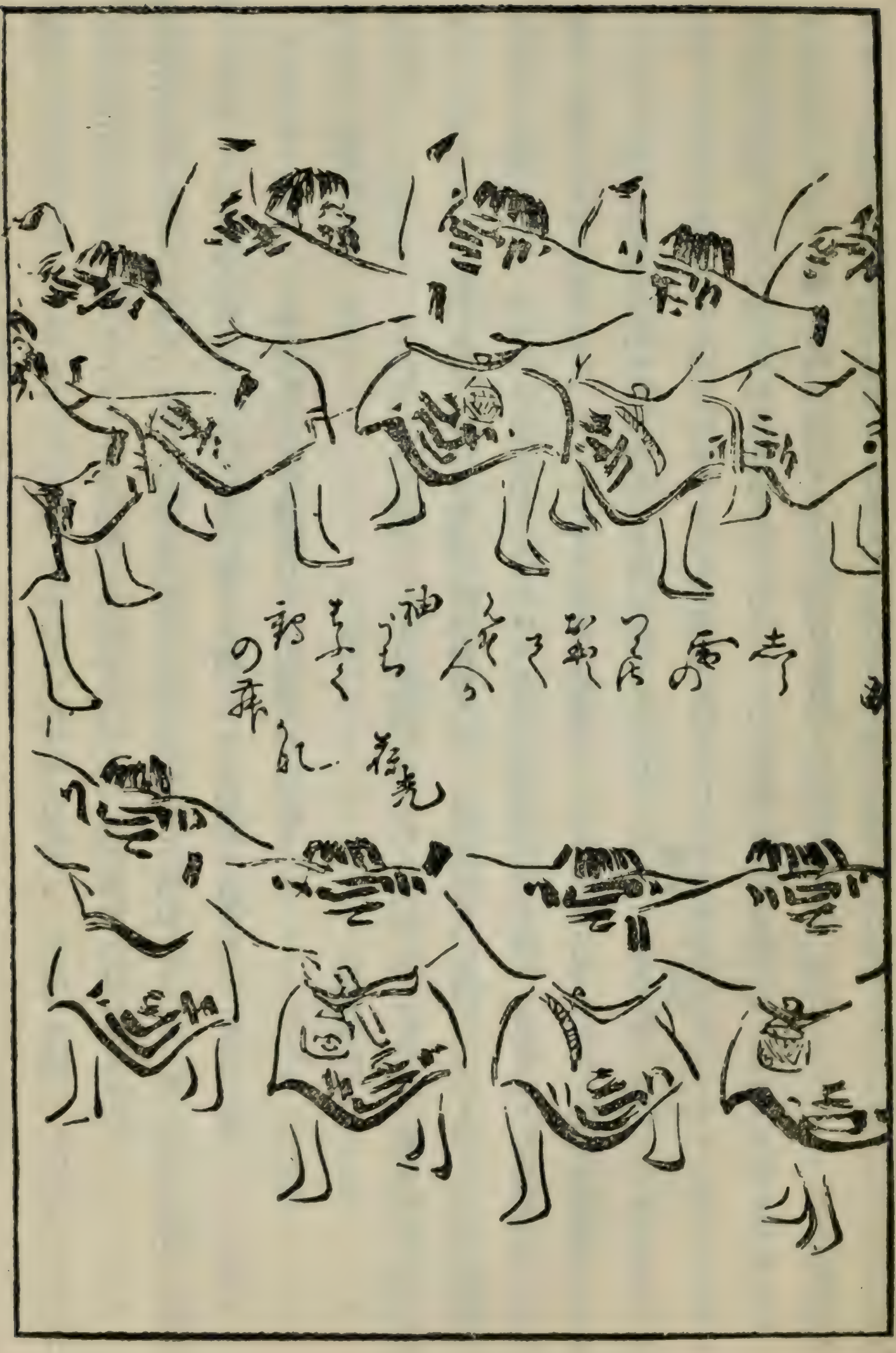
シ（小川）過てヲコタヌサル（小川）の川上を越て行や、小堂有。見るに彌陀の尊像を安置したり。其由を聞ば、大西（榮之助）氏が近頃建立せし由聞ば、戯に其柱に誌し置。（三丁）

大神のかためし國にいかなればあらぬ佛のあとをたれけん

ピラカ村（人家廿四軒）に行、乙名バフラ（蝦夷第一の舊家也）の家に至るや、慇懃に座を設け粟飯を炊て我等に出す。其家筋等の事等聞に、何一ツ筆記も無れども、翳々として答へ、別て感ずべきは家の系圖と言ものを如此語りけるまゝ誌ンし置也。



北里酔民



從是ウヨロ（小川）チツヘシコロ（小川）シラウ（小川）ヤムワツカ（小川）等越て（凡一里）上るや、シユムンコツに至ると、トレアンは其道筋早爰に來り待し故、共に會所へ直に下りける。

扨會所には山々の土人寄集り、また石場君も出役にして控書讀渡し、酒飯を皆の者へ被下、老も若きも醉を盡し、其國ぶりの哥謠ひ舞樂みければ、實に是ぞ太古のさまと蜂腰一首を其壁に誌るし置、

千代ふてふ田鶴のむら鳥うちむれて雛をはぐゝむ舞の目出たさ

ヲムシヤ考

藤原高門

ヲムシヤてふ事は早くより片假名もて書習はしつれば所の者も故よし定に辨知らぬに、蝦夷双紙（最上德内著）夷言雑話（串原正峯著）等にも蝦夷の饗應振舞の事と有のみにて、其後の文ども等も名義の譯書なせる者も見及ばぬに、クナシリの別名をもヲムシヤと言るなど考合せて夷言と思取し人も是彼有て、その解など書顯せし文も見侍れど、抑ヲムシヤてふ事は蝦夷どもになべて酒其外もの取らせ掟書讀聞せつる事なれば、夷言を其儘打まかせて言傳ふべき謂はあらざるべし。此方にて夷言を唱へ來れるは地名人名の外は見しらぬ草木鳥獸の名を稀にいふのみにて、其他は絶てなし。東風ヤマセ　小舟ホツチ　群來クキル（鯡の）等の類は松前邊の言也。又かの方にて和言を用る事は殿ヲトナ小使會所運上屋支配人番人馬牛等其餘も有ぬべし。

扨蝦夷共に往古より贈しものは語言不通にて和言を言傳ふる由も無れば、夷言もて名づけ、後々通辭抔往來せるに到て、渡せしものは名もて言傳ふるに唱安きは强に夷言もて名付事もあらぬ習はしならん、此方

は前にも言る如く地名抔の類の外は素より夷言をまねぶべき事にもあらねば見聞儘に態送り抔さへ和言に言るをや、まして官吏の取扱ふヲムシヤを夷言もて言傳ふべき理はあらじと思ふに、テシホの邊にては御撫謝と書傳ふるよし、是も又夷言にあらずといふのみにて押宛たる樣に聞えたり。予が考には御赦ならめと思ふ。さるは嘉吉以來松前家所領せし後も屢叛きし事あれど果は必和談調ひし事にて、扨降人に成し上は懷る外に策も無れば御赦の印とて物取らせ、此後の事共言聞せ等せしにて有べくと思ふに、蝦夷亂記(寬文亂)に權左衞門と云者シヤクシヤイン其餘の者を討る條に、和議に於ては既に調ひし處なる、汝等生れぬる祝ひの酒給るべしとて金堀の小屋の中へ迎入れ、淸酒二樽濁酒二樽を贈る。(中略)五百人の飯炊しぐを心得ぬ事には思ひけん炊く者に近付其よしを問にけるに、人々和議調ひ明日城中に歸り給ふにより悅び事の饗應有べき。(今もヲシヤムには飯振舞たり)料に備ふと答へければ(下略)等有は此前後降人に出て御赦の時は必酒飯等與へし習はしなればこそ、權左衞門はさらなり、米炊く奴僕迄もかく言て誅しならめ。されば御赦の時にいつも酒等取らせ捉書讀聞せし事なるに、頑愚の輩ともすれば叛きし故に懷けん爲に折折御赦とてかゝる事取行ひしを、漸々彼等も叛く氣力もうせて過ける儘に、果は撫育の爲に年々御赦の取らせ物する事に成行たるにて、其名義素より和言なれば、彼の方は深くも辨へ知らず、又こなたにもかく成來ては物取らせ捉書讀聞かせつるが大意なれば今さだかに言傳はらぬ成べし。さてはクナシリも往古一嶋殘らず叛て終に降人に出しかばヲムシヤといへるにもかなへるや。

扨ヲムシヤの事を大人に問ければ、右の一巻を示されけるを開き見其事等語らひける時ふし涼風薫りければ、共に蜂腰の一首づゝを戯れて座上の壁にしるし置けるも後の笑草とぞなりけるならん。

下蔭は夏しらさるのほゝかしは廣葉もれくる風の涼しさ　高門

きのふけふ秋ともいまだしらざるの浦ふく風ぞ袂すゞしき　弘

夫畫法有南北二宗々分而爲南人
北宗和人南宗偶異之説也蓋居以
其地之南北不可論其畫者人也多
氣志松浦氏我南物之人而首有勤
勞于北隅蝦夷地則人之所能知也
跋以紀能寫彼地之山川風物細閲
者專意自成一法北南非和又能合

南北二宗而作之者別有自然渾成之趣殆出于太古之畫法老耶然則謂之擬表畫可也哉展觀之際聊書所見以為跋

南華逸史蘇

嬰乃樵者呼書

東西蝦夷山川
地理取調紀行

東蝦夷日誌

四編

多氣志樓藏板

凡例

一此サル會所元に起レ筆し新葛布室內三石の三場所を記す。其厚別を上り山越て新葛布川筋へ下り、水源を見分し會所元へ下りしは、厚別はサル場所內に誌し、新葛布川はニイカツフの部に記す。餘また準レ之。

一地名の譯等海岸といへども前に出たる同名は追々畧レ之。此編は厚別志（三册）毘保久志（三册）志毘茶利志（四册）紋別志（一册）三石志（二册）計利米布志（一册）を摘抄して編輯せば、其審を得んと欲し玉はゞ此全部を熟讀し玉へ。

一三編より四編源廷尉の古跡を誌す所多し、是土人の言傳へ多ければ也。また公の蝦夷行を赤本物の樣に言人有れども是皆其閫門外を知らざる人の論にして、夏虫不レ知レ氷疑ふ人をも亦何ぞ怪むに足らず。文治の後續て渡る人々は小山葦名武田安倍河野村上相原等枚擧するに遑あらず、（審に蝦夷年代記に出レ之故に略レ之）土人も又今の如き者にあらず、其盛ことをいはゞ、〇夷一把と云は六千人なり、相聚る時は百千把に及べり、日の本唐子の二類は其地外國に連て形躰夜叉の如く變化無窮なり（中畧）鬚多して遍身に毛生ぜり、言語俚野と云ども大半は相通ず、此中に公超に霧をなす術を傳へ、公遠隱形の道を得たる類もあり、（中畧）武將大軍を遣て征伐すといへども、凶徒彌盛にして討手宇津宮の家人紀淸兩黨の軍多以命を墮、漸深雪の比に及ぬ。貞任追討の昔の如く年序をや累んと衆人怖畏をいたす。（諏方錄記第三繪隆盛詞青蓮院宮

一品尊道法親王）其餘古典に屢々見え、閲者往古の形勢を審にせんと欲せば蝦夷年代記を閲し玉へと。

文久四甲子の彌生末つころに松竹叢堂に於てしるす

東蝦夷日誌四編

伊勢　松浦竹四郎　著

○沙流　下

日邊瞻二日本一、雲裏望二雲端一、遠游勞二遠國一、長恨苦二長安一（辨正、姓秦、大寶中赴唐、會玄宗潛邸之日、以善圍棋、屢見恩遇、遂卒彼地。日本詩紀卷六）出二曾所一何時も此詩を思出さゞる事なく余も一絕と、極目西南飛鳥絕、不知日本在二何邊一と吐露せしが起承の二句終に得ること能わず、只西南を望み襞袖を浸さゞる時ぞなかりしが、或時此一首を吐たり。（二丁）

うき旅の心も空に飛鳥の翅もおよばさるの海面

アイレシヨマフ（岬）大澤（ホロナイ）（小川）ホン大澤（ホロナイ）（小川）今是をコエホク大澤（ホロナイ）またハンケタ大澤と云。此邊惣て沙濱畑多し。（十六丁）エヲツチウベ（沙）海邊低き處との義、ヲヒシヨマフ（二丁卅四ㇳ）ハイ（川はし魚や有）本名アイにて蕁麻多き義、遲流水惡く鱒鯇チライ桃花魚あり。

川筋（左）下（ハンケ）ミフ（小川）上ミフ（同）トミルベシベ過て西にモイワ岳（ノボリ）と云あり、源十餘里にしてアツヘツのウリルカワと向背す。（字多し）此處昔しは土人多けれども今皆シビチヤリに移ると、又寛文年間ヲニシベと云大力の者錫者允（シヤクシヤイン）金堀庄太夫と叛心を企し時、早く察してシビチヤリなる金丁文四郎江是を打ん

イヘナイ岳
レクマ岳
タセウフレナイ
ミカルヘナイ
ヘテウコヒ

ことを謀に行たるを知て、大勢の僕を連、文四郎が宅まで打入り戰し時討死せし者の子孫近比迄あり、今アツヘツ江引越たりと。依て此場所土人を御味方蝦夷といへり。

カムイシ、タル（鰯小屋有）惡神が住しとの義、瀧澤（小川休所卅四丁半）ケノマイ（川橋）ケンヲマイの畧、ケンは土人喰糧艸なり。是其形象を聞に黄花慈姑なり。ヲマイは有る義（地名解）また水到て宜敷義、（シュクシナ申口）遲流魚類前におなじ。

西岸字多し、フリマクンヘツ（西）ウシ、ヘツ（同）其他字多し。源厚別のヲサツナイと向背す。

沙濱（七丁五十丶）チクシヨ（六丁十丶）カバリ（川橋）本名カハルにて薄き海岸少々礒有を云（地名解）又川上に二ツ家の如き岳あり、漁者海上にて是を目的とする故号とも云。土人是を尊崇し神酒を供ふと。川遲流にして深く、澤内廣く畑地によし。

西岸小川多し（人家廿一軒）畑有、源二ツに分れホロ岳と云、左右より出る、魚類前に同じ。

マウタリ（廿三丁十丶）フクモミ（川橋、番や、小休所あり）本名𤜴有なり。ヲタエンルン（沙岬七丁五十丶）クマチトエウ（土人跡也）棚魚なきの義、神が魚を懸置しが無なりし故事有。（ウエサンクル申口）并て（二丁十）シュフンコッテ（沙地）ユウシヤ（小川）近年此濱へ昆布の生る小石を室内三石より取よせ請負人山田某多く入たりしが其精力不容易ことなり、若し是に昆布が生せば其功勳勢州桑名の沙を江戸海へ持來り白魚を出せしより國家の益幾倍ぞと思ふまゝ一首を詠して山田氏（文右衞門号陽山）に贈る。（六丁廿間）

君が御世ひろめかれとやひろめをばうつし植たる人ぞかしこき

アッヘッ（巾卅間余、船、西サル、東ニイカッフ、共に小休所あり、以川中境とす。渡し守隔年勤と、去年年より秋味漁をはじむ）名義アッは群る義、又楡皮多き故とも云、またモヽカと云獣ある故とも云。（従ユウフツ境六里二丁十間、従サル會所三里七丁）

七月六日（戊午）教導四名（トレアン　ヒリカアン　イソンテカケ　ホタム）共に鞭打て到る、川筋屈曲両岸柳赤楊白楊多く土肥赤く草深きを分て行く（西岸）モユサ（小川）ヘンケユサ（谷地）東にカマバクシナイ（小川）ケナシクシナイ（サル土人二軒）ヲフンカルシ（畑あり）欵冬虎杖楸形艸の間を行、満身露に濡たり。チカホマナイ（小川）ホンハクツ（同）ハクツ（中川サル土人二軒、ニイカフ土人五軒）西に越てホンユク（平山）此邊り木立なし、眺望よく俯せば茅野に鹿の通るを見る故号く。（サル土人六軒）下りて赤澤（ニイカフ土人五軒）此所へニイカフより教導三人（小使、イカシサンロ、イヘヒカン、サンカネ）を廻し置故大勢に成、何さむしき事なく、鹿道をたどり〳〵て上る。

なか〳〵にはかこそゆかね早雄鹿の千筋の道を分わびてけり

西にヲサツナイ（小川）ヲコタンノサ（小川）アカン（小川、サル土人二軒、ニイカフ土人三軒）此所より見るに上なる山に大岩の聳立て竅穴透邃たる物色赤く両肩を立しさま恰も車の両輪の如し、依て此名起るか。アカンは車の輪の如く聳立し物のことなり。ヲイナウシ（小川）フウレビ（小川）東へ越ホリケアン

ペ（小川）ヲトフシナイ（小川）ヘンケヲトフシ（小川）モウクルカワ（小川）ウクルカワ（ニイカフ土人三軒）また向にヲホチミ（小川）ヘンケヲホチミ（小川）ヲハイシナイ（東岸）ヲキチシ（小川）モトカンピ（源アネと云沼あり、上にヲキケナシと云山有）是よりニイカフ川筋ウンヌエフ江山道有と、此所人家の建始の地と云。（ニイカフ土人六軒）畑多し。イッカナイ（小川）フウケマ（小川）向にトシネナイ（小川）ウンコトコンナイ（東川）ヲキケナシ（サル土人二軒）。是より大木立、下には犢舌草（ヘコノシタ）一面に生たり。聞馴ぬ小鳥多く囀りたり。イワトロマイ（小川）ヲユンナイ（小川）西岸小流多く高山に成、其間（西に）ハンケチヤラセ（瀧）ヘンケチヤラセ二瀧並び落也。扨九折を上りシリホクシナイ（右川）チカフンナイ（左川）ホロカアンナイ（左瀧）ヲサッナイ（同）山頂に上るや一面の平地、後を顧ば龍蛇の蜿蟬せる如き川筋より海上一面に見發し、沖行船も鳥影の様に見へ、麓の里も手に取る斗なりければ、

　のぼり來てかへり見すれば山本の里はよばへばこたふばかりぞ

下りてムイネヒ（右川）形ち箕の如きより号しと、此に到り又餘ほどの廣地有、是を二股（ヘチエカリ）（右ヒウ、左本川）と云。教導（ニイカフ土人四軒、川口より七里）イヘヒカン家にて宿、夜莨餅を鹿油にて揚出し、また菌を取り來りて饗ぬ。明日は節句といへども何もそれらの事もなければ、

　なり出しまゝの國なり七夕のまだ空ごとの無もかしこし

七日未明我等が爰に泊りしを知てモトカンヒの者一頭の鹿を持來り與る。出立してチシペ（右）ヘンケチ

シベ過て、チシヤマイ（小山）廻りて、エネンゲ（右川）槐木の義、シケレベ（右川）五味子の義、上二股（石ヒリ、カコツと云。源アイマヘツと背向）左本川、滿山白樺斗なり。ヌモトロ（小川）ハンケフ（小川）ヘンケフ（小川）パンケヘサ（左小川）ペンケヘサ（同）キサリペヲマ（左川）過てナヌニ（サル土人三軒）四面高山其間に家居し、頗る僻地なる故婦人は始て和人を見たる由にて驚し由なり。從是川中まゝ上る。ヲリツカンナイ（右川）ウリルカワ（左川）イタラツケ（中川）字多く、源はヌツケヘツのニシユイと向背す。上りて二股、右のナヌトロ、從是兩岸峨々足を立る處なく、上に硫黄山等有と、其處大瀧有てシクマ岳と云より落る。其夜ナニヌ村へ歸る。粟團子に鹿肉を入レ鹿油にて揚出ス。夜更て召連し犬度々吠

て事有に、宿の犬は其度毎少しも吠ずして外に飛出しけるが、是は羆か熊か粟畑へ來る哉考に出しなりと。吠る時は其獸逃る故に默して行たりと、如何にもよく馴しもの也。

八日出立、ヒウ迄下り此川を上る。ヘンゲチシホナイ（右川）チシヤマナイ（小川）越て山に上る。メロヒウ（山上）此山ハトイ岳に繼きアイマヘツに向背す、其絕頂をしらず。可斗の平山厚別ニイカフの分水嶺となり、樹木なく芒胡枝花薔薇のみ生。西はサル山東室內北ビボク南大洋を眺み聊目に障る物なし。遙向に三丁斗の間一面赤くみゆる故に彼は何と問ふ間に、土人弓箭を握り走り追行、其音に今一面赤く草の枯たるかと見し處八方に散亂するが鹿の群集りしなり。其數萬を以て算べしと思はる。土人の言に熊は好て陰森たる木立に住み、鹿は好て明き處に住と、是熊を恐れてなる哉。（此次二枚目の裏につゞく）

○ニイカツフ領

宋均立德猛虎渡レ河卓茂行化蝗不レ入レ境と虎蝗すら德化感ずる如レ此、況於二六合蒼生一乎。其地の防人ども心せずんば有べからず。彼ナニヌ村の如く山中に住し生涯世上を知らで過すも、出れば苛酷の役に逢ひ極老病者のたづきもし難き故かと思わる。扨厚別より崩下（八丁廿間）ヌツト（八丁）ホンヲシユツコムシペ（崩下）茅多き義（四丁廿間）ヲシユツコムシペ（小川、三丁五十間）ホンカキノシユマ（小川）昔しは此所を境とせし由、（ハフラ申曰）并て（二丁五十間）カキノシユマ（同）名義、岩が垣のごとく有と云事。（十丁）ホロシユセツプ（小川）名義、澤が廣きと云義。（十七丁四十間）ホンシユセツフ（小川）并て（五町廿間）

ニイカツプ

十丁所寫真景

ホロノツカ（小川）大なる野が有義なり。（五丁）ホンノツカ（九丁十間）ヲコマサリ（小川）鎗の柄にもなる芦が有より号と。此邊にて少々灣に成たり。（四丁廿間、従サル會所五里十三丁五十間、従箱館八十里廿四町）

ニイカツプ（會所、通行屋、勤番所、漁や、辨天社、備米藏、藏々、馬や、雇土人小や、大工小や）船々遠淺にて澗無故に産物積取時も沖掛り、時化荒候時は逃船とす。（西戌入津、寅卯出船）往昔は松前家臣工藤平右衞門給所なり。ビボクと云しを文化六年呼聲の不宜に依てニイカツプと改む。名義ニイカツプは楡樹皮の義なり。此川木皮多き故号也。ビボクも此會所元の地名にあらず、此川の名なり。土人皆川筋に住す。（文政改七十一軒　人別三百九人、安政改九十一軒、人別三百八十一人）産物鮭昆布煎海鼠鰯椎茸干鱈鯨売其餘雑魚多し。會所山の根に立未申向、快晴の時惠山并に南部の山々も見ゆ。汐干時は海岸に出てヲノヒタナイ（會所の後）岬を廻り馬にて渡るによし。滿汐また風波の日には會所元より（文化六巳年新道）九折を廻り（二丁）此峠を判官館と云、四方よく眺望す。其風景云んかたなし。直に下る。（二丁）渡し守海岸通り貳丁卄間有と。

ニイカツプ（巾四丁五間）本名ビボク、西高岸、東は平野なり。魚類チライ鮭の二種有。ヤムワツカ迄あり。鱒鯇はニセイケ迄、桃花魚鱧杜父魚チ、ラカイ泥蝦梢魚有。

八日晝比ビウより山越下り（山越凡六り餘）ビボク川端に出、東岸に渉りヤムワツカ（人家畑有）に出、イカシム家にて船をかり上る。急流捗取難し。少し上りヌツケヲツナイ（左川）トイトイブ（右岸）爰に

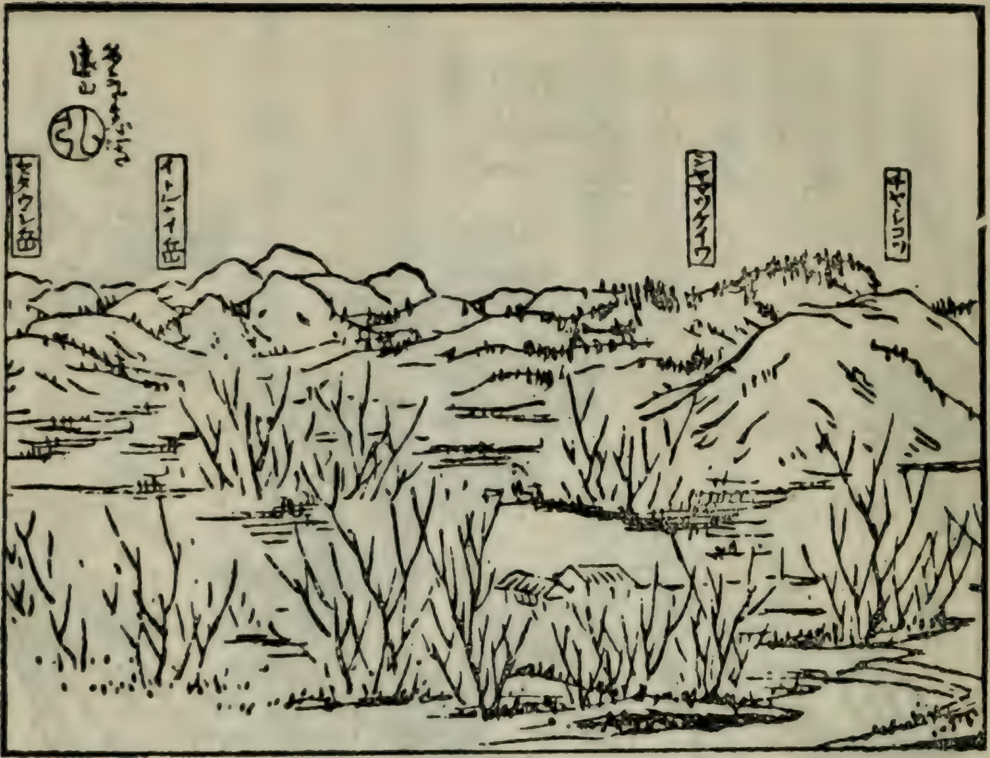
て土地一變し、兩山峨々と聳立、川も亦奇石怪石持立す。ホキヤツ（左川）ヲサナイ（左川）此邊蝦夷松五葉殺多し。水勢慾急なる故繩もて曳、また彼方へ渉り、此方へ越なして上る。纔に貳里斗にて暮に及が故宿。土用明て三四日なるに夜甚だ寒く、壹人ヅヽ火を焼て明しぬ。

九日此所に鍋鉉を置上る。川中も十貳三間になる。ヲニセツヘ（左川）アフコサンペ（同）サツテキ（右瀧）土人も是迄は舟にて來りし事有ども此上には行難しと。只堅雪の時來るのみと。從ㇾ是歩行にて岩角傳ひ飛越冽越行てハユンナイ（右瀧）ホロハツタラ（大瀧）南岸の岩角恰も鬼面の如く、過てシユフトシユマ（大瀧）流木一面川に滿たり。フツタフ（左川）兩岸壁立其間大淵と成、歩窮る故奥の大概を聞記に、兩山慾聳て堅雪の時ならで行難し。其時五人位一隊とし上り獺熊を取と、恰も水晶洞に入が如し。然し春雪融に動作は氷柱折落る事有、昨年是に打れ怪我せし者有と聞に、若し氷柱ならで此岩壁崩落なば我等が身何かたまるべきと思ふや如何にも歸の急れける也。其上ユクハシユシ（右川）トエイ（同）ヲソウシ（同）ヲケルンペ（左川）此所に土蘇木（ヲンコ）多しと、從是滿山樺斗なり。シユイカウシ（右川）アイマヘツ（左川）ニセイケ（崖）恰も如二石門一と、過て二股エカイチシユンナイ（右）シヤシ（左）シイウシ、カレペ（左）源はサル領糠平に向背し大瀧有と、上に悪（ウエシ）ヒホク（左）源ホロシリ岳と云、峨々たる高山實に神仙の域境なりと、堅雪の時上るに七日にて到ㇾ此と、皆岩洞に止宿し獲物を雪車にて下すと、惣て名サケノンクル、イカシサンロ、イソラムク串ロ）夜ヲサナイへ下り宿し、翌（十日）纜を解に其疾如ㇾ矢、一小時にヤムワ

ツカ村へ着（従是下る）トマッチヤイへツ（左川）ワツカクシ（右）シユネナイ（同小川、人家有）畑有稗黍粟蕎麦よく出來たり。セフ（左川）ヲクマウシ（同）クツタルシ（右人家有）此邊川巾大く成れども急なり。川石白色又赤筋青筋の物有、又石英を含有頗奇麗也。ヲシヤマウニ（右川人家有）小使イタキロ、家にて宿す。妻我に菱を煮て勸めたれば一首を誌るし置、

　びほく山岩根踏分こし我に鬼菱めせと言もことわり

十一日平明解舟下る。トマチヤイへ（上に沼有）ヒラチミ（右川）ホラシユシ（同）カツクミ（右川人家）ウンシヤキナウシ（右川）薩艸有義也。フルケン（左川）坂端の義、濫茶利にて金坑盛の時爰に道有しと、其形今に殘る。ヲチウシ（右川



人家）アクマフ（人家有）トヨサラ（左り谷地）ヲムナイ（左川）フーモセウシナイ（同）クッチヤンナイ（右川）ホンルペシペ（右）此所より厚別へ道有故号く。ホロルペシペ（同）同じく道有、ヘンケウンヌエウ（左川）ウンヌエウ（同）マウニシヨロ（左川人家）シ、ヤモヤウシ（漁場）和人漁場の義、此邊澤目廣く畑を開けは頗る宜し。ヲフヤヌトロ（左）ホロチユホロ（同）ケナシヨマナイ（同）ウルキ（右）サトッチヤ（人家）アネイサラ（左川人家十八軒）上る細長き沼有て蘆生たり。乙名サンケヌンクル（六十八才）家にて晝飯す。此者間宮氏當御調の時教導せしとて種々話しを聞て七ッ過迄筆記し分る。ソリハライ（右川人家十九軒）トフシナイクルン平（左）ハクツ（同）其餘小川多く有、書盡し難し。タカイサラ

〈右平谷地人家十五軒〉頗る東南向にして畑地に宜し。下りてホントシカ（左川）此處渡し場（小川）也。此川外とは違ひ急流にして爰よりヤムワッカ迄船を遣るに、三日上りて一日に早しと。昔しは爰をパンケ（下る）サラ（芦）と云、サラ川をヘンケ（上）サラ（芦）と云しと、往古は七八寸圍の蘆有し、時に土中より堀得る事有なり。其蘆を以て地名となせしも宜なることなり。實に希代の產なり。

渡し場より濱岡兩道有、至て宜し。（五丁廿間）ムリエト（鮭鱒漁場）過て（五丁十間）モエノシケ（魚場）名義、灣の中程と云儀、同じく素濱岡の方には平山南受暖氣にて中〳〵夷地の心地はせざるなり。また道も能く開らけ有しかば戯に口吟たり、

　かく道のあるものならばえみしらの國には有とも住まほしけれ

（四丁四十間）ヲラリ（小川漁場）本名ウラエ ペッ也。柵を架魚を取義。（十四丁）シンヌツ（小川）シノマンヌブカの略哉。是シビチヤリとピボクの間の山の尾崎に成たる所故に号しと。今は爰を以て境とす。

（從サル境三里一丁廿間、從ニイカップ會所卅一町卅間）

○シツナイ領

天地の氣候は人によりて變事疑べからず、我陸奥の金堀共の話に、深山幽谷の未嘗て人の到らざる所は寒氣尤甚敷堪難き心地す。又其邊り野菜等植れども初生し立事難く、漸々人多く入込年を越て住居しぬれば、年

年寒氣も薄く成、畑もかつぐ物實取程に成也。（陸奥風土記、保田光則著）といかにも此思はる。東地は文化度一端御手入に成りし跡故兎角山癪陰々の氣薄く何となく蝦夷地の心もせず、何時も此邊りにてはかく思ひ出ること也。同じ道を過行ヲタベツ（小川、番や）沙川の義、此所鰯秋味昆布の漁場也。（廿三丁廿間）過てシビチヤリプト（渡守貳軒、小休所有）松前家臣蠣崎太田兩家の給所なり。西岸平地東岸赤崩平、本名シペイチヤンとて鮭が卵置處の義、往昔ホマリモイと云しが連年不漁にて土人難澁し、神に祈りしかば、此名を附よし靈夢を蒙りしに其後打續大漁なりと云傳ふ。

余此川筋へ上りしは紋別川筋よりルヘシへを越へンケヘラリへ下り、其より水源行を記すに、八月十二日此處より西岸に越んと流を見に、川筋數條

に成故さして深き所も無れども先試に教導壹人飛込や、水臍に及びいかにも急流なり、依て荷物を河原に置、小流三筋を越て枝川（マクンヘツ）村に到る。（西岸人家十軒）小使タカラソを頼み、丸木船にて是を取寄てノヤシヤリ（人家二軒）イチブエイ（西川人家五軒）等云を過、チヌエ平（西、人家五軒）に到り宿す。此邊澤目廣く、東南受、地味至てよし、畑は雜穀野菜別ても甌肥芋多く作れり。名義は昔し義經卿の書物に矢いりし故事有と。

十三日、從是當村土人（コタン、カタ）を頼み刳船にて上る。いかにも急流、チユツホウシ（東川）ルウヨ平（赤岩平）此處に砥石有と、西にチヌユ岳（丸山）東にシヤマツケ岳と兩山相對し、其間成故水流恰も如ㇾ瀧處を上る哉、（東メナシヘツ、西シユンヘツ）ヘテウコヒ（二股）此處左右向方共に斷

岩壁立其趣倪雲林が折帯の山の如し。先西方に上る哉、兩山肩并べ雑樹陰森巽岬崖に映亂、いかにも仙境に入ル心地し（三四丁）ヲフシケイ（左川）ニシユイ（同）此澤に種々木化石あり、余も拾はんと欲れども、山神甚だ惜み給ふとて教導の諫る故止む。マカユウシ（左川）サラハヲマ（同）セトシナイ（同）ヲクルンナイ（同）従二股纔壹里と思に、早夕陽に及ぶ。山愈嶮水倍疾く、岩立石轉し爰にて行既に窮る。土人の曰、従是奥は我等も知らずと、只堅雪の時山通り獵に入斗也。往昔（文化六年）間宮様も爰にて船を岸間に狭み堅て荷物も刀も流し漸々命を助ク、土人大勢を頼み探されしが終に大小は無かりし也。其時に教導に出しイタクチン（トウフツ村）と云て今に殘れりと、其後はます〱従是奥へ行ことを恐れける由申に依て船を上す能わず。其大略を記し置て、兩岸川に瀧多く上りて大瀧有、是迄は鮭鱒も有、其上は鯇斗也。上にソウホコマ（左川）ハシケビ、（右川）ヘンケビ、（右川）等の支流有。又岩家ナイ（左川）とて大岩屈有。過てムイネイ（左川）ヲニカルシ（同）兩岸大絶壁雪中獵に至る時は、鍵を作り是を木根また岩角に懸置、是にて上ると、キヘナイ（左川）此處寛文年間錫者允没落後金丁喜兵衛此處へ逃来り、土人と共に艸根を掘喰ひ、或時毒箭の烏頭を掘を見、是を喰草と訛思ふて喰し、此處に死せしより号しと。過てイツケナイ（左川）ネトナイ（右川）アフカシヤンヘ（右川）此上にアフカシヤンペ岳と云有、頂椴松五葉樺斗也。往古の金坑跡多し。従是は左右瀑布多く其源一大高山、西はウエンビボク岳と云。堅雪の時此處より五日路なりと。扨従レ是船を戻し遺恨なれども夜二股にて宿ス。

芳齋

ねぐら出る鷲の羽音におどろきて今朝も見はてぬ夢さめに鳧

十四日金鳥山頂に映に川筋未だ小暗し、擧ㇾ頭ば樹々霜を頂り。枯木を集め火を燃し朝寒を凌ぎ東川(ノナシヘツ)に入る。同じく急流左右共に斷巖奇石重疊たる間に虎耳艸雪もゆら岩蓮花、別ても奇と爲は地楡(コレモコク)の花の二尺も有があり、又山翠翡翠は岩間〳〵より篙音に驚きて出ること數しらず。鶚は大樹の上に巣をなし、鷹は岩に窠し鵰鷲多く淺瀨に魚を覘ひ、實に人境と思われず。下にニセイケ（兩岸）此處左右五十餘丈の岩如ㇾ筆立、此處にて木幣を作て山靈を祭り行、タモクシナイ（左川）サルトシナイ（同）此處右方大岩壁、過てチヤラルセナイ（右瀧）此瀧白糸とも字たき處也。從是六十間斗湍瀨、一同裸に成船を盪し上る。シユトカプ（右）ヘンケシユトカフ（同）此處惣て左崖になり川筋瀧の如し。又押上てホヨ（右方）名義狼のことなり。此川筋狼多き故号しと、源は横岳(シヤマツケノホリ)より來る。此岳三石川の上なる山なり。ニナルトマ（右）赤岩(フレウシユマ)（左）モシヨシ（右）ヘンケモシヨシ（右）名義蛆の事なり。此邊惣岩太く尖り中〳〵上り難き故、爰にて舟を繋ぎ置、岩上飛越刎越し上る。長澤(ケンネナイ)（左）ウエンシリウトルクシナイ（左）惡山間有し澤の義也。此處大淵に成也。ニナラハクシ（左）此處寛文度金丁多く入しと云坑跡有。ウフトイ（右崖）リイセナイ（右）爰にていかにも兩崖絕壁歩窮りし故、岩屈の有に宿ス。夜寒く寐られず。

　山川をみくらとなしてます神は御心きよし高くぞ有けむ

川上の大略を聞記すに、小川多く別ても珍しきはシユマカツケ（左川）と云には、青石の磐有、凍て年々

芳齋

薄く片(ヘゲ)ると、此石にて魚肉を燒食するに宜しと、ヲニチフシケ（左）ペンケチプシケ（同）爰には櫛齒の如き數本立並びたる石有と、シユツトク（右）トウウシナイ（左）爰には一ツの沼有、其深さ測知る者なく神靈有とて尊敬すと。過てホロウシナイ（左）爰に太古神が金を堀玉ひしと云洞有。其洞中石鐘乳、また綠青石英多し。下川(ハンヘツ)（左）上川(ペンヘツ)何れも瀧に成落る。本川源にはセタウシ岳シヒチヤリ岳此間にサツテクペツ（右）シノマンヘツ（左）後は十勝のトツタペツの源と向背す。今此山中を委敷する者は極老イタクチシのみなりと。堅雪比五人位一隊と成熊捕に入るといへども、いかにも山峻シ、間々怪我人有る故、當時上りしと云者少し。夜チヌエ平村に歸り宿ス。

十五日野道を下る、茱萸赤楊(ケネ)紫葡萄(ハツ)獮猴桃一面にからみたる處分け〳〵て行。ウトマテキ（向東）メナヲロ（人家、川有）又東にペンケサラ（川）ハンケサラ（同）ヘンケコクウ（同）ハンケコクウ（同）ヘンケトヨニマ（同）トヨマ（同）等の六川一里餘の蘆荻原にして四時共に鴈多しと。是より淺瀨を見立東岸に越ゆるに水勢早く石滑にして辷り、荷物を濡せし故、ルペシナイ（川南、人家十一軒）なるヌサケシユ家に至り是を乾すに、妻我が宿しを悅び未だ熟せざる栗なりしが摘來り、今夜は和人の月見なりとて團子を拵え饗し呉。又召連し者弓携出し哉、自分は何も取らざりしが狐が取獲たる水鴨壹羽を拾ひ來り、其夜は斗らずも面白き月夕をなしたりけり。

うつりゆく日數もしらぬ山里に思ひの外の月を見るかな

蝦夷の海や今宵の月に胡沙ふくといふ空ごともはれ初にけり

十六日雇ゝ船西岸へ戻る。ヌブカ（人家）ケナシサン（小川）此邊平野雜木立也。畑多し。イサンネクル（東沼）ニイシユイ（西川）イヨフル（同、人家十二軒）過てトウフッ（同、小川人家十四軒）此邊人家多き故道形有、中〳〵夷地の心地せざるなり。爰にイタクチネ（九十壹才）とて間宮氏が連し爺有しが、余が至るを待て兎を取らせ饗ぬ。余も手拭と煙草等遣し別る。東にてヘンケウコッ（小川）ウコッナイ（同）チカフンナイ（同）西にはメナフト（小川、人家）此川鮭多し。チッヘシナイ（小川）東にヒラハクシ（小川）ルシホロ（同）西にユクライケ（小川）ヒハウシ（小川、人家）東にウエンナイ（小川）サッ（小川、人家）ルウトラシ（小川）上にチヤシコッ（城跡）此處錫者允の居城なりしと。西にカラヌトップ（小川）此邊穴居跡多し。シンフッ（小川）落地是本道チラルイカの川上なり。是よりしばしにて渡場へ出る。

（從チヌエ平、九五里半）

錫者允合戰記采要　金丁文四郎はメナブトに住し、山丁數百人をして稼し錫者允首長此處に城壘取立、尻利角と云魚の鰭にて柵を結ける。此骨は火にも燒ず、千年を經るとも朽ること無物也と。其構嚴にして其地の運上を取、威東地に輝しける。其比羽州仙北郡の庄太夫とて、秋田城之助臣家なりしが、滅亡の時浪々してより何時か其家を起さんと案じ煩ひ、此首長の家に來て終に其娘リカセに通じ壹人の男子を生て龍王頭と号、自ら智謀の有に任せて種々の惡行をなし、寬文九酉年松前家交易船の東部に下るを要ひ、船頭水

夫の孫首を取て人數四百餘人を殺し、荷物を奪ひ其勢に乘じ松前に攻上らんと出立し、君縫迄到るや、追捕使蠣崎佐右衞門、佐藤權左衞門、松前儀左衞門、新井田瀨兵衞等に出合一戰に打負て引取籠城しけるや、同十月通辭勘左衞門の謀計の爲に和降を進められ、債の品千品を出べしと其品八百品出せし時、酒宴を始て其饗應に醉臥しける處、廿三日の宵闇に乘じ、松前八右衞門千三百人の手勢を引卒し、牛を城の方に向け、牛を通辭の旅宿せる文四郎の方に向け、十重廿重に圍み給ふ時、通辭首長と取組や、次男ヲツテカイは其座に刺殺され、三男シラケシは烟出しより迯出し、首長終に爰に刺殺され、三千人の者皆散亂、庄太夫捕われ、此川端に首を懸られしと、(下略)

蘆間はふ蟹さへも身のほど〳〵をしりけん物とかねてしらずや

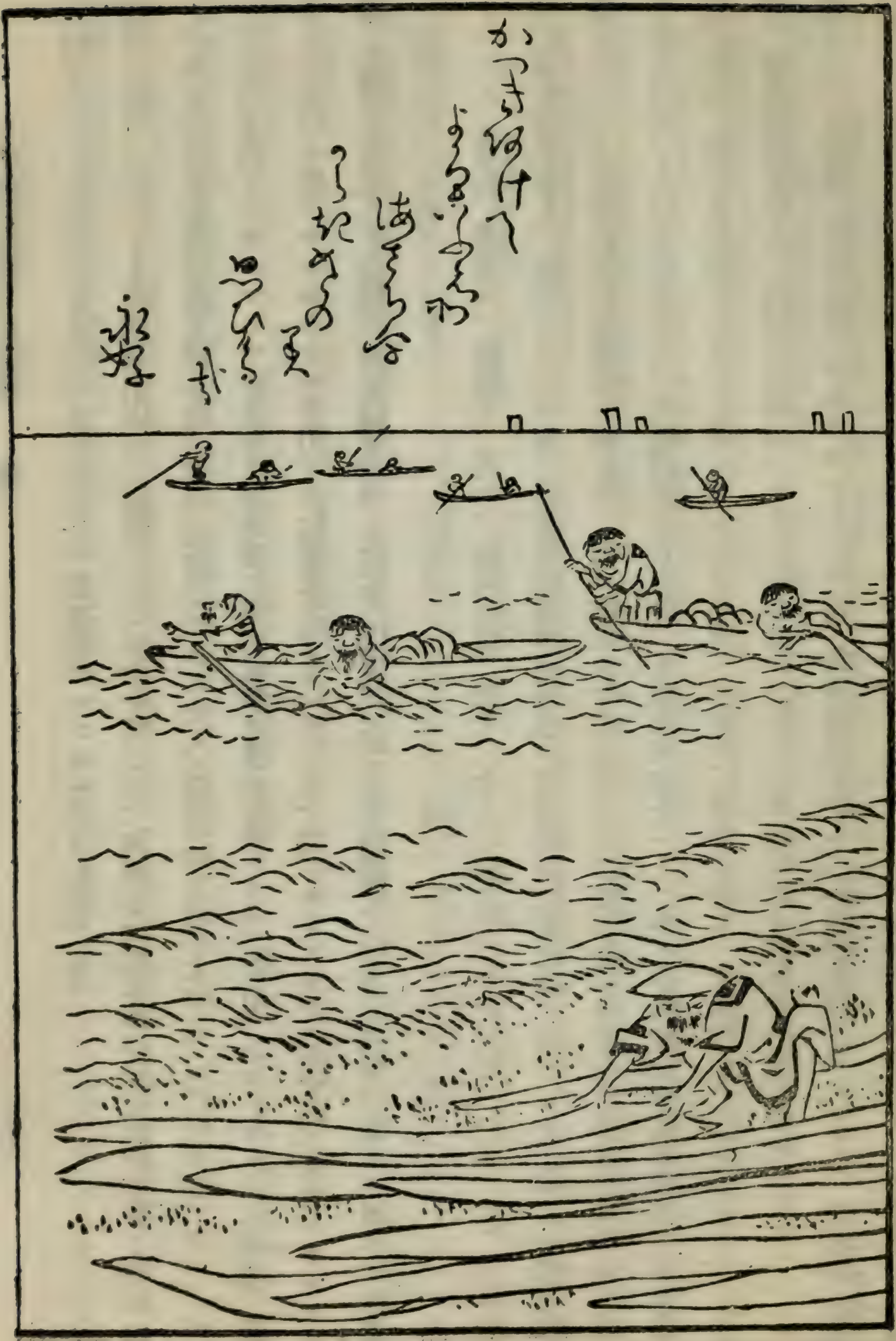
渡を越、山の下を行。(十一丁卅一間)ホエナシ(小岬)時化の時は此上道を通るなり。(二町)ホロマウタ(小川)マウタ(小澤、人家跡有)名義、玫瑰多きが故なりと。(八町十間)ルモコマフ(小澤)過てウセナイ(小澤平地にて、馬や、晝休所、番や、板藏)シツナイ繼立を此所にてす。名義顯る義。此處岬なる故に号なり。(十四丁十間)ヲシヨモツヘ(小川)名義ヲシユンウシペとて油多き處なり。往古神が鯨を捕て置給ひしとの故事有、此邊一面平磯にて蝴昆布多し。(二町五十八間)ウラ(小川、二丁卅間)ヲサルンナイ(小川)蘆荻原の義。(一町廿間)エレ、ブシ(小川)糸にとる草多きが故とも云。(九丁廿間)シユマヲペ(小川)岩多き義。從是は沙地なり。(八丁卅間)

モンベツ（川巾八間、船渡し、夷家貳軒）名義、靜成義。是遲流にして深き故号く。又寛文亂の時も此川より東は騷動も無りしが故に穩の義を取て号しとも云へり。

八月十二日（戊午）會所にて教導（小使メナフト村トンカシユ、トハサン、ルヘシヘ村、ヌサケシユ、イクナヌシ）を賴。此西岸より入、一面の蘆原流屈曲したり。しばし過アンサミ（東川、人家）シトカプ（西川）チカフンナイ（西小川、人家有）セホツナイ（東川、人家有）カハチリ、セトシナイ（東川）トウフウシ（東川、人家）ホロナイ（東川、人家）ヘンケホロナイ（東川）タクタクヘウシ（東川）ユウルシ（西川、人家）此邊になるや、澤目廣一里斗もあり、土地至て暖氣實に如此肥肽の地を不毛になし置はと歎じぬ。フユニ（西岸、人家）サヌシベ（東川、人家）此邊り畑多し。蘆原には鴇鷀（ヨシギリ）囂敷鳴、また我等が行に驚て鷭（バン）が飛も有。實に一興を添たり。未だ早けれどもヌサケシの妾の家にて宿す。

　庭もせの秋萩さけり宿かりていざねてゆかん鹿ぞ來なかん

賴置東川に至んと（七八町）二股より東に入、同じ蘆原也。過てヌフウトル、從是追々山になる。小川字多く、其源は横岳（シャマツケノホリ）に到ると、其梺まで到り、夕方歸り宿す。シンフイヲロクシナイ（右川）フトルキナイ（左川）トフヒツ（同）サメ此所迄蘆原なり。是より木立を上りニタツナイ（左川）キナチヤウシ（右川）ユクタテレケ（同）過て山になる。水源は未だ遠く字も多し。皆横岳より落る。扨木立山を上るや、凡一里餘晝比に山の峯に到るに粟畑多し。是皆シヒチヤリ川筋より作るよし半は鹿に荒さるれども半は收



納すると、此所凢一里も行下りて（廿丁）澁茶利のヘンケヘラリに出たり。

川東に去年（巳）より會所を引由にて地形なせしが土を堀しや、陶器また黒水晶の鏃石雷斧を多く堀出たりと。余も七八枚を貰ひ歸り藏しぬ。從是（七町）チノミ土人山海の神を祭る木幣有。（二町廿間）ヲタクヘウシ（小川）本名ヲロタクツヘウシなり。從是濱に轉太石多く成が故号く。（二町半）シユシユウシ（小川）柳多義（三町四十間）ヲシヨウシ（小川）上に瀧有故也と。（三丁五十間）ホンヲコツ（五十間）ヲコツチナイ小澤）此邊よります〳〵海岸には大轉太石、上は平山の崖に成て少し淵形を作る。（三町、從ニイカツフ四里十一町卅五間、箱館八十五里）

シツナイ（會所、勤番所、板藏五、馬や、蝦夷屋藏、備米、土人七軒）辨天社金毘羅、いなり社）下に小流有、是を以て号し。本名フツナイ也。名義曾祖母澤の義也。往昔此所に老母神が在せしと、其より此場所は廣まりしと。此澤に昔は人家多く有しや、種々陶器欠ケ出る也。今に七目綳め等面白き物有。土人（文政壬午改百四軒、人別五百廿三人。安政卯改百廿七軒、人別六百四十一人）多く產物鯡鮭鱒昆布鮫鱈海草類椎茸鹿皮雜魚、船は會所前五六百石を繫く。（未申入津、卯辰出）海岸岩多く、未向竣なり。上に畑多し。土人好て雜魚野菜を作る。快晴の時惠山エトモを見るといへり。往昔松前家々臣新井田瀨兵衛給所なり。

從是山の下沙濱（六町十間）チヤラセナイ（小澤）此邊昆布取多し。（三町廿間）ラシユツペ（小川）岩礒如垣有る故号く。（一町）ホンラシユツペ（十一町五十間）ヲワトシユマ（小岬）ハルタウシ（小澤）此所喰

草多きに依て号く。此處の草はセタトマとて漢名綿棗兒の事也。（八町廿間）フッシ（渡船、渡守小屋あり）西岸に境柱を立、渡船隔年に勤め、川筋又南北の土人の接也。魚類桃花魚鯇雑喉のみ。名義、南風の時に口塞げとも直に破るとの義也。

小舟にて上る（五六町）ヲトエウシ（三石、人家）過てトイヘツ（左川）二股、是より東メナシヘツ（小川）またモフシ（此上ホンモフシ其外小川多し。三石川へ道有）と云。西をシユンブシ（西方）と云、此處迄上る。ホロナイ（シツナイ人家あり）イラミチヤリ（左川）其外字多し。源横岳に到る。惣て椴木立、澤に蘆荻にて土地畑によろし。然れども水不宜也。（從ニイカツ境四り十一町、從會所三十町五十間）

○三石領

みるめかる浪のぬれきぬほしもあへず（陸奥紀行、紀正敦著）童男、童女等楡皮衣の儘にて打寄る昆布を拾ひ、道狭しとまで乾ける、其賑ひ何故かく豐稔の地をして、今に異國やうに衽を左にし有かと獨言しつゝ、同じ砂濱行と、（二町廿間）ヘシトカリ（小澤十町半）ヲマツナイ（漁や有、三町十間）フツチヤクナイ（五町二十間）ニノコシ（小川、四町十間）ホンテコシ從是砂濱（四町十間）カシユシラリ（五町十間）ヲバフ（一町從シツナイ會所一里三十町四十間、從箱館八十六里三十壹町）

三石（會所、通行や、勤番所、板藏十余棟、馬や、備米藏、漁や、辨天社）土地少し岬に成。上は平山、下沙濱、午未向大船五六町沖懸り、小舟岸に繫く。（未申入、巳寅出）本名ミトシとて樺桶の事也。從是十町東

の川の名を以て惣名とす。此處地名はシュフトにて此澤の口に蘆荻有を以て号し也と。又和人今三石の字を冠らしめ、此沖に三ッの大暗礁有故とも云り。或時此所にて、

むやひ舟よる方見えず吹こめし胡沙よりもるゝ海士の呼聲

土人（文政改五十六軒二百廿二人、安政改四十九軒二百廿人）多く、土產昆布鮭鰯鮲鱈鹿皮海鼠雜魚類也。往古杉浦多內給所なり。從是平地南向（六丁五十間）ショップ（小澤）上は平山崖樹木なく、海に向たる方三日月形の土手三ッ有。其外に堀跡有。內には穴居跡十八九並ぶ。古老の話しに城跡なりと、雷斧環槌簇石陶器の欠多し。其邊一面に畑跡也。會所元より此邊矢根の作り屑と見へて紋別石の欠多し。此邊に紋別石は無處なるに此欠多く有は、簇を作る爲に彼地より皆持

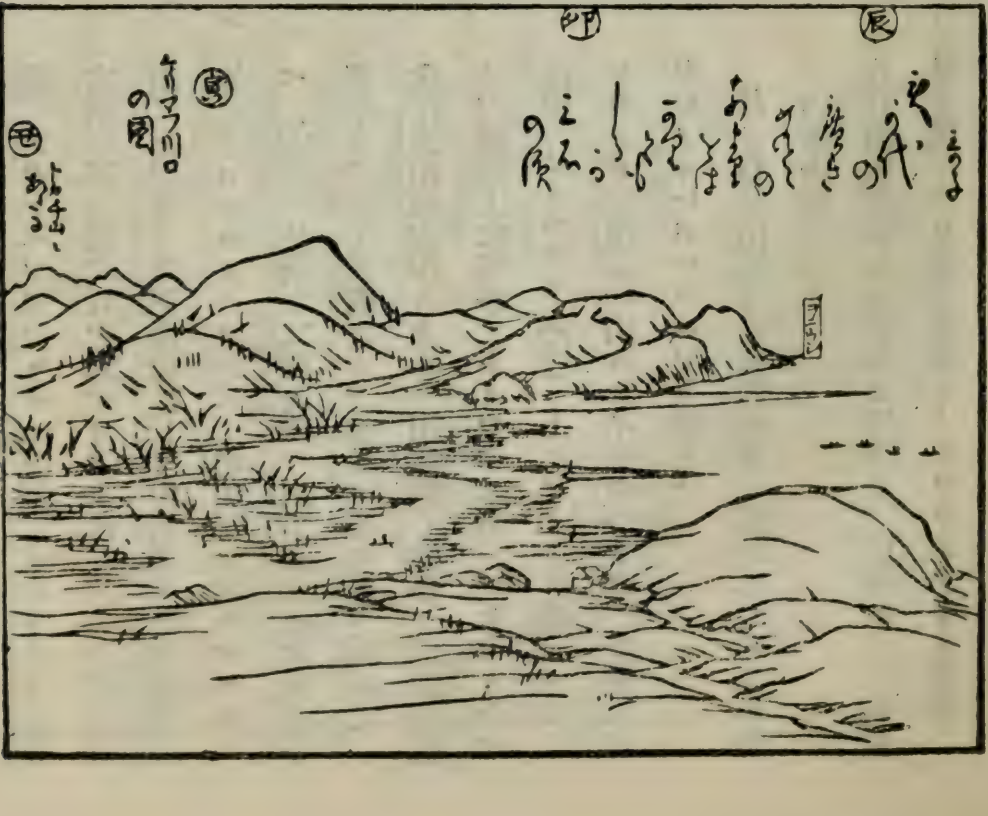
越たるものかと思はる。(四町) 土地に黄精偏精多し。ミトシ(渡船) 水底小石、濁水の時は馬にて渡る。鮭鱒チライ桃花魚鯇多しと。

七日(戊午八月) 土人三名(小使ソハカル、チヒイタル、トウロク)を連出立。西岸ヒイシユンビハウ(人家) モウシユンバラコツ(小川) ホロバラコツ(小川) バラコツ(小川) 上にバラコツ岳と云有。東に越てトウブシナイ(沼有) キナチヤウシ(小川) ウコソンコウン(人家十四軒) 過てイマニ(大立岩高サ十丈余) 往古此濱に鯨がよりしを神達切取、蓬の串に刺て焼き、其串を爰に立置しが化て石に成、追々大く成し哉、此下を不浄の女が通し時、其岩中より折て先の方川の西に飛行しと、今二丈斗の岩有。扨此岩の上に櫻椴樺五葉松楓其餘異草も有。土人の說に三石山にある草木何一種無はなしと。土人至て

尊敬して木幣(エナヲ)を立祭る。名義イマニは串のこと也。(二四町)イマニトカクシナイ(小川)キムンビバウ(西川)此澤一里四方もあり、四面山にて陵地、開墾せば頗る宜し。ヌフシユツ(西川)シヽヤモナイ(東川、人家)ルペシペ(ケリマフ道、人家十二軒)キムンコダン(東川、人家)是迄の所畑あり。ホロケナシ(西川)チヤシコツ(城跡)陶器欠鏃石多し。穴居跡有。従是左右山になる故川中を上る。シカルベナイ(右川)ユウルシ(左川)此所横岳(シヤマツケイワ)の尾也。過てコトロチクシ(左瀧)樹木には獼猴桃紫葡萄からみて早紅葉を催せしが瀬々に照移り風景いわん方なければ木皮を剝て一首を誌し置り。

　薄紅葉それだにあるを落瀧津一入秋の色ぞ添ける

石は白く水至て清冷なり。ウツマフ(右瀧)此邊兩岸共奇石怪岩のみヲフカルシ(右川)ヲフイチセ(左



瀧）テクンヘツタラ・イ（右瀧）イシヨウマ（同）右岩如掌立實に目を驚せり。上にトンカル岳（丸山）と云有。此下流急にして大岩簇々たる處瀧の如し。コエカタハウンペ（右川）コエホクハウンペ（左川）此所を二股と云。三方高山雜木陰森下草小さく至て奇麗なり。爰にて宿らんと用意し、余は東川（メナシヘツ）の方少々上る。川筋狹く淵多く成故行難く、從是上に字多くトミウセ（右川）ヒラリシケ（同）ヒリカヤリ（同）上にアイタサ岳（并て）シタメクシ岳（此山カモイ岳のつゞき）此間に有をシノマレメナシヘツと云と。

　月くらく山風さゆる秋の夜に胡沙ふくろふの聲
　　の聞ゆる

八日西川を見んと聾比まで上り、山愈峻、川筋淵多く成、上り難が故歸る。シヨウシナイ（右瀧）

ヘンケ二股、是より右をシケレベ左バンと云。兩川共に字多し。又二股（左コエホクハン、右コエカタハン）共に神岳に至る。堅雪の時濱より凡三日也と、夜二股に歸り宿す。

川より濱陸兩道あり。（十二町卅間、なやあり）ベセハケ（九町廿間）ホンヲラリ（三町）ヲラリ（小澤）陸は餘程の廣場なり。ヘシュトリ（十四町廿間）シリエト（小岬、馬や）昆布鰯場なり。此邊娑雖多し。（十三町五十間）ケリマフ（川西、夷家一軒、巾廿間船あり）名義、ケリヲマフにて魚皮沓(ケリ)有る義、往古此處に城有、合戰に負て籠城し、糧盡ケリ迄も喰たると云より号しと云。又ケロマフと云、ケロは松前方言ムイと云貝なり。マフは在也。漢名斎脊面(ワイカセ)云貝ある故とも云り。

南向川東平山西平野なれ共、吹上たる沙土手の如

く成故、川筋風當らず、至極田畑宜し。八月五日西岸を上る。苫荻原多し。澤目赤楊蒲柳一面に生、流屈曲遲流なり。（十八九町）ワッカンペッ（東川、西岸人家）タッコフ（西山）シュモロフト 西川、人家）三石川筋へ道有。此邊廿餘町の平地過て、タフカンニ（西岸）僻大木數圍の物有。其枝地に低て蟠屈し、恰も踊舞手振の如しと。神靈著よしにて土人尊敬す。又願事有哉、此前にて踊る時は和性甚しきと、チエフンナイ（右川）セヨイ（左川）ソウナイ（右川）シシヤモヤウシ（和人網引場）ルヘシペ（右川）小平（左川、人家）此處にて晝休したるに何か干藷の煮たる如き物を出て振舞たるが、聞に萍蓬草の根也と。此邊萍蓬の多き是にてしらる。兩岸懸壁り、サクバイ（左川）クマウシ（左山）エバテキ（右川）其餘小川多く、越てヌキペッ（右川）少々河原の有に泊る。夜蚊多くて寐られず。

燒捨しほだにたぐへて落葉をばよせてしばしの蚊遣とぞする

此川外とは違ひ石なく泥地にして、陸は里草多く、樹も赤楊柳桑類のみ也。

六日、從是二股上らん聞に、川筋屈曲たる故、山越するに至て近くサッナイ（左川）と云に出、過てニン
階子カラツヲ（右川）此所にて始て岩壁を見たり。其峻屛風如し。獵者蔦蘿を樹根に懸上る故此名有。爰にて川上の事を聞に、少にて二股（右ホンケリマフ、左ホロケリマフ）右川源神岳より左少し又上り、二股あり。右アッカンヒナイ、左シュンクシ、共に源神岳よりす。此邊崖大岩洞多く、是より流出る實に天下の奇觀なりと。山皆松樺五葉、堅雪の時濱より三日に至る。魚類三石川に同じ。

川（ケリマフ）東崖下通り岬を廻り、（十六町）ヲニウシ（小澤）名義深く杭を立る義也。風波強敷時通り難き故、文化六年詰合の者渡東より直に山の新道を切附爰に至る様になしたり。其比は纔の處にても風波の時の爲と心を用ひ玉ひしも。今半は埋もり、只形斗りに成しぞ歎ずべし。東方第一の嶮路礼文木（レフンキ）山中も文化度開置れしが近比沙原（サワラ）より諸蘭（モロラン）えの渡船聊の運上を納め、渡船に株人被仕付候後は、誰も山道を廻る者なく成しが故、最早往古の木立山と成て榛荊箬篠原と成しとぞ余は常に思えらし○溝を鑿て水を通ずる者は一人の力といへども功とす、山を崩して田を埋めむ者は萬夫の勞といえども功となすべからず。（地北偶談）その語いかにも如此有度事と思けるなり。（従シッナイ境三里七十五町）

文化

木の根ほり岩がねとほし踏分しふみかわる世の人ぞいそしき

東蝦夷日誌巻四終

松生磊落又瀟灑十年足跡遍天下五航絕
海入東島手把霧帕海山癖好事今無因真
時採得古琴壽駭鐵鑄西言色足驚人端溪
寅寶寶進呈斯館雅濤澂有高僧屆衆伬興寶
下吹知是先生遺愛物不載溫泉資歷鎖一兩
現出眾碢雕琢重不足鍮壽帶乙卯三三以爰
筆東哉遺此物賜僧治名蛙室泥摘繩風一
洗娛被今維七二人古微丘吳松生試披東風

滌塵復一齋不堪衆樹無聲寂鄭衛亂須雅
嗚咽鍾子不生伯牙死此後人耳猶洋溢
尾弱絃隱亦好能弄辟者少聽去還君此琹
三疊且高曲自古知賞寡

古琹篇贈楷生　黃郷高山榮

慶應丁卯後月　二峰寓大兔

茶溪鈴木先生著

多氣志樓主人註

唐太日記

全二冊

橋本玉蘭翁畫

文苑閣藏板

唐太日記例言

此日記は人に見すべき物にもあらず。唯余が五百里外の孤島を經歷して辛苦を嘗たる情狀を有のまゝにしるして兒孫にしめすのみなり。嗚呼一勺の水といへども、其得難きにのぞみては珠璣よりも貴とし。兒孫これらの書を讀て自戒しめ、又その兒孫にしめして家誡となす事あらば余が幸ならむ。

夷地文字なし。其地名の如きもみな記臆に出たる故か、彷彿影響の間にありて、聞人によりて同じからざる所あり。猶後の考據をまつのみ。

里程の如きも又定たる書記なし。夷人の記臆と經歷の遲速にてはかるのみなり。故に鋭進懈惰の時によりて遠近を思ひ違へたることもまゝあり。他日訂正すべし。

嘉永甲寅七月唐太島志良努之の西窓下において

鈴木重尙しるす。

此書は茶溪先生甲寅の夏魯夷の事によりて嗹哈嗹島に于役せられ、クシュンコタンといへる運上屋元よりシュシュヤ越と云六日の山程、開闢已來和人の未だ通行せし事なき山中を踏破して、東浦なるナイフツといへるへ出、夫より奥トツソの嶮を探り、マーヌイといへるにもどり、西浦へ越、夫よりシラヌシ

といへるソウヤへの渡海場へ歸られ、渡海の風を待給ふ間に、十余日の筆記中より其要を拔萃して置れしを、彼地へ此度の御所置によつて舟わたりする人も日にまし、年にまさるまゝ、其人々の便りにもなれかしと、余其後通りて見たる儘を以て注譯の樣に加へ、聊閱者の欠伸を慰め、また圖画を入れて梓にのせんとはからふものは伊勢の國なる

松浦竹四郎源弘

安政四丁巳の臘月中のころ箱館の僑舍にしるす。

甲寅 唐太日記巻の上

多氣志郎　松浦弘　評注

嘉永甲寅六月余（ヨ）堀（ホリ）使（シ）君（クン）に從ひ蝦夷地の西浦を巡視してソウヤ（蝦夷地西海岸にしてカラフトへの渡海場所なり）に風待す。

同十二日順風にて同所を出帆し、唐太島（カラフトシマ）なる志良努之（シラヌシ）へ向て颿しに

注。志良努之は唐太島の南第一岬西にて、ノトロの崎の少し西岸なり。後ろに山有、是に靠て一小灣をなしたり。ソウヤを去ること十八里といへり。極高凡四十六度余也。シラヌシはシラウシの誤言也。シラ、は岩のことにして、ウシは多しと云こと、此地前に一ツの礁あるが故に號るか。會所一棟其外藏々、夷家七軒、甲寅の頃迄は山靼人等爰に來りて交易をなせしなり。

風西に轉じたれば區春許潭（クシユンコタン）へ向て颿たり。此夜は洋中にて夜を明し、翌十三日未明より朝嵐に帆をまぎらし遣るに、其灣中鯨魚潮を噴上げて其眺めいわんかたなし。辰時前同所に着たり。

注。區春許潭（クシユンコタン）は當島第一の好港、西人爰を指してアニワ港と云。運上屋元にして建物藏々、また辨天社等美々敷立たり。其北八丁にバツコドマリ、南三十余丁にしてポロアンドマリ等、何れも番屋藏々あり。大

船何程にても前に滯碇するに宜し。此所は癸丑の秋、魯夷來住せし地なり。地名クシユンは浪無靜なるを云、コタンは所と云儀なり。實に好港に依て號けしものなり。

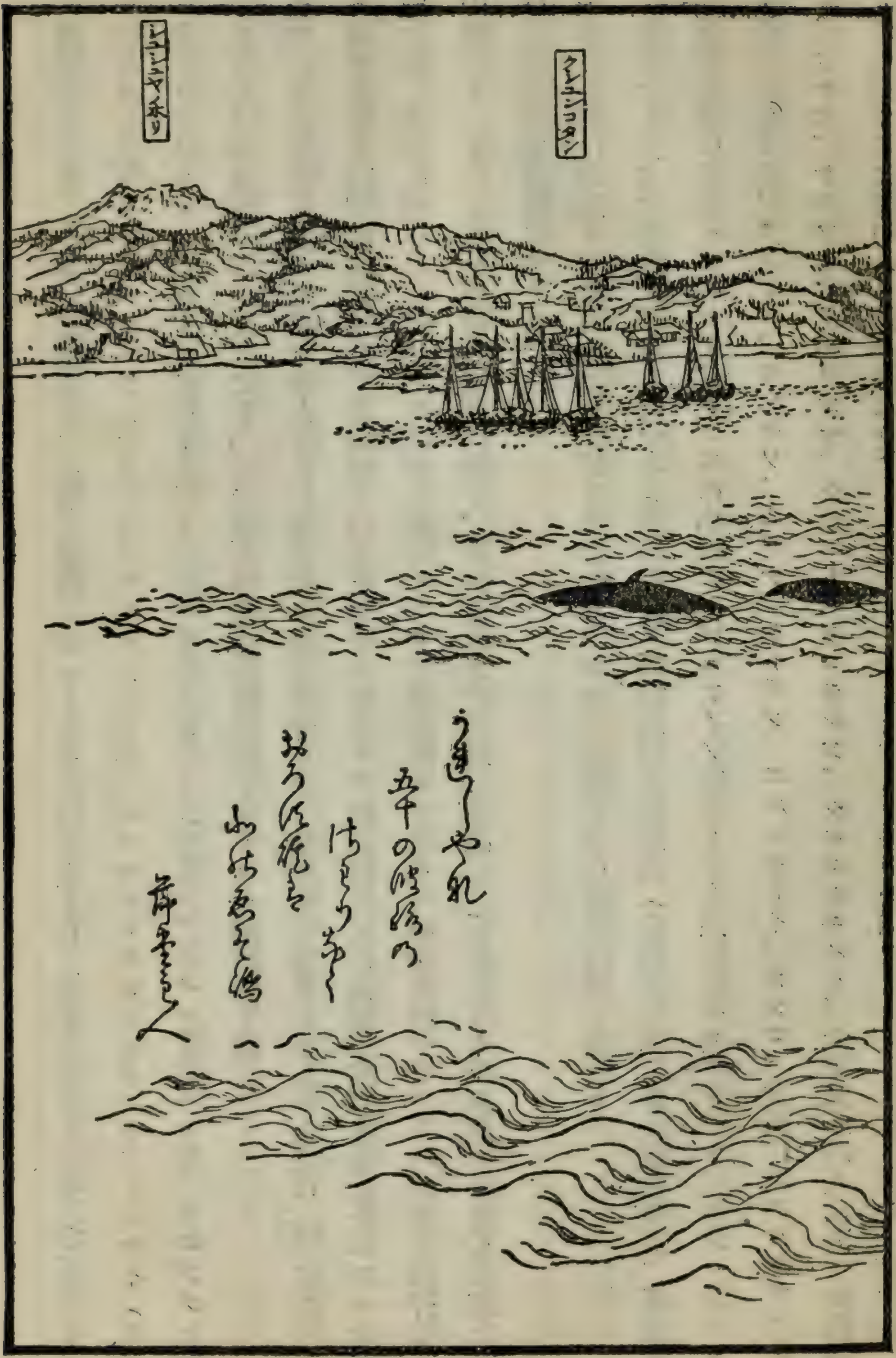
村垣使君其余僚屬も亦皆同日に上岸したり。是より先き渡り越たる人々一同會合して唐太東西巡視の事を謀る。兼ては堀使君東浦、村垣使君は西浦巡視の心組なりしに、粮米人夫など差支への事のみ出來て、東西手分になり難ければ、兩使君ともに西浦より巡視あるべしとなり。余は國界までも從ひまいらすべしと兼而思ひけれども、かく差支もあるなれば水野氏（正太夫）と共にシレトコ岬の方巡視のことを命ぜられたり。

注。シレトコサキは當島東南の第一岬クシユンコタンを去て三十余里、極高四十六度、余巉巖峨々として絶壁の地にして是に激する潮勢白浪を溯まき、難所と唱ふ。地名シレトコはシラ、イトコの結語なり。シラ、は前にも云岩にして、イトコは盡ると云儀なり。岩の果と云か。

余ほゐなく思ひたれば、能々土人に尋詢ひしに、嘔春許潭より東浦へ出る間道にシユンユヤ越と云あり、春秋の頃夷人の通路にて、夏の際は草木生繁り、數十里の間人煙絶たる難所なるよしなれども、東浦へ出る捷徑なれば挌別僕從を減しなば聊の人夫にて通路なるべきよしなり。

注。クシユンコタンより以北五里計にしてシユシユヤと云る所有、其川すぢに入て少しの陸を越、日程六日にして東海岸ナイブツに出る。是をシユシユヤ越と云なり。然るにクシユンコタンを出て東奥に到るや、當時本道と稱るは、南の方（十リ）チベシヤニと云るに到り、是より上なる沼に越、此沼（五リ）より陸

トウフツ
ラフイトマリ
ホロアントマリ
氣志樓主人
圖


クシユンコタン

路（二リ）少しを過て又沼あり、（五リ）東浦トンナイチヤへ出、夫より（二リ）ヲチヨボカ（三リ）ウエンコタン（一リ）コヌシヘツ（一リ）ヲブツサキ（一リ半）シユマヲコタン（五リ）イヌ、シナイ（五リ余）ヲソエコン（十八丁）ロレイ（二リ）シユシユウシナイ（十八丁）シユマヤ（一リ半）ナエブツと廻るなり。其里程一倍に及ぶによつて、夷人等歩行の時は此シユシユヤ越の方を通るなり。

余竊（ヒソカ）に喜び此道を踰（コエ）て國界に至んことを堀使君に請ひ申せしに、使君その意をよみして人夫の煩（ワヅラヒ）にならざる處置もあらば、如何にもして其山越すべしと命ぜられたり。然に此日矢口（清三郎）直養も余が如く此間道を踰て國界に到らんことを村垣使君へ建白したり。其志暗合したるも亦奇と云べし。されば兩人同行して山越なすべきのよしを松前の家來に談じ、支配人清水平三郎へも談じ、兎角して人夫粮食の手當も出來たれば、此行の志は遂に決しぬ。

十九日今朝は朝陰（クモ）り、晝の頃より空晴風吹出せり。朝四ツ時過る頃に傴春許潭（クシユンコタン）を發せり。

余從一人（名は壯助）直養も同一人（名は佐吉）館打足輕水牧惣太（松前家家來）番人冨松豊吉、嚮道者傴春許潭の乙名イツポング、タゴエの小使サーブニアイノ等なり。人足にはエネアンペツ、エシマワセタポ、シラポク、ヨヲケン、モンキワ、ムヅナ、ケトチン、エルシユトイ、カンコ、女夷にはエケラサケンピリケス、ケタフヤ、ヤエランマ、シラエト、ヲコランヌ、シユコシユイケ、上下貳十四人なり。此内粮米の減ずるに隨中より追々歸れり。

三拾余町にして雲羅(ウンラ)、此所にて送りの人々と袂を分てり。此には番屋あり。又去年より在留の魯西亜人の畑の試作りせし所あり。三畝歩程も有之、蘿蔔(ダイコン)、爪哇芋(ゴショイモ)など作りてあり。傍に番小屋の跡あり。瓦を製したる跡摸型(カタ)等取散しあり。

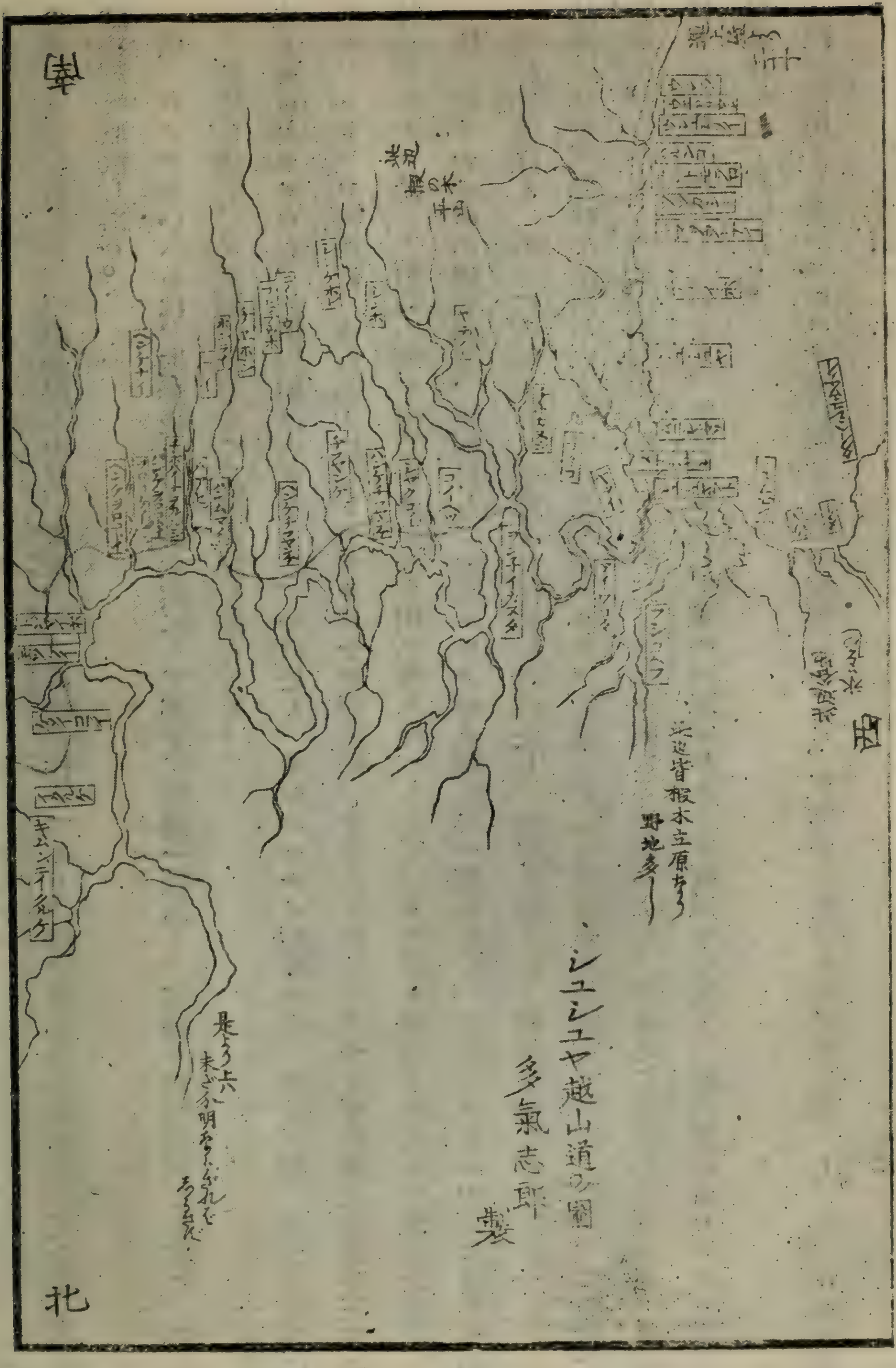
注。ウンラといへるは、地形後ろの方椴(トド)立山にして其下に番屋一棟あり。其邊り地味肥沃なる故に、魯人も畑地を墾し、又其地の土をもて瓦等を燒し跡有なり。

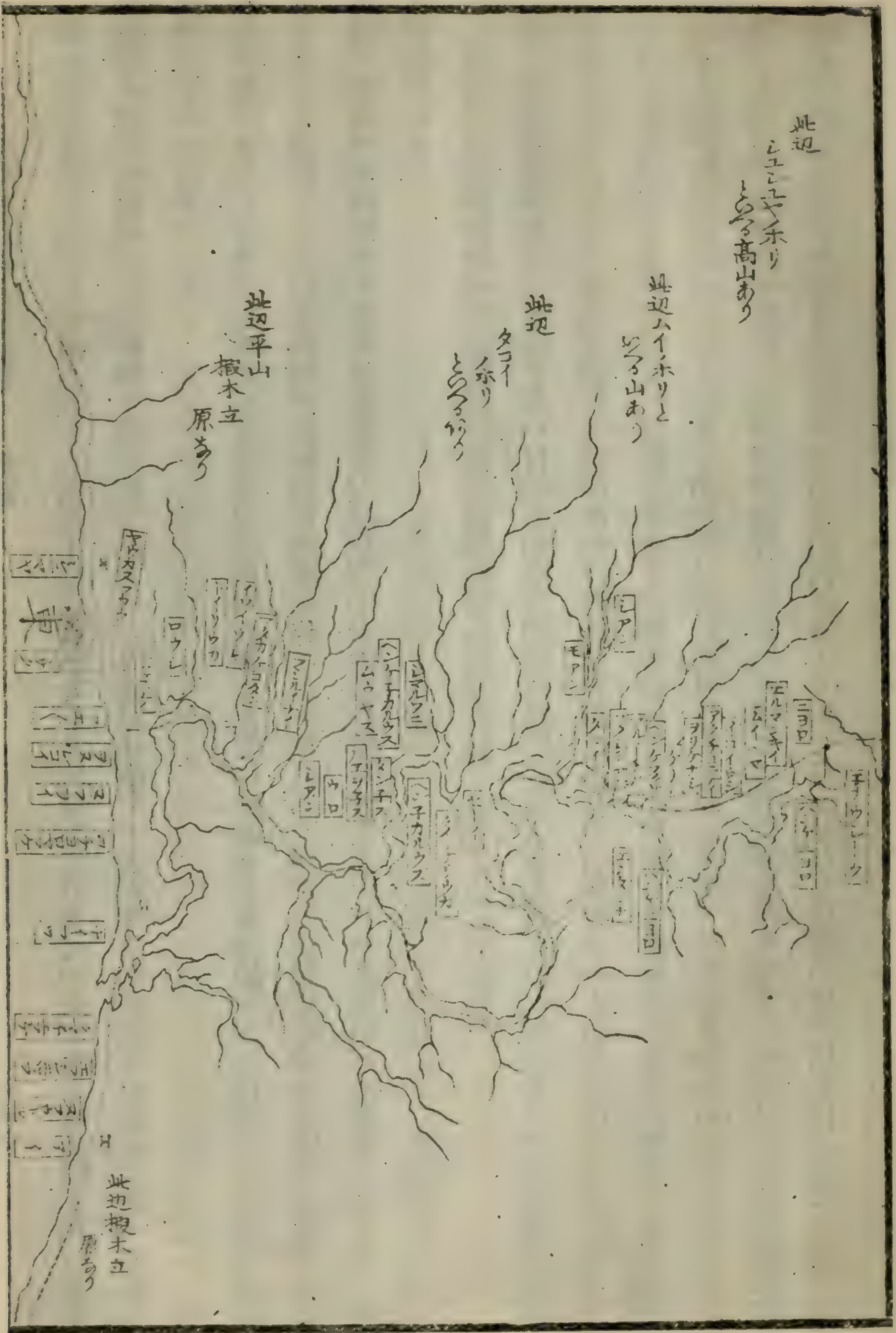
夫よりウコカリウシ、此所以前は夷家有よし、今はなし。ウシエンナイ稲荷の社、夷家三軒、また五町余にてエントモヲロ同貳軒、また五丁にてトマリヲンナイ同四軒、また八丁余にてチナイボ此所に清水平三郎の持小屋あり。是より明朝の潮を待てシュシュヤ川へ乘入るべしとて、未だ日も晩れざれども一泊したり。

注。此チナイボの地たるや、西向にして向濱ルウタカと對して一灣をなし、其奥シュシュヤ川口まで其沼内惣而海淺し、所々に寄洲ありて干潟なれば船を容がたし。依て此邊りにて滿潮を待て容るなり。

此所には平三郎持小屋あるによつて寢食も安かりき。此處の前には壹反歩斗の畑有て芦肥(ダイコン)、萵苣(チサ)、紅蘿蔔(ニンジン)、彭翁菜(ゴボウ)等を作り、芦肥は越年番人第一の食料にて水腫を病ざる奇薬のよし、此後ろに炭燒の小屋あり。是等皆平三郎始て仕だしたるよし、從僕等前濱にて鰈の四五寸斗なるを取來りて食す。鰈夷語はカバレイと云、此夜は心よく打臥たり。

注。當所より奥シュシュヤ邊に產する鰈の味美なること、又其多く產すること他に類なし。冬日には此灣


シユシユヤ越山道の圖
多氣志郎製
此辺皆椴木立原なり
野地多し
北


此辺平山
椴木立
原あり
此辺ハイノホリといへる山あり
此辺椴木立
原あり

中一面に氷結る也。この邊りの土人其氷上に大篝火を燃し穴を穿、其火温の氣に集り來る魚を括槍もて突取る。羽の八龍湖にて氷を割て網を投じ漁するより其興一倍せりとかや。又其肉味も龍湖に比する時は尤美なりといへり。

廿日朝曇りたれども雨の氣色とも見えず、今朝潮の滿るよしにて昨夜より夷船を前濱に廻したれば、未明より支度して乘船せり。然るに此行は嶮惡の山路を越ることとなれば、尋常の旅裝にては迚も通行成難きよしなれば、夷人の衣服アツシと云物を著し、尾花帽子と云ものを打被り、キナホスといへる脚半を附たり。因て一絶を得たり。

欲〓執〓孤筇〓窮〓嶮奇〓。風餐雨臥亦何辭。樹皮短褐芒花帽。也好人呼爲〓島夷〓。

注。此間道は道形もなき處を凡の目的を山派水脈等に取て、丈よりも高き草の中を分、また谷地中などを行ことゝなるが故に、終日下艸には露深ければ如此裝て行ことゝなり。其アツシといへるは、木皮（ヲヒヤウの木）もて織たるものにして、是にくさ〲の雷紋様のものを木綿もて縫襍す。土人の常服。尾花帽子といへるは、芒花の穗もて作りしものなるが、多くは羽の最上邊より出、又キナホスといへるは奥羽にて蒲脚半と云て、寒地は木綿にては雪の中凍合してあゆみ惡く、又草深き所を越るには一日も不保が故に、多く此蒲にて作りしを用ゆ。是は南部領の沼宮內邊より出。其上品なるは馬の尾を以て作る。雪中越る山中には甚よろしきものなり。

凡半里程乘出したる頃より空の氣色俄にかわり雨降り出したり。ツナイホ（地名）よりは三丁余にてシユシユヤ（地名）夷家八軒あり、三拾丁余にてシユシユヤ川口なり。入口水深壹丈五六尺余、川口午の正中に當れり。往。シユシユヤは其地形後ろの方に鳳尾松の黒く繁茂せる山續き、シユシユヤノホリといへるに靠て前は少しの岬をなし、其邊り蒲柳原にして水際には蘆荻多し。其中に家居す。當所は此灣の第一奥の東岸にして、波浪少しもなし。シユシユは柳の夷言、その多きによつて号せしにや。是より土人等歩行の節は川口の手前字メナシサシといへるまで海を歩行わたりし、夫より山に入て字チタヱに出るよしなり。船にて行には一里も沖を乘りて此川すぢへ掉さし入る。此川口は灣中第一の奥の方にて、洪水の節押出せし土砂多く處々に附洲をなして船動ば乘り上て難澁する所なり。

川に沿りて四五丁程の左の方椴林の內に鷲の雛の梢より落たるが驚て飛廻るを見附たり。番人豐吉船より飛下り、續いて夷人共走り廻り終に手捕にしたり。是を兩使君へ獻ずべしとて水野氏へ書を添て歸り船の便に遣したり。此邊鴨の子、雀の如くなるが打群て水上を行さまいと珍らし。川口より半道ほどにて枝川へ入。爰より船を棄て上陸せり。此所字チタヘ（地名）と云由、木挽小屋あり。雨はます〱強く降出したれば、此處の小屋に一泊せんと議す。去るにても兼て山越の日を積りて食粮を携へたれば、何程の嶮悪なりとも雨に障へられて滯留なすやうにては志を遂べくもあらず。兎も角もして前路にすゝまんと決定して歩を進めぬ。

和人は白米、夷人は玄米にて凡十日程の食糧を負戴し、その余は船にてトンナイチヤよりナヱブツの方へ

回す積りにて、船廻しの分も引續いて出したるよしなれども、風潮に障へられしにや東浦を回る內終に此船來らざりし。

注。此船廻しの事は前にいひたる如くチベシヤニより沼越トンナイチヤへ引出し、東海岸をナエフツへ搔送り行事なり。

此邊り兩岸とも椴蝦夷松のみの林にして、女蘿數丈の長きもの懸りて地に垂たるさま、內地には絕て見ず。唐画の山水の如く也。また一絕を賦して其木の皮を削てしるし置。

松掛二女蘿一千尺長。素絲翠蓋滿山香。平生愛翫唯圖畫。始識人間有二此疆一。

此道樹枝交加して眼に遮り、頭を障へ枯木朽根路を塞ぎ脚を著る處なく、雨は涔々と降り困苦いふばかりなし。辛うじて二里ほどもすゝみて少し小高き所に上り辨當を遣ひたり。爰をメヽ（地名）と云。小流ありて水淸冷、蚊の多きことは言語に絕たり。火を焚は少しは踈になるなり。夫より壹里半程にて字アヲイ（地名）と云。此所少し小高深林の中へ小屋掛したり。小屋掛をするには、水の宜しき所を撰み、又小高き濕地ならざるを見立るなり。水惡ければ腹痛の患あり。濕地に臥す時は瘴氣に打れて病を得。且虫の類多くして難義するなり。扨小屋掛をするには、立木より立木へ枯木の丸太をわたし、是にて屋根組をして、其上を椴の木の皮にて葺なり。夷人ども事馴たれば攜たる鉞にてその皮を剝に至て手早きものなり。

注。此山道中誰にても通行の時小屋を架するや、必ず椴の立木の皮を上下長四尺斗に鉞目を入置て剝ぎ、

是にて葺く。纔三四人の宿すべき小屋家根といへども、其皮凡貳十枚三十枚も用ゆ。其皮壹本の木より必ず一枚ならで剝ざる也。その剝取し木は枯朽るものなり。依て其時に小屋掛したると云所々の跡を余通行の時節見るに、凡一ヶ所毎に百本余ッヽも立枯したり。是等の事にても此地樹木の多きことを知るべし。小屋の前には枯木を集めて終夜火を焚たり。急卒に掛たる小屋なれば雨降出したるに漏りて堪べくもあらず。屋上には油紙など引掛て兎角して夜を明しぬ。

廿一日昨夜より雨降り續きたり。五ッ時頃にアヲイ（地名）を出て半丁程にてアヲイ川に至る。此川水淸冷なり。爰にて嗽ぎぬ。夫より山道前日の如き椴蝦夷松の中を凡壹里程にてコイ（地名）と云地に至る。深草の中に小屋掛あり、是に入て朝飯の握り飯を食す。

注。此地一ッの沼あり。其沼周り凡壹里半、是より落るをコイヘッと云。水淸冷なるによつて土人等通行の節多は此所にて宿すなり。余が通行の時も此處に小屋あるよしなれども、爰まで來ることを得ずしてサッコイと云るにて露宿しぬ。シユシユヤを立て是まで雪路ならば早著すべけれども、夏道は中々著し難し。

番人冨松樹皮を剝て此所を始て通行せし事を記し呉よと請ふによつて、余乃其木に漫書したり。

　草露鞭來山露新。手排茅塞分荊榛。風流官吏過斯地。開闢以來唯二人。

此邊より左右草生茂り虎杖（イタドリ）に似て夷言ハッハシと云。また欵冬（フキ）、夷言をコロクニといふ、一間余なるが路を塞ぎ先へすヽむ人は見ること能はず。其上泥濘にて深き所は膝を沒す。壹里ほどにて小川を渡り、深艸を分

行くに向より來るものあり。東浦ヲタサンといふ所よりクシユンコタン勤番の松前家士へ同僚より遣す書狀の飛脚なり。此夷人の話に、先立の間宮等へ積贈る米船をヲタサン洋にて傾覆し、其米を失ひたり。故に來れる飛脚なりと。此米も我が粮に關係するなれば各是よりして心を傷めたり。爰にて飛脚に別れ、晝食して歩を前めたるに、路は猶々惡く、さま〴〵の草繁茂し水葵の如くにて葉の大きなる草、また犢舌（ベコノシタ）とも云欵多いよ〳〵多くしていよ〳〵大なり。

　欵冬如竹鬱叢生。葉々相重翠影濤。山路不妨多二雨露一。一莖代レ傘蔽レ頭行。

注。世間欵冬の大なるものを秋田欵多（フキ）と号て好事の人其葉を摺に大さ藤紙に半し、又風騷家多く是を傘に比す。此地の物は是に倍して若藤帋に摺る時は全紙に滿べく、是をものに比せば馬乘合羽とも云べきか。

晝休せし所より貳里余にてライ（地名）と云る茂林に小憩す。此邊立木の中程を爪にて抓きたるやうなる跡あり。依て是を土人に問ふに、羆熊の雪中途に迷はざるしるしなりと。又是より壹里余行てハーセ（地名）と云所に夷人どもが通行の爲に掛置たる小屋に止宿す。

注。此所をハーセと誌るされしが、實は此處ハアセクシといへる地なり。ハーセは此所より行て先生嗽がれし川をハンケナイといへるが其川の向なるべし。惣而此邊の土人往來ども、此所の川の此方か、彼方に是非宿するよしなり。よつて余も此川の向にて宿したり。

此小屋は左右に雨覆あり、中にて火を焚なり。今宵直養余に云、粮食給せずば志を遂べからず、日を併せて

進まんとすれども女子の人夫も接りたれば意に任せず。依て某先に進んで粮食の手當をなすべし、行李は跡より搬運せん事を余に托すとなり。乃其意に任せて余は一日路も後れてすゝまんと議したり。此深叢中數日の難程猛評。余未だ直養に邂逅せず、然るに此所に讀至りて其意氣を感じ拍手して一笑す。此邊り獸の跡歷々として認べき地なるに、直養强て前を乞ふは其意敢て糧食の爲のみにはあらざるべし。此邊り足は泥濘に沒し、面部は如何やうに裝とも虻蟆の爲に責らるゝに、同行の爲にひま取られて路はか取らざる時は如何ともなし難し。余もクシユンコタン詰貳人と同行のよし隊長より言聞されしが、其兩人の遲足を案じ前行を願、一日前に只土人のみを召連て出立したるに、按に違はず其兩士は遲足にて種々の奇話もありし由、他日土人共より聞侍りしもおかし。

此夜は夷人共の掛たる小屋なれば床と云ものもなく、蚊殊に多くして紙帳の破れより入、瘴氣肌を侵して眠につき兼たりき。

廿二日朝の間は曇り、晝頃より晴たり。直養は朝疾く起き從僕壹人番人冨松幷に嚮道者イツポンク其外人夫五人を引連、粮米其外必用のものゝみ持せて余より先に發せり。余は少し後れて出たり。山道廿町余も過てハーセヘツ水淸く淺し、依て此川にて嗽けり。

注。先生此川ハーセに有によつてバーセペツとしるされしが、此山中ハーセペツと云ものなし。土人此川を指してペンケナイと云なり。ペンケは上と云ること、ナイは則澤也。此所は上の澤と云儀か。余は此川

の上にて宿しぬ。

又拾四五丁にて同じ川の上に出る。サアブニアイノ余を脊負て渡せり。夫より一里斗りにて、字イナヲカルシと云る處に出る。此所木幣多く立て山靈を祭たり。

注。此所本名チハホイナヲカルウシと云なるべし。柳の大木有。其傍に往來の土人削花を建て拜をなし行ことなり。其謂は昔此島に鍋の無かりし頃、タコイに住る姥々が土を以て始て鍋を作り、東浦の土人へ其製を教へ、夫よりして南濱より西浦の土人にも教へんと、鍋を脊負此所まで越來りて、風與過て破りたりと。夫より意の達せざるを恩ひて、此處にて病に係り、終に死せしと云り。其跡を今神に祭り置き、此邊りの土人往來の時として削花を奉りて、數日の途中の食粮を絶さず越さんことを祈り誓ふとかや。如此其土鍋を此島にて用ひしこと昔〳〵の赤本話しの様に思ひ居たりしが、今度（丁巳）鎭臺堀君御廻浦の砌にクシュンナイにて右に圖せし如き鍋を壹枚土中よりほり出せしとて、同所の土人獻ぜし由にて持歸り給ひしを見侍り。余も始て土鍋を用ひし昔語りを信じぬ。

又壹里余にしてシュシュヤの川上に出る。此處をヲロコトイと云。此邊りぬかり道は少なけれども草生ますます深く、䖵多いよ〳〵太く、また蚊の多き事言語に絶たり。夫より同じ様なる深叢中を分て壹里半程行て、またシュシュヤ川の端に出る。

注。此地は字ペンケヲロコトイと云なるべし。始めに出し川端はハンケヲロコトイと云、下のヲロコトイ

径リ七寸余
深サ三寸五六分
手作リ厚サ
凡三四分ヨリ
五分モ有歟ナリ
土至テアラク
砂マサリナリ
多氣志郎
縮写

と云儀なり。此邊り欸冬原なるが余爰に肉蓯蓉を數十莖得たり。クシュンコタンの小使ツクニウと云るは、頗物を辨へ居る者なるが故に是をとふに、何たるものをしらず。然るに召連たるロレイの土人アカラカイ（人名）がいへるは、是は夷言ヱバーと云て、東海岸の土人は撲傷（ウチミ）、折傷（クジキ）、金創（キリキズ）等に是を搗砕きて附るに、其功驗著しと、依て考るに、是は南濱より西に無して東海岸に多きと覺ゆ。その形像日光山誌、また本艸圖譜等に出たれば略しぬ。

土人等夫婦此所に小屋を作り居たり。名はスグロクと云、女子（メノコ）をばトヒンと云。其傍に小川あり。字モツケイと云よし、其土人等は何の爲に來り住するや聞に、鰷の漁をなし、又食料に用ゆるアンラコロといへる艸の根をほりに來り居るとなり。依て召連たる土人等に直に煮て振舞たり。

注。アンランコロは東西蝦夷地にての名にして、此地是をハーと云、則黑巻丹（クロユリ）のことなり。其餘ニヨカイと云ものあり。是車巻丹（クルマユリ）のことなり。またトマと云て延胡索（エンゴサク）の根をも食用とす。延胡索は藥名にして通名はヒツチリと云。漢名を滴金卵と云。其圖本艸圖譜に出たれば略し、次にハー、ニヨカイの二種を出し置ものなり。

夫より小流を踰たり。何れも獨木橋なり。半里程にてまた深林の中に夷人の掛たる小屋あり。此所をエクルケ（地名）と云。此林を出て廣き原に出たり。蝦夷松の綠深くして草の丈ケ高からず、白き總（フサ）楊枝樣の如き草多くして、景色宜き地なり。

多氣志郎 寫真
ニヨカイ
車巻丹ノ圖
花ノ色 萱艸ノ如シ
ハー
黒巻丹ノ圖
花ノ色 紫黒ナリ

注。按るに是草にあらず、菌蕈(キノコ)の一種なり。雜木繁茂し枝葉落ては腐(クサ)れ、喬木(フトキ)倒れては朽(クチ)たるの地、必ず梅雨の頃如此ものを生ず。余も此邊りにて數十種のものを見ぬ。

イナウシ（地名）と云此原野を暫く過て、又山道に入り貳里余にして深林の中小高き所に小屋掛して夜を明せり。今宵は直蓑も居らず、いとゞわびしかりければ、

辛苦嘗來雨又風。寧堪獨臥亂山中。別レ君最是傷レ心處。今夜同レ牀唯草蟲。

又

斜架二危檐一了木支。潺湲先辨與レ茶宜。泥鞋探レ嶮穿二山骨一。禿筆題レ詩白二樹皮一。雲濕二牛牀一無二客伴一。草埋二荒徑一有二熊窺一。怪禽夜叫長松上。獨愛二幽奇一就レ睡遲。

注。ユナウシはエナヲウシの結語なり。此地東西の境目にして分水の地なり。依て往來の土人、東より來るものは削花(エナヲ)を作りて東の方の山靈に暇乞し、西より來る者は、西の神に暇乞して途中の安を祈るなり。依て多く此所に立たり。故に號る[illegible]ウシは多しといふ儀なり。

廿三日朝曇り、五ッ時小屋を出て山林を暫く行、ニヨロマトウ（地名）と云る沼の端に出て、夫より廣き野地に至る。此地萱艸(カンソウ)咲亂れ、其間に藻萊(アヤメ)多く咲交りたる地にて、四方打開け少しは鬱氣を散じたり。されども蚊の多き事、糠を振蒔が如し。うるさきこと限りなし。夫より又蕗虎杖多く生繁りたる中を分け行に、前行の人は少しも見へぬなり。其蕗の大さ根の所にては壹尺七八寸も廻るべし。壹里余にてネモイ（地名）と

云る處へ出る、此所川あり、巾貳間斗。夫より山道又野地を過てタコエ（地名）の川上カモイチウといへる所にて晝飯す。また〳〵深叢の中に箬(クマササ)交りなるを分てケナシ（地名）に到る。又此所にも小川あり。其傍に夷小屋壹軒あれども人はなし。又同じ處四五丁にして巾四五間の川に大なる栁の樹の倒れたるが自ら橋をなす處あり。枝は半天にぬけ出て深翠愛すべし、尤奇とす。是を越て野地山林を過てホクイチヤン（地名）といへる所にて休息せり。

評。賴光峯入の畵卷物に、彼大江山にて童子が岩窟のまへに大なる溪河を、枯木を倒して越るさまあり。先生おそらくは其心持にて越し給ひしならんと。爰に至りて竊笑しぬ。

夫より拾丁余にてフルシチヤン（地名）漁小屋貳軒あり、又拾四五丁行てトノシチヤン（地名）此邊に夷家壹軒ありて七歳斗と四歳斗の小兒貳人並居たり。此夷家は我に付來れる人足ポンキッ（人名）夫妻の家なり。妻はシユコシイケ（人名）といひ、家には老人貳人ありと云。此小兒はポンキッが子なるかと思はる。ポンキッは此子を爰に殘し置、クシユンコタン（地名）へ夫婦にて稼に行て居たるが、此度の人夫に當られたるなり。今日は已が家に立寄たるよしにて止宿まで來ること遲かりき。此處よりまた同じ道を行こと凡三十丁余にして嚮導サアブニアイノ（人名）の家に著せり。サアブニは當時家內九人暮しのよしなれども眷屬斗りにもあらず寄合世帶のよし、小屋は四間に三間半もあるべし、爐を二ツ切てあり。其一段高き所にキナ（敷ものなり）を敷て余が坐を設けたり。余サアブニに寶物を見せよと乞ければ、一本梯子(ハシコ)にて棚に上り、鎹かます

の中より赤錆の太刀の身と其鞘を出したり。然るに其刀身錆たるが故にや鞘に入がたし、又其外に銀箔を貼したる菖蒲刀の身桐の板にて作りしを見せたり。余ピリカ〳〵と賞しければサアフニも其賞せしを如何思ひしや笑たり。次にまたカマスの内より女の古著を出して見せたり。是は彼が晴れ着の由、生壁色にて裾摸樣の紋附なり。是を折疊むといふ事はなく、唯かますの内に押入たれば揉め皺みたること論なし。今宵は山中と違ひ安心してうち臥ぬ。

注。此處平地にて東の方のタコイノホリより落る河と、南ニヨロマイの方へ落る川と合して是より五里斗を下り、ナイブツ川にて落合るなり。人家九軒ありてサアブニは此所の小使役なるが故に家も相應に大くして余も此家にて止宿せしなり。其時寶を乞しかばやはり一本梯子にて棚の上へ乘り、筵かますをおろし、其中より古著壹枚に太き刀の身壹本と鞘とを出し見せたりけるが、其身廣くして子母樋に巴の紋を三ッ程彫たり。其鞘は土人が自らの細工にてあるや、樺にて處々を卷、至極雅味ありて愛翫すべきものなり。扨其傍の柱を見るに文字樣のもの有が故に、是を問ふに、矢ロニシパのカンヒと答しまゝ見るに、如何にも手垢にて黑くなり終に讀むことを得ざりしも遺恨なりける。

按るに余是まで何處にもせよ落書、または刄ものもて生木に疵附あるを徒ら事と惡むの情甚しく、依て余は落書は云に及ばず、立木に疵附し事はなかりしが、此度の行處々山中にて鉞目等を見て夫を目的とし心丈夫になりし事有。已來は我も休みし所は必ず何成ともしるし置かましとおもひ侍り。依て思ふに人を使

ふも其人其任に當れば頗用をなすべし、當らざる處へ用ひなば如何成英雄豪傑俊才にても駑馬におとるべし、落書鍬目も堂社の柱、塗立の白壁抔は無用なる事もとより論なし、かゝる山中にて見る時は一點の直も千金とぞ覺ゆる。

廿四日晴たり。サーブニの宅を出て前の川を渉りてまた深草の內へ分入たり。欵冬その余のもの是までよりも生茂りて悪道いわんかたなし。トウシトウ（地名）の脇を通り山に上り、野地を過て小川に出たり。ウロウと云所なり。爰にて鳥雀の鳥に追はれたるを捕へて深叢の內へ放ちやりたり。夫より艸の中を來りてシアンチヤ（地名）と云に出。此所夷家二軒、エフンハ（人名）と云ものゝ家に休む。此家に直養も休みし由なり。此小家の前に蝦夷船を備へたり。依て是に乘下る。川巾貳拾間余も有べし、是タコエの川下なり。兩岸垂柳にて屈曲し、拾丁余にてオンネナイ（地名）と云川に落合。是より幅廣くなるなり。此所は先年某（此處余が通りしに少し異り。余はタコイより山道壹里半斗りにしてヘンネカルウシ（地名）と云るに出、また壹里余も下り、此シアンチヤのエフレハの家にて休む。夫より廿丁余にしてナエブツへ下るなり。此ナイフツ川は西北より落來りて、此川の本川すぢ是より上に人家貳ケ村もあるよし、凡是より河巾七八拾間にも及び、其深き事四尋より六尋位にも及ぶ。當島トツリ以南の第一の亘川にて水豹も多し。キヽウシ（地名）アフコタン（地名）ビラボ（地名）など過て、三里程にてホロヌウ川岸に着く。然るに此所に女夷壹人佇居て髯を掛たり。蝦夷船貳艘來りて余が舟中のサーブニ（人名）と物語りて、やがて乘來る

船と爰にて乘替たり。此邊より雨頻りに降出し寒に堪ざれば其形狀を察したるにや、女夷薪の燃さしを持來れり、火鉢樣の物なければ壹尺程も有べき板に置きて手を煖めたり。程なく薪は盡たれども板に火燃入て煖かなり。此邊左右の水上に水豹時々首を出して船を窺ふ。また川岸に兎の居たるを見たり。サーブニに問へば、是をヲリケエ（兎の夷言）といへり。夫よりまた壹里余にてナエブツの岸に上り、青艸中を行き、夷家に著す。通辞の豊吉は跡船にて後れたり。兼て粮米の事心にかゝれば、余聊か覺へたる夷語をもつて運上屋チツフアマ（船米）、アンナ（有）と問しに、夷人等首をふりてイシヤム〳〵（無）といふ。爰にて大に望を失ひ如何はせんと案じ煩ひたり。雨はます〳〵強く、寒さに堪ざれば爐に焚火をして身を煖め濡たる衣類を乾しなどする間に、跡船も著て夷語も通じ直養が書たる書狀を取出して漸く事情も分りたり。先に直養が心構へに贈りし貳苞の米は、先立の間宮等持行たり。余等が爲にクシユンコタンよりおくるべき米は未だ著せず、先立の爲に跡より贈る米船は昨日此地を過てオタサン（地名）と云所まで行過たるよしなれば、此船を引留て粮食の手當になすべしとて直養はオタサン（地名）をさして走り行たるよしなり。かゝる故に我等が同行の粮食は如何すべきと十方に暮たり。

評。先生十方に暮られしは尤目睫に見るが如し。

今白米は漸々八升あり。玄米も亦纔なるよしなれば、豊吉才覺して是より貳里斗りも南なるシユシユウシナイと云所より、玄米壹斗入かます取寄たり。是にて皆々力を得て此夜より玄米を食すべしと議して、獨した

る燒酎をみな〳〵少しづゝ喫して打臥たり。其家の主人の名はワーチヤアイノと云へり。

注。此處は東海岸にて萬里の波濤目に障るものなく、此河は北地第一の大流、澤目數十里開らけ、源はルウタカノホリより來る。其川口の南岸に家居す。ナイブツは澤の入口といふ儀か。惣而水性鹽氣を含みて悪し。貳拾町も上り北岸一ツの沼あり。凢廻り貳里もあり。其邊り皆椴木立原、海岸には五鬣松の長壹丈より貳丈位のもの林をなしたり。秋より末此邊り鵜鴈其外さま〴〵の水鳥多し。其鳴音の噪がしきこと、家の内にて對坐し物語りするも聲を妨げられて聞とり難きほどなりとかや。

甲寅唐太日記卷の上

甲寅 唐太日記卷之下

多氣志郎　松浦弘　評注

廿五日（六月）昨夜より引續きたる風雨にて船渡し差支へたるよしなり。早朝より起出旅裝したる甲斐もなし。粮食に支へられたるのみならず、かく空しく日を送る事如何にも心苦しけれども、夷人共船を出さゞれば詮方なし。今朝は彼ハー（艸の根）といへる草の根を入れ、玄米にて粥を焚て食す。ハーは少し苦味(ニガミ)あれども卷丹(ユリ)の如くにて風味雅なるものなり。また此邊りより白鳥と云る壜(トツリ)を貳ツ三ツ持來り、玄米を入れ、木を削りて精(シラケ)げたり。余も是を助けて搗たり。總て夷家の不自由なること言語に堪へず。戸口に出んとするに履物なし。手を洗ひ、口嗽んとするに盥なし。依て余は罇を倒さまにし、底の方に水を入、是にて手を洗ひ、また嗽きしたり。また火鉢といへる物なし。割れ石の凹きに火を入れたり。

注。此石はルウタカの水源にあるを土人等鱒漁に上り其時に割り取り置、諸方へ配分せることのよしなり。運上屋近所の土人等は隨分火鉢位はあるべけれども、此石を用ゆる事此地の風となりたり。實に其石も亦愛翫すべきものなり。

足輕物太餘りに蓙の上の穢れたれば、傍に掛たる埃掃(ハタキ)の樣のものを取て掃はんとせしに、女夷聲をあげて留めたり。後に聞けばイナヲ（削花）とて神を祭りたるものゝよしなり。神にて地を掃はんとせし故に、聲を揚たるも

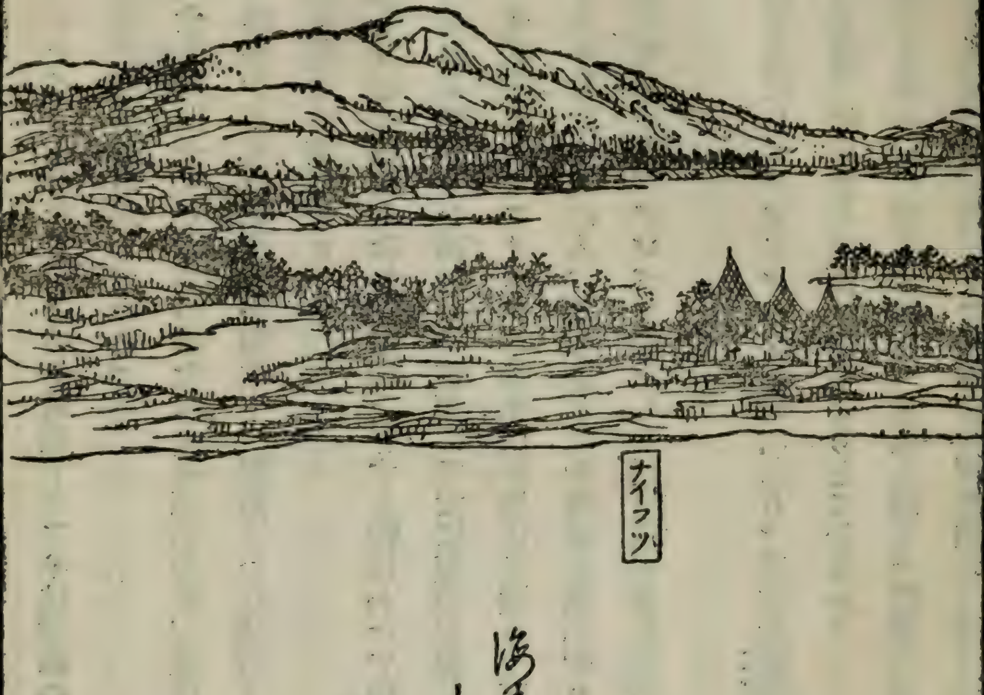
尤なりと辛苦の中にも一笑したり。扨四ッ過より風雨も少し穏になりたれば出船せん事を夷人共に詰問するに、此處より壹里余川を下りて、海邊にて向ふの岸に渉るなれども、其岸赤壁にて風波荒き時は船繋ぎなり難しとなり。余乃豐吉惣太等を連て海の容子を見に出たり。實に夷人の言の如く風波あらくして嶮惡畏るべきの狀なり。此海蝦夷の千島東沙都伽(カムサツカ)に連りたるよしなれども、眼に遮るものなく物凄き体なり。され共川の流れは穏に見へたり。此河原に鶴白鳥群居たるを、惣太銃せんとせしに、忽飛去れり。又夫より小屋に歸り先川を下りて行べき所まで行きてよ、如何にしても船寄られざる時は引返すまでなりなど夷人ともをすかし拵へて漸く晝過る頃より船を出したり。川筋壹里余も下り海面に出る。左りの方ナヱフツトウと云大なる沼あり。海面は高波打寄河水激流して船漂蕩す。此所を横に切て向ふの岸に着んとするに、赤土の絶壁にて寄せ附がたじ。海岸より打寄たる枯木亂れ横て容隙なし。漸く少し疎なる所へ船をさし入て皆々飛下り、始て安心したり。此切岸に余杖頭にて數字を題せり。

注。此崖赤砂交りの土にして壹度々々の洪水に崩れ落る處なり。よつて記し給ふとも惜哉壹月をも待ずして消失せん。其數字とは何を記し給ひしやらん、恐らくは日本の果とも書給ひしならむと一笑しぬ。

夫より絶壁の上に漸々はひ上りたるに、此所一面の草原にて松の枯木多し。其外玫瑰(ハマナス)、萱艸(カンサウ)は花盛り、四五丁行て濱邊に下りたるに流れ木の横はりたる事夥し。壹里半余にてアイ（地名）と云所の夷人小屋に宿す。

注。此地一面の平地東向にして海岸白砂地にして歩行至て悪し。爰の後ろ礙山ナイフツのトウキタイに續

トウキタイ
ヲンチトウ
武郎圖



海そこや
なほ田くさまよ
夕にもあしは
あかのひとむらを
うけて海[illegible]の森

篤

きたり。その名アイウシナイなるを今アイとのみ云通す。アイは蕁麻の事、ウシは多し、ナイは澤なり。此草爰の澤目に多きが故に此名あるかと思はる。

夷人名はタシトリと云。余今朝はハーと云草の根を入たる玄米の粥、晝は赤小豆の入たる粥を食せしが、此夜腹痛して大に惱めり。終霄少しも睫を交る事能はず。熊膽または使君より賜ひし正氣散など用ひて曉方に少しまどろみたり。故に發程大に延引せり。

夷家には圊もなし、笠もなし、燈火もなし、腹瀉などする時はわけて難義する事なり。

廿六日今朝は晴たり。四時過る頃アイを出たり。腹瀉にて大に氣力を損じ食氣なければ其儘立出たり。草原壹貳丁にて海邊に出つ。又貳三丁にてアイペッと云小川を舟にて渡り、貳里程にてシルトロ（地名）夷家壹軒、こゝにて朝飯をなす。今日は土用に入、其しるしにや暑氣を催ふせり。夫より小川所々にあり。又五里餘にしてヲタサン（地名）なり。ヲタサンペッ船渡しを越て三丁程にて居村也。乙名ヲマシネ（人名）の家に投宿す。

注。此地も同じく東向素濱にしてヲタサンヘッと云川あり。其北岸椴楊柳（トトウ・ナヤ）、赤楊（ヘン）等の山際に家居す。ヲタは砂也。サンは流れ出る儀、此川筋石砂流れ出るよりして号るか。

此家余程廣く四間に五間もあるべし、爐貳ツありて臭氣も薄し。直養の書狀壹通殘し有て、玄米壹斗をタヲタツロに殘し置よし也。且粮米不給、倶にトツソの蝕を探り難し。即今西浦へ赴くべしとなり。今日惣太驚

を銃して皆々其肉を食ふ。余は不快なればとて白米を粥に煮て食せしめたり。此海岸ナイフッ川よりシラヽヲロ邊まで平曠の沙場にてトヽの木、又は蝦夷松の林多く道よろし。

廿七日朝より雨降たり。ヲタサンを出、小川貳ッ越、貳里余にてマトマナイ川拾間余、夫より壹里半程にてキトウシ夷家貳軒、此邊を過る頃は大霧にて咫尺も辨じがたし。此海邊に海豬（トド）の死したるが半身砂に埋もれたるあり。半は肉を切取りたり。腹の太サ四斗樽の如し。キトウシ（地名）夷家に憩す。爐上に海豬の脾を掛たり。息を吹込み、海豬また水豹（アザラシ）の油を貯るよし、其形ち大胡盧の如し。其夷家鱒の切身を爐上に吊（ツル）したれば臭氣堪難し。貳三丁過てホロナイ川口四五間越てまた壹里半程にてペケレイペッ（地名）川巾貳三間、夫よりまた壹里半程小川貳ッ三ッ越てシラヽヲロに著す。其入口にシラヽヲロ川巾四五間あり。此所山に添て村落をなす、後の山をイサラ（地名）ノホリと云。イサラは兀たる事、ノボリは山のよし、此山兀たる所あれば如此いふよし、山の鼻餘程海中に差出たり。

注。此地の地形則本文の如し。其村は山の根にありて少し南を受たり。其前一道の暗礁有て沼形ちをなしたり。地名シラヽは岩の事、ヲロは多き儀なり。

夷人の常食コロクニ（欵冬）、シロク（鹹艸）其外さまざまの草の莖を乾貯へ置き、水煮にして海豬の油を少し入食す。鹽は食せず。玄米を與ふれば鍋にて煮て粥となし、海豬の油、水豹の油を少し入て食す。膳椀はなし。帆立貝に盛る。此村人家凡十二三軒もあるべけれども、運上屋へ稼に行故に甲斐々々敷ものは見へず。皆老人子供

武郎圖

病者のみなり。また若き女夷は運上屋へ行け共、家に居る女夷は懶惰(ランダ)なる事甚しくして、夜も宿たるまゝ打臥し、朝起ても手水を遣ふ事もなし。爐の端にて烟草を喫するばかりなり。其穢はしき事女夷は男夷に倍したれば、食事の手傳もさせぬなり。小兒は幼少の時より弓矢を持て走り廻る。され共能く教へたるにや、弓を地に附て矢を張る故に人に當らず。又子供の内よりして此地の風にて、男子は右小刀、左り小刀の貳挺を腰に提、女子は壹挺を提たり。また男子女子共に十四五才迄は前髮にエキシポといへるものを附たり。

注。エキシポはいかなる儀をしらず、只此處貳三ヶ所の事なるか。山靼渡りの靑玉を三四十斗も三角形に糸もて木綿へ綴り附、是を前髮に下る、至極美しきものなり。

廿八日朝曇りたれども晝より晴たり。五ッ頃に當所を出立して山の裾を廻り行に、エナヲサキ（地名）シコマナイを越て凡壹里半余にてマーヌイ（地名）に至る。直養は昨日此所にて滯留して余を待しが、至らざりしを待兼て今朝出立し今の程はマーヌイ川を渡りたる頃ならむと。今少しにて逢はざるは遺恨なりし。また前路にすゝみたる間宮、松岡等が書状を持たる飛脚只今船にて爰へ著たりと。兩士は一昨夜頃ウエンコタン邊までも行て猶ヲロツコ人所住の地まですゝまんとの志なるよし、余は是よりトッソの嶮を探んため蝦夷船に乘る。

注。マーヌイは濱形東向、左りワアレ岬、右シラ、ヲロのエナヲサキとの間にありて一灣をなし、其所マーヌイヘッと云あり。其南岸に家居し、後ろは椴木立、其中に一ッの沼あり。此沼水の落口なき故に惡水

のよし、歸路西地へ越るには此川筋に入るなり。川の北岸七八丁にヲハコタンと云處有て、爰に堀君の營まれし鹿島の社あり。夷人等が願ひの削花(エナホ)など深叢中に立るさま　皇國の御威稜を耀すの形象とぞみえたりける。

ワーレ岬絶壁奇景あり。ホウコタンと云所夷小屋あれども人も不住。夫より大なる立岩あり、クサレネグと云。夷小屋あり。此處までマーヌイより海上凡三里といふ、しばし休らひ當處のルシハネ（人名）と云夷人を嚮道にして濱傳ひして行に、前にムシリと云離れ嶋ありて、鷗群居ること夥し。五六丁にて一ッの岩海中に聳へ路盡たり。

注。此嚮道の夷人は何處ともしるしなけれども恐らくはチカペロシナイの者なるか、此地五丁斗の素濱にして右はウシエンヘシ、左りはソエンコタンノチ岬に對峙して一小灣をなし、前に一ッの島あり、後ろに椴木立つゞき川あり、其北岸に家居す。地名はチカップウシナイの訛りなるべし。此地鸕鷀鷗(ロシカモメ)はいふに及ばず、エトヒリカもおり〳〵來り、其餘さま〴〵の水鳥この離れ島へ常に群をなすが故に此名あるか。チカップは鳥の事にして、ウシは多しといふ儀なり。

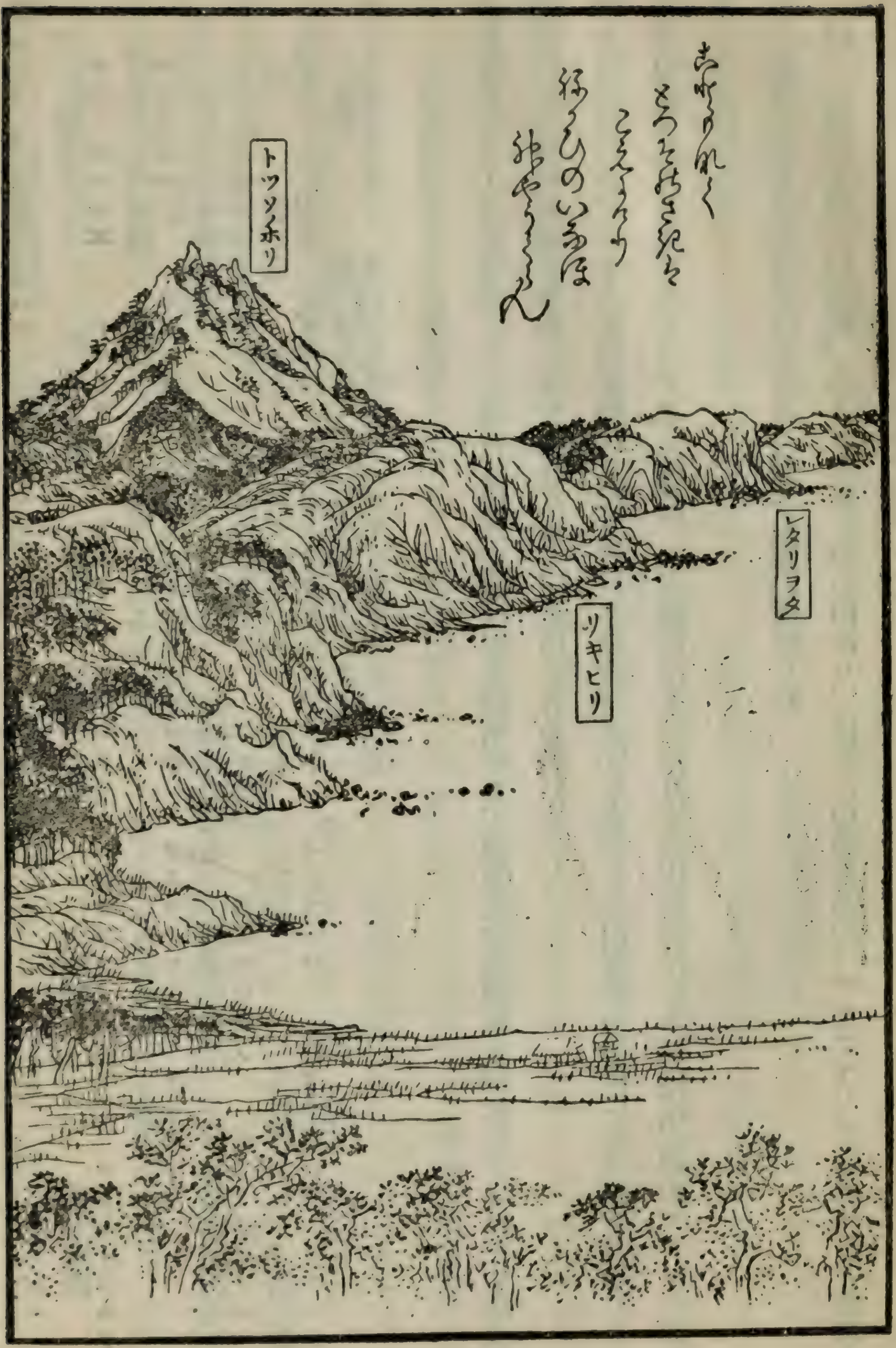
夫より岩窟中を行事十間餘にて始てあなたの濱に出たり。此所にノテカリマといふ奇石あり。爰にてトッソの山の側面を見る、巓雲に隱れて見へず。余トッソの麓にいたらんといふに、みな〳〵潮滿て去路を失はむことを恐れて退かんと乞。余押てすゝむ、或は潮膝の上まで來り、又は道盡て石穴を潛り、一岬を廻ればま

た先に一岬有て漸々三拾丁余を經てトツソの麓なる海岸に出たり。是よりは絶壁にて潮水深く一歩も進みがたし。トツソは樹木生茂りたる高山にて、麓の方三丈余の所赤壁にて壹里余も有べし、爰に一條の瀑布あり、ニヲイといへり。其先の方山の裾は海中へさし出たる處貳ヶ所程見へたり。

注。トツソは東地第一の高山、嶺は奇嵓簇々と並び立て其形ちリイシリによく似たり、依て土人リイシリの婦山(メノコヤマ)なりと云。またリイシリも此貳里斗奥より抜て彼地へ飛去りしなど、其抜し跡といふもの大なる沼に成たり。山靈著しきが故に、往來の土人必ず此麓の字ノホリホと云所へ船を寄せて削花(イナヲ)を作りて奉り行ことなり。余チカヘロシナイより先の處は船にて通りしが故に如何成所なるや委敷ことは知らざりしが、其大岩穴といへるはバッテレチシといひて、穴の明き抜しと云儀の岩岬なるべし。またノテカリマと云るは、其岩岬の前にあり。亘岩にて余は船中より眺望せしが、是より先は中々行がたき事は一目にして明らかなり。そのトツソといふは、此處限り道の絶るといふ儀の山なるに、先生此處まで來り、またも奥を探らんとせられし事少し不審也。恐らくは是日記(ニッキ)淨書(セイショ)の時に思ひ誤られしならむ。

余猶委しきを探らんとするに、同行のもの歸路を失はんことを恐れ屢促す。止むことを得ずして引返せり。實に潮水張り來り深くなりし事已前に倍して、岩根を傳ひ行に危き事度々なり。辛うじてチカペロシナイにもどり晝食して又舟に乗り出んとするに、風濤午前よりはあらくなりて、河水激する處船漂漾して潮を打入るゝ事兩三度に及べり。漸々にして洋中に出たるに、浪あらき故にや船頭の夷人高らかに唱へ言をなしたり。

弘圖
知加邊呂志内眺望
ウシエンベシ
子カフモシリ
ソエンコタン子
チカヘロシ内



トツソホリ
レタリヲタ
リキヒリ

珍らしければ豐吉に聞かせて書附置り。

地名　淵　神　様の方より　山の神　松前殿様
ツカヘルシナエ　トマリヲロ　カムイ　ヲロロリ　トシヨフフノカムイ　マトマイカムイ

同じことの神様　有故　見て居給ふ　心もちよく　まゐる
ウネノカモイ　ネタシユ　ウネカムイヱンカラツキ　ラムラツケノ　ヲマナンカ

それから神様たから　その上　また　神様見て有る　達者で　暖日時節だから
トカンナカムイヲロワノ　ネヤカシニケタ　エンカラ　ラムラツケノ　ホツケタラノマ

向へ　著たら　よゐ　御天氣　雨も　なゐ　天氣だから　新しゐ
マナニ　ソキ　ピリカ　シリンヤツテ　アフト　イシヤマノ　シリネクシユ　アシン

神様　悪い事なら　しんぼうして下され
ノカムイセ　エンホロリ　ツキヒリカノ

譯未だ盡ざるかと思はる。

七ツ時前にマーヌイに戻れり。今日は近き頃覺へざる快晴にて、濱邊は余程暑氣を催たり。されども綿入の胴着(トウギ)絆切合羽(ハンテンカツパ)抔重ねて日向を歩行たれども、汗も出ず其異候しるべし。

廿九日朝晴たり。マーヌイ川を船にて泝り行に其巾拾四五間も有べし、西岸椴の木林にて水至て清冷なり。左右の屈曲凡貳里余にてチペアニ（地名）と云處に至り、今日も亦山路へ分け入なれば、例のアツシを着たり。乃路傍の木に

足見の山わけ衣袖せばみ今日や幾日を重ね着ぬらむ

注。此所船を岡へ引上置、是より陸路に懸る所なり、依てこの名あるか。チツプヤンゲなるべしと聞侍り

ける。

また山路にかゝれり、此所シュシュヤにも劣らぬ難道なれども兼て使君の通行有べき由なれば、直養夷人に命じて草を苅らせなどせし故通行至てなしやすし。又蚊も少し。山を上り又澤に下る。兩三度にてまた山を登りし處にて休む。此邊ケヨミウン（地名）と云處に使君の爲に假小屋を掛たる由なれど余知らざりければ寄て見ざりき。是よりまた壹里半程にて夷人等貳人來るに逢ふ。言語不通志敷別れ去る。暫して豐吉跡より來りて、彼貳人は西地廻浦の方より東地へ白米を廻せるなり、依てその内五升余分て取たりと。同行今宵より白米を食すべしとて喜ぶ。又其跡より來るもの共鱒の頭なきものを壹尾拾ひ來れり、是は獺の取て頭のみ食して捨たるなりと。凡獺は魚の頭のみ食して余は捨置よし、魚を祭るといふ儀にや。則肉を割て焚火にて炙るに醤なきまゝ、余貯る處の鰥味噌を附て食したり。味甚よろし。此數日海邊に宿したれども魚不足にして食せず。昨夜漸々一臠を喫したれども、鮮魚ならざりし。今日は不圖も獺のために美味を嘗めたり。又夜玄米にて醸したる白酒を持來りて船の上り場にて夷人ども打寄喫したるよし、サーブニは余が嚮道して列たるに、醴の腐りたる如くにして少し甘味あれども酸き事甚し。是より小高き處壹ツを越て凡貳里余と思ふ處、昨夜直養が宿したる小屋掛に入りて一宿せり。

注。按ずるに此處凡カアマナイといへる處なるべし。水宜敷が故土人等昔しより山越しの節は必止宿する

處なりと。

晦日朝曇りたり。壹里余にて大木の倒れたる所に休む。此木夷人ども木幣を立て祭る。又鉄の矢の根夥しく刺たり。これをチトカンヌシともいへり。

注。此樹數圍の大木なりしが、貳三十年前倒れしとかや。此邊りの土人弓勢を試んために此木の梢に向て放ち、其的をあやまたざるものは生涯如何なる猛獸に逢とも射損ずることなしと云傳へて立願し、皆試みしとかや。今其鏃多く刺たり。チトは射る、カンヌシとは當り刺せる譯のよしなり。同名トンナイチヤ越にもあり。またワーレの少し北シヤリよりネモロ越等其餘所々にあるなり。

此前後分水嶺なり。夫より貳里余躋攀してクシユンナイの川上字チペアケといふに出たり。此處に上川（ウエカハ）（傳一郎）が分間せし抗あり。余此所にて樹を削らせて。

東涯探遍又西涯。短褐孤笻涉二險奇一。甞二盡瘴嵐多少苦一。便知我亦一男兒。

此所に船貳艘を繫したり。是は直養が命して上せ置たるよし也。是より乘船したるに人多くして船底やゝもすれば沙に膝して傾くこと度々なり。壹艘の船には荷物人夫ども乘餘りて六人陸行したるよし、夫より屈曲極めて多く、三里余下りてクシユンナイに著す。

輕風一路棹二漁船一。六月荒陬未レ脫レ綿。兩岸幽禽弄二嬌舌一。留華長駐九春川。

此所夷家四五軒あれども人家は壹軒のよし、爰に假小屋を建たり、此番人を馬吉と云。上川に從ひて奥地ポ

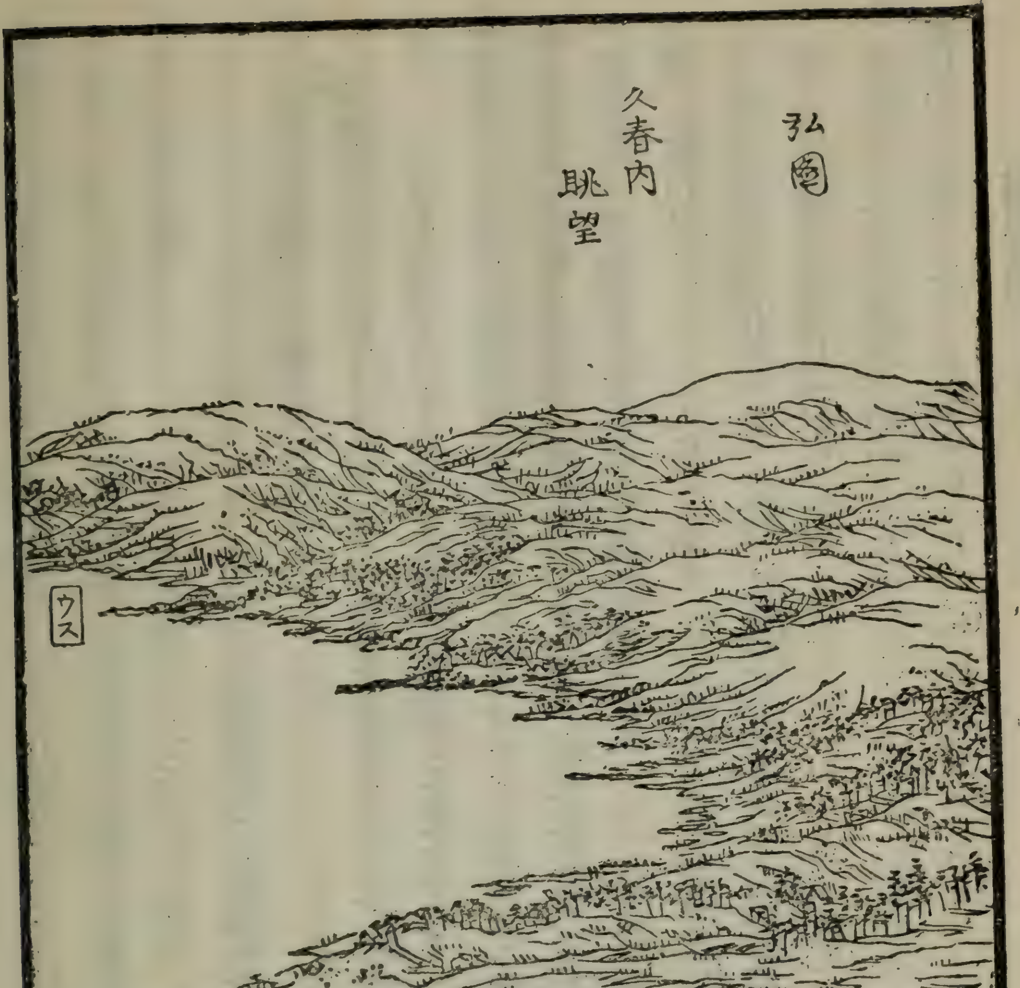
ロコタン（地名）まで行、また長谷川就作に連られ歸りたるよしなり。さてクシユンナイ川落口は三拾間もあり。ライチシカ（地名）の川落口は是に三倍すと、馬吉の物語りなり。

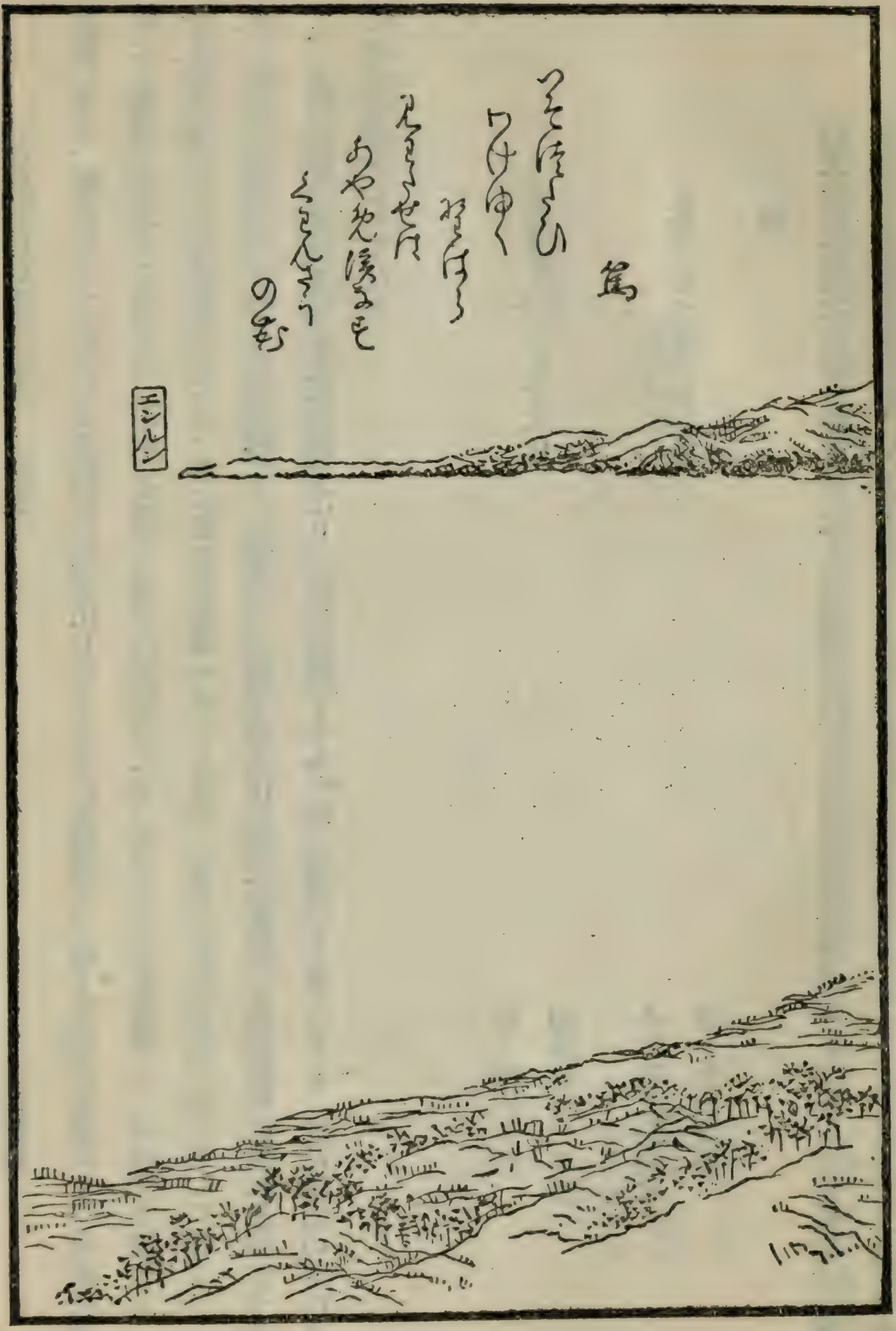
注。此所西海岸平地に一條の川あり、先生舟にて下られし流也。人家は川の南岸にあり。此處石はウスの少し北なるエンルカ、左りタクタクヘウシの岬對峙して一小灣をなすが故に波浪穩か也。故に此名あるか。クシユンは浪無と云儀なり。

夫より濱傳ひ貳里余にてナヨロに著し、當所乙名シトクランケ（人名）の家に泊す。此シトクランケは楊忠貞といへる者の曾孫なるよし。今日は直養が嚮道して家に居らず、其妻なるべし、大鍋に鰤の切肉を入、水にて煮て夷人共に振舞樣子なり。爐の端にはサアブニ（人名）ケトウシ（人名）トメカアイノ（人名）坐せり。又此家に居る白髮の老人同く坐したり。シトクランが父なるか、各海扇と木にて作りて黑く塗たる物に切身を盛て食す。各一椀ツヽ食し終りて指にて器を拭ひ、よく〳〵嘗、或は袖にてふきなどして妻へ返せり。

注。此島の風として、土人にても和人にても客ある時は何品と云事なく直に鍋にて煮振舞こと例にして、五軒有る村へ著せば五軒より一種ヅヽ食物を持來り饗せり。其食器は多分帆立貝、または木にて小判形に薄く彫り、少々持處に耳を附し物有、是をネマといへり。それにて食し畢りて、必ず本文のごとく手また袖にて拭ひ返し、洗ふといふことはなし。

妻は其まゝ洗ひもせずして箱中に入たり。黄昏の頃シトクラン（人名）歸來る。余楊忠貞が時の物ある哉一


弘図
久春内
眺望
ウス


エシルン

見致し度由、豐吉を以て言ければ盃箱樣の物を出したり。中に書附四通、最上常短(ママ)の添書あり。邊要分界に載たる管理三姓云々の花押有。唐紙半切程の滿文の始に押たり。端の方は印文消滅し、次は印文讀べし。文章は滿字にて少しも讀ぬものなり。外に貳通尺牘樣の漢文と滿字一通有。此外寶物や有と尋しに何もなしと云。楊忠貞が墓の事も尋しに今は朽てしれずと云。總て夷人は亡親の事他人より言出せば大に愁傷する事にて、其時は言出せしものより償を出すなり。故に通辭するもの頗る遠慮する事なりと。其尺牘樣のもの上包に左の姓名をしるしたり。

寬政四年壬子五月廿六日　最上德內常短(ママ)
　和田兵太夫典恒

文化五年戊辰六月廿日　小林源之助豐章
　最上德內常短

率

レ賞二赫哲來之佐領付勤琿等一抵ヲ至德捞賞烏林一査ヲ得各處各姓哈賚達一倶赴前來領賞惟陶姓哈賚薩近年以來總未二抵來領賞一每年憑以二滿文一劄付領取似レ此情形寔非二辨公之道一耳聞西數大國與二陶

姓人㆒往來是而是以頒勞
貴官如遇㆓陶姓人㆒切須曉諭令㆑伊明年六月中旬前來領賞如不㆓抵至㆒則將㆓此姓人㆒銷除永不㆓恩賞㆒
故此特諭

賞烏林官

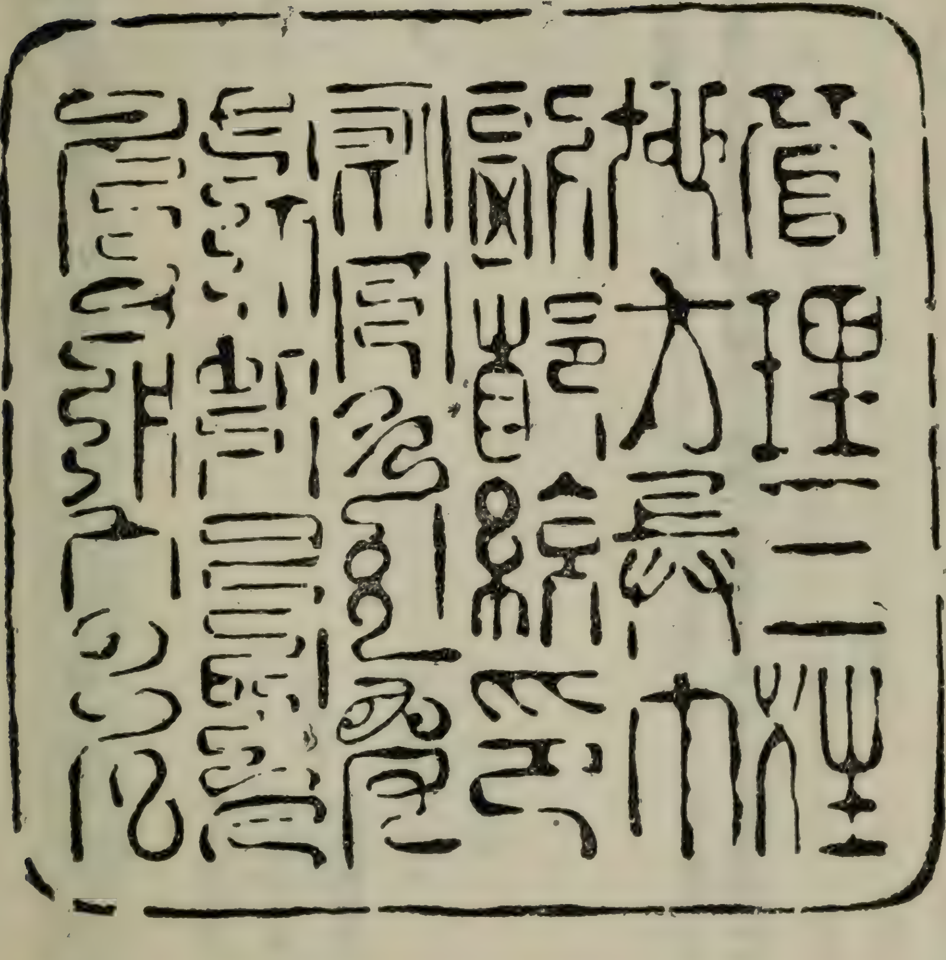
佐領付勒琿
雲騎尉凌善
防禦德僧尼

嘉慶廿三年夷則月十五

耳聞
兩散大國原因並未㆓知情㆒語未
大清大國恩賞烏林亦來者各官員以㆘直驗者不㆑負㆓自國㆒故㆓此賴一日來若有㆓順使者㆒此處原由一並
分別猜來覩直須知寔荷㆓
大清大國官員㆒

拜純

（校云。元本朱印
縱曲尺三寸一分五厘
橫曲尺三寸二分三厘）



此記之通唐人ニてあしらへ書も其思ヲ継写
所書ヲ写置へし

御用

此書付の写を以て江戸表へハ上申候得共
此方ニ而此通大切ニ渡置候事

カラフト島

ナヨロ役夷

ヤエンコロアイノ

此書ハ最上常矩の自筆なり

注。此處酉戌向の濱形にして惣て海岸崩岸多し。其地一條の川ありて其兩岸に人家十余軒家居す。ナイヲロは澤大きしといふ儀なり。

七月朔日朝晴れたり。シトクラン（人名）が家を出、前の川を小舟にて渉り濱邊に出たり。是より壹里程赤土の切岸にて潮膝上まで來る所あり、風波には通行至て難儀のよし、夫よりしてヒ、ヘツ川を越、シララヲロに到る。此處夷小屋あり休む。是より此所の土人サンケアイノを案内とし拾町程にてカウマナイサシ、また拾町も過てマヲナイ、拾四丁を過てトマリヲロ、此處川口巾貳十間程打開きたる所なり。夷家なし。是より壹里余も行て奇巖（キガン）多き處に到る。此邊海中に水豹多し、暗礁かと怪まる。此處海中へ差出たる大岩ありて路通ぜず。山へ上り又直に下りたり。道にて蝮蛇一條を打殺たり。

注。此島は寒威甚しきが故に蝮蛇は有まじと思ふに此嶋至て多し。依て島夷夏も彼水獸皮にて製せし沓を履く、敢て此沓寒を凌ぐ爲のみにはあらず。夏は蝮蛇の用心とかや。土人此蛇を恐るゝ事和人に倍し、又殺す時は天氣變り海荒るゝよしいひ傳ふ。

夫よりヲテツコロの間凡壹里余も有べし、奇なる瀑布（タキ）あり。其水巖に當りて微塵に碎けて霧となり、瀑布の形ちをなさず。又流水巖に溜り沓のさきを傳はり氷柱（ツララ）の如くなるが幾條も落あり。ヲテツコロといふ小川を渡りたる所にて、從ひ來るサアブニ（人名）を女の子の後れたる迎に遣はす。此邊より海岸浪打際をたどり絕壁を傳ひさし潮のときに逢へば全身濡ることもあり、大轉太石（コロ）濱を暫時越て巖石磐へ通路絕たる所に至る。

此處をツウカイといへるよし、此海中の岩に海獱一頭横はり臥たるを惣太銃せしに、中りたる樣子なれども其まゝ海中へ轉び落て行方知れず。兎角する内日は暮かゝり雨は降出したり。夫より絶壁を傳ひ登るに、その上泥濘深く、草の丈ケ高くして嶮惡言べくもあらず。漸々山上に登り、又澤に下り、谷水を越たるに、又向ふに大なる山あり。驚きたれども詮方なし。草根に取附杖に助り、漸々這登り黑暗中を行。深草の內樹木の横はり臥して道を障へ、少しも方角を辨ぜず。されどもサンケアイノ（人名）は獨先きにすゝみ、手鎗を道筋に建置立戻りこれを能々すかしみて深艸を搔分けすゝみ行、如此事數度にて漸々下り坂になりたる所、窮めて難所にて泥濘深く壹步を失すれば忽ち深谷に陷るべき樣子なり。余爰にて疲憊極まり、進退窮し、漸々豐吉と夷人等に引れて草の上を辷り降りぬ。辛うじて夜二更の頃にも有べし、海邊へ出たり。流れ木に腰をかけ須臾息をつき、夫より壹貳丁步して假小屋に至る。

注。此所恐らくはホントマリなるべし。此邊常に女の子并にセカチ、カナチ等迄も通行いたし道形ち有るなり。ナヨロより凢八里半計と思はる。しかるに夏の道にてこゝに日を暮し、如此難澁なし給ふこと如何にも不審なり。尤もツウカイの濱は轉太石にて難所なれども、爰にて如此困り給ふほどの事にてトツソの嶮をまたも奥深く探らんとの心ばせ如何なし給ひしやらむ。此地彼方に比する時は三分が一の難所にてもあるまじ。

此度新たに作りたる小屋にて莚圍の儘にて人は居ず何壹ツもなし、唯火を焚さしたる跡のみなり。皆々案に

相違して如何はせんと評議す。此邊蝦夷居住壹人もなし、是より先バイカラサムシ（地名）と云所にて夷住もあれども、四里余もあるよしなり。手段盡たれば今宵は只此まゝにて夜を明すべしとなり。されども荷を負たる夷人ども跡より來ることもあるべきかと思へば濱邊に火を焚て廻りに並坐せり。湯を沸すべき器もなければ曲ものに水を汲入て呑む。余は茶碗に水を入、焚火へ寄せ置たればよく沸たり、之に砂糖の少し貯へたるを入て呑たり。昨日までは燒米を一袋携へたるが蝦夷に分ち遣りたれば是もなし。雨は次第につよく、屋根漏り頭上より濡る故に、壁になしたる筵を取りて打被りぬ。此日は余并に水卷惣太、僕壯助、豐吉、サンケアイノ（人名）のみにして其餘は皆後れたり。終日の疲れにや皆々筵を被りて打臥たれども余は眠る事能はず、火に當りて濡たる衣を乾し又は臥て腹また脊を煖めなどす。サンケアイノ（人名）は少しも横になることなく壹人火を守り居たり。夜半過る頃より余睡を催し、草筵を被りたるまゝ打臥しぬ。

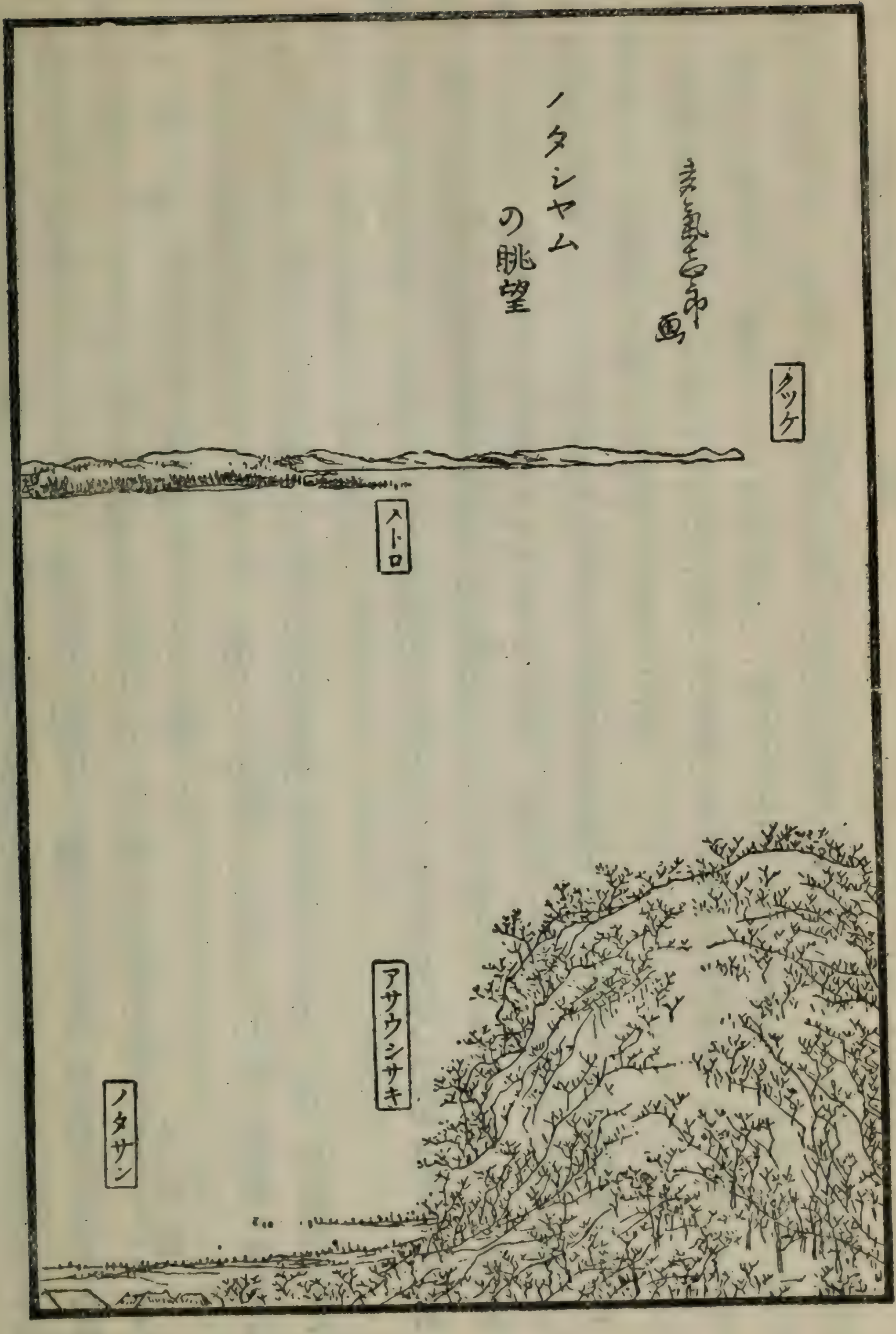
二日昨夜より雨降續きたり。余夜明の頃目覺て又火につきたるにサンケアイノ（人名）は支度して鑓を携へ出行たり。是は昨夜後れたる人足の迎ひに行くとなり。其精悍感すべし。夫より一睡して朝五ツ頃目覺て起けるに雨ますく強く降れり。兎角する内後れたる人足、女の子ども追々に着したり。豐吉夫より粥を煮て皆々食したり。昨日午飯の儘なればことに甘美なりし。夫より爰を出て濱邊を凡壹里も來りし頃、向ふの方より帆貳ツみえたり。余二使君の船なるべしと思へども問べき人もなし。稍近づきたる頃は又貳里余も來りしなり。海面纔四五丁余も隔たる所にて佇望せしに、彼船よりも此方を見る樣子なり。余如何ともせんす

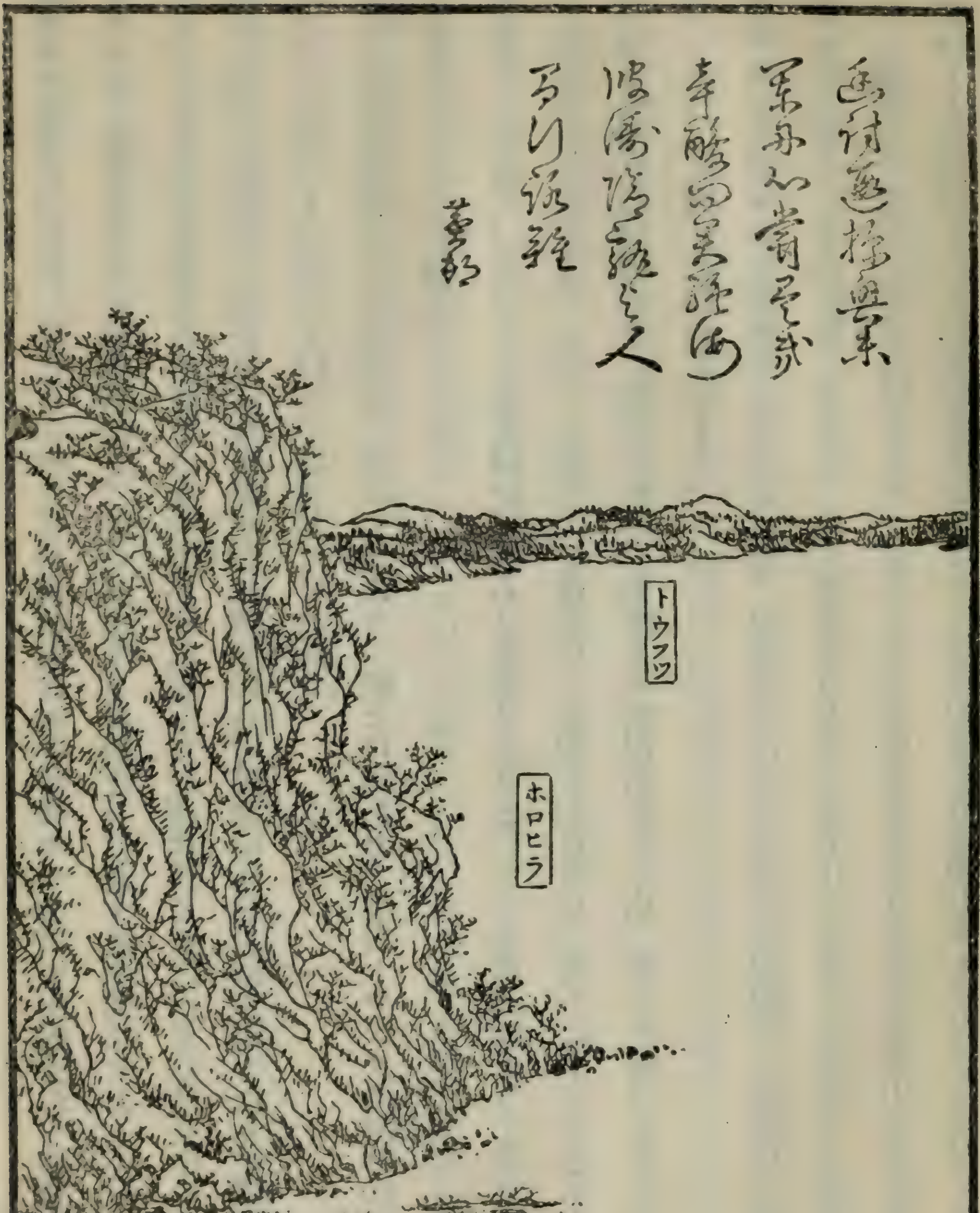
べなく惣太に命して空砲壹發を放せり。須臾にして彼船よりも壹砲を答へられたり。よりて使君の船なるべしと思ひたり。途中謁せざるれば心にかゝる事のみゆへ引返さんと躊躇せしかども、帆を掛て走る船いつ追著べき目的もなし、兎に角思ひ煩らひて又壹里余も來りし頃、夷人壹人出迎たり。此ものカモイトノチップ（大殿船）なりやと問ふに頸つきたり。夫より小川を渡りハイカシに著たり。

注。恐らくは此所バイカラサムシかと思はる。本名はハイカルサン、夫を訛りていふや。鰤番屋一棟あり。其傍に小川あり。後ろ峨々たる岩壁、地名ハイカルは春の事、サンは流れ下るといふ儀、此川春雪融する頃のみ流るゝが故に此名起りしかと思はる。

豐吉は蝦夷船に荷物を積、余より先に此所に來り居れり。余に云、かもひ殿は昨夜ノタシヤム泊りにて今朝出帆し給ひしと。因て先の船の實跡を得たり。直養は昨夜ノタシヤムに泊したるよしなれば面謁して事情をも謁したらむに、余は僅に五六里の違にてノタシヤム（地名）に至らざりし遺憾いふばかりなし。余爰にて河、平の兩氏（河津、平山）へ一書を出せり。是までの事情は直養謁したらんとおもへば、唯突岨の嶮を探りし事を述たり。爰を出て石濱を半里程過てノタシヤムに著。

注。此地西向小石濱五六丁も續きたり。右はアサウシマキ岬、左りはホロヒラのサキ、峨々と相對して聳へ、其間一小灣をなし、遥南にノトロの崎を望み、一條の川ありて、此北岸に番屋一棟、夷家五六軒を置、よろしき漁場なり。本名はヲタサンなるを、東地に同名あるが故いつとなくノタサンと唱ニ變りしとかや。


ノタシヤムの眺望
クツケ
ストロ
アサウシサキ
ノタサン


トウフツ
ホロヒラ

昨日まで使君の泊られし所なり。爰にて村垣使君はエンルモコマフにて引返され、奥地にすゝまれざるよしを知れり。爰は通行家と唱る所にて、萬づ是までとは異なり。著するや先浴せよといへり。余クシユンコタンを出てより十四日湯あみせざれば是を喜び速に浴して此夜は快く打臥たり。此夜半の頃雷鳴あり。
同三日朝雨、晝頃より歇たり。今日蝦夷船に乘て出る、風強けれども海上穩かなり。貳里余にて小川あり、トウプッと云へり。爰に上陸して明番屋にて小憩す。

注。此所西向濱、うしろ平山、椴木立川あり。此上に沼あり。地名トウプッは沼の落口と云儀なり。地名此處の川によつて起るか。

船は爰にて乘替へ、差出たる磯を傳ひて回る。此所ノトロといふ。凡貳里余もさし出たるべし。又此岬を廻りて貳里も行、トコタンに著。此處小山を後ろにして灣を前になし、後ろに小さき沼あり、鯡場所のよしにて番屋も六間に拾間程あり。辨天の社有。夷家も十軒程あるよし也。總て此邊は多分穴居することなり。雪も五六尺位より深くは降らざるよし。

注。此地濱形申酉向素濱右の方ノトロ岬、左りエンルンモコマフの岬對して突出し、其間モコマフ迄一大灣をなしたり。番屋の後ろ沼あり。依て此名起りしか。本名はトウコタンなり。トウは沼、コタンは處といふ儀なり。其上に擂盆（スリバチ）を伏せし如き山あり。土人等是をまたリイシリの妻山なりと云。

四日朝より雨降出したれども海上は穩かなり。床潭の前より乘船してトマリホ（地名）を過てラクマカ（地名）

に至る頃より雨ます〳〵降ければ、此所に船を寄て番屋に休みて濡たる衣を干などす。夫より八ツ半時頃にエンルモコマに著。此處西の運上屋とて總て西浦の漁業を括するなり。支配人、番人居住し手廣なり。夷家も三十八軒あるよし。直養の書状有て村垣使君の跡を追シラヌシ（地名）へ赴くとなり。爰にて役夷人并人足蝦夷に酒を與へて此日頃の勞を慰めたり。此運上屋の窓より高山の頂を見る。番人に尋るに夷人トウキタイ（地名）と云、又メノ子山とも云。此邊にては最高き山にて洋中より望めばリイシリ（地名）に似たる故メノ子の稱ありと。昨日床潭の後ろの方にみえたる山なり。

注。此所西戌に向ひ、ノトロに對し、左り少しの岬あり。是に依て号しか。エンルレは岬のことなり。コマフは内といふ儀か。前一道の暗礁あり、其内に大船を繫く。後ろの方ラカイノホリ（山名）ホロノホリなど云高山あり。此間より南濱ルウタカの河上へ越るによろしく、運上屋藏々合て貳拾余棟、夷家三拾六軒、辨天社など美々敷建たり。

五日今日は朝より晴たり。

注。此島濛靄深きことは四季の差別なく懸りて、晴とては十日に一日もあるかなきかの處なるが、此モコマフ二里前後の處は至て靄薄し。よつて考るに敢て今日晴たるといふにも無るべし。此邊よりトコタンまでは番屋數ヶ所あり。人烟も疎ならざれば依てしからしむるかと思はる。

是より乘船してヒロチ（地名）ヲホトマリ（地名）など過行く。何れも山の裾にて夷家有れども打開きたる

處は見へず。タナントマリ（地名）と云所に上陸して晝飯せり。其番屋にて所見を賦したり。

　處々黄茅倚二翠微一。草深古徑沒二柴扉一。枕レ灣沙岸銜レ波瘦。繞レ舍溪流經レ雨肥。窻小唯看山半截。江平相映鳥雙飛。漁村午靜閑無事。一縷炊煙人未歸。

注。此地濱形西向小石原にして後ろの方平山椴木立、モコマフより六里半陸行の止宿所になる處なり。番屋漁小屋等あり。夷家むかしはあり、今モコマフに引取て壹軒も不住。

夫より又舟に乘りて七ツ時前トコンホに著す。此處は番屋も手廣なり。

注。此所西向素濱、左りウエンヒラと云山の岬、右ヲタライチシ（地名）と云、一條の砂岬對峙して一小灣をなし、川あり。其南岸番屋一棟、板くら幷に夷家壹軒あり。申の方十余里にトヽシマを眺め風景いわん方なし。

六日昨夜半頃より雨降出し曉の頃より晴たり。前濱より乘船す。海上數十里にトヽシマを見る。ウシニコロ（地名）ナエボ（地名）マツナシ（地名）を過て八ツ時頃モイレトマリ（地名）に著す。今日經過せし所も昨日の路の如く皆山の裾のみにて平地少し。モイレトマリ（地名）は少し打開きたる處なり。此番屋にて帆立貝を燈の皿に用ひたり。風流なるものなり。

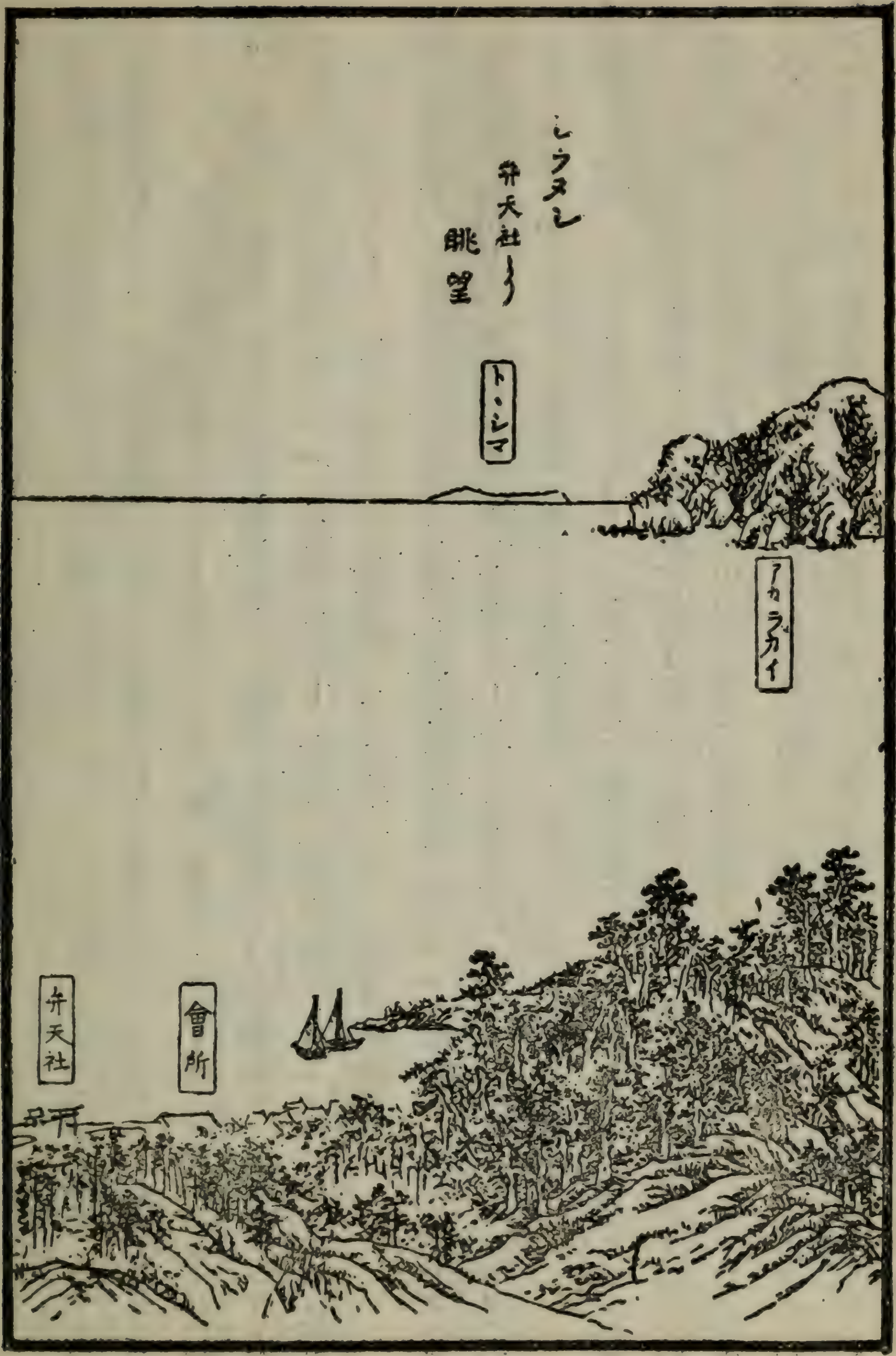
注。此處本文の如く、山の裾少し打開し處に番屋あり。余もこゝに止宿す。濱形西向にしてトヽシマと對したり。此島は全海獺多きより此名ありと。其周廻七里。また此處海上も七里有とかや。又當所の地名モ

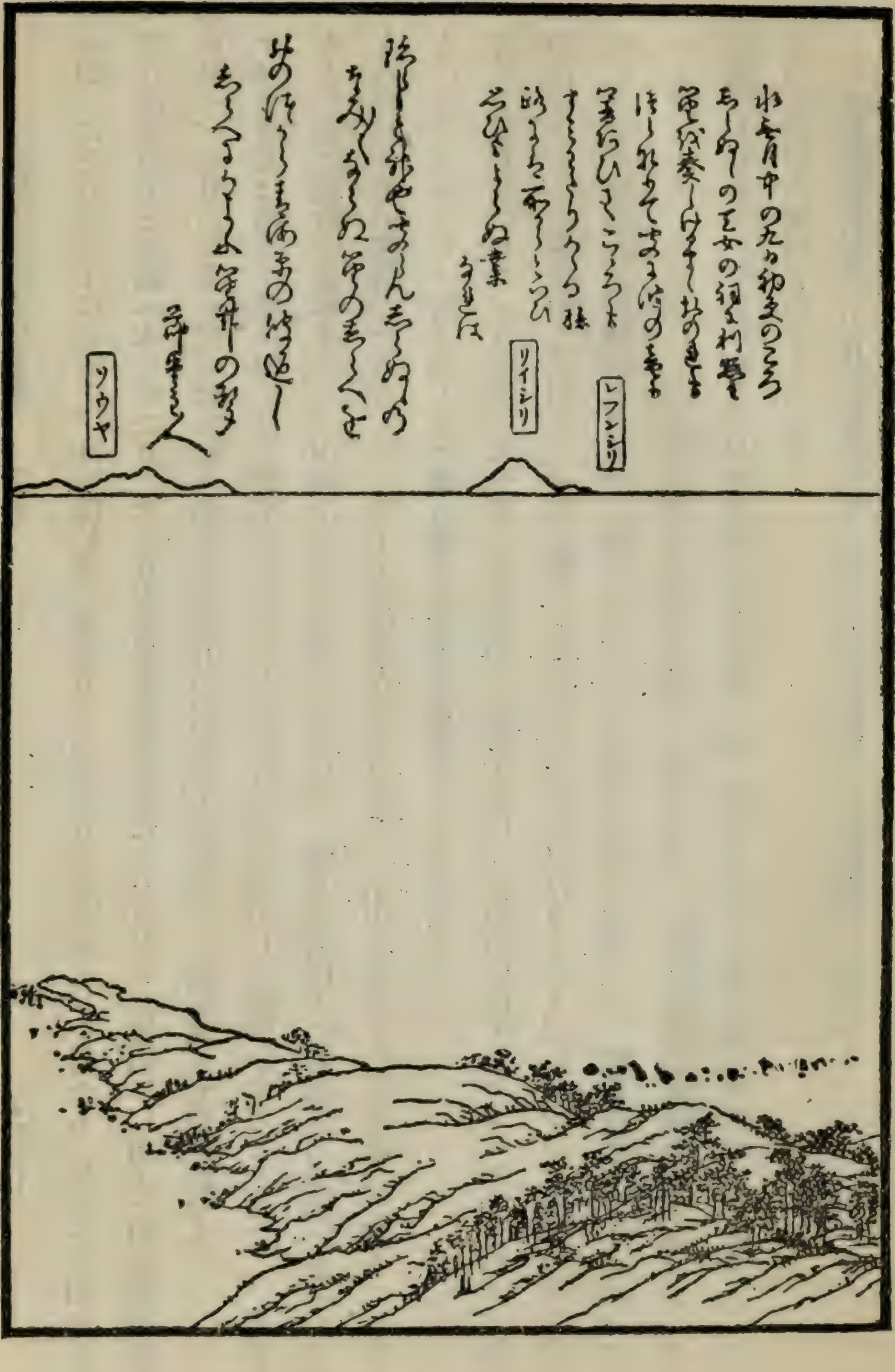
イレは休、トマリは船澗と云儀なり。トコンホより七里餘あり。

七日終日雨。今朝は荷物を船積にして余は陸行したり。このモイレトマリよりシヨウニ（地名）まで凢拾里余の間夷家壹軒もなし。中には山を遠く打開きたる處もあれど小屋掛もなし。小川所々にありて何れも歩行わたりなり。何といふ處にや小憩したれども雨ます〳〵強く降。晝食すべき所もなし。依て其まゝにて起行せり。シヤウニ（地名）の少し手前に海岸に聳へて遠見すれば屋根のやうなる岩あり。是をウエンチシ（地名）といふ。ウエンは悪き事、チユシは泣事なるよし、此岩海へ差出て海少し荒るゝ日は船を入るゝ事ならざる故に此稱あるよし、此岩の裾凹みたる所を越て七ッ時過シヨウニ（地名）に着す。

注。濱形西向、下は小石にして後ろの方峨々たる高山樅木立也。左りヤエンシユホ（地名）右ウエンチシ（地名）并び突出して、其間貳里計の間一小灣をなしたり。又末の方にリイシリ（地名）レブンシリ（地名）を見、風景いわん方なし。止宿所一棟并に夷家二軒あり。モエレトマリより凢十里あり。

八日朝より小雨、今日も陸行す。シヨウニ（地名）を出て直に屛風の如くなる絶壁あり。海岸にさし出て道通せず。少し陸の方切岸を攀上りて廣き原を四五丁過てまた海濱に出たり。是より小川三ッ四ッ越て又絶壁の裾通りを廻りてアカラカ（地名）と云高山の裾を廻る。此邊大絶壁に蝦夷松の磯馴て斜に懸りたるさま奇景いわん方なし。夫より大轉太濱を過て大なる瀑布貳ヶ所あり。唐太廻浦中にて始て見たる大瀧なり。巾凢三間も有るべし、壹ヶ所は少し狹けれども貳段に落たり。實に奇觀といふべし。此處を廻りて岩の少し出て


シウヌシ
弁天社ヨリ
眺望
トヽシマ
アカラガイ
會所
弁天社


レフンシリ
リイシリ
ソウヤ

屋の如くになりたる下に小憩す。此石隙に燕の巢あり。夷人探りて燕の雛三ツを得たり。異りたる羽毛も見へざればまたもとの處へ入させたり。夫より爰を出て壹里半余にてシラヌシ（地名）に着す。村垣使君直養等に見へ、頃日の辛苦を語り合て皆々恙なきを賀し、召連し人足蝦夷へも酒を與へて勞を慰せり。

すべて夷人は愚直小兒の如くにて愛すべきものなり。數日の同行に少しも物爭ひすることもなし。長老なりとて別に尊敬する体もなく、少弱なりとて侮るにもあらず。他人の家に入ても食用の手助けなどして家人の如し。余が嚮道したるサーフニアイノも馴良なるものにて、小川あるごとに余を負ふて渡りこし少しもいなめる体なし。若き夷人共の戯れ騷ぐを見ても唯打笑ふのみなりき。

評。去歳夏余シラヌシなる辨天社へ賽し此方彼方と眺望するに、北の方にはアカラカイ峨々と聳へ、南の方にはノトロの岬海中へ突出し、一抹の雲かと疑はる。未の方にはリイシリ、レフンシリ海の中央に靑を梳る。また後ろの方雜樹陰森たる中に聊か白きものゝ見ゆるを何かと問へば、夷人等カリンハニのイフイケと答へたり。是櫻花にして此地五六月の頃今を盛りと開くなり。よりて先生の臨春許潭の辨天社江さゝげ給ひしからうたを思ひ出し、日記のはしに書附置しが、今しらぬしの圖を製して併せてこゝにしるし、もつて此卷の厥尾となすものなり。

一枝紅艷弄二嬌柔一。六月初旬香正稠。夷虜何須詢二國境一。此花開處是　皇州。

松浦竹四郎評注

安政七庚申年正月　發兌

江戸書物問屋
日本橋通北十軒店
播磨屋勝五郎藏版

庚申新梓

一名 咜囉伊加記行
噠呂津古

北蝦夷餘誌

多氣志樓藏版

凡例

茶湲鈴木先生嚮に彼地に予役しクシユンコダンよりシユジユヤの山を踏破して東岸ナイブツに出、奥トツソの險を探し歸られし。唐太日記てふ書の其奥ヲロツコ、タライカの欠たるを可惜の餘り、自ら丙辰予役の記行の中より拔萃して、シラヽヲロに舟を求め、トツソを越、ヲロツコ、タライカの行廿余日を記し、一卷とし先生の其及ぼさゞりしを次置もの也。

書樣は閲者の讀よからんを主とし、余サケ（魚名）を大發華魚に當、マス（魚名）を小發華魚とす。又世間の識者鮏、鱖、松魚、を用ゆれども其是非はしらざれども、通じ易きに依て鮭を用ひ、又青魚をも鯡の和字なること明らかなれども、是を用ひ置ものなり。惣て草木魚鳥通じやすき字を用ゆ。

また編中圖画を加ふるは我が筆の及ばざるを知らさしめんが爲、又器財家寶は聊風土を辨へ玉はんことを欲するの意也。

此書首尾の整ざるは余函館府に納る丙辰の記行三十余卷の中より聊摘記すれば也。其微細をしり玉はんと要する人は卅卷を全閲なし玉はん事をと、安政七庚申の仲春、唐太日記刻成るの日於江戸深川伊豫橋の邊

松浦竹四郎誌

北蝦夷餘誌　一名　咜囉伊加　囉呂津古　記行

伊勢　松浦竹四郎　著

安政丙辰の春余太田某と同に隊長向山君に扈從し蝦夷の西岸を巡視し、五月下旬ソウヤ（地名）より北蝦夷嘩哈嗹島の白主江渡り、區春古潭(クツシユンコタン)江廻り、此處より東浦なる富内茶(トンナイチヤ)と云江越、其より東岸儘眞縫(マー)（地名）に到り、西岸クシユンナイに出んとの路次を議するに、東海岸は惣て素濱にして、小舟の通行快晴の時ならで難が故に、糧食は人歩にて搬運すべき由、依ては成べく人員を減じ出立せんとの評決し、惣勢土人共拾八人と定りしかば隊長一枚の規條を書され、喰糧は物かは、都てのこと倹にして旅裝も

一裝束は伴天股引下著綿腹宜羽織なし笠三尺帶桐油草鞋は腰につくべし但し夜具不用故に綿入一枚ヅヽ自分用意すべし

一茶碗一ッ箸一膳銘々懷中すべし杖は勝手次第たるべし

一蠟燭竹火綱樺(カバ)ト附木火口用意之事

一小鍋三ッ藥鑵一ッ用意すべし

一鉈(タシロ)三本間繩挑灯等は源太夫持參之事

一源太夫事手文庫程の柳行李一ッ持參鍼盤(シヽヤク)量尺紙筆等此內ニ用意之事

一矢立手拭火打扇子足袋藥等銘々用意之事

　右之外無用之品一切持越べからざる者也

と余其席に在て獨シュシュヤ（地名）の山道を越てナイブツ（地名）に出、奥ヲロツコ（地名）タライカ（地名）の二種夷の地を巡視せんことを乞ふに、隊長是をゆるす。依て六月五日先人夫の者を定むるに、當所惣小使ヅクニウ（人名）とロレイ（地名）のアカラカイ（人名）は余丙午の夏此地にて遣ひし事も有る故に是を乞ひ受、餘は支配人の意に任す。其出す處はタコイ（地名）のモンキツ（人名）ウエンゴタン（地名）のヲケノンカラ（人名）はシュシュヤ越の事を能く案内のよし、又シラヽヲロ（地名）のウイキシユ（人名）は奥二種（ヲロツコ、タライカ）夷の地を案内の者とて出す。此行惣而容易の事ならざれば、喰物も土人共に魚類草根ともに其地の物を喰し、聊か心神を安ん爲に一嚢の米と、一椀の鹽を簡し、行暮れし處を宿と定めて

七日出立してシュシュヤ（地名）より山越、ナイフツ（東海岸地名）に出て、シラヽヲロ（地名）え著し、

　運上屋を出立してシュシュヤより小舟にてコイ（地名）に到り、是より山道タコイ（地名）に出。是より小舟にてナイブツ（地名）ゟ下り、海岸まゝシラヽヲロゟ陸行のことは、茶溪翁審に誌されし故に略す。（但し日數六日の間也）

十四日（快晴）此シラヽヲロ（地名）のクロスケ（人名）と言者の妻はタライカ（地名）の産にて、其故度度クロスケ（人名）は彼地ゟ行しこと有る故に、是を賴て夷船一艘を備りて乘出すに、此前灣を出て海岸の

字一々数示せられ、子一枚に几四十丁ばかりを過るや、眞縫の前に到る。爰に川有、其北八丁斗も行や、ヲハコダン（地名）といふ地江甲寅のとし兩輶軒使建立の鹿島の神の社の有ける、其下に船を着て土人等に一柄のエナヲ（木幣なり）を作らせ

　行先のほどは我しもしら浪のたち隔るを限りともせめ

と蜂腰一首をしるし玉垣に建添、越し方の事ども祈り出る也。（廿丁）輪荒（八丁）チトカンチン（一里）クシユンヘシといへる岬を廻りて（五六丁）チカヘロシナイ（地名）に着る。此處夷家二軒（イサエコカリ、サシテトル）有。上陸して風筋を見合せ、また一柄の削花を作らせて其柄に

　あやうくも立しら浪に船うけて突岨の崎の風を待かな

としるし波底に投じ、互に餘情を殘し揆出す也。（十丁）左りはソエンコタンノツといへる岬にして前に一ツの大岩有、種々の水鳥の群居るに、エトヒリカの一群居たりしを土人等指示し言ふに、此鳥は時々何處より飛來り、此處とシントコの二處ならで留らず。又纔時にして何處へか飛去れりと。其餘種々の見馴れざる鳥もあれども洪濤に漂はされ、會先をいそぐが故に寫眞することをも得ず。

エトヒリカは厄土晉布島に多し。エトは鼻、ヒリカは美しき譯。此鳥嘴紅なれば号也。制弗加諸島の婦人、此嘴を以て衣上に綴り飾となすとかや。又西洋禽譜に着色の眞圖を載てゼイパペカアイ又ハヘカアイ

マリンコダン

マアサトツソ

又イクルと号、環海異聞のヲクチヨとしるすも是也。

廻りて（五六丁）ソエンコタンと云、此處二丁斗の砂灣有、其左右峨々たる崖にして爰にて道盡るよし也。モンキツ（人名）の言に、鈴木ニシバは此處まで來り、こゝにてトツソの御山を拜し歸り玉ひしと。

其名義イシヨウエンコタンにて岩石惡き處といふ譯なる也。

過て（十丁）バツテレチシ（二十丁）モユウトツソ（十丁）ニヲイトマリ絶壁傳ひ（七八丁）まゝモエレトマリ（地名）此處一條の瀑布有、高數百丈も有る哉と思はる。それを船中より眺望するに、恰も中天より白布を亂せしが如し。過て（十丁）突岨、此處神山の第一岬になり、海中に突出して左右よりの洪濤岩に當りて其勢ひ膽を冷し、簇々たる巨岩怪石の間ニ入る。潮の響き坤軸を碎かと怪しまれ、潮に曳れて小石の轉ろぶるは心神を彈指の間に凄涼しめ、頓に海外萬里の覊情を起さしめ、其變化禿筆の及ぶ處にあらずと雖も、其時頓に二絶を得しまゝしるし置ぬ。

断崖千万仞。飛瀑自中天。華嚴兼那智。豈能得比肩。

怪岩怒似狼。奇石伏如虎。撑舟此際過。心悸栗双股。

其光景恨むらくは岸より三四丁を隔て小舟を遣るが故にトツソの全形を見ざる事をや。土人等一同烟草一撚を海に投じて過。（十七八丁）

トツソとは峨々たる断巖にて、是より先道絶ると云儀也。

ウテクイナウシ（七八丁）越てノボリホ少しの沙濱也。上陸す。土人の言ニ奥より來るものはトッソを安く越さし玉へと祈。奥に入る者はトッソを安く越しことの有難とて、此處にてヱナヲを削り、御山に手向る也とて、また一柄を削りければとり敢ず、

神も猶しろしめしけむ國のため世の爲越る人の心は

とするし、其處の濱に立添へ、晝飯をして出船せんとするに、ヅクニウの云に、もはや貯の煙草も漸々十二三把ならでなし、是より奥は何にせよ煙草か針ならで用を辨じがたければ把別をして持行べしと、一把を二把となし出て、是より（十丁）イサラキ（七八丁）ニンテルウシホ（十二三丁）ヲチヤラセナイ（五六丁）ヤウコルトイ（廿丁）イカ、ラウシ等こえて（七八丁）マリンコダン江着す。

東向濱形にして左右大岩岬、其間一灣をなし川有。鮭、鱒、鯇等多き由にてフヌフの土人イウウノの悴（キンロカリ）を連て出稼す。此川魚類の多きことは我が休らふ間に六七十尾を捕りて船江積たり。今日も早七ツ前と思へども、明日の天氣心もとなければ、是非フヌフ（地名）までと出船するに、（五丁）左り岸なるヤーサトツソ（岬也）と串赫黄色の峨々たる火焰の如き岩岬を廻り、針を北へ〱と指て行に、チホウトツソ（地名）ワートツソ（地名）インカルシ（地名）等、いづれも峨々たる岩壁、上は椴、蝦夷松等陰森たり。凡二里半と思ふ比岸に十余間とも思ふ黒く土手様の物有て、傍に雌雄の熊児を連て遊び居たるが、土人等是を見るよりも弓に箭をつがひて白眼ふ間に、其櫂の音に熊は山に飛入らんとする、其跡へ放ちし箭は落、終に

萬里單身輕
似萍飄
海暫停舲
北去天河遠
牽牛
織女星
市川

望をうしなひしが、彼黒き物は寄り鯨なりしとかや、息氣近くに隨ひて甚敷、中々喰るべきとも思はれず。扨此邊にて金烏も西山に傾き、少し暗く思ふに、後ろの方には胡沙隱れに一輪の月上り出たりけり。其光りにて探行に、ホヤンケイ（地名）マトウシナイ（地名）ニイランケウシ（地名）フレチシ（地名）アカラ（地名）イコモシ等を越て（從マクシコタン凡四里）フヌツフ江着す。

寄り鯨といふは、氷海始て洪濤の爲に破れて、其間ニ打れて死せしが、四五月頃に岸による也。依て必ず首夏に在るもの也。

此處人家四軒（アイカアイノ、ヲノコトイ、イホウノ、シンコクサ）小石濱也。土人等何れも外へ鰊漁に行たりとて皆明屋に成たり。當所は鯡と水豹は多けれども、川魚は至て不足なりとかや。惣てトツソ岬より南は皆トマリ江復從すれども、此處より奥は其風俗多くタライカニ類し、古着等も多く山靼の物を用る也。扨爰にて一宿しけるに、夜半頃より白雨頻りにして椴皮葺の屋根より處々漏りて寐ることも成難きが故に、早より支度し歸りの糧と鹽を殘し置、舟を岸に曳揚置て

十五日一同に雨用意にて出立するに、是より海岸惣て轉太石の上に、一閑二閑も有る寄り木多く打上、其間にはライムニキナ（蔽の類）ホラヤキナ（苦蕒菜の種也）等鬱叢たり。分行程に、東風いよ／＼嚴しく、桐油は揉み破れ纔に肩にのみ殘りたり。海岸を眺るや、千疊敷共言る平磯かと思ひしに、さはなくて數萬頭の水豹、海猪等が一面に頭を并へてギヤア／＼と孩兒の如く啼けるが實に氣味惡敷ものなり。風は愈募り、吹

倒されん斗の處を、互に手を見連れしが、頭より餘り水の滴るまゝ撫て見たれば笠は吹飛て只紐斗ぞ殘けり。辛うじて（従フヌフ二リ半）トツソサン（五丁）チヘカリソウ（四丁）等を過て、樫保（カシホ）江着しぬ。此處兩方高山の間に一條の川有、（巾十五六間）其西岸に人家三軒（チエーカルシ、ソキンカリ、ヤイトイレメノコ）到るや、一同に出迎、家に入るや、健忘（キヌケ）の樣になり、火邊江到りしに、欠伸（アクビ）斗出、面色靑く、物言難し。左候を土人等我々が腹を溫めさせハー（卷丹の根）を粥の如く湯に涌し呑し吳けるが、是にて少し心地能くなりける也。一椀の米を湯にわかし、鰊の卵と、水豹の油を入て（此地粥にせよ何にても魚油を入れ喰するは寒をふせぐ爲のよしなり）一同の者等にも少しヅヽ振舞。ヅクニウは陣羽織を着し我が傍に坐し、慇懃に貴人（エシバ）は此度蝦夷地が江戸の御料に成りしに依て、奥まで見廻りに來り玉ひし也。是より後もます〳〵御上の掟を大切にせよと、眞顏に成て言聞かし、烟艸針等を遣はすに、彼等よりは、我々の饗應にトマ（延胡索）ハー（黑百合）の類を煮、是を搗てチエトイをとかして入、其に鰊の卵と油を少し入さませし也。恰も蕎麥煉の樣になる也。是をネマ（盆の類の器也）また海扇（ホタテカイ）にもり、水豹の肉、鰊の卵の干たるを膳等に盛りて家々より持來り吳けるが、余も始めには臭氣に困りしが、後には馴れて甚宜敷ぞ思ひたり。

チエトイとは白き土なり。艸の根を喰する時是を入れて喰せば毒にあたることなしとかや。カラフトにても眞縫（マーヌイ）なるシコマナイに有。東西蝦夷地にては數ヶ所有。余此後は好て此土を喰するに馴たり。此ねりもの夷地第一の饗應（モテナシ）のよしなり。

夕方霽たる故、土人等樺(カバ)ありしを以て小舟にて川筋ニ逆(ノボ)り、鱒を捕來るに、纔時の間に其舟も沈む斗に積來り、是にても此地魚類の多き事しらるべし。余は今日着せしより寐たるが故、夜半より目覺、何角と思料しけるに、水聲の譟がしきと熊の子の頻りと吠けるに眠りもやらず有。例の蜂腰と一絕を得たる故、樺灯(カバアカリ)しもて傍の柱にしるし置ぬ。

　夕ごりの胡沙はれ月や澄つらん　ふせ籠の熊の聲立るにも

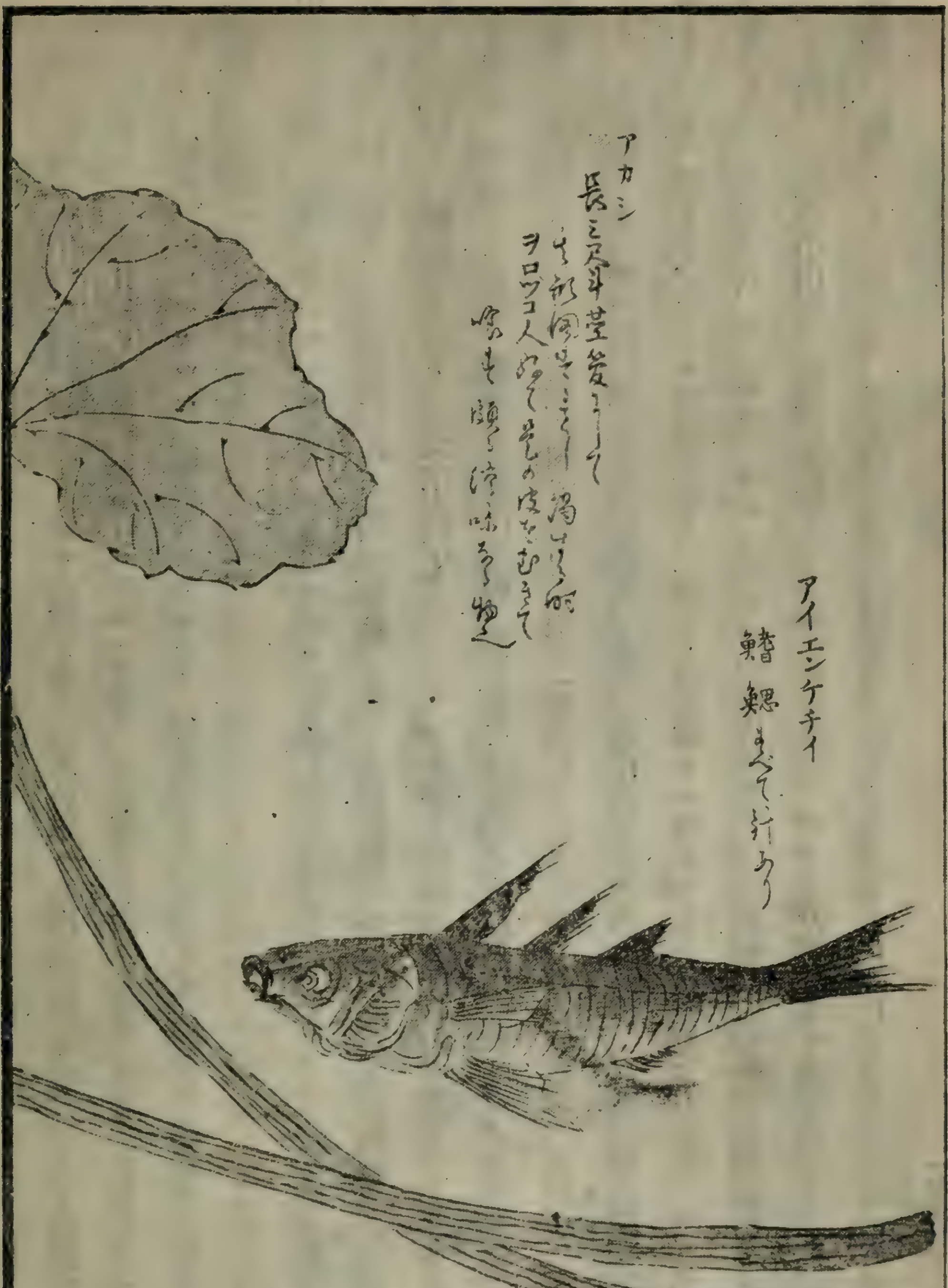
月色林巒渺。尖寒雨後天。溪痕三尺漲。溂々夜難眠。

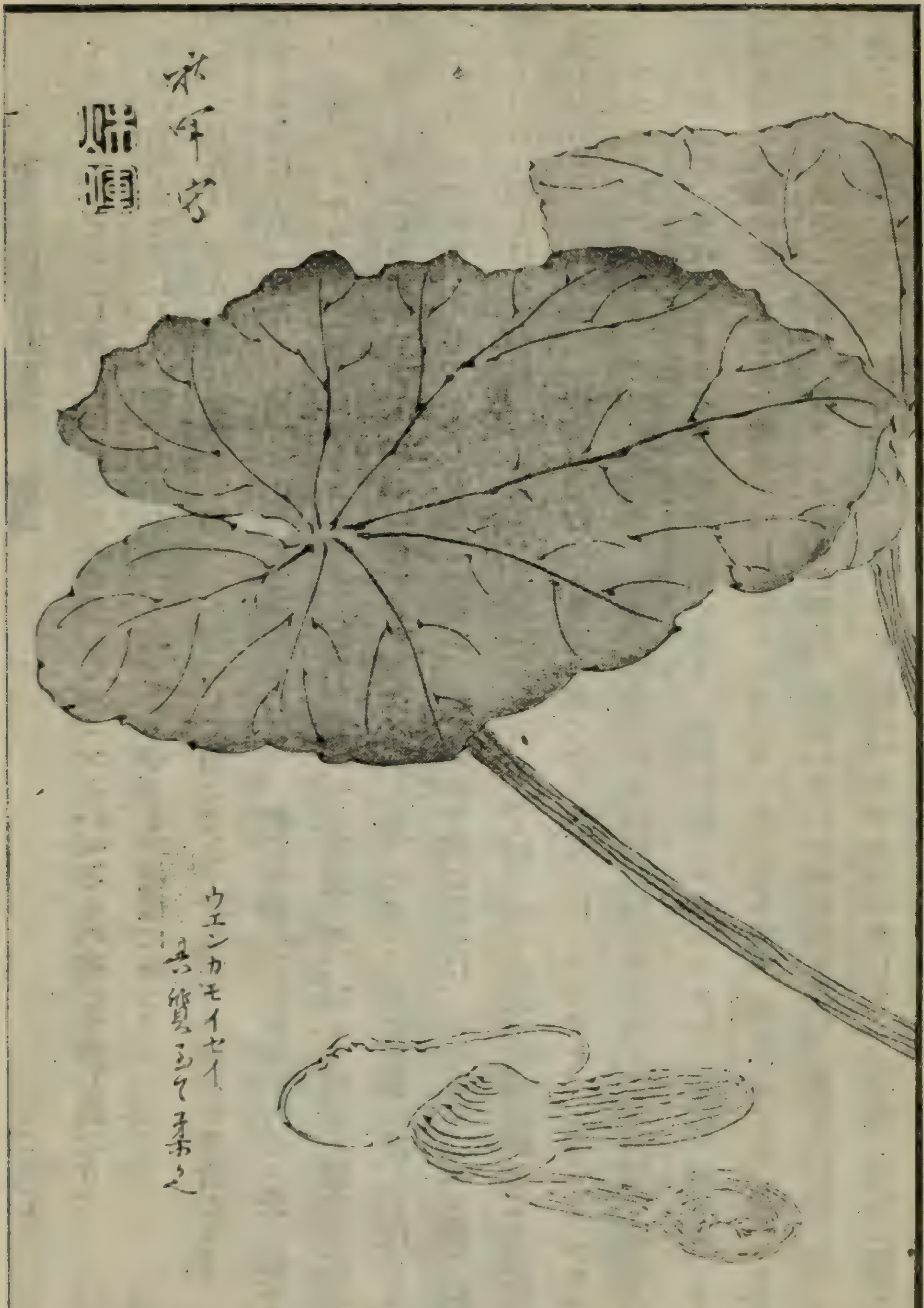
十六日一椀の粥に鱒數尾を喰し、晝飯には水豹肉を各袂にして出立しけるが、今日は昨日に引かへ流石六月土用の事なれば、寒しといふ事もなく、勇み立て行に、上は峨々たる高山、下は小石原に寄木多く打上たるヘロシユマ（地名）クタトマイ（地名）ヘモヨウナイ（地名）カムイヒラ（地名）等越え、凡二里斗にてノブカ（地名）と言に到る。此所少しの出岬ニなり、越てシンヌブカ（地名）ホロナイボ（地名）邊江到るや、海扇また海螺の如きもの石に化したるを見るまゝ、珍しさの餘り拾ひ袖に入れしが、頓て兩の袂重く步行もはかどり兼しまゝ、其拾ひしを又一ツつゝ投捨行けるも可笑(ヲカシ)くぞ覺ゆ。過るや、セツシソウ（地名）ヲヒシヨマナイ（地名）フンベシヤンケナイ（地名）此邊にても寄り鯨二頭を見たる。過て（從ノフカ三リ）ウエンコダン（地名）江着しぬ。

此處山間に川有、（巾廿五六間）其兩岸に土人等二軒住す、（サネキリフイ　イサントロアイノ）越て休らふ

に妻は我にトマハーを出し一同江は鱒を出し、いと叮嚀に世話し、余も草臥はしたれども、明日の都合にとシルトル（地名大川）を越て暮までと歸りの糧と米八合斗を預ケ置出立しけるが、行まゝ其海岸には昨日の風にて吹揚られし小貝多く、中にも見しらぬ珍と言は、次に圖する如き貝也。扨是よりキイヌヘツ（地名）フシコフ（地名）ナンペタウシ（地名）ソーマナイ（地名）ヲチブンナイ（地名）等越て（従ウエンコタン二里斗）シルトル川端ニ出る。

川巾百余間、此邊り第一の大河也。其邊りは渡り難きが故に西岸崩崖の下まゝ上江登るに、崩崖に上燕の穴有、我等が行に驚きてみな飛出しけるが、其數幾千萬とも知れ難し。我等が頭の上を飛廻るに、颱風に秋葉を吹まくが如く、眼眩斗りなり。五六十間下りて土股蕚を多く拾ひたりけるが、其ます〳〵多きに氣馳みして皆捨置、五六丁上る哉、鷲多く川瀬にて鱒、鯇を抓て飛立ける様に見えければ、クロスケ（人名）の云に、彼邊りは浅瀬なるべしと、其處に到て見るに川巾二百間にもなりて浅く見えけるが、其川中に熊壹疋渡り居たり、左候哉、土人等一同に勇立て弓に箭をつがひ、躶に成水中ニ飛入る哉、其音に熊は驚て足早く向岸江飛上りけり。然るやクロスケ其筋を便り、恐らくは此邊りや浅からんと着物をさし上て、四人手を引連彼方江越見るに、アカラカ、モンキツ、ヲケノンカラの三人は來らず。如何なしつらん先濱に出んと、叢の中を分下る哉、一條の小川有。此處に見馴ざる小魚の居ければ、ヅクニウ樺笠もて是を救ひ上るに、鐵色にして横筋有、腹背ともに針あり。是本邦の糸魚の種類也。是をタライカ人に問に、タライカ湖には多しと。方言


アカシ
鰭 鰓


ウエンカモイセイ

アイエンケチーと云よし答えぬ。蝦夷地是に類してロコンといへるもの有ども少し異なり。

糸魚は古名糸まきにして、横すぢ糸を卷たる如きより号しと。越後に多し。

濱に出て見れば、三人の者は荷綑もて寄り木を筏にして越たりと。我等が下り來るを待居たり。扨是より先は小石一ッなく、別ても引潮にて至極歩行よく、依て今宵は足を限りに行んと急ぐに、タカリナウシ（地名）ニヤッセル（地名）ヲーコーナイ（地名）等いへる處過るや、向より弓箭と槍を肩にして來る者有。誰ぞと問ふにウエンコタン（地名）のサネキリフイ（人名）なりと。余に慇懃に禮ししば〳〵ウイキシユ（人名）ツクニウ（人名）と話しをなしけるが、後ヅクニウ我に語るは、シレトコ（カン岬）に異國船二艘來り日々上陸しけるが故に、ヲロッコ（人種）タライカ（人種）等も彼地江出稼に到りしもの皆逃來りしと語りたりと。夫に附ても一歩も早く行んと足元の暗くなる迄急ぐに、ヲカチナイ（地名）イマウチナイ（地名）フンベランケ（地名）クッフカルウシ（地名）等惣て此邊山根に處々寄り木もて三角屋の建有りけるが、其故を問ふに、是は多分タライカ人等水豹獵に來り、此内に居てチヤマタといへる物を懸る處なりと、また此邊海岸に沙噗の如き丸き赤き物多く浪に打揚られ有たり。土人是を割り、潮にて洗ひ余に與ふる故喰しに、其味石渤卒に異ることなく、後タライカ人に聞に、此邊の者口中の病有る時は、是を水に浸し置、その水もて洗ふに功驗著しとかや。同じ沙濱まゝキナウシ（地名）ワッカウフウレナイ（地名）過て（從シルトル几三里半）

サッコタン江着。此處川巾五六間、淺瀬にして鱒鯇多く背を顯して溯り居けるが、アカラカ（人名）モンキツ（人名）は先に此處に來り、寄り木もて其魚を二十尾斗捕て、幸爰の山根に嵒の有に、其陰に宿らんと云。それと先評決し一夜の枕を嵒根と定め、一同其無雜作なるに風と思ひ當り、月影にて一首の愚詠を燒さしの炭にて

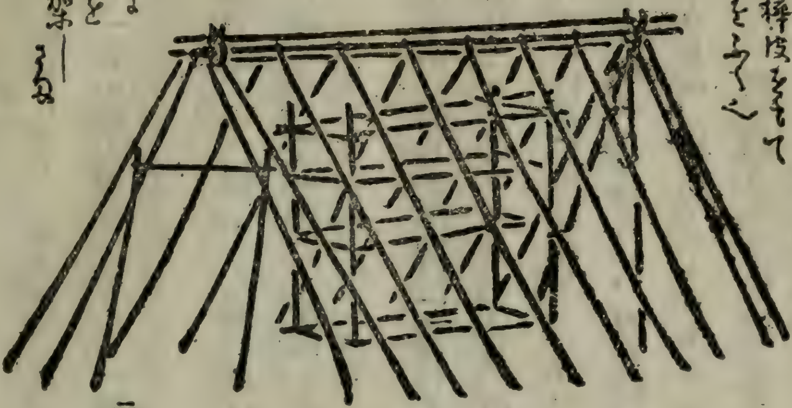
　歸りくる鷲やねぐらに迷ふらん礒の嵒はは我かり寐せり

と岩面にしるし寐るや、夜半過より微雨（ビウ）しめ〳〵と降來りしかば、桐油むしろまた欵冬の葉等を被り立ながらに粥を喫して、

十七日出立しけるが、同じき堅沙にて歩行よく、ホンサッコダン（地名）トナイホ（地名）等越行しや、岸に小舟一艘引上有たり。クロスケ（人名）の言に、是はタライカ人の船なれば是に乘りて一同の荷物を積行べし、其内二人斗は空身にて陸行し、ニイツイ（地名）江ニシバの來りし事を早くしらせよとて、ウイキシユ（人名）モンキツの二人を走らせ、四人は此船にて乘出しけるが、霧雨降來りけるまゝ肩斗の桐油を被り、其隙よりコタンウトル（地名）ウホッセイ（地名）シユマネッフナイ（地名）等敎示せられ、浪もいよ〳〵と大くなり、今にや船を倒さんと思ふ事も有けるが、クロスケ、ヅクニウ勢限りホホウ〳〵と言て捩行に、船にはます〳〵浪を打込しかば、其垢を汲捨んとせしを察して、クロスケ直に鍋を取て我に與へしが、至極是は垢水（アカ）を汲捨るに宜敷物也。是等の即智は事なれたるより出るものと思はる。辛うじて（從サッコタン四

タライカ人
より木を以て丸小屋の架をし
樅皮または樺皮をもて
屋根をふく之

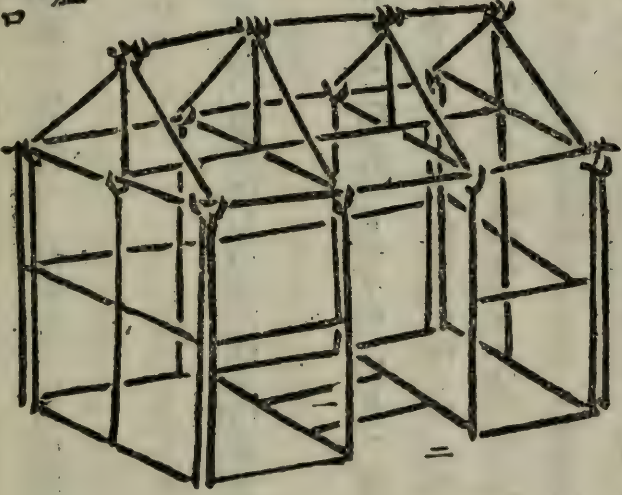
但し内は
大棚を
架し
有之



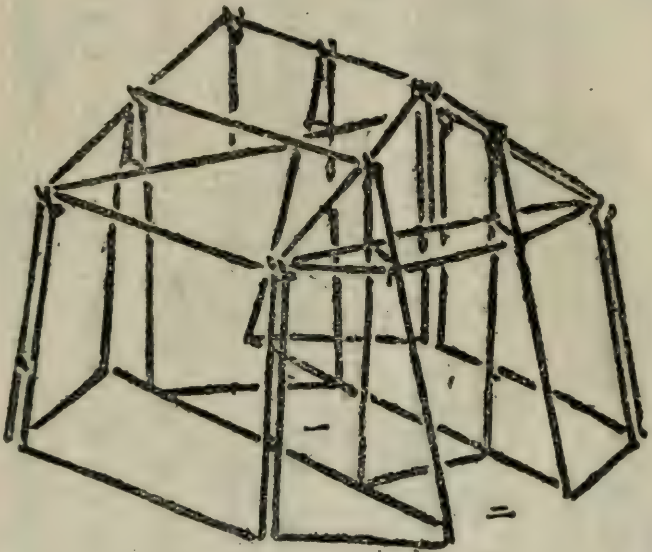
タライカ人 并 奥四ヶ村 家の建方
屋根は木皮をもて葺

入口江
廂を
架る
之

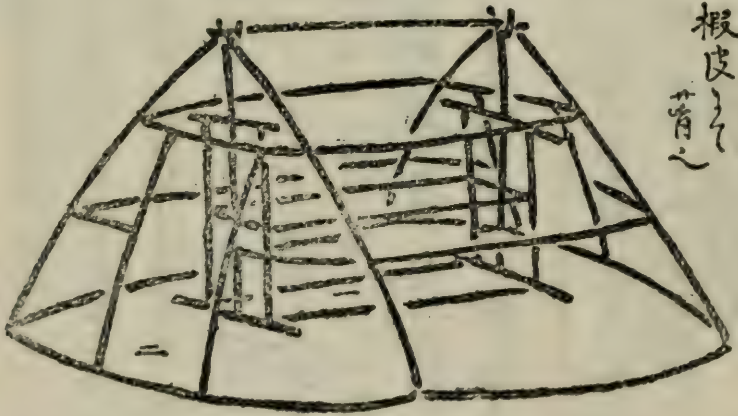
一印 爐
二印 入口



ニクブン人家建方
屋根を椴皮之



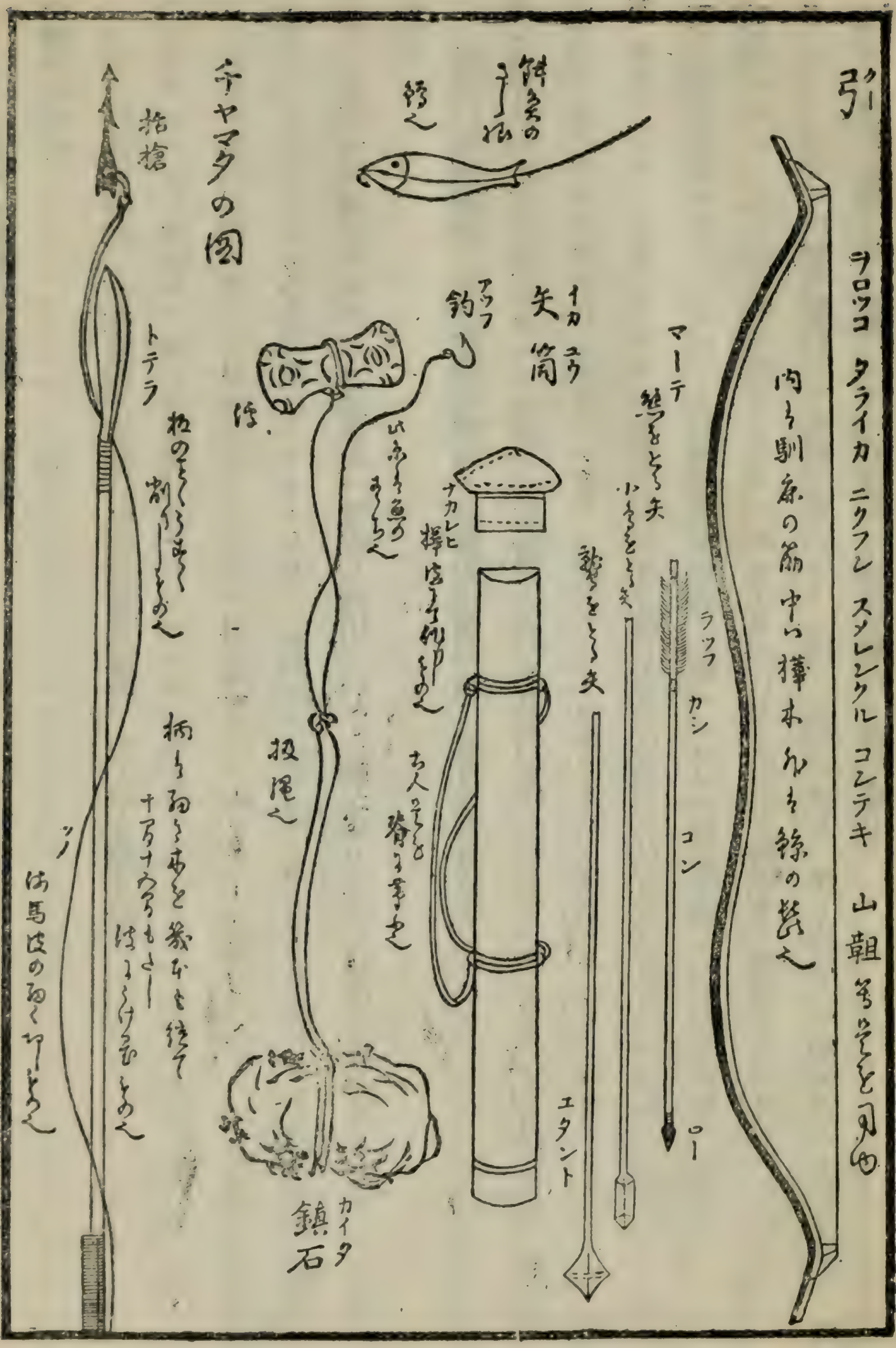
ヲロツコ人家建方
椴皮ニて葺之



里半）

ニイツイ（地名）の川口に到るや、此處平山の間に一條の川有、（巾卅間斗）素濱也。其處にタライカ人二十人ばかりヲロツコニクブンも出たり。ウイキシユも立並び、我が到るを待たり。然れ共洪濤の爲に岸に着がたきに、タライカ人五六人直に躶に成、海に飛入來り。纒を我が舟の鷁首に繋ぎ岡より引しめ、艫より打上たる浪に連て岸に押上、其引浪に取られざる樣になしけるが、其働實に一浪にて十餘間是を岸に上せ、無難にとめたる事、手錬とも何とも言がたし。我等は漸〳〵生る心地してハツ、ランゲ（人名）の小屋に入休ふに、此處タライカ人七八軒出稼する由にて、家々より喰物を帆立貝、またネマ（盆也）等へ入て一同江振舞、我にはトマハー等を出しぬ。扨ツクニウは此者等にシレトコの異船の事を尋問するに、始めの內は上陸致せし時、此方より水豹肉を遣すほどヅヽ持歸りしが、後には彼等が勝手に持歸る樣になりし故、少し氣味あしくなり歸り來りしとかや。

夕方ハツ、ランケ（人名）我等が馳走にとて弓箭を持出しが、程なく馴鹿一頭を荷ひ歸り、直に屠りて振舞ふに、鹿肉より堅き樣に覺えたり。傍にニクフン人が居たるは好て喰けるに、ヲロツコ人は是を不喰かば其故を問ふに、彼等は惣て馴鹿をつかふが故に、誓つて喰はずとかや。其持歸りし弓箭を見るに、內は馴鹿の腸もて張り、中は樺木外は鯨の髭、是を三枚合せて前に圖する韃弓の形に剣し物也。惣て是等も自らの作なりと。又矢を見るに、其根は自ら船釘等を拾ひ、それにて作るとかや。韛といへる物を見たるが至極手輕き



弓
クー
ヲロツコ タライカ ニクフレ スメレンクル コムテキ
矢筒
イカユウ
釣
マーテ
ラフフ
カシ
コン
ロー
エタント
トテラ
鎮石
カイタ

仕懸のもの也。

呦々駝鹿嘯前灣。支枕時聞夢寐間。怪底腥風迸爐畔。毛人半夜獵戈還。

十八日タライカ人共來り、是より先我が僕ヤーシユといへるものとヲロツコ、ニクフン等を壹人ヅヽ連、それに荷物を負はし行と懇に申吳ける故、それ等を雇ひ出立に、ウツナイ（地名）トイクシ（地名）等云處過て行や、向ふの方より小舟三艘にヲロツコ人共、水豹油を積て來に逢ふが、是はトマリ（會所元）ヱ交易に行由、依て余此處まで來りしと言事を一筆記し向山といへる殿が來り玉ふに逢はヾ渡し吳よと託して其傍の岩面ヱ、

風倦汀沙腥撲面。天邊指顧寒雲頽。洪濤洶涌翻坤軸。猶有漁徒皷掉來。

誌し立分れんとするや、ツクニウ樺笠一枚を貰ひて我が此間の風に笠を取られしを思ひて吳ける也。過るや、岩壁の下傳ひホヌシホクシ（地名）ノテド（地名）ハイカラコダン（地名）キルヽ（地名）モエンルン（地名）等越て行や、此邊にチライ（魚名）釣が多く流し有るは凡七八尺も有べきもの一尾かゝり居たり。見るに鱗は恰も蟒蛇の如く、如何にも氣味惡敷もの也。（從ニイツイ二里余）過て一すぢの川有、此處を惣而此島にては人家の在る處ヱ至る哉、家々より何にせよ喰物を持來りて饗應するが風俗（ナラハシ）となれり。

チライ（魚名）は蝦夷語にして松前方言いとうと云。石狩に多し。少し毒有とて喰せざるものもあり。內地未だ見ざる魚なり。近日上梓の石狩記に寫眞を擧れば爰に略す。

コタンケシと云人家一軒（カニクサアイノ）妻と妾と老母と子供と十二人にて暮しぬ。其丈六尺三四寸、滿州の古着を着し頗る勇壯の男也。我が至るを聞、門口に靑草を敷、八人の子供を一連に座（スハ）らし、我を拜さし、家の傍にヲロッコ人等が出稼するを呼遣ふ事己が奴僕の如し。頗る用るに宜と思ひしかば、別に遣し物等致し、來春はルモウ（人種）ニクフン（人種）に入らん事を談ずるに、我だに行かば惣て奥地の者皆知り合が故に、外には誰をも連るに不及と大に悅びしかば、又一枚の單物（ヒトヘモノ）を遣したるに、歸るさ其却禮にとて、弓一張と矢三種と呉たり。扨是よりバラコウ（地名）チシトモウシ（地名）ソウニ（地名）ヘセトイタイウシ等言岩壁の下を行に、沙滿る時は波浪岩根を打て通りがたし。其暇を待て過行に、奥の方目に障るもの無りしが、卯辰の方に當り一點の靑山波上に梳（クシケツル）を見たり。是を問ふにシレトコの由答たり。凡此處より直經凡二十里位と思はる。依てまた一絕を賦し得、休らふ處の木の皮を剝てしるし置たり。

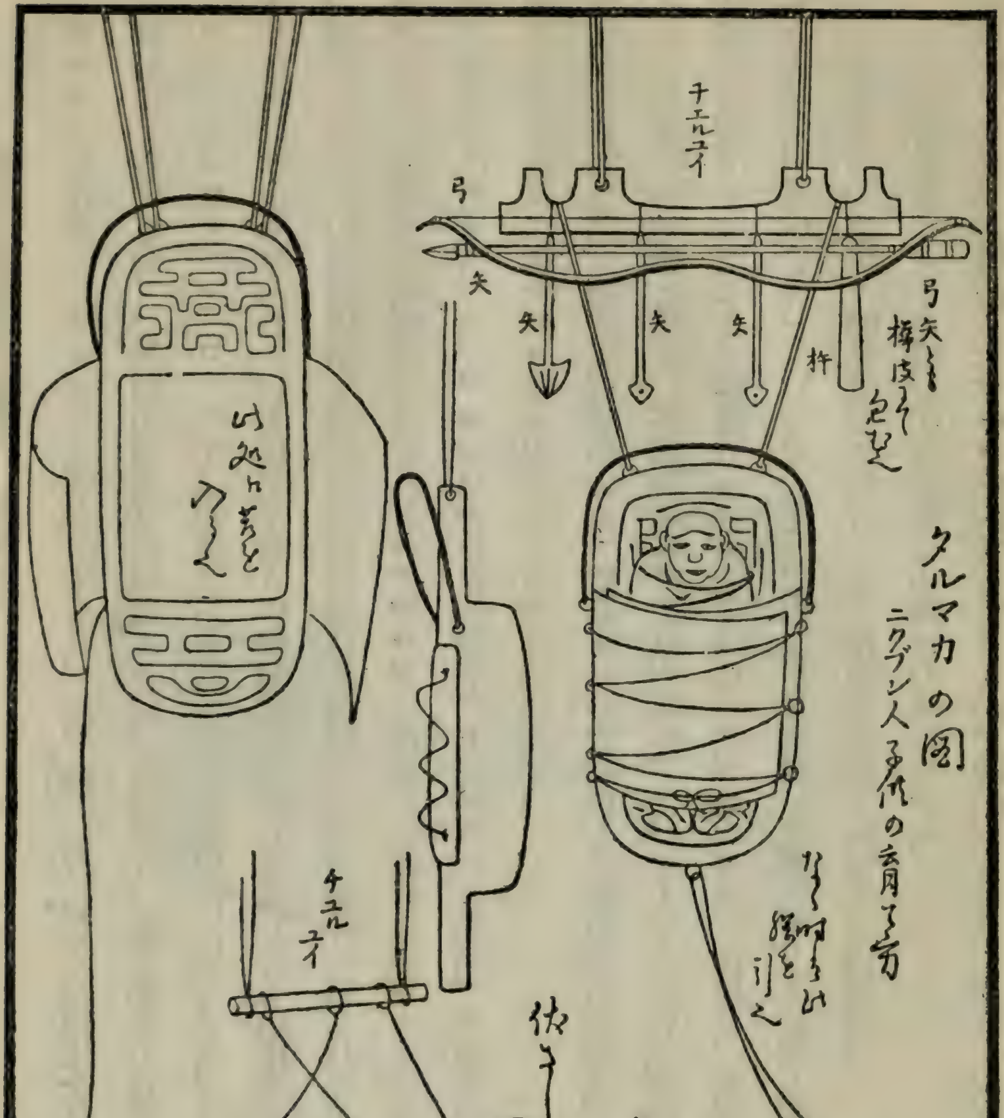
海霧晴時亭午風。靑螺指點渺茫中。焉知島嶼是鰌背。一道噴潮撒遠空。

此邊り濱は皆沙に成、上は崩崖の椴林也。扨爰に夷言ヲチユキト云て頬白の如き小鳥一羽鷹に蹴られて落されしを、ウイキシユ拾ひとりて叢に入れしかば、ニクフン人それを探し求めて持來りしまゝ、此度はヤーシユ（タライカ人）是を取て梢に投上たり。其時ニクフン大に怒り、礫を打て夫を又捕來り、直に喰しが、此一條にてもニクフンの野鄙なる事知るべし。しばし過コチヤウンナイ（地名）ヲネトウナイ（地名）ヲチクニナイ（地名）エキネウルウシヤニ（地名）等過るや、一面の平地になり（從コタンケン凡五里）けるが凡八

ヲロツコ人
ニクフン人

澄江製
タライカ國人

ツ半頃に着す。
ナヨロ此處東地目に遮る物なき平地にて川有。其西岸にタライカ人二軒（エウキツト、シヨリ、）住す。東にはニクブン人十軒斗も家居し、傍の立木に樹木をわたし、家毎二十余疋ヅヽの犬を繋り。是は雪車を曳するに用ゆる也。其顏色も内地の者より猛く、喰物は生の物とては不喰、皆煮たる物也。ニクブンは性陰森たる樹木の下をこのみ、ヲロツコは性明るき晴やかなる處を好む。容貌はヲロツコ、ニクブン、スメレングル、コンテキ、山靼、滿夷等みな彷彿たれ共、其風俗器財并に氣質言語も異り、ヲロツコは懦にして惇朴也。ニクブンは鄙利にして愚。スメレンクルは强利にして鄙なり。タライカ人是等に比する時は數等の上品也。その古着并に財器山靼の物を用ひ、日本の物とては鍋と鉞のみ也。
此處江は何故に來り居るや聞に、丸木舟を作り、是をヲロツコ人と水獸皮に易るよしにて、川原に五六艘も作り有けるが、頗る手際に見えたり。夕方一同の者を呼て（二十七人）粥を五合斗も煮、是を振舞しに、其半を喰て殘りは草の葉に包みて子供等江土產に持歸りしが、是にても彼等が不自由なる事しらる。別ても此近年滿江（黑龍江）の川筋に俄羅斯と滿州の合戰有、ニカライスカといへるところ江俄羅斯人等馬頭をひらき其邊りを蠶食せんの勢有に依て、滿州地に土匪の起ること止む間無故、彼地江交易に行ざる故、煙草はいふもさら也、針等にも甚不自由致し居る由也。依て一同江針一本ヅヽ、遣しけるに甚悅びぬ。惣て彼等の衣服は魚皮、水獸皮等を滿服の樣に長き半袖に縫、種々の金物靑玉等を飾りしもの也。



チエルユイ
弓
矢
矢
矢
矢
タルマカの図
ニクブン人子供の育て方
タルマカ

ニクフン人此邊にてヲロツコと交易をするに、その獺、狐、貂の三種は尤も貴し。其次に水豹皮を用ひ、何品によらず取替て、其過不足を互に取償ふるは、皆チライ、鮭、鱒等の皮を用ることもあり。またニクフン、スメレンクル、コンテキ、山靼等の交易の過不足を償ふには青玉を用ゆ。其遣ひ方本邦の錢の如し。

十九日明日は土用の入りといふに未だ綿入に袷羽織にて少しも暑しとも思はず、また此處よりニクフン二人を備りてきのふの者等は歸し出立するに、濱は皆堅砂にて歩行能く、路もはかどり、ハチヨモウケ（地名）ホロモウケ（地名）此邊ニクフン人日々チヤマタ（漁具）をかける處なりと、夜前も五頭を得たりと。腥血未だ其邊りに迸り有たり。ワエンレハウシ（地名）トマサウシ（地名）チカイ（地名）チヤウシ（地名）等過て九ツ半比に（従ナヨロ九八里）シツカの川端に着す。

此處川巾凡二百間、深サ五六尋のよし、當島第一の大川にして廿里余の平地也。濱形正南向にして地相うるはし。此灣の第一奥と見ゆ。其北の方には十五六里にアンバマーイトといふ高山、未だ雪に埋れて有たるが、此川上は彼山より來ると。其後ろルモウと云處にニクブン人等多く住居し、其より西岸のヲツチシ（地名）江も一日に出るによろしといへり。依て一絶一首を吐露し此處の寄り木に記し置ぬ。

白草黄沙十里程。曉來急認血痕行。獵人指點射鵰處。同雲半天山雪明。

いく日數北へ〳〵と來しければ空も小暗き心地こそすれ

向岸にヲロツコ人等多くチヤマタを懸てゐたりしが、我が至るを見て掉さし來りければ、是等を案内に頼み

鉄口琴
本邦ビハボン
ヲロツコ タライカ
ニクブレ
庚申竹醉日畫
曲川玉清

東岸に越て濱ェ行や、惣て松の木の皮の黒く化したるが一面に有たり。其中には琥珀も接りしが、上には五葉の松と樺木のみにて下艸には種々不見馴ものも有也。此邊りヲロツコ人の墓所數十ケ所有。（從川端十七八丁）過て

ヲロツコ人は死する哉、長棺にして是を四本足に三尺位より七八尺位ニ高く架、其傍ェ平日の持道具、槍弓箭の様成物を立置けり。高さも家々の格にて高低定れり。

セチセツトと申てシツカの川端ェ出たり。ヲロツコ人八軒有。（イニタマル、コエタカ、ナンクーノ、ムリカノ、ツテヤイノ、ヌツヽイ、エトウ、チヨンコ）一々見物し、舟にて向岸のハツタといふに越、此處に又三軒（セヘツヘヌ、カニヌ）一軒はナヨロより連來りしワウシの家なり。其邊りに馴鹿を數頭飼置有たり。惣てヲロツコは雪車を見し、又娘を嫁さすにも雪車を飾り、それに載て馴鹿にひかせて遣はすとかや。內地の南部邊にては、嫁を遣すに馬を飾り、それに載せて遣はすも異似たりと獨笑つゝ夕方まで遊び、魚皮の三間ニ二間斗ニ縫合せたる屋根皮と大鍋壹枚を備り、川口ェ戻りしが、濱にはヲロツコ等余を見物に大勢來りけるが何れも鱒、鯇、鮭、水豹等を持來り、其心切實に心根に徹したりけるが、犬は我を見るや頻りと吠たり。是には殆んど困りたり。

今日土用の入なるに此邊は鮭が多く捕たり。惣て鮭は奥より口に入、鯡は東の奥より口ニ來り、口より奥ニ入ると言も宜なりけり。

晩に米八合斗を大鍋にて粥に煮、我を見物の人々ヱ一椀ツヽ振舞んと思へども、大勢の事故器も無りしかば如何とも到し難く、濱よりホツキ貝（蛤のごとく少し厚し）の売を拾ひて、是に一杯ツヽ遣したるに、至極悦びて其夜は假屋の傍に大勢篝火を焼て我等を守り呉たりけるが、一睡して起て見るに、月は未だ最中なるに明近くも有哉、我が衣服は涿露に浸れり。また一首の蜂腰を假屋の柱にしるし置ぬ。

月影の盈てかくるをしをりにて遙けき道の日數をぞしる

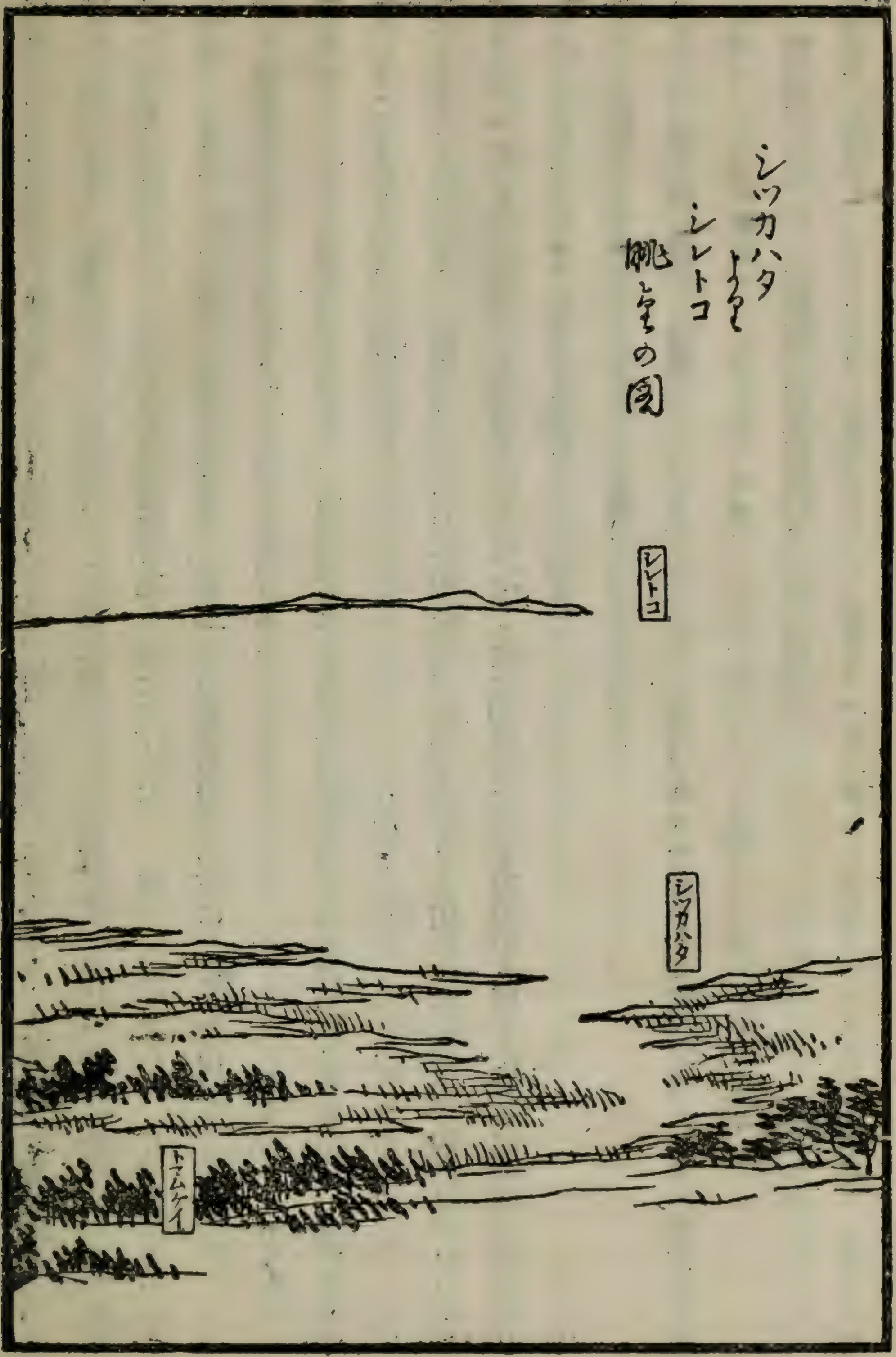
廿日出立して是より濱に行に、ワウシ、コエタカの兩人は今日も案内せんと同道致し呉ぬるに、未だ五ツ半と思ふ頃に（従シツカ二リ半）タナシコタン江着しぬ。此處川有、（巾六七十間）源は三里斗ニてシツカ川に合すとかや。傍にヲロツコ人一軒有、（エハケ）未だ臥居たるを呼起しぬるに、風と我は和語もて誰も居ぬかと呼しに、一同のもの大に笑ひしかば、余も其可笑さの餘り傍の椴の木の皮剝ぎて

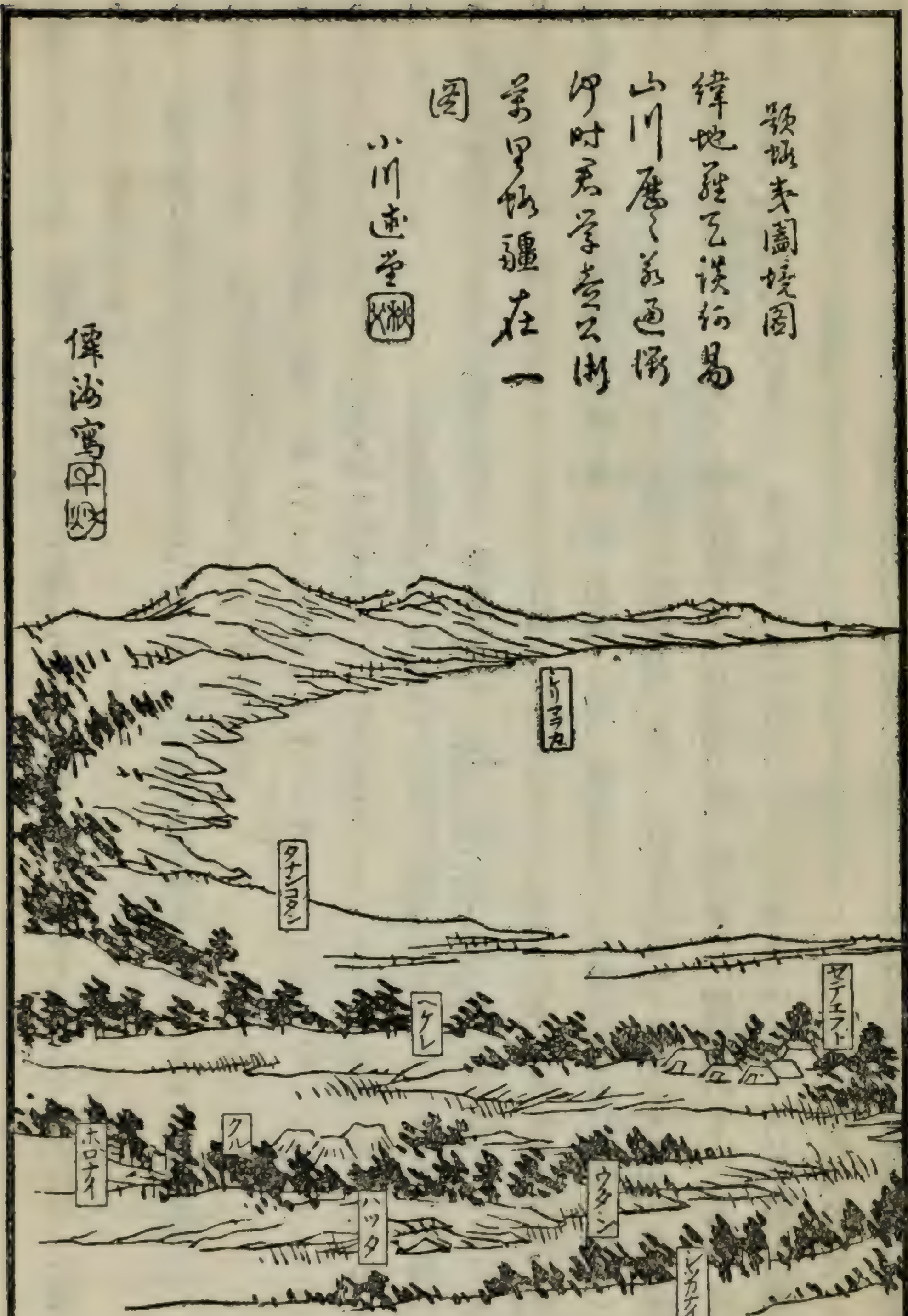
ひと掉をさしてもがなと言わかぬ異國人の守にまかせて

としるし、越て同じ様なる沙濱に行に、ライムニキナ（艸名）ホラヤキナ（艸名）ノヤ（艸名）等丈より高く生たり。其邊蚊虻多く、人際を認て群來りぬるが、實にタコイ越よりも甚しくぞと覺ゆ。

雙蹊渉牛境。日々披蒿萊。蚊蝱春撲面。一拂去還來。

等其酸辛を吐露し、アネセトク（地名）ワルシ（地名）ハチユクノ（地名）ナイフトモ（地名）ニクノシケ

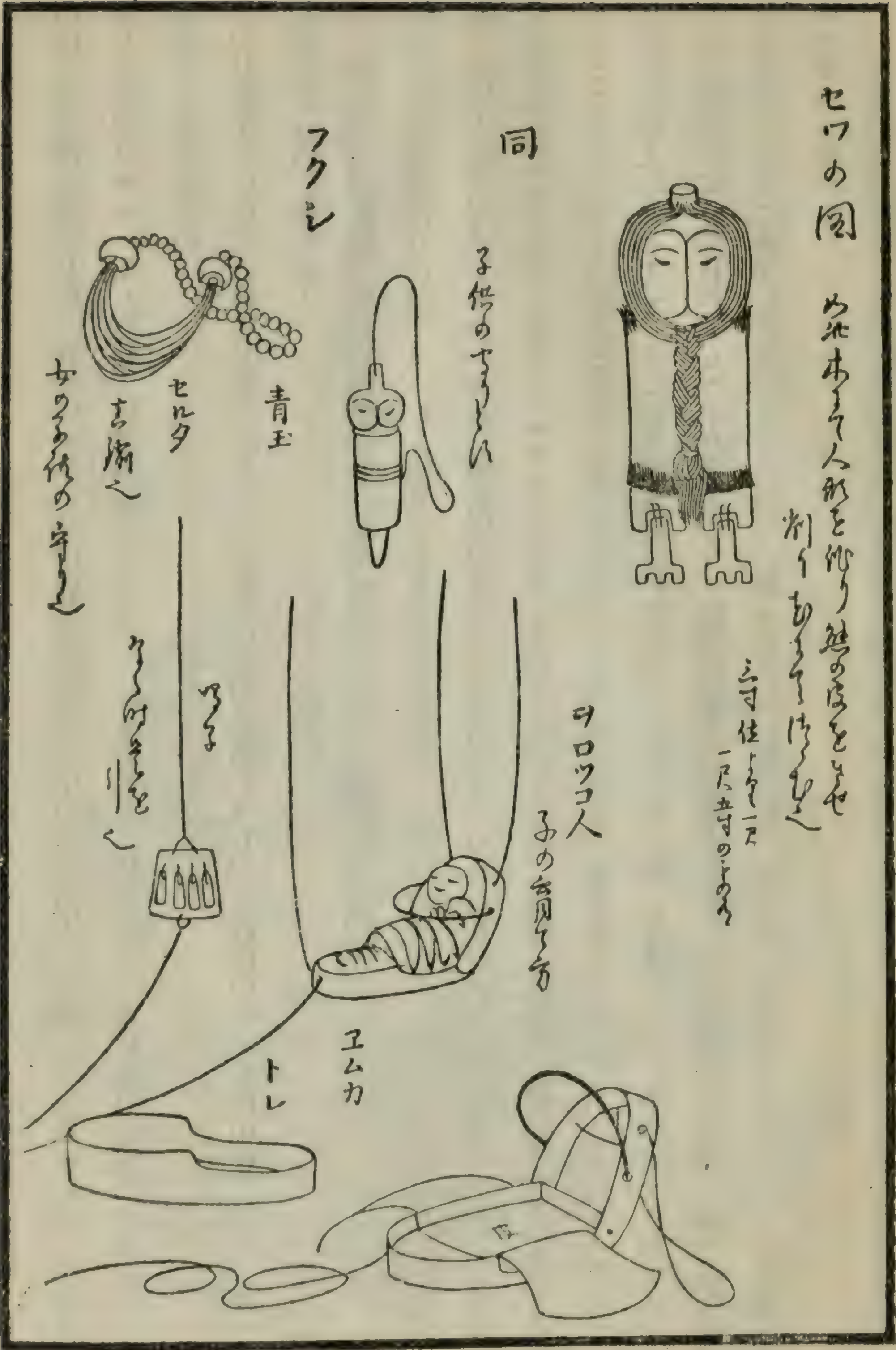

シツカハタより
シレトコ
眺望の図
シレトコ
シツカハタ
トマムケイ


タナシコタン
ヘケレ
ホロナイ
クル
ハッタ
ウタシン
レンカナイ

(地名)クウニシヤ(地名)等皆前に同じき濱つゞき也。(從タナンコタン凡三里半)過て川有、此處をヤーネエンルン(岬名)と云て

タライカ湖の落口也。巾凡五六十間もあるべし。ヤーシユ艀に成て飛入、やす〳〵と向岸に游ぎ行、一艘の小舟を掉さし來り、是にて皆のものを渡し、十三四丁も行や、

シリマヲカに到る。此處人家十一軒(ハツ、ランケ、ケセカノアイノ、ハスランケ、ハツカミイ、アンマ、ヌーナニ、マツリ、ヤイスコアイノ、ヲスイランケ、ヒラカナアイノ、ワライ)何れも稼の出來る丈は外へ行、家には爺と婆と子供らのみ殘り居候間、ハスランケの家にて止宿したり。此上なる湖は周廻凡十七八里、四面は蘆荻にして其上に椴木立あり、魚類は海獱、水豹、鯇、鱒、鮭、桃花魚、鰈、また鯽に似たるホロコンと云るもの、鯇に似たるウエフカセと言物と、帆立貝は八寸、九寸に成る有。其外ホツキ、蜆、蜊、小貝類種々有と。多は滿面氷に成て鴈、鴨、鵜鶘、白鳥、鶴其外種々の者群居譟敷由にて夜も寐ること成難しと。タライカの人別は凡七十五六人にて、風俗蝦夷に類し、言語も又近し。平日はヨタラツペ(蕁麻にて織り、アツシの如く繡す)を用ひ、婦人は多く水豹皮又鱒、鯇、鮭の皮にて韃服樣のものを製し、是にクツカニとて石帶の眞似樣のものを作り、是に種々の環を附け、テクルンカニとて腕輪を入れ、惣て山韃の風を學べり。余爰にて矢立の墨薄くなりしかば、木切もて水を入接居たりしかば、老人一枚の鍋を持來りて是を伏せ、其下にて樺皮を燒き、其油煙を鳥の羽にて拂ひ、矢立に入れ與たりけるが少しも墨ニ異る事無りし



セワの図
同
フクレ
青玉
セルタ
ユムカ
トレ

かば、余も厚く謝せしが、我等矢を染る時は皆此墨に染るとて、赤と黒とにて染し矢を見せしが、其赤きを問しかば、シユマヘーと答ぬ。依て余それを乞ふに、赤き岩石を一片吳たり。實に不自由成れば又それなり事濟かと感じ侍りぬ。

廿一日最早人の住する處も是限りなれば、是よりは歸程に趣くべし、それにつきても湖中を一見し、シッカに出んと小舟二艘を艤し、

　歷々荒陬討盡還。風餐露宿備嘗艱。彭瞠笑我筐中紙。滿載人間未見山。

等口吟し、岸傍探行に、ヤスウシ（地名）ホロモシリ（地名）アチユクモシリ（地名）等は島にして樹木多し。其間を越、イクフネエンルシ（地名）ワツコチ（地名）ヲ、セエンルン（地名）等過、ウエンチヤルシ（地名）といへるに到り（從シリマヲカ二リ半）此處より川に入る、其巾二十余間、兩岸樹木立二里半も行、タナンコタンの川上ェ出逢ふなり。是より川巾凡七八十間になり、是を掉さし行こと凡二里ばかりにしてシツカの川上なるハーマイト（地名）といふに出たり。此處人家一軒（ウタレ）是よりホロナイ川まゝ下ること二里斗にて一昨日休みしヘケレ邊ェ出る。此處に來るや、兩岸よりヲロツコ數十人立出て種々異樣成聲をあげ悅び小舟に棹さして川中まで出迎ひ、種々世話なし吳たり。夕方シツカ端ェ下り宿せんと、其頃一類の白雨ふり過れば

　討到毛夷地盡頭。穹廬馳擔褐麗裘。嘆吾蓬矢猶難報。暮雨溟天入滿州。

曇良伊加人
以鍋取墨
外之墨圖
綾岡画
一蜻

等聊蓬窓の微意を掌冊（ニツキ）の端にしるし置も後の笑草也。

廿二日一同のヲロッコ人等に何れ明春は必ず來るべしと袂を分ちて互に言をかはせども彼等も余も言事は譯らざるなれども、恐らくは餘情を惜しむなるべしと、點首して前路を歸りけり。

東岸マーヌイより西地クシユンナイに出、シラヌシに歸る路は都て茶淡翁が盡されしかば略置もの也。

七月二日西岸クシユンナイに出、隊長向山君ニ謁し同道してライチシカ（地名）の八幡社え詣しエンルモコマフ江引取。此處には米酒煙草等も有る故に、夫々褒美等遣し、辨天社の前にて、一樽を倒して一同の悦べるさまを見、

皇國の昔し汲てふ手振かな神呑する蝦夷がにぎはひ

なん一片の帋にしるし廣前ニ張置しも、今には恥辱を海外江まで殘せしかと口惜けれども、恙なく歸り來りし嬉しさの餘りにぞ有。是より何かの御用も滯なく濟、シラヌシ江着し。

八月七日ソウヤ江歸帆し、是より北海岸なるエサシ、モンペツシヤリ、ネモロ、アツケシ等を廻り、東南の海岸まゝ廻り

十月十三日箱舘府江着したるが、如此異域迄一年を不過巡視し歸りしも是ぞ足羽の神の守りの著しかりしやと思ひ、一卷となし其しりへに、

東討西探纔一年。皈來高枕始穩眠。肅愼風濤流鬼雨。今宵醱夢落何邊。

一絶を添置もの也。

北蝦夷餘誌　大尾

書松浦多氣志郎蝦夷日記後

君不見蝦夷之地距江戸二千五百程。廣袤幅員大於内地東南連鄂北女眞居然一區新瑞穗。厖乎槃瓠配天妃。爾後蠢蠢長種類。被髮黥面語侏離。純謹爲風少詐僞。金礦銅礦𨓭𨓭在。海𡧖漁鹽土𡧖藝。中古以來棄不關。寛政嘗一講遺利。其人則最上近藤間宮羽太。其書則草紙分界餘録休明光記。審彼遺此各得失。未見一部全且備。往歳大君襲職初。再置都護鎭東隅。更募高材逸足者。

實踐闔境撰地圖。吾友多氣志郎應募出。竟許國家以馳驅。薹笠戴頭劍橫腰。涉險跋阻如坦途。朝攀鶻巢暮熊窟。穀盡茹果果盡魚。六月陰曀風裂面。三春冱寒氷結鬚。獵虎東去蝦地盡。黑龍北來自韃胡。不出三載盡探討。嗟呼汝眞男子酬桒弧。變之緯度氣節之異同。大之山川部落汊港之形區。小之黃麞玄狐青魚若熊鵰鮭鱒之稅租。記來殆如甲乙帳。爬羅剔抉兼精粗。裒然卷袠三百數。至此始出大成書。誰謂徐霞客。兩戒之外遍足跡。

山脉水源詳則詳。于天下務亦何益。多氣志多氣志國家憑汝定職貢拓區域。其功大小與高下。相較奚翅霄壤隔。錢虞山云霞客千古奇人游紀千古奇書。鷟子亦云多氣志天下有用之士日記天下有用之籍。

是篇徃歲鷟津詞伯所贈今録以代跋

庚申夏五月　松浦弘識

昭和三年七月貳拾日印刷
昭和三年七月廿五日發行

日本古典全集
第三期【非賣品】

多氣志樓蝦夷日誌集
第三

編纂者　正宗敦夫

東京府北豐島郡長崎町一六二
發行者　合資會社　日本古典全集刊行會
代表社員　長島豐太郎

東京府北豐島郡長崎町一六二
印刷所　不二製版印刷所
印刷者　柳井隆雄

發行所
東京府北豐島郡長崎町一六二
合資會社　日本古典全集刊行會
振替東京七三〇二二
電話大塚二〇九六番

I
52

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

*purchased from
a gift by*

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03076 3924

DS
895
H6M38
v.3